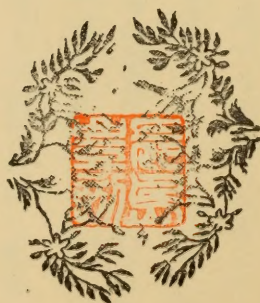
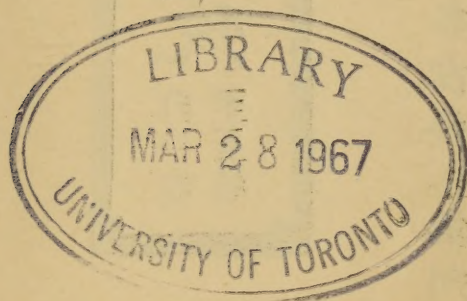
顧問 井上通泰先生
山田孝雄先生
新村出先生

正宗敦夫 編纂 校訂

國史草木昆蟲攷

自一巻 至五巻

合資會社 日本古典全集刊行會壽梓

今の世にあれ出て、上つ代のくさ木、とり、獸の名をわきまへまくするには、まつぶさに今の世の物の姿をしりてうまらにかみつ世の言のこゝろをさとり得るにあらでは、いかでかたがへること、たがはざるとのけぢめをさだむるよしあらむ。今よりふた百とせばかり先つ世ぶり、本草學てふことをむねとする人つぎ／＼に出きて、草木鳥獸の名もやゝ／＼につばらかになり來ぬれども、今の世にて、冬の雪に薪こる翁がたみたる口よりいひ出たる詞をとり傳へむは、夏の日に田草ひく妹が訛りたるかたり言をのみしるし付て、さるまさしき名にもあらず、漕いにし舟のあとなし言のみなんさはなりける。そも／＼萬づの書をよみ明らめて、物の名をたゞさまくする人の、今の世のさとび言のみもて傳へて、上つ代のみやび名を取いでとかんとおもふ心なきは、うれたしともうれたしといはざらんや。こゝに占春大人の物せられし此書よ、うまらに上つ代の言の心をさとり、まつぶさに今の世のものゝ姿をしりて、たがへるたがはざるとのけぢめをとき明らめ、かの薪こる翁田草ひく妹が跡なし言をばいさゝかもまじへず、ふるき史にのせたるまさしき名のみ取出てしるされたれば、今の世にあれ出ながら、上つ代のものをわきまへしること、おほゝしき天の八重棚雲をはらひて、豊さかのぼる朝日のみかげをあふく

が如し。あやに尊き此書なるかも、あやにむかしきこのふみなるかも。かくいふは大人に物まなべるむさしの國人本間游淸

國史草木昆虫攷

卷次分目

例言　十條

○飛潜動植の名大初の時は蓋し雅俗の分ちなくいひ傳たりけん、世々をへて寧樂宮の比より都の通名あり、鄙の方言ありし事、紀記及哥集を見て推しはかるべし。その一二をいはゞはぎ、はり、やまぶき、をみなべしの如きは即通名なり。澁谿崎のつまゝ、小島のひさぎ、雄神河のあしつき、鞆浦のいちのきの如きは、蓋し方言なるべし。さていにしへの方言は、後に但其名のみ物に書傳へて其眞物のかくれたるもあり。今にいたりつまびらかに明めがたきもあり。かゝるたぐひはおしあての釋ありとてもこゝに擧けず

○同物にして名稱のしげきものは本條の中につらぬ、いね、すゝき、たけ、うま、の類是なり。名稱を弁づるものは、菌、蕈、豆莢の類是なり。動植の體名も、き　くさの條にしるせし如くなり。また古名と同名にして物異なり、同類にして異名あり。或は古名を冐すものあり。これらも亦皆名目の本條中に併てしるす

○いにしへ漢呼に和名を注せしは既に其眞物こゝにありて、これにむかへてあてたるのみに

もあらず、或は其効用により訓をとり、義を求て、和名を附釋するものあり。今の如く專らに其眞物にむかへて、其當否を匡し、其名を會せしには非ず。猶文字に訓を設くるが如し○世に鹿鳴草を萩をしるし、山振花を欵冬としるしたるは、皆和名抄の作例を詳にせざるゆゑ之。其類例左のとし○唐韻云、蟶注に、辨色立成云萬天、本草云、馬刀、註ニ和名上ニ同以上和名抄巻十九鱗貝類馬蛤條下ノ文○唐韻云椿、注に和名豆波木、漢語抄云、海石榴、註に和名上ニ同以上和名抄巻二十木類椿條下の文　これ蟶と馬刀とは異なれど和名相同じければ同條に併出たり、椿と海石榴も亦然り、此例尚あり○本草和名に、椿木ノ葉樗木、蘇敬注に云、二樹相似樗木疏椿木實也、和名都波岐○海石榴即山茶なり、是亦椿と海石榴と明かに二物なり○鹿鳴草(はぎ)、注に辨色立成、新撰萬葉集等用ニ芽字ニ按に万葉集中に芽子また婆藝、芳宜などともかきたり　國史用芳宜草、漢語抄又用鹿鳴草、爾雅注云、萩一名蕭、注に和名波木以上和名抄巻二十草類鹿鳴草條下の文　これまた欵冬と山吹花とは異なれども和名同じければ同條に併出したり。鹿鳴草と萩とも亦然り。但其和漢の名を倒置せしのみ。これ萩は明かに蕭にして蒿類なり、蒿類にハギの和名あるしるしは、菊カハラオハギ　莪蒿オハギまたウハギ　茵蔯蒿カラウハギの名あり○本草云、黄芩注に和名比々良木、漢語抄云、杠谷樹、和名上同、一云、巴戟天以上和名抄巻二十木類黄芩條の文　これ黄芩と杠、

谷樹と巴戟天皆異なれど、和名おなじければ併出たり。既に草類に巴戟天を出してヤマヒラキと註したり、此其異なるしるしなり。槃甞て和名抄釋例を集錄して別に收たればこゝに省錄す

○和名諸書に馬琬食經、崔禹錫食經、七卷食經等あり。按に隨書經籍志に食經四卷とありて、撰者の名字を著さず、唐書崔融傳に、融有六子問者禹錫麴とあれど、食經を著せし事なし。北史に崔宏浩字伯深著食經とありて、其序文を載たり。舊唐藝文志に、崔氏食經九卷、焦竑國史經籍志に、崔氏食經十卷、これ正に崔浩が食經なるべし。（舊唐藝文志に竺暄食經十卷とあり、諸書に引所の七卷食經は、この零本ならずや）藤原朝臣佐世奉勅撰國朝現在書目、其中に食經三卷、馬琓食經一卷、崔禹錫食經四卷、新撰食經七卷とあり。おもふに馬琓は馬琬なるべし。崔禹錫食經四卷とあれば隨志と合す。新撰食經七卷食經ならずや、此書に據て考ふるに、食經を著したる禹錫は隨以上の人にして、崔融が子と同名なるとしるべし。されば崔氏食經の名物は即晉隨の比の古名なるとしるべし。彼邦には此書はやく亡びしにや。鯛、鯵、鮪、鮏、雲雀、鶬鳥等の名は竟にかくれて、新に名稱を作りしこ。我國にて名物を唱ふるものも、おほくは其舊をわすれ、或はかゝる古名を和名とやおもひ

けん。且はまた不審の稱となして、新奇の稱と貴で呼は不撿のあやまりゝ○馬琬食經、崔禹錫食經、七卷食經等に載せたる品物の注釋は、丹波康賴醫心方卷廿九に、穀造釀五菓五宍五菜凡數十種、其氣味効用及び形狀の全文を載せたり。惜むべきは其首頁斷裂して今みるとなし、本草和名、和名抄等に引たるは皆共省錄之

○此書に本草經と引たるは、太平御覽及び證類本草に收たる所のものなり。陶蘇及び唐宋諸家本草も亦皆證類中より取ものゝ。和名抄に引所の本草は、或は輔仁本草和名もあり、輔仁の引たる本艸は、卽唐本草なり。今此編に書目をしるせる漢呼は、すべて本草綱目中の品物なり

○莫傳抄、秘藏抄、藏玉抄等は古語深秘抄に收めたり。これらに載たる名物、おほくはいにしへによしなく、俗名に近きものゝ。名義を釋たるも、おほくは信がたけれど、考證の一助となるもあらんか

○俗名及び漢呼あるもの、はた方言俚語のいにしへに似たるものは、別に隨錄して史外と名づけ、副品となすのみ

○槊背て　君命を奉じて成形圖說一百卷を編纂す。今旣に三十餘卷、木に付したり。此書は

之是圖説に載べき品彙の名義をつゞひし底稿ゝ。故にいまだ每行に動植の次第を分別せず、隨觀のまゝに漫錄せしなり。猶且和漢の名のみしるして、考證なきものあり。こは後に其名義を索搜せん爲の料に舉つゞひたり、再校の時は但其考證品のみを採て、每行に分部を排纂し、其他の諸名を汎拂せん。もとより和名諸書に載たる品所の遺漏するもの尙少なからず、以往の疏證を俟のみ

文政四年辛巳春三月　　薩摩侍醫　曾槃　記

○引書略目

略称	書名
記	太安麻呂古事記
紀	舍人親王日本書紀
万葉	橘諸兄万葉集
續紀	菅野道眞續日本紀
後紀	藤原冬嗣日本後紀
續後紀	春澄善繩續日本後紀
式	藤原忠平延喜式
輔仁和名	深江輔仁本草和名即新抄和名本草
字鏡	求法僧昌住新撰字鏡
順抄	源順和名類聚抄
六帖	古今六帖
丹方	丹波康頼醫心方

清記　清少納言枕草紙

丹抄　丹波長平日本勅號記 即本草類編選

此他つ引用書は全ク しるす

漢呼疏証目錄　因漢呼而索訓者爲便

安行

蘆　○　葦　あし
粱米　あは
鳧あち　縿附
年魚　あゆ
大麻　あさ
灰汁　あく
葵あふひ○古菜曰葵
楝　あふち
馬醉木　漢呼にあらず○あしび
茜　あかね
苻　あさゞ
蔄子　あけび
梓　あづさ
檍　あはき　植楠あをき附
戾木　あさき
鰒　あはび　たち
蠟觜鳥　あとり
頴　即禾穗　あしかび
蒲葵　あぢまさ
蘭　あらゝぎ　○　ふぢばかま

桔梗　あさがほ
紫菜　あしつき○のり
菖蒲　あやめぐさ
酸醤　あかかゞち○ほゝづき
黄驄　あしはなげ
瑞稻　あやしきいね

伊行

稻名　いね
烏賊　いか
櫟　いちひ
鯨魚　いさな
石磷○蝛　いそがひ
半邊蚶　いたやがひ

紫陽花　あぢさゐ
驄　あをむま
赤小豆　あかあづき
赤卒　あかゑむば　かぎろひ
橘　あへたちばな　たちばな　○かぐのみ
秋野七草菜　あきのなゝくさ
犬　いぬ
鯔　いな　○なよし
貽貝　いがひ
鵤　いかるが
蝗蝻　いなむし
五穀　いつくさのたなつもの

宇行

鸕鷀　う
梅　うめ
棘甲蠃　うにかせ
薺菜　即莪蒿　うはぎ
鴨跖草　うつし　即月草
白蛤　うむき
鶯　うぐひす
水晶花　うのはな
水松　うみまつ
蕁　うきぬなは○ぬなは
驢　うさぎうま
駒類　うひたひのうま

瓜○西瓜　うり
馬　うま
牛　うし
朮　うけら
胡麻　うごま
班車魚　うきゝ○しをり
蘋○萍　うきぐさ
野蠶　うつゆふ
淫羊藿　うむきな
浮薔　うゑこなぎ○こなぎ○なぎ
葱　うつぼくさ

衣行

樸　え

葡萄えび　蝦附　えびかづら

紫葛　えびかづら

於行

遲稻　おしね

莞　おほな

鳥　おそどり

狼　おほかみ

穭　おろかおひ附○ひつち
再生稻○ひこばえ

護田鳥　おすめとり

加行

頴○卵○殻○貝○蚫かひ○
頴しひな

海鰌魚　えひ

昆布・　えびすめ

龍膽　えやみぐさ

蘿蔔　おほね　すゞしろ

樅　おものき

黄精　おほゑみ

蒼鷹　おほくろ

白頭翁　おきなぐさ　菊附

萱草　おにのしこぐさ

草○萱○榧○柏かや○
栢ひ

柏○榧　かへ
鷄かけ○くたかけ
櫧かし　かたがし
牡蠣　かき
犴　かむ
雁　かり
蝦蟇　かへる
香木　かつら
柑子　かむし
馬叉魚　かつを
鷄冠花　からあゐ
雉　かほどり　きゞし
蝙蝠　かはほり

鳧○鷶○鳧　鴨　かも
樺　かば　かには
蒲　がま
蟹　かに
龜　かめ
木葉　かしは
野鷄楓　かへで　かへるで　もみぢ
蘿藦　かゞみ　芄蘭附
合歡　かうか○かうかのき○さのかたゝねぶりのき
槲櫟　かゞみは○たまがしは
燕子　かほばな　かきつばた
鷃　かやくき
駱　かはらけ

山羊　かましか　瓦松　かはらまつ
人參　かのにけくさ　雁來紅　かまつかの花

幾行

葱○酒○樹○木き○酒くし　黍稷　きみ
菊　きく　樸○蚶○象きさ
木綿　きわた　黃瓜きうり即胡瓜　生瓜附
蟋蟀○促織○蜻蛚きりぐす○蟋蟀こほろぎ

久行

桑　くは　橡樟くす　楠附くすのき
葛　くず　莎草　くゞ
鷹　くち　たか　栗　くり　さゝぐり
熊　くま　蜘蛛　くも　さゝがね
烏芋　くわゐ　梔子　くたに　くちなし

釣樟　くぬぎ

海月　くらげ

畫鳥○水蛭　くひな

紅藍花　くれなゐ　すゑつむはな

蛇　くちなは　へび

輿渠　くれのおも

皂莢　くそかづら

計行

煙师　けなりくさ

己行

沙噀○蠶　こ

蘿○薜○苔

辛夷　こぶし○こぶしのはな

胡桃　くるみ

鵠　くゞひ

麕　くしか

熊膽　くまのゐ

鳿　くろとり

撲奈　漢呼に非ず○くるへきな

衞矛　くそまゆみ

菰　こも○かつみ○共にはなかつみの條に出

鯉魚　こひ

枹　こなら

鮀魚　こつを　　五辛　ごしむ

呉茱萸　こにすひ　　石花菜　こゝろふと

叢柏　このてがしは

左行

小竹　さゝ○しぬ○すゞ　　百合　さゆり

鮏○梟　さけ　　鯖　さは

鷺　さぎ　　猿　さる

大角豆　さゝぎ　　櫻　さくら

賢木　漢呼に非ず○さかき　　榮螺子　さゞえ

鶺鴒　さゝぎ　　結香　さきぐさ

刺竹　さすたけ　　灼艾　さしもぐさ

五味藤　さねかづら

志行

椎　しひ
衣魚　しみ
鷸　しぎ
獸　しゝ
蜆　しゞみ
銀魚　しろを
車渠　じやこ〇おほはかひ
史外出
小鸁　したゞみ
白蛤　しらがひ
鶺鴒　しなかとり〇にはどり
垂柳　しだりやなぎ
須行
菅〇麥門冬　すげ

結縷草　しは
鮪　しび
鵙　しめ
莽草　しきみ
栞　しをり
罽　しゝぐま
藺　しりくさ
眞珠　しらたま　たま
垣衣　しのぶぐさ
黃騂　しろあかげ
繡麻　しもつけのはな
杉　すぎ

灰墨　すみ
茅〇薄　すゝき〇ち〇ちがや　つばな
鑪すゝき　△菫　すみれ
細腰蜂　すがる
天門冬　すまろぐさ
八駿　すぐれしうま

世行

石蜐　せ
芹　せり
楝　せむだむ
沙瑶　せみがひ

曾行

蕎麥　そば
魚狗　そひ
柧稜木　そばのき
珠牡　そでがひ

多行

竹品類附　菌たけ〇竹筍たかむな
鶴　たつ
鯛　たひ
蛸　たに
秦皮　たむき　とねりこ
疊　たゝみ　皮ノ席附

田中螺　たつび
鸍　たかべ
石龍芮　たゝらめ　○ふかつみ
蟆たにくゝ　蟆子、とぢくち
虎杖　たぢひのはな
冬燕　ちどり

都行

絡石　つた
柘　つみ
海石榴　つばき　椿附
木兎　つく
燕　つばめ　○つばくらめ
槻、　つきのき

鵽鳩　たとり
狸　たぬき　貉○貒○附
薏苡　たまつし
龍　たつのたま
茶　ちや
敗醬　ちめくさ
紅鶴　つき
橐吾　つは○ふゝきの條にもしるす
躑躅　つゝじ
鯯　つなし
王孫　つちはり
橡　つるばみ

天行

貂　てむ　　斲木　てらつゝき

登行

虎　とら　皮席附　　鳥○鷄　とり

鵄　とび　　千歳虆　とゝき

石楠草　とひらのき　　赤菜　とりさかのり

奈行

菜○魚　　楢　なら

梨　なし　　薺　なづな

七種菜　なゝくさ　　海藻なのりそ　鷓鴣菜附まくり

瞿麥　なでしこ　　梅花蠣　なみまかしは

仁行

楡　にれ　　小辛螺　にし

裙帶菜　にきめ　　春草　にこぐさ　○ぬえぐさ
朱櫻　にはざくら　○はねす

奴行

橣　ぬで　○ぬるで　　零餘子　ぬかご
射干　ぬばたま

禰行

鼠梓　ねづみもちのき

乃行

苔　のり

波行

胡枝子　はぎ　　榛　はり
薔薇　ばら　　栲　はじ
灰　はひ　　蓮　はすね

鼠麴草　はゝこ　　郁李　はねず

朱櫻　はゝか　　鰚魚　はらか

薑　はしかみ　　曇花　はまゆふ

春鳥　はるとり　　田字草　はなかつみの下ニ有

山茶科　はたつもり　○令法　　萍蓬　はまたかな

杜仲　はひまゆみ

比行

稗　ひえ　　蒜　○水蛭○蛾　ひる

鴇　ひめ　　菱　ひし

瓠　ひさご　　燈蛾　ひむし

雲雀　ひばり　　翡翠　ひすひ

蒲葵　びらうげ　　蜏　ひをむし

鵯　ひえどり　　樹衣　ひかげかづら

不行

紫藤　　欵冬　ふゝき

黑貂　　梟　ふくろふ

牡丹　　杜衡　ふたまかみ　細辛附

反行

粳粉　へに　　靈壽杖　へみ

甲煎　へなたり

保行

寄生　ほよ　　梭尾螺　ほらがひ

子規　ほとゝぎす

末行

松　まつ　　豆　まめ

檀　まゆみ　　猿　ましら　○さる

松蕈　まつたけ
蠛　まくなぎ
扶芳藤　まさきかづら
鴗　まなばしら

美行

薤　みら
海松　漢呼に非ず○みる
海驢　同上○みち
三稜　みくり
蓑衣蟲　みのむし

武行

椋　むく
蟲　むし

馬蛤　まてがひ
金鐘　まつむし　月鈴兒附すゞむし
松蘿　まつのこけ

芮　みの
末醬　同上　○みそ
水草　みくさ
蛟　みづち
鶚　みやこどり

郁子　むべ
鰻鱺　むなぎ

木綿　ゆふ

衣行　既出

與行

蓬○艾　よもぎ　　羅漢鳥　よぶこどり

良行

里行

林檎　りうごう　　龍鬚筵　漢呼に非ず○りう
ひんむしろ

留行

礼行

呂行

和行

早稲　わせ　　綿花　わた

裙帯菜　わかめ　　秸　わらしべ

黄菜　わうさい　　萱草　わすれぐさ

爲行

蝙蝠　ゐ　　蛸　ゐもり

惠行

葳蕤　ゑみくさ　黄精附

乎行

鴛鴦　をし　　消皮　をしかは

蠖　をぎむし　　女郎花　漢呼に非ず○をみなべし

史外

安行

梫木　あせぼ
繍眼兒　ありすひ
紅螺　あかにし
海石榴　あやつばき
鸚鵡螺　あふむがひ
年魚腸　うるか
姑獲鳥　うふめとり
鰕　えびすうま
蠕　おきしゝみ

卉服　あらし
紙菜　あをき
戴勝○海豹　あざらし
虹魚　あふひがひ
四季竹　あをばのふえたけ
西施舌　うみたけ
見光祿　うみうさぎ
蚼螺　いつまてがひ

加行

璅珸　かゞみがひ
扁螺　きさご
海盤車　きゝやうがひ
罌粟　けし
凝海菜　こるも

左行

鷲　さしは
沙糖　さたう
春魚　しらす
蒲葵　そろ

多行

玉珧　たひらぎ
鑚螺　たけのこがひ

吐綬鷄　からくむてう
騧　きつかけ
壁虎魚　くもがひ
蠱毒　こと
黃驄　こまあしげ

騅　さるけ
魁蛤　さるのかしら
西瓜　すいくわ

齊蛤　たちがひ
竹孫草　たけの上のかひ

奶汁蕈　ちゝたけ
磹蠣　つきひがひ
天狗　てむぐ
梣　とねりこ

薪　つまき
藩荇　つるな
豆腐　とうふ
科斗　どぢくち

奈行

衞矛　にしきゞ
龍　なか

騑　ながれぼし
麞　のろ

波行

僞筍　はひも
糖蕈　はつたけ
栗鼠　ひす
菩薩　ぼさつ〇栗をいへり

石蛇　はまかづら
黄螺　ばひ
駒額　ひたひしろ

末行

蛤蜊　まかひ
榲桲　まるめろ
海豆菜　みどりかひ
秋鳥　むくとり

也行

柞木　やとめ
水駱駝　やちえふ

良行

甘藷　りうきういも
鷹爪　れたま

和行

敗醬　をとこめし
騴　をもとしつ

國史草木昆蟲攷卷一

安部

あし　蘆　葦　葭　皆アシとよみたり。これ我國の開闢せしはじめ、その形葦芽の如くに成いでしとて神の御稱に宇麻志阿斯訶備比古遲神など申奉たり。方俗にこれをヨシといひ、またハマヲギともいへり。これいにしへより今も猶方俗によりて物の名のおなじからぬヿをしるべし。紀の葦牙は、あしかびの條にいふべし。大伴忠男云、記の一本穗の傍を省き禾と書たるを、其新芽の萌いづる事と心得て禾を牙の誤として改め、終に刀筆せしより今は弁じがたくなりぬ。万葉卷六に、葭部、卷十四に安之能葉尓由布宜利多知天、卷十一の詞書に、蘆垣之中、順抄に葭を阿之豆乃と注したり

あは　記紀に粟をよみたり。順抄に、粱米を阿波乃宇留之祢と註したり。アハは淡しき義なるべしといへり。万葉卷三に、春日之野邊粟種益乎、とよみたり。さてあだし國にては、漢より以前に粟は穀實の惣名とみゆ。論孟などの粟は、今のアハとするはあたらず。江談抄

にも、近世以粟爲粱こ有は、我國のむかしも、粟をもてモミの如くし、アハには粱の字をもちひしなり。順抄に、唐韻を引て、粟ハ禾子之。こ有を阿波こ注せしはくはしからず、禾子こは稻粱稷䅽の子なるをアハこのみかけていへるはあたらぬよし本居宣長もいへり。槃按に、孟子云、河東粟移於河内。又云、米粟不多帶レ穀者爲レ粟、去レ穀者爲レ米、これはいにしへは粟をもて今の米こいへるが如く、穀の総稱に係りしもまたしりがたし。伊賀國風土記に、阿盃郡按阿盃は今の阿拜なるにや始屬ニ伊勢國ニ云ニ波波莊ニ天照太神下天之阿波子(ノミ)給五穀長蔓(タケシケシ)、故名阿波、謂阿盃者音謬之。この說によりてもまた穀實の總名に似たるなり

あち　鳧をよみたり。万葉卷三に、邊津方尓味村左和伎、卷四に、味村驂、卷七に山際尓渡秋(アイ)沙(リ)こもよみたり。賴政家集に「すみのぼる月の光りによこぎれて渡るあきさの音の寒けさ」こよみたり。今の俗に云アシカモ之

○鰺をよみたるは、丹方に崔禹錫食經を引て、鰺、味甘濇無毒、似鰻(イノモチ)而皮中有白垢、尾白刺連々逆々頭有石、江南人呼曰石首魚、註に和名阿知、今の漢人は鰺の字をわすれて、竹莢魚また鮑鮱などいへり食經の事は凡例にしるしたり

玉かつまニ云、鴨に大かた四種あり、第一大なるを眞かもといひ、次に大なるを

ひどりといひ次をあぢといひもゝも小きをたかべといふ。皆同じ鴨にて、たゞ形の大小にて名のかはる之。|又アイサといふ一種あり　こは鴨のたぐひながら聊異之

あゐ　字鏡、順抄並ニ藍を註したり。和訓栞にも曲にしるしたればこゝにいはず。万葉に、韓藍、鷄冠草をこれとなせし說あれど誤之。某々の條をみるべし

あゆ　記に年魚をよみたり。景行紀にも年魚市郡、万葉巻三にも年魚市方とよみたり。神功紀には細鱗魚と書きたり（アユノ漢名ハ香魚といへり、雁山志にみえたり。また細鱗魚といふ名も雁蕩山志に載たれば、和漢同名になることをおもへ）万葉巻十九に、鮎をよみたり。式に押年魚を載せたり。万葉巻五に、和可由都流とよみたり。また三に、河湍尓波年魚子狹走ともよみたり

あさ　大麻を訓たり。萬葉に、麻衣、麻種とよみ、また巻十一に、櫻麻、この櫻をカニハともよみたる說あり。式にヌサとよみたり。アサにはふるとしけし。はやく成形圖說にしるしてゐりたればこゝに再び悉さず（俗說に、麻をいにしへ幣に用ひ、また今の俗に、婚姻の禮式に用ひしは麻苗甲折して直に三葉を生じ、また五葉を生じ、また七葉を生ずるがゆゑにこれをめでゝ祝事に用ゆといへり）

あき　順抄に、大辛螺を註したり

あく　順抄に、灰汁を註したり。祭統考工記には說水とみえたり、飽の義なるべし。俗語に、あくごきこいふもこれよりいでたるべしといへり、いかゞ。源氏末摘花の巻に「くれなゐ

のいろこき花こ見しかごも人をあくにはうつるてふなり」また同じ卷に、紫の紙の年へにければ、はひおくれ、ふるめいたるにこ書たり。猶はひの條むかへて見るべし

あめ　順抄に、鯇を註たり。漢語抄に、水䱥、注に一云、江鮭、この魚近江の湖水にありて、雨のふりける時に多く得るものなればいふこいへり。其形げに江湖の鮭魚之。開寶本草に載せたる嘉魚にちかし

○餳を云は甘き義之○豆汁をいふも餳に似たれば也

あみ　順抄に、海䊵魚を注、魚史にいふ米鰕之。和訓栞云アミは海蟲の義之ウナ反アムシ反ミこいへり　谷川が反切の說すべてかくの如く取がたし

あぶ　記に阿牟こいへるは虻なるべし

圏こは虻にて古くは皆アムといへり

あふひ　順抄に本艸を引て、葵を註したり。字鏡には阿保比こあり。源氏藤袴の卷に、心もて日かげにむかふあふひだに、こよみたるによれば、逢日また仰日の義にや。我國にてアフヒこ哥によみしものは、專ら山城國御蔭山におふる二葉のアフヒクサなり。いこはやくいひしも是なるか、いかゞ。漢土にていひしものこはとなり。按に晉の宗懍が荊楚歲時記に、葵

信濃國にては今も冬葵を菜蔬となして食料にあてしといふ猶尋ぬべし

爲百菜之主、羅存齋、尒雅翼に古人採葵必待露解、故曰露葵、今人呼爲滑菜言其性古者葵爲五菜之主、本草經上藥菜部に載せたる冬葵即これ之。今こゝの俗に寒アフヒといひ、陸ノリともいへり、漢土にて古へは專ら食料となせし事いちじるし、後は聞ことなし。漢土にて凡葵名を帶るものは皆この冬葵を本として稱をとるなり〔正字通及詩經世本古義角部七月の注に其品類數種を擧たり〕○万葉卷十六に、後もあはんと葵花さく、とよみしは二葉のアフヒクサにや、冬葵にや、決めがたし。今ハナアフヒあり、一名はカラアフヒ、是蜀葵なり。字鏡に菵を加良阿保比と註したり、清記に、からあふひといへるも皆一物にや。丹抄に冬葵をカラアフヒと註せしは、正しくこゝの二葉のアフヒにむかへたる名なるべし。さて蜀葵に似て花の小なるは錦葵なり。葉の草綿葉に似て花の淡黃色なるは黃蜀葵なり。俗にトロ。といひて、抄紙の料となすもの之。たけ高く花辨の菊花に似。最大なるは、新城縣志に載たる望日蓮、一名丈菊、一名向日葵なり。下野に白峯アフヒあり、武藏多磨に深山(ミヤマ)アフヒあり、是らは葵類にはあらずして方言之○豳風七月ニ烹葵及菽、註に葵は菜之、說文おなじ。通雅に、古謂菜爲葵、晉以來曰菘、今謂之菜、いにしへに葵臛の羹といひしも、葵も菜の通稱なるべし

あかめ　神代紀に赤女と書て、その註に、鯛魚ノ名也とみえたり。今の俗にアカメダヒといへるはけだしこれよりいでたるなるべし。たひの條をむかへみるべし

あをな　記に、阿袁那と書たるは、菁及菘なるべし

あらめ　万葉巻七の哥詞に、何如荒海藻とよみたり、荒布とも書て、和布にむかへていへり。式には滑海藻をよみたり。めの條に詳にしるす

あふち　萬葉巻六に阿夫知乃波奈、巻十に相市乃花、巻十七に珠衣尓奴久安布知などよみたり。清記に花咲てかならず五月五日にあふちといへり。今の俗にセンダンといへり、こは旃檀の音をかりたるなり。順抄に楝を註せり〇小補韻會に、今人作籽并戴楝葉五色絲、皆汨羅遺俗也、今猶邊境端午日懸之簷下云、せんだんの條むかへ見るべし、藻塩草、下學集、并に樗をよみたり

あしび　万葉巻二に、廿六丁磯之於尓生流馬醉木、巻七に、安志毗成榮之君、巻八に、馬醉木の花不悪、巻十に、春山乃馬醉木花、この外にアシビをめでゝよみたり。關東の俗に草ボケともシドミともいへる樝子に似て矮小なるもの、春ふかく花のにほふ、いろは映山紅などにひとし。こ

の實は冬柏(ツバキ)の實の如くにして、味の酸を小兒とのみてくらふものなり。さて萬葉のイハツヽジを羊躑躅と書、これに對てアシビを馬醉木と書たるは、おのづから文を設けたるなり。羊躑躅は漢呼(カラナ)なり、馬醉木は我國の稱なるを、あるひはたれも漢呼と覺てアセボといふ木の漢呼とせり。さてアセビを馬醉木と書たるは、馬のこれをくへば醉て足痿(ナエ)けることなり。俊頼散木奇哥集に(堀川百首にも見えたり)「とりつなげたまた横野のはなれ駒つゝじが岡にあしび花さく」とよみたるも、馬のくらひて毒なればこそかくはよみたり(ママ)。また新六帖に「みまくさは心してかれ夏野なるしげみのあせみ枝まじるらし」とこゝにアセミと書しはシとセと通はせたるゑ、陸奥國人は今アセミといふといへり。眞淵云、アシビともシトミともいふ語を考ふるに、病に志良太美あり、貝に志多太美、草に毒太美といふ、太美は病の事なり、さてその太美と度美と音の通ふに依て、志度美はあしたみのあを略き(太と度と通へり)あしびはあしたみのだを略ける也(ひの濁とみの淸とは常に通へり)さて關東の俗にアセボともアセミともいひて、前條のアシビに混ひ、それより馬醉木といふ名を漢土の稱とおぼへて、このアセボに膚属せし事久し、この木の根はヒサカキに似て、夏月穟をぬきて牙黃(ウスキ)いろなる細碎なる花を敷(シケ)るものなり。或は本草拾遺に載せたる梫木なりといふは否

補　万葉巻十、わがせこにわが戀らくはおく山のあしみの花の今さかりえ

【頭註】陶弘景云、俗人五月五日取葉佩之辟惡氣也、今斯方の田舍にても端午の日に軒にかざするえ。家隆卿の哥に「かほりあふ庭の樗の花ちりてあやめの軒をすぐる夕風」

【頭註】【補】下學集云、馬食ニ此草一則死、故云ニ馬醉木一

橘泰が筆のすさびに云、あせみ、れんげつゝじ、口に毒あり、故に借通して兩物に馬醉木を訓とせしなり、然れども馬醉木はあせみにしてつゝじに非ず。西國にて此木をよしみ柴と云よしえ。よしみはあしいの反名なるべし、あせみはあしいの轉語ならん、故ニ調伏の法に此木を用ふる事あるよしなり。万葉に、磯の上に生る馬醉木を手折めど見すべき君がありといはなくにとあり。これはつゝじの事にしてよめりと見ゆ、つゝじは常のつゝじに非ず、蓮華つゝじなり、木葉共に大にして花かば色え。陵宵花に似たり、甚毒あり、佐渡の金山には他の躑躅なし、蓮華つゝじのみえ。又南都春日の森にあせみ多し云々。秀枝云、右泰が説は總てより所たがへり

あかね　萬葉に茜をよみたり。さて茜刺緋染はふるくより但馬國出石郡出石なる筒井何がしが家に傳へて、今もその上好の緋を染こいへり。こゝによりて俗にこれを緋染草こいへり。史の貨殖傳に、千畝茜卮こいへるも其料のなるべし

校云ちしほ原あしはニ作ル今訂ス

あいさ　万葉巻七に、山際(キハ)尓渡秋沙とよみたり。頼政家集にはアキサとよみたり。即前に載せたるアチ之。今の俗にはアチ鳧(カモ)ともいへり。夫木集、あはぢ嶋松ふく風のおろすかときけばいそべにあき沙立なり。又、あきさるゝ淺澤をのゝ人はなれさびしく遠き水のおとかな

あさぢ　記に阿佐遲とあり。崇神紀に、淺茅原(アサヂガハラ)、万葉巻三に、淺茅原曲々二、巻八に、淺茅之花、順抄にも、茅を智と註したり。茅の秋深く老たるは赤色にしなれゝば、ちしほの色にたぐへてチといふといへり。此説いかゞ。今その花をツバナといふてチバナにして即茅針なり

あさゞ　菅家万葉古訓に荇菜をよみたり。唐本草に載たる苦菜之。六帖に「みるからにおもひますだの池におふるあさゞのうきて世をばへよとや」

あけび　順抄に、蔔子を註せり。朱實(アケミ)の義なりといへり。陳扶搖花鏡に載たる蔔子之。即木通の一種なり。また常盤アケミあり、むべの條みるべし

あづさ　記紀ともに安豆佐、順抄に、梓と註したり。槃案ずるに、醫家にいふ梓と、經にいふ梓はかならずことなり、書既に梓材をもて篇の名となし、記に梓人をもて匠の名となし、昔人言室有二此木一、則餘材不二復震一、或位置在二他木下一、則有聲其異如レ此とみえたり。晉崔豹が說

に、生莢者爲レ梓とあれば、この俗にいふ木角豆(キサヽゲ)なり、一名は雷サヽゲともいへり。さてわが國にはやく梓弓といへる事あり、今の雜木のキサヽゲともおもはれず、予嘗てみる所の古弓古材おほくは槻(ツキ)の木也、伊勢貞丈の弓材考などには深考あるべし

あづき　記紀万葉皆小豆をよみたり

あきつ　記に阿岐豆、卽蜻蛉なり

あしゐ　順抄に藎草を註したり、記紀のアシヰもこれ也。今云、黄草(カリヤス)の一種也。抄にまた加木木とも註したり

あはき　記紀幷に檍をアハキとよみたり、この木今いまだ詳にしりがたし。强ていはゞ、明の楊愼が丹鉛總錄に、檍取億万之義、草木疏云、檍木改名万歲樹、また唐詩に青松忽似万年枝、これらの言によりておもひ合するに、橘の檍原(アヘキ)といふは、世にめでたきことよぎのおひけた地なれば、それをさしていへるかも、嘗てきく安房國人いへらく、わが國の海巖にアハキといへる大木あり、葉は櫧(カシ)のきの葉に似て大なりとぞ。　また同國平郡船形(フナカタ)村西行寺の住僧來ければ、幸にこの木の樣を聞しに、僧言、わが村中にオホキといふあり、其形狀を審するに、前にい

ふアハキにして、卽伊豆國人のいへるタマクス是は楠なりさてまた檍原（アハキハラ）は我薩の封内日向國諸縣郡高原鄕之。蓋往昔に其地を經過するに、樟楠の屬とにおほし、さればいにしへにいへる檍（アハキ）は蓋しは檍楠なるべき歟

【頭註】困

玉だすき六之卷云　神代記に檍原（アハキ）と書れたるを、和名抄に梓の屬也とも、櫪木ノ一名也とも云る皆非なり。師ノ翁も、此木の事は未考得られず、此は殿村常久が說に、新井君美主の東雅萩條、朝鮮人らに萩（ハギ）を見せたるに杻の字當（アテ）て出せりと云れしに就て、杻ノ字を考ふるに、尒雅に杻ハ檍と見え、其註疏どもに杻一名檍とも、或ハ謂ニ之檍ト、とも云るを擧て、此のアハギを萩なりと云るに從（ヨル）べし云々

○あをき附　是は今の俗にいへる青木にして、いづれの地にもあるもの之。碧葉丹實の灌木也。俗に檍の字をおしあてけれど否之。また冬青などをいへるもあしゝ。按に享保十八年に肥前國長崎の鎭尹某氏、當時來舶の淸商に數十種の草木を問はれしに、其中に所言青木を植楠と答へたり此書名は享保復言といふ淸估周朱周來章等の筆記なり其後予薩摩にありて淸の漂客福州の盛文煥が言を聞に、また植楠と答へたり。また中山人長國與言唐山にてこれを芙樹といふといへど此說いぶかし。按に芙樹は證類本草本文卷十四陳藏器を引て、此一樹を擧たれど不審にして今確當なるものをし

らず

あさき　千載集　戀　三　前齋院新肥前「東やのあさきのはしら我ながらいつゝふしなれて戀しかるらん」うたゝね　安嘉門院四條「わするなよあさきの柱かはらずは又來てなるゝをりもこそあれ」　寶治二年百首　信實「こりかぬるあさきの宮木ふしゝげみさもくれにくゝ人のいふらん」新撰六帖、木、衣笠内大臣「杣山のあさきの柱ふししげみひきたつべくもなきわが身かな」また同じ人「東やにたてし斗の眞木柱あさき契にふしはたえにき」續後拾遺　戀一、宗尊親王「戀すてふわが身なたてそ東やのあさきの柱くちはつとも」清水濱臣云、按にあさきはふしだちたる雜木をいふ歟、ある越後人のいへるは、越にてはすべてふしくれだちたる木の、材木となりにくきをば是はあさぎゝ、物のやうにたちがたしなどいへりこそ。あさきの意いかにとも考がたし。游清云、案るにあさは物のくひちがひ、物のすなほならぬをいふ、あざむく、あざける、あざわろふなどいふあさはみなもころ言之。童家頌韻に、又をあざへとよめるも、くひちがひたるをいふ。又中古の書に、よりあはせたる縄をあざなへるなはといふも、くひちがひたるをいふ。さこせと通音にて、神代紀には是を絡繩とかけ

り。また和名抄に校倉（アゼクラ）といひ、新猿樂記に叉庫（アゼクラ）といふあぜも、くみたる木のくひちがひたる形をいふ。つら〳〵是等の義をあはせて考ふれば、よぢれまがれるをあさともあぜともいふなるべし。扨木のおひたちにて、よぢれまがれる事、繩などのあざなへる形に似たるがいといと多きものこと。あさきといふは必是なるべし、今の世にも床柱などにはわざと風流めかして、ふしだちよぢれたる木を用ゆること。千載集、續後拾遺集のうた、叉新撰六帖に、東やにたてし斗などいへるをみれば、昔もかりそめなる所に用ひし事はかりしらる。漢名にていはゞ、戻木などいふ物にやかなひなん。再按るに、前のくさ〴〵の詞の例によれば、あさのさは濁音なるべし、六帖の哥にあさき契といひかけたるによれば、淸音にやともおもへど、かゝる詞は淸濁にかゝはらず用ふる例なれば、猶濁音のかたしかるべくおもはる。槃（メヂ）おもふに、東山天皇の御代より喫茶を嗜める人多（サハ）にいで來て、そのうつはものは、古きを貴、異なるを好み、それが中にあさき碗てふ物あり、蓋しこゝにいふアサキにてつくりしものならん歟

あして　新猿樂記に葦手とかけり。天德哥合の序に、した机のかしゆひのくみおほひは、ふぢのすそのにあしでをぬひものにしたり。哥合に「霜がれの野べにあしでの墨がきを色ご

り染る春のわかくさ」和訓栞にみえたり

あさな　本朝月令に、七野(ナヽツ)より七草を供といへる中にアサナあり、埃嚢抄にアシナあり、註にあしなは大根のことなりといへればアサナはアシナにや、尚考ふべし

あしな　既に前條にしるしたり

あはび　允恭記に、幸二淡路一獲二大鰒於明石一、按るに、漢書伏隆傳に献鰒魚、註に鰒似蛤とあれば、鰒は小なり、その大なるは即決明之。明人の書に鰒を石決明なりとしるしたるは違へり。決明腹中よりいでし眞珠はあはびたま、又しらたまの條にしるしつ。殼のことを万葉巻十一に鰒貝(アハビ)とよみたり。さて式内に、鰒貢献の國十八國ありて、其品類三十余品あり、纂疏に輯錄したればこゝに省きぬ

あきと　順抄に、鰓を訓ず、魚頰之。俗に腮字を用ゆ

あとり　順抄に、獦子鳥を註せり。立成を引て臈觜鳥註に、阿止里、一名胡雀。また云、或說此鳥群飛如列卒之滿山林、故名臈子鳥之。欽明紀に、臘鳥アトリとよみたるも是なるべし。今の俗にシメといふ鳥の類なり。是桑扈種類之。獦子は蠟觜なるべし

あまに　輔仁和名に女萎を註したり

あまな　輔仁和名に黄精を註したり

あしかび　記に、宇麻志阿斯訶備比古遲神。按に、訶備は頴にて、禾穂なり。可美葦頴とは高皇產靈の神德を尊びたるゝ。よておもふに、紀の葦牙古本には葦穗と有しを、いつしかに好事のもの、記の一本に穗の傍を略て、禾を書たるをみて、下に因ニ萠騰ニ之物ニ云、これを萠芽のことゝ心得て、葦禾を牙の誤として改め、終に本紀をも刀筆せしより、今は菽麥弁じがたく成にし也。記の萠騰の字は燃上ると訓じて、葦の發秀する形容を、火氣の騰るに譬喩したる詞なるを、文字に泥て義解を誂しなり。万葉に葦若末、順抄に葈を阿之豆乃と註せし皆葦のつのぐむ事なり。さればもとは葦穗なるを、葦禾になり、また葦牙になりたるもしるべからず。この說は大伴忠勇が予にかたらひたるまゝにしるしつ

あぢまさ　記に檳榔を阿知万佐、輔仁も同例なり。さて檳榔嶋と記によみたるは、正しく檳榔にはあらじ。濳齋云、檳榔は味あるものなれば、味勝の義ならんかといへり。槃按に、檳榔島は日向國にありて、今はその字音を呼てビロウジマといふゝ。予往つとしに其島に往け

るに、蒲葵てふものおのづから多(サハ)に生たり。これをはやくより檳榔とおもひまがひて、其字を塡めたり。按に、味勝(アヂマサ)の說はいたくひがごと。アヂマサといふ名、神武紀に見えて、檳榔の字は後世にあてたること。其檳榔は吾國になし。アヂマサは蒲葵の和訓なれば、蒲葵に付てしからん。尙詳しくはびろうげの條に見えたり

あららき　允恭紀に、採二一根蘭一擬レ蟻。輔仁和名に、蘭蒿をよみたり。順抄に、澤蘭、佐波阿良々木、また辛夷を夜末阿良々岐と註したり。蘭は卽フヂバカマなり、アラヽギは荒々(アラ)葱の義にて、其香と氣をいへれば、蘭葱の臭あるものもまたいへり。今下野國二荒の俗に山アラヽギといへるものは、江戸にて伽羅木といひ、飛彈山には一位木(イチイノキ)、愛瀰師(エミシ)らが詞にヲツコといへるものなり。この稱木蘭よりいでたる冒稱こと

あしかに　万葉卷十六に、葦河尓。順抄に葦原蝦といへるも同じかるべし。蓋し蟛蜞なるべし

あきはぎ　万葉卷二十に、安伎波疑とよみたるは、集中の芽子(ハギ)なるべし。救荒本草に載たる胡枝子なり。榛(ハギ)また紫草などをいへるは皆違へり

校云本ノマヽもとよりあり

あさがほ　万葉巻八に、憶良詠秋野花哥に、朝貌之花あり。字鏡に、桔梗を阿佐加保と註したり。輔仁和名に、牽牛子をよみたり。木にはやく蕣花をよみたり。さてアサガホといへる詞は、もと朝起の顏ばせをいへり。また月の顏花のかほなどいへるは、艶愛（ウルハシ）きこゝろなり。すでに紀には顏、面（カホ）、容、貌、又色をも皆カホとよみたれば、形秀の義えけん、草木にいへるは、朝に咲て露に照り、風にかほれるをいふなり。草にいへるは、ひとくさの名に非ず。いにしへは草をかやとよみ、蘆荻をスヽキとよみ、また聚生けるをスヽキ、後には萱をのみカヤといひ、芒をのみスヽキといへり。いにしへにアサガホと秋草によみたるは、桔梗をもいふなるべし。いまにては牽牛花をのみいへり。憶良のよみし朝顏の花を、蕣花也といへど、蕣は木槿なり。あがれる人の其（本ノマヽ）いこゝろに草の花をほめるうちに、但ひとつ木の花をまがへる事あらじかし。また木を草といひ、草を何木といひ、けのあらものにこものを、何鳥などいへるは、世のやゝ末になりて、ものは名をうしなひ、名は物をうしなひて、有にかひなくなり行けるに、寛平年に僧昌住とかやいへる人の撰びたる新撰字鏡に、たまたまいにしへの名をのこしたるをみて、吾はひとり憶良のよみたる朝顏を桔梗なりとおもひ決たり。すでに春海、宣

長、彥麻呂、奈美支などにもかたらひき。千蔭をはりて後にその人の名代のうたどもを見るうちに「七艸にもれしうらみやはれやらぬ霧のまがきのきちかうの花」いかで千蔭にのみいひのこしけん、うれたき事之。さて万葉卷十に、朝杲朝露負咲雖云暮陰社咲益家禮（アサガホハアサツユオヒテサクトイヘドユフカゲニコソサキマサリケレ）。とは桔梗にや、蕣花にや、契沖云、ゆふぐれのうるほひによりてこそ花は咲まさりけれ、といへるなるべしとて、後撰集に「ゆふぐれのさびしきものは朝がほの花をたのめる宿にぞありける」とよみたる、此哥をしるしとして、早くいへる朝顏をけにどしの花となしたり。後撰集に載たるはとまれかくまれ、万葉の哥に、牽牛花の朝顏有ヿはいかゞ。或人云、萬葉卷十の朝杲の哥は、芳萓の哥のうちに入たり。此うた句の入みだれたるか、咲雖云の下に萩の花はなどの詞あらんか、朝杲の暮蔭（ユフカゲ）に咲益れるといふヿなし云云　牽牛花はそのかみ古今集物名に、それが字音をもてよみしに、これも朝露に咲てかをれる花にしあれば、源順の比にやありけん、深江輔仁の和名にはじめて阿左加保と註したり。この前（サキ）なる昌住が字鏡にはみる所なし。されば寛平以後のヿにして、寛弘年の比むらさきの物がたりなどによみし朝顏とは、もはら牽牛花なるべけれ。これなかつ世になりいでゝ、つねなき花の色なれば、終に

牽牛花も、蕣花もアサガホの名をおびたりけん

あきのほ　萬葉に稻をよみたり。記に水穗とあるも稻穗に係(カケ)ていへり。稻は水田(ミツタ)におふるものにて又秋登の第一なれば、しかはいふなるべし

あらしね　式に荒稻アラシネとよみたり。紀に穗をイナホと訓たり。續紀に赤丹穗といふも熟稻のアカメルイネと訓たるが如く皆稻なり。万葉に丹穗とあるは、今の俗に穗の赤みつくといふことにて、稻にかゝれり。赤穗といふ地名もまたこれによりて稱せるなり

あきつす　神武紀に、蜻蛉之臀呫(トナメセル)、こゝにアキツスと訓たり

あをさば　順抄に、鯖、食經に背蒼色者也、和名阿乎佐波、このうを青色にして、多(サハ)に來るものなればいへるなるべしといへり。此說いぶかし

あぢさゐ　萬葉卷二十に、味狹藍(アヂサヰ)哥に安治佐爲と訓たり。順抄には白氏文集を引て、紫陽花、和名安豆左爲と註したり。紫陽花、また韻語陽秋にもみえたり。松江府志に載たる麻毬も今いふアヂサヰなるべし

あしづゝ　葦の上の紙をいへり。奧義抄にも蘆(アシ)よの内に、うすやうのどき皮あり、これな

りこいへり。顯昭の說に、蘆筒の義之こいへり。後撰集に「難波かたかりつむあしのあしづゝの一重も君をわれやへだつる」また類題に逍遙院の御うたに「こをおもふつるの毛衣あしづゝのうすきやわぶる夜のうらかぜ」

あらずみ　荒炭之。和炭にむかへていふなるべし。今云堅炭、消炭なるべし。式には炭の一字をよみたり

あまづら　字鏡、順抄幷に千歲藟を註したり。今隼人國の俗にいへるアマカヅラこいふもの含水藤之

あをむし　順抄に蝭蛉を註したり

あをのり　順抄に陟釐を註したり、今食料のアヲノリにはあらじ。のりの條にいふべし

あしつき　萬葉卷十七に、礪波郡（越中國にあり）雄神河邊作哥、乎加未河泊久礼奈爲尓保布乎等賣良之葦附等流等湍尓多々須良之。注に、葦附水松之類。槃按に、武藏國荏原郡荒藺崎の淺渚は今の大森建石八幡諸村に隸り、是より先百餘年前は、その淺渚に秋の比蘆葦を樹わたし、冬より春かけて海潮の盈虛にかくれ、またあらはれ、うしほのうるひ、日のひかりをうけて、

その下缺文ノ處、木村本「土民はヒヅと」アリ

紫菜を生けるを採て、土民の資させしに、人の心いよ〳〵巧になりて、いつはあれ檞櫟の小枝をたてわたして、あしに代けるに今はかゝるよろしき紫菜多に生ける、故陸種に勝りて榮にさかえにけり。そのたてわたす柴を日井場こいへり。今その□□□□こいへゐなり。さていにしへは、紫菜の蘆葦の莖におひむしければアシツキこいへるはげにふりたる理實なる稱也。今も尚小竹の小枝を植てつくれるもあり。吾聞其はじめ千東宮戸川べにてつくりたゐこぞ

あはきみ　記にいへるは粱黍なるべし

あまかし　記にいへるは甜檮なるべし。紀に味橿こも書たり、かしの條にその屬をいふべし

あはがら　順抄に、梳齒魚を註したり

あしたづ　葦田鶴なり、たづの條にしるしたり

あしつの　順抄に茭を註したり。既にあしかびの條にしるしたり

あしかひ　鷹羽貝に似てたひらかゝ。なのめなゐこまかき理あり、また淺理貝にて、横にながく朽葉色のまたら有、げにあしの老葉のごし。くれなゐのうつりあゐものはいさめで

たし。津守冬國の哥に「海原やなみにゆらるゝあしかひのかひある國となれるかしこさ」

あまかひ　鰒の兒貝に似て、表(ウハベ)は波間柏(ナミマカシハ)のはたへに似て内淺く界あり、小舟の形に似たり、色はうす紅と白き有、風雅集に「みつはさす潮ひにあさる海人かひはおもひもよらずわかの浦哉」またこれを舟貝ともいへり。夫木集に「こと人に便りによする舟かひは吹くる風やつなぐなるらん」一種いと淺くいろ白きを、若の浦にて白玉椿と云キセワタ貝ト同名カ　また螢貝、駒の爪貝あり、皆同じ屬なり

あをうま　天武紀に、白馬をよみたり。万葉、字鏡、續紀、順抄等皆青馬をよみたり。また万葉に、大分白馬をよみたり。是驄をいへり○白の字をアヲとよむ義を尋ぬるに、游清云、青雲は青天白雲をつゞめたるべし。白きに青きをかぬれば愈粹白之、既に紀に青雲のしらかたの津ともつゞけたり。槃おもふに、白は卽五色中の粹之、それに青きをかぬれば愈粹白之故にその純粹を賛美して月白魚白ともいへり、唐詩にも、江碧鳥逾白と詠したり。また白馬をアヲマとよむも稱賛の詞なるべし。青天白雲は元是高明の象なれば登仕路の事とも砥レ行立レ名の事をも通じて青雲といひしなるべし

あかごま　記に赤駒と書たり。万葉おなじ。稱徳紀に、赤毛駒をよみたり。皆騂をいへり。
万葉卷〔○十九〕「皇者神にしませばあかごまの腹ばふ田ゐを都となしつ」

あしぶち　順抄に騮を註したり

あきちこ　藏玉集に荻をといへり

あめうし　垂仁紀の註に黄牛をよみたり

あさつき　式に島蒜をよみたり

あゐのみ　輔仁和名に、藍實を註したり。あゐの條むかへて見るべし

〔○以下五行幷次頁白丁〕

あやめぐさ　順抄に、養性要集を引て、昌蒲一名臰蒲、和名阿夜女久佐（臰は臭と同じ）万葉卷八に蒲草をよみたり。續紀文武帝詔に、昔者五日之節常用菖蒲爲縵、比來已停此事、從今而後非菖蒲縵者勿入宮中。古今著聞集に、堀川院の御時、五月五日江帥菖蒲を奉りたりける狀に、進上（メテマツリアグル）水邊菖蒲千年五月五日大江爲武（ミツベノアヤメグサチトセノサツキイツカタエセム）、この狀を殿上にいだされて人〳〵よめと仰せられけれども、其心をしる人なかりけるに、師頼卿其時少將にてさもらひけるがあんじえてよみ侍け

る。さて曜仙神隱書に端午以二菖蒲一服酒といふものは即石菖蒲なり、こゝにアヤメグサといふものは白菖なり、菖蒲をアヤメグサとよめるはわが國の稱にしあれば尙不當の論あるべからず、明人詩に、五湖四移鬪舟移蒲揷鬢前入酒巵、これも石菖蒲なるべし。農圃六書に、六種菖蒲有、佛典法苑珠林に五種菖蒲を載たり、これもこゝにいふイシアヤメ之。また花アヤメあり、これは應劭風俗通に載たる溪蓀且季德裕平泉花木記載たる芳蓀なるべし

あかあづき　順抄に赤小豆を注したり。宣長云、こはたゞ阿豆伎なるを、黃小豆、綠小豆などいふ漢名あるに就て、後に其色を分ちいふ名之。これによるに、阿豆伎はこもに小豆の大名之、その中にして赤豆なる者最いちじるしければ阿加阿豆伎と分ち呼べり。今は小豆の大なるを赤小豆とは稱(トナ)へつ

あをみづら　万葉卷七に、靑角髮(アヲミヅラ)とよみたるは、神代紀に、天吉葛(アマノヨサヅラ)あり、このヨサヅラは瓠(ヒサゴ)のカヅラにて莖も葉も共に靑ければアヲミヅラといひて、万葉に靑角髮よさみの原といひかけたりといへり

あかかゞち　記に、赤加賀知。神代紀に、赤酸醬をよみたり。宣長は赤赫都賓(アカカツ)なりといへり。

順抄に、酸醬を保々豆木と注したる是之
あまがへる　順抄に、蛙黽を注したり。按に黽は鼃字の誤なり
あかゑむば　順抄に、赤卒を注したり。ヱンハのハは濁てよむべしといへり。後にこれをカゲロフともよみたり、俗にはアカトンボウといふ之。トンボウは東方なりなどゝいへるは僻事なり、とんぼうの條にいふべし
あしまつひ　字鏡に蚌を註せり
あきがしは　万葉巻十一に、秋柏潤和川邊。また朝柏潤八河邊とよみたるは皆商柏之、商をアキといへるは商夏のアキなり、倘詳に冠辭考にみえたり
あめのうを　式に阿米魚とみえたり。こは近江の湖中にありて、鱒に似たる魚之。すでにあめ條にしるしたり
あかみとり　天武紀に、朱鳥此云阿詞美苫利とよみたり
あはびたま　万葉巻六に、鰒玉左盤尓、また巻十三にも、鰒玉をよみたり。しらたまの條むかへみるべし。万葉巻〔〇七〕に「おほうみのみなそこ照らすあはび玉いはひてとらん風な

藏玉　あだな草いかなる人の植置てかゝるうき世にちるをみすらん

ふきそね」

あしげうま　万葉巻十三に、大分青馬をよみたり

あしはなげ　黄驄をいへり、拾遺集に「難波江の葦の花げのまじれるはつのくにがひの駒にやあるらん」

あしげふち　神樂哥にみえて、驒をいへり

あきなくさ　莫傳抄に冬草の惣名ゝこいへり。藏玉集に冬菊なりこいへり

あきちくさ　莫傳抄に萩なりこいへり

あだなぐさ　莫傳抄に櫻ゝこいへり

あをふぐさ　莫傳抄に春草の生いづるをいひ、また春草の惣名ゝこもいへり

あさみぐさ　藏玉集に松ゝこいへり

あをはごり　藏玉集に鴨ゝこいへり

あこやがひ　いかひの條にいふべし

あまかづら　式に甘葛煎をよみたり

あをかづら　順抄に防己を註したり

あをつゞら　古今集、戀四、寵「山がつのかきほにはへる青つゞら人はくれどもことづてもなし」淸記にも草のうちに此名あり。槃おもふに、今防己をツヾラフヂともいへれば、即ち前條のアヲカヅラならずや。淸記の抄には青蘡草と註したり　〔○以下八行余白〕

あべたちばな　万葉巻十一に、馬下乃阿倍橘とよみたるは味物甘橘といふなり。順抄に、橙を安倍太知波奈と注したり。新六帖に「名にしおふあべたちばなの花ならば冬の衣の袖のかやせん」眞淵云、阿倍の濁と、阿米の淸と通ふは古語の習なり。續日本紀に、初て柑子のみなりつると見ゆれば、其柑子などをいふにやとおもひしは非ず侍りし、同紀に聖武天皇橘氏を賜はる時の詔　橘者菓子之長上ニテ人所ㇾ好とも仰られて、むかしはかくめでし物なれば、味しものあま橘とほめいふべきなり。後には蜜柑などことにうまきが來れるにおほはれて、橘をうましとする人なければ、今は疑ふことゝなれるなり。橘は今も春盤などに盛ものにて、五月花咲き子も常にあり、はた南殿の橘は今の京の前より有つる木のよし禁秘抄にかゝせ給るが如く、其後にも世々を傳へて、同じく橘をうゑさせらるゝなれば、かたぐ\疑はざれ、且五月花咲はこの類に他なきなり　記には波那多知波那とみえたり

ありのひふき　順抄に、桔梗を註せり。桔梗ははやくアサガホとみえたれば、このアリノヒフキといへる名は、當時の俗にいへる名なるべし。さてその名義、いと〳〵心得がたく、更におもひよれることなし

あやしきいね　天武紀に、七年秋九月忍海造能麿獻ニ瑞稻五莖一。按に古事記の序に並穗瑞といふもこれなり、就て兩穗兩岐などをもいふと、表にもいへり

あやしきかめ　萬葉卷一に圖負神龜とよみたり

あこやのたま　いかひの條にしるしたり

あしげのうま　驄をいへり。六帖に蘆鶴のあしけのこまともよみたり

あきまつくさ　藏玉集に夏川なりといへり　〔○以下一行竝ニ次頁餘白〕

あまのよさづら　あをみづらの條にしるしたり

あきのなゝくさ　万葉卷八、山上臣憶良詠秋野花二首、その一に、秋野尓咲有花乎指折可伎數者七種花、其二に、芽之花乎花葛花瞿麥之花姫部志又藤袴朝貌之花。釋は各、條にしるしたり。また雅世の哥に「しげりあひて秋まつ野べの七草に先だつ色やなでしこの花」七種

栞の原始より世にいひ傳へし事ごも且其くさ〴〵の說は、寬政年の比、人のもこむるま丶に書つごひたるを、其人木に忍りたれば、再びこ丶にしるさず〇陽明家より、七月七日秋野の七草を扇のかたにつくりて進献せしとあり圖說は別にしるしたり其種々はしますゝき、女郎花、桔梗、せんのふ、小車、蓮、菊之

あはびしらたま　武烈紀に、鰒眞珠をよみたり。尙しらたまの條にいふべし

ありますげ　六帖「みな人の笠にぬふてふ有馬菅ありての後もあはざらめやは」或云、津の國有馬郡の山すげ之。猶なにはすががさなごいふにおなじ

あから橘　万葉卷〔〇十八〕に「月待ていへにはゆかんわがさせるあから橘かげにみえつ丶」或云、熟せる橘をいふなるべし　〔〇以下四行幷ニ次頁白丁〕

伊行

いも　万葉に芋をよみたり。またウモこもよみたり。順抄に、以閉都以毛こ注したり。內膳式にはイモノコこいへり。多識編に、ツ丶リノコこいへり。三才圖會に粒ツブイモあり、琉球に鶴ノ

コイモあり、又順抄に、山芋を夜万都以毛と註したるは、薯蕷之。今は自然薯蕷と云なり。その實を三代實錄にヌカゴといふ、卽零餘子なり。今いふヤマノイモは、鎭江府志に載たる佛掌薯之。和訓栞云、芋の葉を白身草といへり、芋の類おほければこゝにつくさず、詳に纂疏にしるしつ

いね　記に、稻をよみたり。紀にイナとよみたるは連聲の時の稱呼にて常語にはあらず、酒をサカ、風をカザといふ例之。又或はシネといふも皆飯根の義にして、穗ある時の稱之。式に拔穗稻とも書たり。さて粳糯禾粢の稱おほし、嘗て成形圖說及纂疏にしるしてゐりたればこゝにその概略をしるす。凡稻は濺種の惣稱なり、早中晚の三種は中夏成熟の候をもて定擬とは爲べからず、かの國のごときは一月に一熟、一歲三稻、また春に種て夏に登るとは、南邊の外にはなけれど、稻穀の豐美且その饒きにいたりては、天下四大洲の內、わが國に逾る所なし。代々の漢史にもしるし、はた來舶の諸越人も貴けるとは著明なり。としげゝればこゝにのこす。其名稱は〇早稻ワセまたハヤテ〇中稻ナカテまた二番物〇晩稻オクテまたオシネ〇穭オロカオヒ〇孫稻ヒコバエ〇嘉禾アヤシキイネ卽瑞稻之〇粳秔ウルシネ〇糠ミシロノイネ稻

不粘之○糯モチノヨネ○秈アカゴメまたトホシ郎大冬之○陸稻ヲカボ○米ヨネまた米麿牙共に東鑑にみえたり、またボサツ舊韓地の方言之、雞林類事にみえたり○粒イナツビ○穀モミ語孟にいふ粟之、あはの條にしるしたり○糙モミヨネ式にいふ黑米之、今粈(モミ)の字を用ふるは、はじめて日向風土記にみえたり。按に、粈音紐、說文に雜飯之。これ糙米の義なし○粠アラゴメ○粃シラヨネまたシヒナセ○糳マシラケ○粺シラケ○糲ヒラシラケ式に云、白米之○精粺シロシラゲ登米之、山海經注に、祀神之米○糄ヤキコメまたヒラコメ○籺ツ、オチまたコマメ○糠ヌカ亦コヌカ○糈コメサキまたアラモト○穗ホ○穎カヒまたシナヒまたカブシ○稍イナバナ○芒イナゲまたハシカまたサシまたノゲ○稃モミカラまたアラヌカ○稈イナガラまたワラ○秸エリワラまたスグリワラ○穖イナグキ○莒ワラノハカマ

いぬ　記に犬をいへり、順抄に、猥を無久介以沼と注し、葒草を伊沼多天と註し、犬を惡奴と註し、狗尾草を惠沼能古久佐と註したれば、イヌエは近きに似たれど、おもふにひとかたは當時の俗語にやあらん

いか　仲哀紀に、烏賊津(イカツ)ノ連あり、字鏡、順抄にも烏賊を註したり。式に烏賊骨をイカノコフミ

訓たり。順抄云、今案、背大骨卽俗所謂甲也。甲は卽コフ也。是を懷瓶といひ、海螵蛸と云、按に幼々新書に、浮石田漂消螵蛸皆輕浮の義なるべし。またおもふに章魚を蛸魚といひ、蜘蛛を蠨蛸といひ、蛸蝍を螵蛸といへば多股のものをもいへり。これも義を輕浮に取ならん。證類本草に、海上方を引て烏賊の骨を海螵蛸といへるはいぶかし、海螵蛸は應に烏賊の稱にはあらずやといへり。げにさるべし

いが　栗刺をよめり、卽毛毬を云なり。夫木集に「手にとらば人を刺てふいがぐりのゑみの中なるかたなおそろし」

いを　順抄に、魚の俗語之といへり。伊勢物語にもかくは書たり。ウを轉じてはイとなれば也

いび　順抄に、立成を引きて、鵁を伊微と註したり、また唐韻を引て云鵁鶄

いな　鯔をいへり。磯邊の稻株(イナカブ)より化してなりいづるものなれば名とするといへり。瑤囊抄に、鰷をよみたり。俗には鮭字をつくりてよめり。そは簀の上に走りたるを漁(トル)るものなれば、かく二合の字を製(ツク)りたるらんといへり。土佐國人はエキナユといふといへり。順抄に

は鯔を奈与之と讀たり　〔○以下八行余白ノ所次ノ註アリ〕

案　いし　いは　いそ

殺生石　後院に云、武州駒場に御藥園御用植村左源治政勝が諸國巡行して寶曆五年に奉りし諸州採藥記と云物の下野國の部に云、此石は那須か嶽の麓にあり、此處を湯本といふ、彼石を打割て樣子を見、又なめして味を考察るに、さして常の石に替る事なし、此石の有處硫黃野と見ゆる、此山の溫泉涌出る時殺生石の在る場所へ行逢へば禽獸に至る迄忽死といへり。予は殺生石を打割て持參二ッ三ッ上る云々

茵は茴の誤なるべし

いちひ　輔仁和名に、茵蕡以知比、茵蕡也。今以知備、是本草に載たる茵麻之。允恭紀に櫟井イチイ、櫟津イチヒツ、順抄菓部に、櫟子、和名以知比、また櫟毬、和名以知比乃加佐と註したればイチイは椆櫟柞櫟の櫟にて、今云ナラ也。用明紀に、赤檮、此云伊知毗、と註したるもおなじかるべし。さて今の俗にいふイチヒ、カシヒてふものはことなり、また飛彈國にも似たる名のきあり、次にしるしつ

○いちゐ　飛彈國位山にていへる名にして一位の義なり、その木は日光山のふもとにていへるアララギとおなじきゝ。あらゝぎの條見るべし。さてこの木を笏に用ひし木なれば、ま

たシヤクキともいへり。笏は手板シヤクなり、笏尺ともいへり、南洋寄歸傳にみえたり、書言故事などにも手板を載たり

【頭註】側

梅窓筆記云

笏ニ一位ノ木ヲ用ルコト八雲御抄山部くらゐ（いやたかの岑、六位笏木伐之山）之 又三玉集飛彈國司にて基綱卿位山の一位の木を笏の料にのぼせられし時、御こたへに「位山みねちかきまで我こえし道をば君が手にとりてみよ」トアリ。一位ノ木今飛彈國ヨリ箸ナトニ作リテ、都ニ來ル木ヲイチヰト云ヘド櫟ニアラズ、アラヽギ之。物產者流ノ說ニ、廣東俗語ニアル水松ト云物ニ形似タリ。位山ニ生ズルヨリイチヰの名アル之ト云リ。又櫟モイチヰニアラズ、ドングリノ類之ト云ヘド、コレハ後世ニ物產ノ精シクナリシヨリノ論ニテ、既ニ和名抄ニ櫟ヲイチヒと訓ジ、松尾ノ攝社櫟谷ヲモイチヒダニトヨムカラハ、往昔ヨリ櫟ヲイチヒト云ガ俗ナルベシ。今更ニアラタムベキニアラズヘイチヒノ假名昔ハイチヒ、中比ヨリイチヰトカケリ

補　記に乃遺蚶貝比賣与蛤貝比

いがひ　順抄に、尒雅の註を引て、貽貝、一名黑貝、和名伊加比と註したり。舊事紀の黑貝も是なるべし。式には淡菜をイカヒとよみたり。按に淡菜は卽今俗呼のケガヒなり、一名ウハガヒ一名モガヒ是なり。此他方言尤おほし、其形平貝ヒラガヒ今云ヒラキに似て、甲高く表ウハベは黑く、內は青黑

寶令ニ作活ニ云云蟹貝をいかひと訓したり、或云蟹まさに蛅につくるべし

の光あり、唇の兩方に黑毛を吐、たとふべくもわらふに堪たり。東海夫人の名虛ならず、其肉可食、其腸中に珠あり、今藥舖うる所の尾張眞珠と稱するもの是なり。和名鈔に云、尒雅註、貽貝一名黑貝、和名伊加比、これ貽貝の字音によりて訓を取るなり、和名此例おほし。ラニ、シヲニ、ノセウの類是なり。今本尒雅釋魚貝條云、玄貝貽貝、郭景純注云、黑色貝之、是即白貝、紫貝の屬にして、寶貝の一種黑色なるものなり。醫方に所云貝齒也、俗にはコヤスガヒ、タカラガヒなどいへり。其肉は科斗の如く、但頭尾あるのみにして食ふべきものにあらず。延喜式に、貽貝鮨とあるは、尒雅の貽貝に非ず、今の俗にいふイガヒの屬をいふなるべし。竊におもふに、藤原忠平延喜の式を撰する比、偶尒雅の本文をわすれたるならん、また其後人宋の嘉祐に出たる淡菜を貽貝とおぼえ、抄の註によりて、竟にイガヒと呼なせり、是其誤を以て誤を傳ふると既に久し、西行の哥にも「あこやとるいがひのからをつみおきてたからのあとをみするなりけり」とよみたれば、まさしく今のケガヒをイガヒといへるしるしなり。さてアコヤはある說に、尾張國の地名なりといへど、吾子なると明え、アコは愛寵の詞なれば、貝珠の稱となり、新猿樂記にあくや玉、宇治拾遺にあこや玉などみえたり。また珠のいづる貝の名

仙覺抄ニイチゴ之ト云ルハイカヾ

にも貧する也、六帖「いせの海のあまのしわざのあこや玉とりての後も戀のしげゝん」

いちし　萬葉卷十一「道のへのいちしの花のいちじろく人みなしりぬわが戀つまを」新六帖「いたづらにあふよしをなみみちのくのいちしの花のなには聞ども」また「しるべせよいちしの花の名にしおはゞまたうべもなき道の行へき」或はいふ、是羊蹄草之。按に、順抄に、羊蹄菜、和名之布久佐、一云之。こゝにいふシとイチシとは同物には非ず、イチシを一字之義といへるはおぼつかなし。葱、和名紀。これを後世にヒトモシといふ、これをしるしとなし例となすは僻事之

いたび　安閑紀に物部木蓮子をイタビとよみたり。式の御贄(ミニエ)の下煎木蓮子ありてまたイタビと訓たり。順抄に、崔禹を引て、木蓮子、和名以太比、と註したり。又本草を引て云、折傷木

いなば　紀に稻葉の雲などゝみえたり

いひぼ　記に飯粒をよみたり。又紀及三代實錄などには粒の一字をもよみたり

いぬえ　順抄に香薷を注したり

いそな　水松をいへるなるべし、平康貞女のうたに「いそなつむ入江の淸水たちかへり君み

校云
原本ニ
みえたり
セリ重複
削ル今

ろまでのいのちこもがな」古今集大哥所御哥に、こよろぎのいそたちならしいそなつむめざしぬらすなおきにをれ浪

いちご　字鏡、順抄幷に覆盆子を註したり、紀にはイチヒコとみえたり

いぎす　順抄に海髪を以木須こ註したり。湊語抄云、小凝菜を古留毛波こ註したり、こゝろふこの條を見るべし

いさな　萬葉巻二、鯨魚をイサナこよみたり、また同巻に勇魚(イサナ)こも書たり、壹岐國風土記にイサこ見えしはその國の方言なるべし。さて鯨魚の品おほし、予が魚品に載たればこゝに省きたり

いつも　萬葉巻四に、河上乃伊都藻乃花、また巻十にもおなじ詞あり

いばら　欽明紀に、茨城をイバラキこよみたり。うばらの條むかへてみるべし

いりこ　式に熬海鼠をよみたり

いるか　記に入鹿魚をイルカこよみたり。字鏡、順抄幷に鯆䱐を註したり

いわし　字鏡、順抄幷に鰯を註したり

いくひ　出雲國風土記に魚の名とこいへり

いむき　字鏡に蛹を註したり

いたち　順抄に鼬鼠を註したり　〔〇以下二行幷ニ次頁白丁〕

いたどり　反正紀に虎杖をいへり。たちひのはなの條にしるす

いはつな　石蘿をよみたり。いにしへは葛綱角皆通じてツナと訓ぜり、詳に和訓栞、冠辞考などにみえたり。今いふイハカヅラは石血といふ草なり

いなたな　記に、稲種をよみたり。天智紀には稲種をタナシネとよみたり、田成稲の謂之。種は田根と註したり、藻塩草に稲之保とあるもホは即穂なり

いながら　記に、稲莖をよみたり。廣雅に、稲穰謂之稗藁、韻會に禾莖、正字通に禾稭、皆今いふワラにしてこゝにいふ稲莖之

いづかし　記に、伊都加斯とみえたるは即嚴橿なるべし

いそまつ　萬葉卷二十に、伊蘇麻都をよみたるは磯邊におふる松なるべし

いちしば　萬葉卷〔〇四〕に市柴、又卷十一に五柴ともよみたり、皆櫟柴の略なるべし

補 輔仁同じ、又いはこけと註したり

校云六八七ノ誤

いこゆふ　糸木綿なり、ゆふの條みるべし

いきくさ　順抄に景天を註したり

いもがら　順抄に蕨を註したり、卽芋梗なり

いはくみ　順抄に卷柏を註したり

いをすき　順抄に商陸を註したり

いぬたで　順抄に葒草を註したり

いへにれ　順抄に兎葵を註したり

いしがめ　順抄に秦龜を註したり

いひごよ　順抄に鵂鶹を註したり

いひあり　順抄に赤蟻を註したり

いしもち　順抄に鮸を註したり

いしぶし　順抄に鮠を註したり

困 玉かつま六之卷に云

何の貝にまれ磯に打よせたるは大かたに片貝になれるを片戀

或人のいはく、物語書などに、いしぶしといふ魚は、今の世にごりといふものなるべし。此ごり、鴨川、桂川などにも多く有て、つねに石の下にかくれゐるものにて、石の下を尋ねてとるなり。いしぶしといふ名にかなへりといへり

いろくづ　順抄に鱗を註したり

夫木集知家の哥に

おとこ山秋の今日とやちかひけん河瀬にはなつよものいろくづ

いかるが　紀に斑鳩をよみたり。万葉巻十三に、伊加流我とよみたり。丹方に、崔禹云、鵤、貌似レ鴿有二勾喙一隼眼而翅羽蔽々班々可愛、鴿、順抄に鴿に作る、今云ツチバト也

いらむし　字鏡に蛓を註したり、按に蛅蟖、今いふケムシなり

いそかひ　萬葉巻（〇十一）に水沫玉（ミナワタマ）にまじれる磯貝（イソガヒ）とよみたり。後花園院の御哥に「わが袖はいつかひがたのかたしがひあふてふとも浪にしほれて」また夫木集に「いせじまやふたみのうらのかたしがひあはで月日を待ぞつれなき」とよみたる、かたしがひこそ、いにしへにいへる磯貝をといへり。されば閫書に載たる石磷、また蛾などの屬なるべし。これ皆礁石（オキノイシ）

といふに冠らせたるなるべし一種のものとなすべからず占春の説穩ならず

按にいはゐは蓋し石厈なるべし、つら蔓なるべし、さ

に徘徊まつはれる片貝なり。今はその色、そのかたちのことなれるに就て、俗名を別にせしなり

いろがひ　満貝に似ていとこまかなり、眞白淡紅のうるはしくてりにほへる色の貝なり。またこきうすきむらさきなるもあり。夫木集に「ふしがたにこきむらさきのいろがひはいくしほなみに染かへしけん」また名所記に「いろ〳〵のかひありてこそひろはめ（ふめ木本〔閑〕）ゐちくさの濱の海人のまに〳〵」また「汐みてばいそまになびくいろがひのうきみしづみ戀わたる哉」また丹敷貝、撫子貝、櫻貝などもなべて色貝といふ之

いへばこ　源氏夕顔の巻に、たけのなかにいへばこといふとりのふつゝかになくをきゝたまひて云々　〔○以下五丁白丁〕

補

いはゐづら　万葉巻十四に、かほやが沼の伊波爲都良、また巻十四に、おほやがはらの伊波爲都良、とよみたり。おもふに沼といひ、原といへれば石藺葛といふ義にや、藺は沼にも原にも生ふるものなれば かくはおもひつ。按にツラといへる詞は藤蔓の事のみにはあらじ、凡物のつらなる事をツラといふ之。卽万葉に、巨勢山の列々椿、また列樹などのツラもおなじ

義と。されば伊波爲といへる草の列々(ツラ)に生ひしげりたるをいふなるか。さてイハといふ詞を負たるはイハマツ、イハツヽジなどのイハとおなじかるべし。石蘿をイハツナ今の俗イハナなどのイハもおなじく、石に因て生し蔓の類ならんか。このイハヰヅラを或國の方言にイヘイカヅラなどいふはうとし

【頭註】補　ればらるにをらるいやの審生かの總ふ古說石ふづ類てに泰未

[補]夫木、和泉式部の哥に、岩つゝじ折もてぞみるせこがきし紅ぞめの色に似たれば。又新六帖、知家が哥に、村雨にぬるともをらん岩つゝじせこがま袖の色もなつかし

いはつゝじ　萬葉巻二に、磯乃浦廻乃石乍自とよみたり。春曙抄に、白氏文集を引て、岩榴、一名山躑躅、一名杜鵑花、杜鵑啼時花撲々と詠じたり、つゝじの條に解たり。字鏡、順抄に羊躑躅を註したるはいかゞ

【頭註】補

[補]こは寢席にて皮といひかけたる也。いにしへ寐るにも皮をしきしにて、うきてもなどつゞけたれば、寐筵を皮といひかけたるなるべし。皮を河に通じて河ぞひやなぎといへるにや

いなむしろ　顯宗紀の哥に、伊儺武斯盧哿簸(川)泝比(副)野儺擬(柳)とよみたり。万葉巻八に、伊奈牟之呂河ニ向立とよみたり

補　輔仁和名同じ

秋田　つらに生ふるいなご

いたちくさ　順抄に連翹を註したり

いはのかは　順抄に石葦を註したり

いへついも　順抄に芋を注したり、いもの條にしるしつ

いはくすり　順抄に石斛を注したり

いさゝくさ　藏玉集に大角豆(サヽケ)なりといへり

いしのたけ　莫傳抄に李皇紀を引、床夏なりといへり、けだし石竹の字訓之

いろみぐさ　莫傳抄に櫻之といへり、藏玉には紅草なりといへり、藏玉、尋行よしのゝ山のいろみ草花より上にかゝる白雲

いはねくさ　莫傳抄に蕨之といへり

いくなくさ　莫傳抄に松なりといへり

いけみくさ　莫傳抄に蓮なりといへり

いほむしり　順抄に蟷螂を註したり、また或はイヒホムシリともいへり

いなごまろ　順抄に蚱蜢を註したり

いたやかひ　イタヤは板屋にて、板簷(ヒサシ)のごとく理(キメ)のある貝にて、今の俗に杓子貝といへるもの

補　てふ虫をいへるにや

と。新六帖、信實「あやしくも浦めづらしき板やがひとまふく海士のならひならずや」この板や貝を、今の漢人は牛邊蚶といふといへり

いれこさけ　式に内子鮭、今云子籠鮭なり

いがたうめ　源氏物語にみえたり。伊賀專女の義にして狐をいへり。伊勢鎭坐紀に專女三狐神といへるによるなるべし

いのくつち　輔仁和名に牛膝を注したり

いつまでぐさ　淸記に、いつまで草おふる所いとはかなしと書たり。八雲御抄に、壁におふるといへれば垣衣の類にやあらん

いなおほせどり　順抄に、稲負鳥とかきたり。古今集に「わが門に稲おほせどりの鳴なへに今朝ふく風に雁はきにけり」ある人いはく、稲負鳥は鶺鴒をいへるよし、セキレイといふ鳥は、稲を刈ける時しかならず來鳴、いねをかる事をおほせるとなり。おほせるとは、いねをかれといへる心と。おほせ、をふせともかくよし、またひとつの說に、セキレイの鳴と百民いねを春おふてかへるともいへり。とにかくに、いねをかりとる比ほひセキレイの鳴ゆゑに、

稲負鳥と名づけたらんとぞ。定家卿のいへり。また近来好事の人あり、あきつくにゝ行ければ、少女ども鶺鴒のいななくをきゝて、百姓いねをおふてかへるとなんいへるとありけるよし、啼なべにといへるは、稲負鳥と雁とふたつならべていへるゆゑに、すみてよむべしとなり。宣長はニウナイ雀のことなるべし、ニウナイは新嘗のうつりたるなるべし、近江僧立綱はイハミ鶺鴒なるべしといへり。イハミはイナミの誤ぞとぞ、萍の跡にみえたり

いねつきこまろ　　順抄に螽斯を註したり

いたちはしかみ　　順抄、蔓椒をも注したれど、蔓椒は古より我國にはなかりき

いつくさのたなつもの　　神代紀に五穀をよみたり、五種の種つ物の義なり。宣長、久かたの乾の元に稲穀をもて人民を育の第一とす、此ものはわが國の號に負ひ給ひて、天皇の御名にしも稲穂の事を稱へ奉りけり、こは瑞穂國を統御うへにて申しまつれるぞ。記の傳に、神つ代の御名に、豊香節、豊買、葉木國など皆稲によれる御名なるべし、香節は稲の靡き垂たる意ぞ。豊買は豊頴にて、葉木國ははびこりこもりかなる意、雲野なども、かの久美竹のくみにて、稲のふさやかにこもりかの意ぞ。また厳稲御食主などの御名の例をも言あげしけるは

さる理にありぬべし。謹ておもふに、懿徳の御名を耜友(スキトモ)と申、孝昭の御諱を香殖稲(カヒシネ)と申せし、蓋(シ)亦天忍穗耳、天津彦穗など申奉るに相ひとしく、この瑞穗國を統御(スマル)より、稲穗の緣りしを取給ひ、天が下の君に立給ふは、民の爲なれば、これを食(ヤシナ)ふの物を、御名のうへに聞えさせ給ふ、誠にいみじくおふけなし。槃云、いにしへ五穀といひしも專らに稲を主(オモ)としていへるぞ。これに麥(ムギ)豆(マメ)粱(アハ)稷(ヒエ)を副て五種とし、記には稲粟小豆麥大豆とし、式には五穀をよみて田成物といへり。九穀の稱は皇極紀に見えたるぞはじめなるべき。漢土にては、いにしへ五穀のうちに稲を入ざるは、書を著せし聖賢西北より起りしゆゑに、ひとり稲を遺したるよし見えたり。わが國とは古今に異同あり、との次(ツイデ)なればいふべし、禮記月令に、黍稷麻麥豆をいへり。周書に云、神農之時天雨粟是則初有五穀之始也、禹本紀に令ニ益予衆庶ニ稲可レ種ニ卑濕一と記せるこそ其證なるべけれ。鄭玄月令の註に、黍稷稲麥菽といへり。穀梁傳には、禾麻粟麥菽といへり。醫經には、素問眞言論に、麥黍稷稲豆、藏氣法時論に、麻麥稷黍豆、五常政大論に麻稷麥稲豆、王逸注、離騷註おなじ。靈樞五味篇に、麻麥黄黍秔米大豆、周書云、凡禾麥居東方黍居南方稲居中央粟居西方菽居北方、太平御覽に、范子計然を引て、五穀者東方多レ麥西

方多レ麻北方多レ菽中央多レ禾、以上の諸書にしるすに大同小異あり、東方に麥レ多きが如きも、其方位に泥て、その實はしかるに非ず、夏官職方氏云、正東曰青州其穀宜稻麥、今荷蘭人我東方の稻を天下第一としてかの土毛(クニツモノ)と交易するも絶ず、蓋し麥は北方の地に生ず、歐羅巴地方は麥を以て常食とすれば方位の說にあたらずといへど、わが東方は三穀四種六穀九穀にいたるまでその饒衍いふべくもなし、羅存齋尓雅翼云、古人說百穀以爲粱者黍稷之總名、稻者溉種之總名、菽者衆豆之總名、三穀各二十種爲六十、蔬菜之屬助穀各二十種、凡爲百穀、然予以爲穀之種類每物不下十數、亦何假蔬果而後爲百耶、存齋この說百穀の義をつくしたり。
また按に書舜典注に、穀非一種故曰百穀。延喜祝詞式に、作物といふは田野の百穀をすべいふと士清いへり。されば百穀は庶草を百草といふが如し、正安大嘗會、遠江國池里、兼仲の哥に「いつくさのあひみ垂(タレ)たる田成つものいけだのさとに雲をなしつゝ」

〔○以上第一册、卷第一上〕

宇部

う

記また万葉に鵜をよみたり。記に鸕鷀をよみたり。万葉巻六に、島回爲流水鳥（アサリスルウ）、巻三に、阿倍の島宇乃住石（イソ）とよみたり。ウは産の義なり。彦波瀲武（ヒコナギサタケ）の生れませし時に、この鳥の羽をもて産（ウブ）やを葺きし事、神代紀に見えたり。口訣に、今も産婦これを執は乳（ウミ）易きといへり。されどこの鳥口中より胎生するといふは違へり、雛を吐は鷀なり、この鳥風に能（タ）へ、水に耐ふるゆゑに、舟首（フナサキ）に畫（エカ）けるなり。その形ち鸕鷀に似たりといへり。私記にシマツトリ小日鵜鵠、俗に云ウ、といへれど鵜鵠はカランテウなり

○卯とよむは兎の義、十二支肖より出たり。兎もウと斗よめり、ウサギは後の訓成べし、吐て子を生ずといへば産易きの意にて名づくるにや、と士清いへり　〔○以下七行餘白アリ〕

うり

記に苽をよみたり。万葉巻五、憶良の哥に、宇利波米婆とよみたり、後にはフリともよみたり。是甜瓜なり。今は瓜に種類多ければ甘ウリ、カラウリ、マクハウリなどいへり。また武藏國豐島郡鳴戸村にておほやけに奉れるものをつくるなれば、こゝにいづるを鳴戸瓜といへり。拾芥抄に、五月四日内膳式供早瓜、山城國御園之所供也。蜻蛉日記にも此とみえたり。催馬樂にも山城の狛の瓜つくりとよみたり（下狛上狛ともに相樂郡にあり）　さて他の國にて甜瓜を只に瓜とい

へる者あり、禮記に爲天子削瓜郊特牲にも瓜祭、論語に菜羹瓜、易經に以レ杞包レ瓜、詩經に七月食瓜、八月剝瓜、緜々瓜瓞、夏正に五月乃瓜（大戴禮同）呉越春秋に盛夏之時人食生瓜起二居道傍一瓜子復生、古詩に瓜田不レ納履 周書に削レ瓜食皮、是皆甜瓜なりといへり。いにしへ西瓜をもはやくウリといへり、世云西瓜は五代に至りてはじめて唐山に入といふは否。槃按劉楨瓜賦に云、藍皮密理素肌丹瓤、陸機賦云、或攄文以抱綠或披素而抱丹、張載賦云、玄表丹裏程素含丹（以上賦彙に収）正にこれ西瓜、他の瓜に豈いまだ紅瓤綠皮のものあらん、而此三氏は皆魏晉間の人なり、洪忠宣私漠記聞にも嘗て弁之、而駱賓王詩云、一頃南山豆五色東陵瓜擢レ之乞召平うくる所の瓜も亦西瓜なるべし。またおもふに、いにしへ但瓜と稱するものは應是西瓜なるべし、五代の時にいたりて其種復西域より來るによりて、乃はじめて西瓜と稱するのみ。陶弘景乃云、蓋五代の先既に浙東に入、但西瓜の名なくいまだ漢土に遍からざる也。さて又我にありては卽傳言寛永年にはじめて西瓜の種を得たりこそ、されど釋義堂空花集和西瓜詩に西瓜今見生東海、義堂は卽後小松天皇の御時の僧之、是寛永年の前にあること殆二百四十年なり、西瓜子利水の效驗あることは、諸瓜子に勝れり、人おほくは不知、醫書にいふ瓜子瓜瓣亭等

は皆悉甜瓜をさしていふなり

うめ　梅をよみたり。加茂眞淵いはく、万葉より順抄までは宇米と書り、ムメと書は誤なりと顯昭の牟米とも書といへるは、牟は宇の誤たる所の例をいだしてよく意得ざるなりけりといへり。ウメは熟實の義なり。さてウメとよめるはウムミの詞よりいでたればウの假字にて、ムメとよめるはあらじといふもげにくく實理なり。さて馬はウマなるをムマとも云、荊はウバラなるをムバラとも云、猪はウジナなるをムジナとも云、味酒はウマザケなるをムマザケとも云、またウジムシの如くウとムは親しく通へり。鰻鱺はムナギなるに、今はウナギ、五加もムコキなるに今はウコキ、鼯鼠もムクロモチなるに、今はウグロモチともいへれば、ムよりしてウに轉れるもあればウムの通ひを強て誤ともいひがたかるべし。されどウメのムメなるはさるとにや

うま　紀また万葉に馬をよみたり。順抄には、無萬と註したり。ウマは大馬、コマは小馬の謂なり、ウマとは古語に凡譽ていひぬるにて可美葦牙男神、可美少女など云ふがごとし。おほよそ馬の色は赤白黑の三物に期れり、これにかさぬるに六色を舉て九毛とし、駮を加へて十毛とし、其他の雜色のものは、並にこれを駮類に収入り。今驪にして其色の稍淡きをば青黑

校云ウハは穴か

と稱し、驄にして頗斑點あれば連錢と號するが如く、各〻の本物に就てその稱を別に區分せざるものあり。されど三にして足らず、十にしてみたず遂に百馬圖說あり、中ごろより皮相を五行に配偶して、强てそれが說を作るものあり、これをいにしへに稽るにそのよしをしらず、けだし前漢白奴傳に四方の毛馬を取れるなどいふをこゝに傳つれど、いにしへに謂あることをしらず、嘗て皮相考を作りて一書に訂したればこゝにつくさず、但其概略をしるすこと如左

川原毛（順抄○或云、是河上白沙の色に取、按に別或は瓦毛二字を用、古瓦の色灰黝亦當） ○額（音洛） 髮白（俗○或は黑月毛となすは如例） ○驑（音劉、また驑騮に作、或は騮驑二之恐誤）

鹿毛乃馬（續紀○按るに鹿の夏毛なり、鹿毛夏赤冬灰） ○駵（音留） 腹白乃馬（眠寤集○按に駵は是駵字重復か） ○赤駵 山鷄（ヤマトリ）鹿毛（順抄に漢語抄を引て赤騂和名川鷄鹿毛） ○黃駵 白鹿毛、黃鹿毛 甘子亦毛（順抄に漢語抄を引て黃駵和赤栗毛と注したるは未詳） ○烏駵 黑鹿毛（順抄） ○水口駵

口白（ツゥ俗の白、此に曾于と訓、猶ウハ白を計都曾于と訓のごとし） 粉舐口 虎毛（此華陽皮相に載粉觜騧の名義による耳。皮相に水口駵を水口騧につくるは蓋し傳寫の誤なり） ○白口駵 是蓋水口駵なるべし ○騵（音元） 是蓋腹白鹿毛の屬（腹白の鹿毛は栗毛の中におほくありて鹿毛の中には甚稀なり） ○駱（此三種あると前に言）

川原毛（俗） ○驙（音邅） 水鷚毛（百馬圖） 鷚毛（俗） 黃駱 鹿毛鷚（俗○或は之を鷚毛といふは誤なり） 一種斑鹿毛鷚あり蓋

黄駱の屬なるべし○騝音乾　栗毛䮂俗○魚(ママ)音魚驠と同馬また魚に作　沙魚(サメ)俗○白魚　馬巫　馬祝俗○此馬畜馬舍に在は衆馬
の病災を消除すといふによりてこの名あり　○騅音錐　鼠毛順抄　鼠音。　猴狹目(サルサメ)俗○駰音因　糟毛順抄　白橋毛(ハシ)俗○糟毛の轉訛なり○順抄
に油馬を糟毛と註したり。油馬出所未詳○鴇音寶　黑糟毛舊は糟毛といふ穩ならず今改　○駁音博、また駮と同、或は駮駁に作　斑駒紀　斑馬順抄○駒類
駒的音的　兎額乃馬順抄　月額蠡測集　神馬額眠寤集　星額。　兎星俗　白星方言○騂　流星　流額　白口
方言○的吻　鼻白俗　鼻星方言○駹音尨　斑面　位牌額俗○驠音宴　臀白(トモ)　白尻　穴白俗○駺音郎　尾白
乃馬順抄　尾白　尾斑俗○騴音晏　尾株白(セト)。　鷲尾。　本白乃斑俗○驓音繒　脚斑順抄　四白　四脛俗○
騚音前　四蹄白和字彙　蹄白俗○馵音注　膝白華陽皮相○三明　三足白丙馬圖　三白　△○騘驄と同　美多
良於乃于末紀　白馬(カラウマ)字鏡　大分青馬(マシロノコマ)万葉　葦毛馬名物六帖　黄驄　葦花毛乃馬和名抄　白葦毛　麻花葦
毛歌永○青驄　黑葦毛　胡麻葦毛俗○驒音駝又音驔　葦毛神樂歌　虎毛馬、連錢葦毛順抄○騏或は斷に作　黑
葦毛俗○駓音丕　桃花葦毛(ツキアシゲ)。　山鷄葦毛俗○順抄に弁色立成を引て桃花馬、葦花毛之紅色者也。桃花馬は尓雅に黄白雜毛、注に今桃花鳥葦花馬とみえたり、これよりして紅
鴾の事を紀に桃花鳥と書てツキとよみたり、今はトキといふ之○騢音遐　桃花毛(ツキケ)順抄○安　梅月毛俗○騜音黄、俗驤に作　月毛俗○駩音線　白月毛

眠騔集○騧音瓜、亦騔或は駈に作　黄月毛　澇(ユミ)月毛俗○驃音票　星月毛。虎月毛。連錢月毛。月毛斑俗○騂音宰　是黒月毛の族なるべし或は騅を黒月毛と爲すものは異なるべし○驪音離、また驪に作　黒駒紀　黒馬後紀　黒之馬續紀　烏黒。墨乃黒。眞黒俗○驚音碧　集韻に黒色馬あり、是驪の屬なるべし○驖音鐵　黒緑乃馬順抄　青乃馬催馬樂　青黒　青毛俗○騆音鋗、また駽に作　水青毛俗○或は騆をいふ信じがたし○騂音辛　赤駒紀　赤毛馬續紀　栗毛馬俗○騟音諛　山鷄赤毛馬順抄　赤栗毛。紅栗毛。眞赤栗毛俗○騝音帖　黒栗毛　椽(ツルバミ)栗毛俗○驃前に驃あり同名異物　麻花栗毛俗○按るに尉栗毛の屬、唐時の赤驃を桃花馬となす疑は此類之。今云麻花栗毛は桃花馬に比すれば其色深し、故に俗之を分つ、其實は赭白馬之。また姫栗毛、續栗毛及權田栗毛等あり、熊谷次郎一谷坂縣の時に乘ける馬を近太栗毛といへり、此はまさに傳會の稱なるべし○黄　白赤毛俗○凡馬の黄色なるを此に多は白といふ之○駱音洛雒同　白栗毛　脊筋馬俗○駱に三種あり、白身黒鬣を眞川原毛といふ、黄駱の如きは赤鷚毛といふ、白身朱鬣を白栗毛といふ○沙駱　黒白百馬圖　三白俗○攷事撮要に一脚白を白一脚といひ、四足白を四明と云　○五明　五白俗說辨　○騱音雞　前兩白。二白　前二白　二揃俗○踦　左前白俗○俗に前一白を單に一白といふ　○啓　右前白俗○䮫音衢、また狗に作る、或また媽騳鵋に作る、並同じ　後(平)白。後二白。二揃俗○驤音襄　右後白俗○駿　須具礼多留于末紀　利(トキ)馬字鏡　足駛馬匠材集　遂行乃馬奧義抄　千里馬埃囊抄○神馬　神乃

駒新拾遺集　自兎(シメ)俗○騣音必　神馬之名俗○龍　龍乃馬万葉　龍乃駒竟宴哥集○汗血馬　是千里馬なり○

伭駒　加多九方言○土佐人いふ、馬高駿馬小なるもの土人呼て加多九といふ、是魏志にいふ果下の屬なり　○驤音龍　野生馬(ノオ)、野駒俗○騪音搜　蠻馬(ニビ)。

唐馬(クラ)俗○駫音丹　逆毛馬字鏡○騖　於曾幾于末順抄　使馬字鏡　驚馬(ヨテリ)。　乱馬俗○騙音羅　疲馬字鏡○騂音翰、

また馯に作る、又悍馬につくる　波禰于末順抄○騴音覓　狼馬(クセ)　曲馬俗○曲また狼とおなじ、其邪僻をいふなり　○騚音菊　脊撓馬(クラ)　脊戸

馬方言○蹇馬　脚痿馬字鏡　脚曲馬(アシ)　跛馬(チンバ)俗○瞎馬　瞽馬(メクラ)字鏡○駄馬　荷負馬紀　負馬　使馬　荷

附馬　小荷駄馬　駄賃馬俗以上○草馬　女馬俗○福鹿　往歳蕃人これを貢、滿身に白縷あり、

俗或目して縞馬(シマ)といふ○山馬　鹿に似て角あり、角を解く時は即馬なりと云、日光山中時或

之を見るといふ○驢　兎馬紀　雪乃兎馬藻塩草　牛馬大隅熊毛郡の土人牛馬といふ、種子島産之　〔○八行白紙〕

うど　輔仁和名に、獨活を註したり。丹、順抄おなじ、ウドはウツなるにや。この草莖(クサノカラ)はとに

空虚なればいふなるべし

うし　記にいへるは字鏡に蜡をウシと註したるにおなじ

うに　式に棘甲蠃を訓じたり、順抄に、蠹螺子を註したり、海膽の義なり。また海丹の謂な

記遠以佐釣云をとり
補に理ニ毎知ハ々う訓
大命ニ魚魚をせ

るべし。或は海栗と書けるも有、催馬樂にカセといへるも是也。今陸奥國人は即カセといへり

うし　記に牛をいへり、朝鮮方音にウシと呼、東國方音にタシ、さて獸肉鹿猪をシ、といふは、角生るものゝ食ふべきをいふなり。山羊をカマシ、、羊をヒツジ、牛をウシといふも、皆肉のくふべきを云といへり。いにしへは朝廷より諸臣に至るまで與（ヨ）に屬（ツク）る牛は皆長門牛を用ひけるゆゑに長門國より牛を出さしめ年々の貢賦にあてたるまで、今も長門にては牛に物を負するをなしといへり　〔○次七行空白〕

うを　順抄に、文字集略を引て、魚水中連行蟲之摠名也。註に、和名宇乎、俗云、伊遠。和訓栞に魚をいふは、浮尾の義なるべし、大諸禮に押出して魚とのみいふは鮭の事なり、今は鯛をいふこともいへり○說文云、魚水蟲也。正字通云、魚牛劬切、音愚。或曰、坎爲水爲月魚屬水族惱視月爲盈虛月滿則惱盈月虛則惱減○順抄、龍魚龍體に鱗、和名以呂久都、俗云伊呂古○鰓、阿木止○魚丁、以乎乃賀之良乃保禰○脬、伊乎能布江○鰭、波太、俗云比礼○鰾、保波良○胦、豆知須里○鮻鰉、阿佐留○槃按に時珍綱目に諸骨腦曰魫曰丁、魚尾曰魩（音抹）曰丙、魚腸曰

鯝曰乙、魚骨曰鯁、曰刺、魚脬曰鰾、曰白、魚翅曰鰭、曰鬣、魚子曰鮇、曰鱶。また按に、魚子を鱷こいひ、鯤こいふ。典籍便覽云、腹中者曰鰤、附草者曰鰦、唐韻云、鱗、魚甲也、鰓魚頰也。玉篇云、腴魚腹下肥也○收魚名稱、史記貨殖傳、師古註云、鮿膞魚也、即今不著鹽而乾者也、汪建封行厨集云、著鹽而乾者曰腊魚（腊音昔）又曰鮝（鯗音膝或は鱶につくる、日華本草に烏賊魚乾者名鯗）著鹽不乾曰滷魚、糟收者曰糟魚、汁浸者曰醉魚、韻會云腥肉細者爲膾大者爲軒（礼の內則に麋曰刀水麛皆有軒、註に肉大如霍菜也）字書鱠生切魚成片、說文云、醢肉醬也、劉熙釋名云、九魚首尾全炙者曰貊炙

うはぎ　万葉卷十、春野之菟芽子（ウハキ）採而煮良思文。順抄、野菜部に、薺蒿一名莪蒿、和名於八木こ註したり、これ乎八木こ有は同物なるべけれど、於につくりたれば強て决がたし（ウケラヲケラウサキヲサキなどの例にかなはず）さて伊豫國吉田にてウバキこいひて食料になせし草あり、越後國にて同名同種の草を食せしよし、其草をみるに、今こゝの俗にゴギヤウまたヲトコヨモギなどいへるものにて本草載たる牡蒿一名齊頭蒿なり、これいにしへのウハギは今のヲトコヨモギなるにや、或書にこのウハギをヨメガハギこいへるは否

うけら　万葉卷十四に、牟射志野乃宇家良我波奈、また順抄に朮を乎介良こ註したり、即ウ

困万葉二ノ四十二丁オ　妻もあらば瞭てたげましさみの山ぬのべのうはぎ過にけらずや

万葉こひしけば袖もふらんをむさし野ゝうけらが花の色にいづなゆめ　又あさかがた塩干のゆたにおもふはうけらが花の色にでめやも

校云、おもふはマヽ

校云、五馬ハ

ケラなり。和訓栞云、平安五條天神に少彦名神を齋て今にいたりて季冬節分に供朮の祭あり、これ歳疹を除とて除夜に朮を焚なれば乎介良は鬼(オニ)嫌の義なりといへれど、ヲとオを通はせていふはいかゞ

うばら　神代紀に茨城をウハラギとよみたり。順抄に、荊を註したり。伊勢物語にも、うばらのどき君と書たり、皆荊棘をいへり。欽明紀に、籍草班荊、こゝに荊をシハとよみたるも同じ意之。万葉に宇万良とよみたるは方俗にいふ詞なるべし

うつし　江次第に、鴨頭草移二帖、上野貢。古今集に「いで人はとのみぞよき月くさのうつしごゝろは色とにして」顯昭いはく、月草の花紙に染て又それを移して物を染るを移し花といふなり。さて移のはじめは万葉卷七に、月草尓衣曾染留、また月草尓衣者將摺とよみ、物を染る草の花なれば、卷三に、月草之徒安久(ウツロヒ)ともよみ、後にウツシてふ名となりたるなり。式に鴨頭草と書たり、この花を紙に移せし事は、寧樂の都などよりありしよし物にみえたり。今は藍紙とて、あふみの國よりいだせしなり、餘はつきくさの條みつべし

うこま　順抄に胡麻を注したり、本草の注を引て、音五馬、訛云宇古末。源君美云、胡を濁音

五萬ノ誤

孝德紀元年枯査アリ

記に菟の字に作れり

に讀は郡名考に上野國多胡郡の胡、音如レ吳とある類之。また胡麻の唐音ウーマト。しからば字は胡の唐音にして此間もとより有つる胡麻の外に、かれより來れる種を指し、宇古麻といひしを、後は音便によりて吳麻とのみ呼びしとはみえたり

うむき　景行紀に白蛤をよみ、姓氏錄には大蛤をよみたり。輔仁和名に、海蛤を宇牟岐乃加比と註したり。字鏡に、蚶も蠔もよめり。また記に、蛤貝比賣（ウムキヒメ）、蛤貝をウムキとよみしは、海殼の義なるべし

うきゝ　閩書に載たる斑車魚をいへり。常陸國水戸にては此魚をウキヽといひ、その腸をマンバウといへり。けだし滿肪の義なるべし。文治二年百首に「譬なる波路の龜の浮木かはあはでもいく世しほれきぬらん」今浮木の龜といへるはかくよしあるなり

うさき　記に兎をいへり。輔仁和名に、兎を宇佐岐と註したり。万葉に宇佐木ともよみたり

うじな　推古紀に狢をよみたり。今はムジナと云、ウムの雅俗はうめの條をみつべし、ムジナタヌキの分ちはたぬきの條にしるしつ

輔仁和名ニうるひとしたり

うるき　順抄に、夏枯草を注したり、俗にはウツボといへり。式に鬱茂草とみえたり。うつぼぐさの條むかへみるべし

うづら　万葉巻〔〇三〕あめにあるやさゝらの小野にちかやかりかやかるはかり鶉をたつも

うなぎ　むなぎの條みるべし、髪のウナギ垂タル形ノ似タルニヨリテナヅケタルニモヤアラン〔〇七行餘日〕

うぐひす　順抄に、鸎を註したり。切韻を引、鸎春鳥也。按に、鸎、音英、また鶯とおなじ、一名黄鸝、さてウグヒスはいにしへより鸎、鶯兩字を用ひたり、さるを世に名物の學をいひしもの、こゝのウグヒスは鶯にはあらじ、婆餅焦また報春鳥なりなどゝいへり。槃按に、唐の李嶠詠鶯詩に、芳樹雜花紅、群鶯乱曉空、吟兮折柳吹、韻嬌落梅風、寫囀淸歌裡、含啼妙管中、遷喬苦可冀、幽谷響還通、これまさにこゝのウグヒスなり、ヨシドリをも鸎鶯にはあらじなどいふもかゝるたぐひ也。詳にをしの條にいふべし。また鸎之生卯中之霍公鳥の事はほとゝぎすの條にいふべし

凡毛翎の類は予が禽志に詳錄したり

うつせみ　空蟬の借字に從て後世は蟬退秋蟬をいへり。万葉巻一に、空蟬之命乎惜美、巻二に、虛蟬之代者無常とよみたるは、顯しき身の壽顯しき世といへるとなるを、蟬の借字に泥

み、竟には蟬の樽と成たり。伊勢集に「空蟬のはにおく露のこがくれてしのびしのびにぬるゝ袖かな」

うまさけ　崇神紀に宇磨佐開瀰和能等能(ウマサケミワノトノ)とよみたり。万葉巻十二にも、味酒乎三輪之祝とよみて、皆旨酒にして美酒の謂なり

うきくさ　万葉巻十一に、浮萍をよみたり。順抄に萍を註したり。按に、尓雅に萍、蓱、其大者蘋、説文に、萍無根浮水上者也、周禮萍氏の註に、萍之艸無根而浮取名於其不沈溺也。説文又云、蘋水作薲、大萍也、箋云、蘋之言賓なり、隨風游賓乎水上蘋より小にして水面に浮つゝ生けるもの、惣名也。さて其屬に幾種もあり、その概をいはゞ、詩經の荇菜は順抄に阿佐々と註したり、左傳の蔆芰は万葉にヒシとよみたり、世説の蕁は記にヌナハと訓たり、本草拾遺の萍蓬草は順抄に骨蓬、和名加波保禰と註したり。埤雅の蜈蚣蘋は俗にムカデモといへり。北戸録の睡蓮は俗にヒツジクサといへり、未牌(ヒツジトキ)に花開(サケ)ばゝ。また同書の眼子菜は俗に蛭藻(ヒルモ)といへり。尓雅翼の田字草は俗に藻勝見(モカツミ)、一名カツモといへり、世にこれを安積(アサカ)の沼の花勝見なりといへるはあらじ。また本草綱目に蘋の一名に田字草をいだしたるはいたく誤たり。

月令廣義の滿江紅は藥肆に浮萍となして售ものゝ。これは皆ウキグサの醜なり、萍の大なるは卽蘋なり、俗にトヂカ、ミこいふ、トチは土鱉の俗名なり凡水草の屬は予が水草織に詳錄したり

うのはな　万葉卷八に堅魚朝臣の哥に、霍公來鳴令響宇乃花こよみたれば、卯月に咲なれば卯之花こいふなるべし。またウツギこいへるは、この木には穰ありて、心は虛になれるものなればウツギの花こいふ義もやあらん。さてウツキは荊木の類なり。順抄に溲疏を宇豆木こ註したり。されば虛木は荊木類の總名なれど、卯月にさける卯の花こそ、月のにほひにひこしく、世にめでたければ、この花にその名を負はれたり、あだし國にても今の俗には水晶花などゝ淸に稱せりけり

うつゆふ　神武紀に內木綿之眞迫國、万葉卷九に虛木綿、皆野蚕をいふなり。後世に用ふる蚕は仁德の御宇に渡れる韓蚕なり、それより前に木綿てふものは栲之、虛木綿てふものゝ野蚕なるを疑なし、この條をむかへみつべし

うちまき　散米をよめり、祝詞の註に、今世產屋以ニ辟木束稻一置ニ於戶邊一乃以レ米散ニ屋中一にいへり。元來天孫日向高千穗の峯に天降りたまひし時より事ノ起れるよし、日向風土記に

補

見えたり。産屋打撒の事は、紫女日記に見えたり。尙詳に濟齋が和訓栞に載たり

うばたま　ぬばたまの條にしるしつ。また和訓栞、冠辭考、槻落葉などにつばらなり

うるしね　紀に粳米をよみたり。式に米及び獲をも讀たるは秋獲の義に就ていふなり。いにしへは稻の實をなべていへり、粳米は俗には眞稻、眞米といふなり。黍菜もまたウルシネといふべし

うまひゆ　順抄に馬齒莧を註したり

うるりこ　順抄に細魚を註したり

うみまつ　水松をいへり、土佐日記正月廿五日の段に、つらゆき「おぼつかなけふは子日かあまならばうみ松をだにひかましものを」夫木集に、うみ松をこそひくべかりけれと見えたり。万葉に、海松と書てミルとよみたるもこれなるべし

うむぎな　輔仁和名に滛羊藿をよみたり。丹方おなじ。この葉の海蛤に似たればいへり、うむきの條むかへみつべし

うきみる　伊勢物語に、その家のめのこどもいでゝうきみるの浪によせられたるひろひて

云云。定家の哥に「此頃の南の風に浮みゐのよる〳〵涼し芦の屋の里」とゝを取てよめるなるべし　〔〇以下半頁白紙〕

うきぬなは　順抄に蓴をヌナハと註したり。万葉巻七に湯谷絶谷浮蓴とよみたり。ぬなはの條むかへみつべし

うつせがひ　万葉巻十一に、打背貝實無言以とよみたり。これはなべて海原にある身のなき虚なる貝をいふ之。新後拾遺集「おもひいづやあら磯浪のうつせ貝われてもあひしむかしがたりは」今は磯貝のうちに項のうつろなるかひをもはらにいふ之。これを俗に鹽尻といへり。また肥後國葦北郡にていへる空脊貝は全く石蛤なり

うゑこなぎ　万葉巻三「春霞春日の里に殖子水葱苗ありとみし柄はさしにけり」また巻十四、なはしろの古奈伎が花を衣にすり。また巻十六、水葱の煮物ともよみたり。天智紀の童謠に奈疑のもとゝ有におなじ。内膳式に、水葱の田料をしるしたれば、いにしへは天皇の供御に奉りしもの之。唐六典に載たる水葱席は王維が詩の翠管にして、順抄に和名フトヰとある是なり。ふとゐの條むかへみつべし　奈疑は菜草或は菜葱の義なるべし。按るに今の俗にいふみづなぎ、一名水あふひといへるもの是なるべし。菜て

夫木集
仲正、
山櫻きほひたづぬる人數に身をうさぎまのうながしぞゆく

聞しに、武藏なる葛飾郡松戸莊にて、この水あふひの莖を日乾して蓄へ置、食料に備ふといへり。是王磬が野譜に載たる浮薺なり

うごろもち　順抄に鼴鼠を註したり。字鏡には蚡一作蚶て、牟久呂毛知と註したり。むぐろもちの條むかへみるべし

うまふゝき　順抄に牛蒡を註したり。或說に、下のふはうの如し、濁てよむはあしゝといへり

うまきたし　順抄に體腸草を註したり

うさぎうま　齊明紀に、自百濟還(マタ)獻駱二箇、驢二箇、驢を此にウサギウマと訓じたり。推古紀にも見えたり

うつぼぐさ　禁中宮女葱をいふといへり。きの條をむかへみつべし。仁賢紀に、秋葱轉雙(アキヤノフタゴ)納(モノ)とよみたり。われこれを和してよめる「ひともしにきとのみいへるうつぼぐさうつぼながらにふたこもりせり」

うつもくさ　式に爵茂草といへるは夏枯草也。今の俗に訛りてウツボグサといへり

補　輔仁和名にも又石龍蒭を註したり

うたかくさ　輔仁和名に升麻を註したり　〔○以下半頁白丁〕

うしのひたひ　字鏡、順抄幷に石龍蒭、また石龍芮を註したり。石龍蒭を註したるはいかが。今牛額(ウシヒタヒ)といへるは、俗の水稜麥(ソバ)といへるものにて、救荒本草に載たる苦蕎麥也

〔○以下半丁並ニ次丁合セテ一葉白丁〕

うびたひのうま　順抄に、戴星馬を註したり。ウビタヒは兎額の義也。俗に星額兎星などいへり、爾雅に載たる駒顙也

うめのはながひ　花がひに似てこまか也。淺き洲先に打よする樣は、げに梅の花のちりかたに似ていろしろし。新後拾遺集、俊頼「春風に波やおりけんみちのくのまがき小しまのうめの花がひ」また出現集に「雪のうへにちりぞまがへるはる風の吹上の濱の梅の花がひ」　〔○以下本頁幷ニ次頁白丁〕

うぐひすのいひね　順抄に、恒山を註したり。卽常山、今俗にいふコクサギ也

〔○以下同右〕

衣部

え　順抄に荏を註したり

〇ニ順抄に見えたり、榎を註したるは抄に尓雅の註を引て云、榎亦作櫝、一名梢、今榎をエノキとよむはこゝによるなるべし

〇ニ用明紀に見えたり、朴をよみたるは、天武紀に朴井また朴本連、孝德紀に、蒐田朴、室朴は即陸疏にいふ樸なり、いにしへムクと云も、今ムクエノキといひて、大同小異なり。ムクは但葉に糙澁のおほきのみにしてエとムクとを分つなり。諸に榎の實はなしななれ木は椋の木といへるも大同小異をたとへたり　〔〇以下本頁丼ニ次頁一葉白丁〕

えひ　齊明紀に鮐をよみたり。字鏡に鮇を註し、順抄に鱏を註したり。これ本草拾遺に載たる海鷂魚なり。今云アカエヒ也。泉州府志には魟魚とみえたり、黃エヒ之。閩書に、黃貂魚と見えたり。眞エヒは同志に牛尾魚とみえたり。烏エヒは同志の黑魟とみえたり。三本エヒは酉陽雜俎に黃魟魚とみえたり。猫エヒは本草拾遺に鼠尾魚とみえたり。靑エヒは淵鑑類函

古記には蒲子とあり、伊邪那岐命取黒御鬘投棄乃生蒲子

に地音魚とみえたり。嶺表錄異に載たる雞子魚もこれなるべし。茨エヒは興化志に扁魟とみえたり。鱝エヒは同志に狗魟とみえたり。また順抄に、崔氏食經を引て、邵陽魚を古発と註したり。按に臨海志に郡陽魚を載たり。こは魟の族なり、崔が邵陽も同物にや、諸説全く予が魚品にしるしたり

えび　神代紀に化成葡萄、こゝにエビカヅラとよみたり。式にも衣比と書たり、記に葡子をエビカヅラとよみたり。また式に淺葡萄汁染紙料とみえたり。くはしくえびかづらの條にしるす

○鰕を註したるは順抄にみえたり、俗に海老二字を用ふといへり。凡て鰕の色は葡萄に似たれば名づくといへり。こは河海の產によりて唱をヿにせり、淡水に生るヌカエビを米鰕といへり、海に生るをアミといへり、あみの條みつべし。なべての河エビを青鰕といふ、シラサを白鰕といふ、泥間エビを泥鰕といふ、皆本草綱目にみえたり。海に志摩エビ、尾張エビ、伊勢エビ、鎌倉エビなどいへるは、皆紅鰕をいふゝ。車エビといへるは五色鰕といふ也。閩志にみえたり。シヤクエビといへるは、石股鰕をいふゝ。享保年朱來章が復言にみえたり

えた　順抄に枝條を註したり　〔○以下次頁一葉白了〕

えのき　字鏡に枌を註したり、枌を順抄にはヒサカキとよみたり　〔○以下一葉餘白〕

えびすめ　順抄に昆布を註したり。式には以備須米とみへたり。紀に載たる神武の御哥に、愛瀰詩烏毗儺利とよみ玉へり、エミシは即今の蝦夷之。さてミとビと通てエミスといふ之。式にイビスとしるしたるは、當時の俗語なるべし。昆布はいにしへより愛瀰詩の方物なれば、はやくかく名せたる之。抄に本草を引て、昆布生東海、和名比呂米と注したるは正名なるべし、一名衣比須女と註せしは即俗名ならん。槃嘗て聞、この物松前の東よりして蝦狄の地にいたりて、はての饒衍と天下に并する所なし、その西は但エサシの島より少しくいだせり、而六七月の交に刈とりてさらし乾之、その品等二十種斗に分りて、そが中に赤昆布、赤木昆布などいへるは長五尺斗にして四十八葉を一把となし、其四把を一駄といふ、此品を好品と定ていにしへより貢物となせり、またシノリ昆布あり、一名長昆布、また折昆布あり、その活なるは皆一葉の濶さ一尺ばかり、長さは五六丈にいたれり。その十葉を一束といふ、是紫苔尻澤部小安諸村より產、これを漢商人の交易に充るとぞ。さてまた紫苔村に宇賀といふ地名ありといへり、おもふに玄恵庭訓に載たる宇賀昆布は此間出るものなるべし。　また茅

邊昆布あり、知內昆布あり、下昆布あり、三石昆布あり、こゝを一歳に一万二千駄を發賣こぞ。また拔昆布あり、これはおのづから沙岸に蕩着るものなればよろしからず。また役昆布あり、その一種にシヤシ地名昆布あり、その薄きと和布に似て長し。この外にも品等あれど纂疏に載たればこゝに省きぬ。按に續紀靈龜元年夷種須賀君古麻比留等言先祖以來貢獻昆布。また按に、古へ陸奧蝦夷貢ニ獻昆布ニして民部省に納、其稱は索昆布、細昆布、廣昆布等の名も式にみえたり。わが國のいにしへよりこれを貴ることすでにひさし。また朝鮮昆布ありて、朝鮮より漢土に傳ふこいふ

えむし　字鏡に蝱を註したり

えびすね　順抄に地楡を註したり　〔○以下本頁九行餘白〕

えびかづら　記に蒲子を註したり。輔仁和名に紫葛を註したり。順抄おなじ。また抄に蜀都賦を引て、蒲萄乱潰、漢語抄を引て、衣比加豆良、輔仁は蒲萄に作りて於保衣比加都良こ註したり。按にエビカヅラは我國におのづからある所のものにして、漢土にて蘡薁といへるものゝ。古事記に黑きみづらを投て此ものこなるこしるしたるもよく叶へり。エビ色こいふ

は此實のはじめ粉緑色なるをいふこ。今の葡萄は後に漢土よりわたしたる物にて、其形此方のエビカヅラに似たれば、竟に是をもエビカヅラこ呼しが味甘く世人さかりにめであへるまゝにエビカヅラの名は葡萄にうつりて、我國のエビカヅラをばイヌエビこ呼けり。されば中古よりエビカヅラは葡萄の和訓こなりぬ。おほかたの人これにめなれて、今の俗に蘡薁をエビカヅラこいひ、葡萄を音のまゝに唱へぬるを誤なりこおもふは却て誤也。今の俗稱は誤りに似て却て上古の名義によく叶へり。康熙宸垣識略に十種の蒲桃をしるしたり、我國には綠色は甲斐にあり

えやみぐさ　順抄に龍膽を註せり、衣也美は疫也、龍膽草の根疫を治するこあればかく名ぜるゝ。輔仁和名に、敗醤を知女久佐こ註したるも、この草赤眼を治するこあれば也。丹方に久知女久佐こも註したり、劉寄奴草をチメクサこいふは血止草の義にして皆同例なり

えびすぐさ　芍藥をいへり、順抄に芍藥を衣比須久須里こ注したるによりていへるなるべし　〔○以下本頁幷ニ次頁一葉餘白〕

輔仁和名に決明を註したり

於行

おご　式の御贄の條に、若狹國の貢に毛都久於期としるしたり、今のいふオゴなるべし

〔○以下本頁並ニ次頁一葉餘白〕

おくて　順抄に晩稲を註したり。万葉にもかくよみたり。遲稲なり。祝詞式に、奥津御年といふもこれなり。晩稲は尓雅に載たり

おしね　遲稲なりといへり。哥におしねうつ、おしねほす、山田のおしねなどよみて、奥年稲の約たるなりといへり。按におしねといふこと古き物に見えず、こはをしねにてをは助語也、オソイネの約ゝと契沖のいひしはわろし

おほね　記に於富泥、仁徳紀にも於朋泥とよみたり。式に蘿菔根をオホネとよみたり、順抄には蘿蔔を註したり、卽今云大根の訓なり

おほゐ　万葉巻十四「かみつけのいならの沼のおほゐ草餘所に見しよは今こそまされ」順抄に莞を註したり。按に莞は龍鬚、燈心草、龍葦草などの惣名也。オホヰはいにしへ今もい

校云本草和名齊蒿菜一名莪蒿一名藁蒿トアリ
【以下附箋細註】

へるフトヰなるべし。俗にはマルスゲといへり。これは唐六典に載たる水葱之。杜詩には翠管こも賦(フシ)たり、六典には席となせしヿを載たり。今もみちのくに仙臺にてつくれる大藺席(オホヰムシロ)も水葱席なり、これを狡獪の輩十府の菅薦と稱し世を衒(テラ)へるなり、ふとゐの條をむかへみるべし。ナギの水葱とはヿ之

おほひ　順抄に苜蓿を註したり

おほし　順抄に大黄を註したり

おはぎ　輔仁和名に、蒿草、(下上)一名葭蒿、和名於波岐と註したり、うはぎの條をむかへみるべし

おほは　輔仁和名に欵冬を註したり

年々隨筆云

赤えといふ物、いづれも片面はくちば色したり。いづれも赤き物ならば、たゞエといひてありぬべきを、赤えとしもいふは、いかなる事ならんといぶかしうおもへりしに、陸奥へ物したりし比、えの形して、片面の色淡(ウス)黒きものをみつ。羅をさといかけたるやうにて、端ざまにほひやかに白く、鰭の末更に又黒し。(赤えの赤き色の定なり) 仙臺あたりに多かるものにて、土人はこれをカラカイといふ。これ黒えにてそれに對へて赤えといふなるべしとおもひとり

つ、後にきけは尾張國篠嶋三河國鵜島などにてはやう黒えといふ物ありとぞ。國にありしほど聞ざりしは、いたうも多からぬにや。これかのカラカイの事なるべし。秀枝云、加賀國あたりにて赤ゑいこツぺいと下ざまの人はいへり。赤ゑひ、黒えひの傳なるべし　〔○以下本頁并ニ次頁一葉白丁〕

おほむぎ　式に大麥をよみたり

おものき　神武紀に孔舎之戰、有レ人隱ニ於大樹ニ而得レ免レ難、仍指ニ其樹ニ曰、恩如レ母、時人因號ニ其地ニ曰ニ母木邑ト、今云ニ飫悶廼奇ト訛也。繼體紀に、母樹と書たり、万葉巻三に、三湯之上乃樹村乎見者臣木毛生繼尓家里、註に憶良類聚歌林に、伊豫風土記を引て、臣木は樅なり、此云於毛、また於美。眞淵云、今云毛美乃伎、今河内に大野木村と云所あり。順抄には樅松葉柏身、和名毛美と註したり

仙覺万葉巻ノ十五丁ニ云、宮前在ニ二樹木ニ云々伊与國風土記云、二木者一者椋木、一木者臣木云云、臣木可レ尋レ之。私勘、臣木はもみの木也

おみのき　臣木と書たり、前にしるしたるオミノキなり

おほとり　眞淵云、万葉巻二に、大鳥の羽がへの山。順抄に、鸖を註したり。又鷲などを指

ていへる歟、若鷲をいはゞ羽を易るを待て矢に用ふるなれば、羽易の字の意とすべし

おそごり　契沖は万葉のをそごりをおそと書たればこゝにいだしつ、オソは遲鈍の義にや、万葉のをそとりは烏（カラス）なり

おほぜり　催馬樂、順抄并に大芹をよめり

おもたか　眞淵いふ、清記におもたかの事をいひて、名のをかしきなり、心あがりしけんとおもふに、とあるをみれば、面高き意にいひなしたるものとみゆれば、面の義としておの假字と定むべしとぞ。槃按に、清氏はオモタカより思ひよせて書たる物にて是を證とはなし難し、本草和名こそいと／＼たしかなる證にはあれ。按に輔仁和名に、澤蕮和名奈末爲、一名於毛多加と註したり。澤瀉は遲くあだし國より種を傳へたるものなれど、和名はふるくよりかく有けるゑ。今いふオモタカは圖經に慈菇苗名剪刀草といふ是なり

おほばこ　字鏡、順抄并に車前を註したり

おほとち　字鏡、順抄并に茶を註したり、またおほつちともみえたり。本草和名には敗醬をおほつちと註したり

おほひる　字鏡、順抄并に大蒜を註したり

おめむし　字鏡、順抄并に蛢を註したり

おしくさ　順抄に玄參を註したり、古語拾遺に天押草（アマノヲシクサ）といへるもこれにや

おほみら　順抄に薤を註したり

おほゑみ　順抄に黄精を註したり

おほかみ　順抄に狼を註したり、輔仁和名に犲皮一名野豣、和名於保加美、かむの條に詳にしるしつ。按に万葉卷二、おほぐちのまがみの原とよみたり。おほかみといへるは、おほくちのまがみをつゞめたるなるべし

おほつめ　順抄に鼈を註したり

おほたら　順抄に食茱萸を註したり

おごのり　式に於期菜をよみたり、抄にもみゆ

おほくろ　萬葉卷十七に、矢形尾の安吾大黑尓とよみたり。註に大黑者蒼鷹之名之

〔○以下本頁八行并ニ次頁一葉白丁〕

おもひくさ　万葉巻五、また巻十に、道邊之乎花我下之思草。安藤爲章が年山記聞に、義公の御釋を引て云、物の陰に生たる草を凡て思草といふ歟、六帖に「初蒔の麻生の下草陰しげみ有るかなきかにわびつゝぞふる」また「さくら麻の苧生の下草やせたれどたとふばかりもあらず我身は」又「蟬のなく雲の上なる唉草のかげにやせみの聲やせぬらん」槃按に、類題に逍遙院の御製に「霜がれは何をよすがにおもひぐさあるにもあらぬ汀がくれに」この御哥によりても、御釋の御說いとよしある也。定家卿は何の文によりて龍膽草なりといへりおぼつかなし。莫傳、藏玉などには女郞花也といへるもかりそめのおこ說也

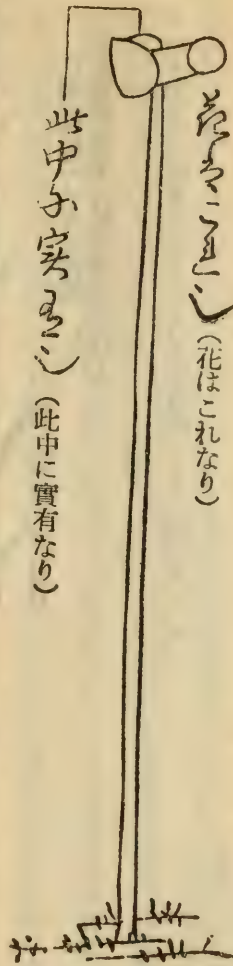
【頭註】玉勝間十三の一丁

末ひろくしげりけるかな思ひ草を花が本は一もとにして

かく詠めるこころは、戀の歌のつねに、尾花がもとの思ひ草と詠むなるは、そのはじめを尋ぬれば、萬葉集の十の巻に、「道のべのをばなが本の思草、今さらに何物か思はむ、と云へる歌ただ一ッあるのみにて、これを置きては見えぬ事なるを、此一本によりてなむ、後にはひろく詠む事となれる由を詠めるにぞ有ける。そもそも此思ひ草と云ふ草は、いかなる草にか、さだかならぬを。一とせ尾張の名兒屋の、田中ノ道麻呂が許

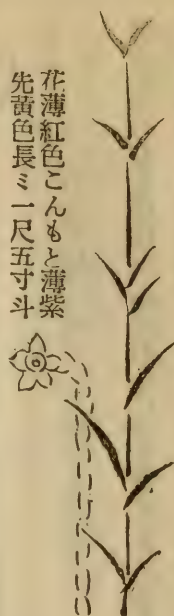
より、文のたよりに、今の世にも、思ひ草と云ひて、すすきの中に生る、小き草なむあるを、高さ三四寸、あるは五六寸ばかりにて、秋の末に花咲くを、其色紫の黒みたるにて、うち見たるは、菫の花に似て、すみれのごと、色のにほひは無し。花咲く頃は、葉は無し、此草薄の中ならでは、ほかには生ず。花のはしつかたなる所の中に、黒大豆ばかりの大きさなる實の有るを、とりて蒔けば、よく生るなり。されどそれも、薄の下ならでは、蒔けども植れども、生ること無し。古への思ひ草も、これにや有らむ。されどすすきの中にのみ生るから、近き世に事好む者の、おしてそれと名づけたるにも有らむかと云ひて、其草の圖をも書て、見せにおこせたる、そのかたは、かくぞ有ける。其後に又あるとき、花の咲たる頃、一もと掘りて、薄のきりくひごめに、竹の筒の中に植ゑて、ただに其草をも、見せにおこせたるを、移し植ゑて見けるに、しばし

(花はこれなり)

(此中に實有なり)

は生つきたるさまにて有しを、ほどなく冬枯にける。又のとしの春、萠えや出ると、待ちけるに、つひに枯れて、薄ながらに芽も出ずなりにきかし。さるは後にたづね見れば、此わたりの野山なる、すすきの中にも、ある草にぞ有ける。これ古への思草ならむことはしも、げにいと覺束なくなむ。

【附箋】

清輔家集に
河千鳥なくや河邊のおほゐ草そて打おほひ一夜ねさせよ

薄の葉筋に少々白きかた長ミ三尺斗

花薄紅色こんもと薄紫
先黄色長ミ一尺五寸斗

コハ才川上之清水ニ生ス文久元年秋薄ノ本ニ宿生スル之

おほゐぐさ　万葉巻十四、かみつけのいならの沼の云云。前のおほゐの條にしるしたり

おろかおひ　ひつち附　順抄云、穭、自生稲之。於路賀於比。俗云、比豆知。また字書を考るに、穭禾不因播種而自生也と有をみれば人のうゑしにあらず、おのづからに落ありたる稲種の、田のみそ或は刈たる田の泥のうちよりおひ出て實を結ぶ之、さるからに丈も低て外の稲におよばねばオロカオヒとはいふなるべし。オロカといふは、足はぬをいふ詞にて、愚(オロカ)といひ疎畧(オロカ)簡といひ、又たしかならぬをオロオロといふもひとつ詞之。漢字の意も魯は愚之、鈍之と有て、他の木に及ばぬ意にて、从禾从レ魯穭ノ字を作りしなるべし。扨ひつちてふ名義は、

丈低くて泥水の中に沾漬ておひたてればなるべし。方言にヒツといふは水に沾ぬるをいへり。万葉巻二、あさ露に玉藻は浧打、又なく涙こさめにふれば白妙の衣沾漬而、巻三、沾は漬とも、また浧打雖泣、巻四、袖漬までにねのみ泣とも、巻九、わきもこが赤裳泥塗而うゑし田を、巻十一袂漬までになきしおもほゆ、巻十五あさ露にものすそ比都知、巻十七赤裳のすその春雨ににほひ比豆知底とみえたり。さて泥漬、浧打、泥塗など書るは泥の音をかりて書るにて、あながち泥にぬるゝをいふにはあらずとも、語のもとをおさば、泥をヒヂといふも本土の水にひたりてやわらかなるをいひて漬土の意之。されば稿をヒツテといふも、たゞ水にひたりたるをいひながら、おのづから其内に泥の意をもふくめり 眞淵の説に物の浧に漬てぬるゝを本にて雨露泪などにぬるゝにもいへりといひ、又ヒヅチはヒツキの約也といへるもみな本末をとりちがへたり。ヒヂはヒツチの義といふ事をしらばかくはあらじ 後世の説に、秋田をかりたる跡の稲かぶよりふたゝびおひ出ぬるをいふといへるはたがへり。そは再生稲にて自生稲とは異之。夫木集に高遠「秋の田のかりほの稲のひつちはら長くもあらぬ世を嘆く哉」西行家集に「うづら鳴くかり田のひつち生出てほのかにてらす三ヶ月の影」是らみな再生稲のひづち也〇再按に、ひづちの名義は右の如く泥水にひづちて生立ぬるをいへば、後世のは再生稲のひつ

ち也○此説による時は、ひづちとよみてつの字を濁るべし。今の世にはつを清みちを濁れば名義に負けり以上遊淸が和訓古義穭野稻秜、檕按に、唐書開元十九年楊州奏穭稻二百一十五頃、再熟稻一千八百頃、是自生と稻孫の別なることはじめてこゝにみえたり。廣雅云、稻已割而復抽曰二稻孫一、さて自生に二種あり、按に稆旅また穭に同じ、後漢光武紀に嘉穀一作野穀旅生注寄之、不因播種而生、大日本史に略記を引て云、延長五年四月北山野穀旅生人競採之、またこれを野稻ともいへり。呉志云、嘉木三年由巻縣野稻自生改爲禾興縣、また唐書地理志云、滄州木魯城乾符元年生野稻水穀十餘頃燕魏飢民就食之、我いにしへには卽日向國高千穗峯に野稻自生すといへり、近頃大隅國大隅郡櫻島炎上して海中に五つの新嶼を涌出せり、その白沙原頭に野稻旅生して實を結び、飢民採て食へり。その種子を試にうゑけるに、來歲は悉く化して茅萱となりたり續紀和銅六年正月左京職献稗化爲禾一莖。また漢江表傳云、孫亮五鳳元年交趾稗草化爲稻新嶼涌出せしは安永八年十月朔日なり、野稻旅生せしは卽其翌年々、是實にけやけき明証也。今大方に自生稻といへるは、説文云、稻今年落來年自生謂之秜、これなり。秜音泥、また今多く穭をヒコモユとよみけるもたえてよしなきにもあらず。按に唐書馬燧傳云、大曆四年兵乱後大旱、田中生穭禾人頗使之、註

俊頼朝臣
住吉にありといふなるおきなぐさきくゆへ秋の風や傳けん

穭禾再生也（昆陽漫錄云、豐後國武田の川中の島に、年々自然と生ずる麥あり。一民取來て作るに實甚多し、農民の助となれるによりて敦書懇に求て此麥を得て官へ稟し、國々へやりて作らせ試るに、地に應ずる所は常の麥とは格別實多し、地に應せざる所は、常の麥と同じといふ）

おほゝそみ　順抄に虎掌を註したり、卽天南星也

おきなぐさ　本草和名に云、白頭公（陶景注云、近根處有白茸、似人白頭、故以爲名）和名抄、野丈人、一名胡王使者、一名奈何草、一名羗胡使者（出雜要決）和名於岐奈久佐、一名奈加久佐。順抄と和訓是と同じ、名義は白頭の老翁に似たれば名付しにて、やがて西土の白頭公の字によれるゝ。こは烏扇をカラスアフギ（本草和名）萱草をワスレグサ（万葉集）海老をウミノオキナ（新續古今集能宣の哥）鬼針草をヲニバリ（俗稱）老鴉瓜をカラスウリ（同上）黄瓜をキウリ（和名抄）といへると同じ例ゝ。又一名ナカクサとあるは漢名の奈何草もて和訓とせしなれば殊なるこゝろはなし。扨順が規子內親王家哥合に「霜がれの翁草とは名のれども女郎花には猶なびきけり」とあるは、みづから年老たるをたとへたるなるか、此白頭公を思ひ寄てよめる歟、はた後世にいふ菊の事をさせるか知がたし。さりながらこの比にはいまだ菊を翁草といふ事有まじければ、猶白頭公の事なるべし。菊を順抄には但カハラヨモギ、カハラオハギとのみしるしたり。後世に翁草といへるはもはら菊の事にて、白頭公をいへる事

校云、虞、和名鈔、鷃ニ作ル

校云、字鏡はオホチフクリ、和名抄はオホチカフクリなり

はたれも〳〵しらずなりたり　松を翁草といふ事は藏玉集にみえたり、游清云

おほうばら　順抄に菝葜を註したり

おやこぐさ　莫傳抄、藏玉集幷にゆつりば、またしだなりといへり

おほねむし　順抄に蝗を註したり

おきつとり　記にみえたり。万葉卷六に、奧津鳥味經(アヂフ)乃原とよみたり、されば味鳧(アヂカモ)なごをいふなるべし

おすめごり　順抄に鸈虞鳥を註したり。尒雅集注を引て云、鴋音紡、一名澤虞、卽護田鳥也。常在澤中、見人輙鳴、有似主守官、故以名之

おそきうま　順抄に駑馬を註したり、万葉にもこれをよみたり　〔〇以下本頁八行白丁〕

おほをそとり　万葉卷十四、加良須等布於保乎曾登利とよみたり。オホヲソは大食(オホヲシ)之、ヲソとシと通音也。鳥はよく物をくふ鳥なればしかいふ之。契沖はオソの假字に改たれば遲鈍の義にしてわろし

おほちふぐとり　字鏡に螵蛸を註したり、こは蚝蟲の巢なり、順抄の註おなじ

校云、庚、和名抄、蓞ニ作ル

おにのやから　字鏡、順抄幷に續斷を註したり

おほみるくさ　順抄に茸庚子を註したり、また蒖蓞をも註したり、按に蒖若なり、若蓞おなじ

おむなかづら　順抄に芎藭を註したり、於無奈は嫗也

おもかげくさ　藏玉集に山吹なりといへり　〔○以下本頁八行白丁〕

おにのしこくさ　游淸云、此草古へつはらなるときてなし、今按に、万葉卷四に、大伴宿禰家持、贈坂上大孃哥。萱草吾下紐尓著有跡鬼乃志許草事二思安利家理。此哥の意は家持がこゝろにいかでか坂上大孃を忘んと思ひて、萱草を下紐につけたれど、いさゝかそのしるしもなく、ます〳〵大孃の事のみ心にかゝれりければ、萱草の名のかひなきをはらだちて、物も名にも似ぬいたづらなる鬼のしこくさ哉とのゝしりたる也。事二思安利家里は、後世いふ名のみえけりといふ詞ゝ。別に一種の草あるにはあらず、萱草をさしてかくいへり、後世に是を一種の草とするは此哥の意をよくとき得ざるゆゑゝ。扨今の本に鬼乃志許草とかける鬼の字は、醜字の偏の省かりたるにはあらずや、もし然らば醜のしこぐさと讀むべし。紀に

醜女をシコメとよめるにて知べし。すべてシコてふは、物をあしざまにいふ時の詞之記紀万葉に例おほし。鬼といひては何の意とも聞えがたし。扨其ワスレグサは今何物をさしていふとも知らねども、今の俗に、音のまゝに、くはんざうといふ物あり、こは和名抄に、兼名苑云、萱草、一名忘憂、萱音喧。漢語抄云、和須禮久佐、俗云、如環藻二音、とあるによれば、古へより字音のまゝに呼しとみえたれば、今くはんざうといふも夫なるべし。扨又ワスレグサてふ名ははじめより此間にさる草有にはあらで萱草、一名忘憂と有につきて付たる名なるべし。すべて吾邦の詞に、何くさといふに、草をさすにあらで心をよせぬる物をさして、何物にてもクサといふ事多し、万葉巻四に、戀草呼力車二七車積而戀良苦吾心柄と有も、戀草てふ草にはあらず、戀の心は深重なるをいはんとて、草といひ、車に積ていへる之。また力草などいふも同じ。今の俗言にも、笑草、泣草などいふ同じ意之。されば忘草も本は其意にていへるなるべけれど、萱草、一名忘憂と有によりて、萱草にワスレグサの名を負せてより後は、終にワスレグサてふ名は、萱草の和訓に定まりて、一種の草とぞなりぬらん。されば此物は俗には古も今もくわんざうの音にてよびぬれば、今世にくわんざうといふ物は、古のくわんざうとおなじ物なるべ

し。其花のさまは、百合に似て赤くきばめるもの也。槃按に、家持の哥は、もと詩の衛風伯兮の章に賦したる焉得二諼草一言樹二之背一願言思レ伯使下我心痗上宋人羅存齋が尓雅翼に、この詩の意を釋けるよしつくしたり、今游清がこゝにいへるも存齋が說と同じ、詳かにわすれくさの條にしるしたり

おほえびかづら　輔仁和名に蘛陶を註したり。すでにくはしくえびかづらの條にしるしたり

〔○本册(第二册)終〕

國史昆蟲草木攷卷二

加部

か　記に鹿をよみたり、順抄おなじ。さてカとはシカの約にはあらず、カといへるが本語にて、シカといへるは牡鹿の義也

○蚊を註したるは順抄に見えたり。人を噬ものなればカムの義なるべし

が　順抄に兼名苑を引て、鵞音峨と註したり　〔○本丁二行次頁餘白〕

かひ　祝詞式に穎をよみたり。また本穎雜穎の名あり、國々によりて差別せり。むかしは穗につけてそれながら上入せしほごに、上納米の事をかくいへり。千五百番哥合に「君が代はにまのさと人つくる田の稲のほずゑの松にまかせん」備中地名に二万と有　さてカヒといふ詞は神代紀の芽の意と同じ、あしかびの條に說あり

○卵をよむは紀にみえたり。いせ物語に、鳥のこを十とよみたるコもおなじ

○殼をよみたるは順抄に見えたり。またカウともいへり。貝のカラにもいへり、木實にもい

補　記に、鵜葺草萱不合命、註に訓葺草云加夜云々

へり

○貝をよみたるは介甲蚌蛤をなべていふなり。先記に加岐賀比は牡蠣の殼なり。源氏物語にカヒツモノとみえたり。倭姫世紀にはカヒミツモノと書たり。こは肉あるものをさしていふぞ。漢土にては、長きを蚌といひ、まとかなるを蛤といひ、凡兩殼の相あふものをもまた蛤といふ。毛あるを蝛蜼といひ、尖(トガ)れるを齊蛤といひ、小なるを蠯といひ、稜(カド)あるを蚶といへり。詳に屈翁山が廣東新語に載たり

○蚑を註したるは字鏡にみえたり

かや　神代紀に曰二鸕鷀羽一爲レ草(カヤ)とあるは、記にいへる彦波瀲武(ヒコナギサタケ)の御産の時の事にして、即御名は鸕鷀草(カヤ)と申奉るぞ。これより草野(カヤヌ)姫などゝ申御名もあり、また草(カヤノ)葉草原苅草の草もみなカヤとよめり。古言に上よりおほふをカといひ、屋舍すべてヤといふ、草をもて作るは覆屋の義ぞ。さて万葉巻八に、波太須珠寸尾花逆葺とよみたれば、カヤてふ言はスヽキをもかねたるなるべし。おもふにカルカヤ、カヤブキ、タデガヤなどゝいふは刈たるをいふにや、タデガヤと舟の底を固むるにカヤを燒て董するをいふ、スヽキは生たる時をいふなるべし

○萱をよみたるは順抄にみえたり、今いふカヤ之。眞カヤといふは、檜を眞木(マキ)といふにおなじ。式に善茅、註に一茅三脊としるしたる善茅は正しく菁茅の誤之。按に書の禹貢に云、包匭菁茅、菅子云、一茅而三脊名曰菁茅、今此にいふ三角萱(ミツカドカヤ)といふ物之。いにしへ包藉縮酒の用となせしもの、蓋しこの茅なるべし。また一種にして香あるもの有、俗に香茅と云、さゝめの條みるべし

○榧をよみたるは輔仁和名に見えたり

○柏をよみたるは神代紀に松柏をマツカヤとよみたり。柀をよむはカヘよりうつりたる之

かへ　順抄に本草を引て菓類に柏實、一名榧子、和名加倍。按に今本草に此文なし、但輔仁本草和名、柏實、和名比乃美、一名加倍、また榧實、一名彼子、一名柀杉、和名加倍乃美、これ抄に引たる本草は、卽輔仁の本草なる事をしりたり。さて輔仁は柏實と條を分て加倍と注したるを、けたし順は一物と心得て、柏實一名榧子といだしたるに似たり。さりとても加倍は柏の名なればこそヒノミ一名カヘノミと註したれ、紀にも柏をカヘとよみたれ、是香重の義之。さて榧をカヘと註したるも、いにしへは類をもて稱せるにや、後にはその混(マカ)へるをいとひて

【頭注】校云、葉ノ下、「の歌」アリ

カヤといへりけん。輔仁和名に、榧一名柀、順抄に柏實、一名榧子とあるを、また式は今の俗に一物と覺えて、榧柀柏皆カヤともいへり。柀を彼など書たるは誤也。尓雅に柀ハ煔ヒン也、註に其葉似杉其木如柏、順抄に末木マキと註したり、今いふマキにはあらじ、卽柏ヒノキなるべしかも

欽明紀に㲪をよみたり、字鏡に髦を註したり、順抄に⿰毛賣を註したり、これ皆紀にいふオリカモ、注に毛席とみえたり、毛裳の義にして裳也。敷裳シキモをいふといへり。また万葉に、毳をもよみたり。毳は細弱毛なり。順抄に、尓古計と註したり、冬瓜をカモウリと註せしも、その毛茸をいふなり

玉勝間十三卷十九丁ニ云、鴨に大かた四種あり。第一大なるを、まがもといひ、次に大きなるをヒドリといひ、次を、アヂといひ、もとも小きをタカベといふ。みな同じ鴨にて、たゞ形の大き小きによりて、名の異る也。あぢ、たかべなど万葉●によめり。又あいさといふ一種あり、こは鴨のたぐひながら、聊か異なり。万葉七に、あきさとあるは此物なりといへり

○鳧鴨をよみたるは、万葉卷一に、葦邊行鴨之羽我比、又卷四に鴨鳧ともよみたり。鳧は卽鴨なり

校云「と」ノ下「樣に」ヲ脫セリ

かり　紀に雁をよみたり。万葉卷二に、鳥埴立飼之雁乃兒、神代紀に、又川鴈爲持傾頭みえたり。にしるしたる雁の北へ行事こゝに入べし

かね　万葉卷　に家持の哥、鳴加泥とよみたり、前にいふカリも皆雁の啼聲によりて稱とせしといへり。

〇鐵をよみたるは式に堅鐵をカタカネとよみたり。金をよむはつねなり

かけ　記に迦祁とよみしは、即万葉卷七に、庭津鳥可鷄とよみたると同じ。眞淵いはく、可鷄と書しは只假字ゝ、それはやなきの事を楊奈伎、うめを烏梅と書たるが如く幸により來たる字を借たるのみゝ。槃按に、神樂酒殿哥に、仁和鳥波加介呂止鳴奴奈利とよみたれば、これも其聲を稱とせるなるべし。鷄に五德あるとは何のふみにもみえたり。また招魂の因あり、水に沒したる人を尋ぬる雄鷄を俘に載せて流せしに、其所に到れば必ず鳴聲を發、俗或は是を鷄放と云、また清朝の俗に棺廓の上に白雄一隻を寘て是を還魂鷄といへり。尙詳に橘黄閑記卷九にしるしたり

かは　新撰万葉、順抄并に皮をよみたり

かば　樺をよみたり、雜式に山城國泉河樺井渡瀨をカハヰとよみたり、尙かにはの條にしるす

かし　記に、加志、甜檮(ヤマカシ)、白檮(シラカシ)、久麻加志、波毘呂久麻加斯あり。神代紀に、青橿城根尊、允恭紀に、味橿、式に、甘樫社、万葉卷九に、橿實乃獨與將宿とよみたり。槃按に、いにしへカシといへる稱はかならず一木の名にあらず、カシはカシハの約、カシハは食敷葉(ケシキハ)のつまりにして、飯を盛べき木の葉の泛稱なるべし

かぢ　字鏡、順抄幷に穀を註したり、卽楮なり構之

がま　紀に蒲をよみたり、景行紀に以蒲爲手繦、天武紀に、莞子をよみたり、同紀に、蒭蒲をアラカマとよみたり。輔仁和名に、香蒲を女加末と注したり、紀に莞をヲカマと注したる段(クダリ)もあり。蒲扇(カマウチハ)は今も薩摩國にてつくれり、其形ち全く同じ

から　殼をよみたり、木實にいふは空虛のこゝろなり、紀に稻莖の事をイナガラともよみたり

かみ　紙をよみたり、雜式に蒲臰紙之、臰臭なり、わが國の紙のくさ〴〵は、新撰紙鑑といへ

る書あり、諸國の産をつばらに載たり。あだし國の品は予が紙譜あり、纂疏に收たればこゝにしるさず

かき　順抄に柹を註したり、說文に赤實菓なりとあればアカキより稱をえたるにや牡蠣をよみたるは記の允恭の段に、夏草のあひねの濱の加岐賀比とよみたり。式の御贄（ミニヘ）に、伊勢礒蠣（イソカキ）ともみえたり、これは石に着たるをかきとるものなれば名となせしゝ。礒蠣、洋蠣、花蠣、內海蠣、コロヒ蠣など有り、詳に纂疏に載たり

かて　粮をよめり、神武紀に粮名爲ニ嚴稻魂女（ウカシメ）一、此云于伽迷

かこ　順抄に鹿を加吳とよめり、万葉卷七に、鹿子曾鳴成、また卷十五に、加古能古惠ともよみたり。此カコはみな鹿子の義にあらず、舟人のカコ也。十五卷の哥に、ゆふなぎにかこのこゑよびうらまこぐかも、これ水手（カコ）の互に呼かはして舟をこぐなり。また、あさなぎにふなでをせんと船人は鹿子も許惠欲妣（エヨビ）、是にて明なり

かせ　式に甲蠃をよみたり（順抄に甲蠃を豆比と註したり）順抄には石陰子を註したり、これ催馬樂に、かぜよけんとよみたるは石陰子にや、つばらならず。今仙臺にて甲蠃の腸をガセといへるは、卽海

膽なり。抄に靈螺子を宇仁と註したり、卽東國のガセなり

かに　記紀に蟹をよみたり、順抄に同じ。またカヂともいふなり。カニは皮丹の義なり、抄に蟚蜞を稻春（イナツキ）蟹之類之と註したり。また蟚蜎を葦原蟹（アシハラカニ）と註したり、蟛蜞俗名カザミ、丹方にガザメ、またヒシカニ擁劍テンホカニ、蠘スナカニ、沙狗ツマシロ、望潮シホマネキ皆本草にみえたり。蚪江一名仙人捏チカラカニ鬼面蟹は平家蟹幷に蟹譜にみえたり、石蟹、抄にイシカニ今はツカニ紅蟹ベニカニ百足蟹チカラカニ毛蟹ツガニ、これを蟚蜞といへるは違へり。虎蟳オホカニ幷に閩書にみえたり、蠘はけだしワタリカニまた閩書にみえたり、歩荷キンチヤクカニ享保年復言にみえたり。蟹奴カニムクリ通雅にみえたり。蝲蛄また拉姑とも書たり、盛京通志高士奇が東西巡日錄等にみえたり、皆滿州語なり。松前方言にサリカニと云もの是なるべし。螯蟹大脚也。抄に於保豆米と註したり。また沙囊在蟹腹內者也、加仁乃毛乃波美と註したり、また蟹黃東坡題跋に見えたり、これ今云カニミソなるべし、傳肱蟹譜及褚氏晴川續譜等に數品を載たれど、おほくは詳ならず

かむ　順抄に、獨犴、唐韻を引て、犴、胡地野犬名、今按、和名未詳、但本朝式に云、葦鹿皮、獨

犴皮云云。按に民部省式交易雜物の段に、獨犴皮を載たり。只陸奥出羽のみに産すといひ、并云數隨ゝ得としるしたり。輔仁和名を按に、兼名苑を引て豺皮、一名野犴、和名於保加美と註したり。是獨犴にや、豺は卽猛獸にて得がたきものなればこそうるに隨ふとしるしたるならめ。また按に、字書に犴同豻、陸仙云、黑喙善守、また豻注に、犴豻同胡犬似狐而黑身、とあれば輔仁のオホカミと註せしも據ごころあり、されば式に載たるは豺皮なる事明かゝ、獨字を副たるはいかが

校云 下木同

かめ　記に龜をよみたり、龜は下に供して神靈あるものなればカメとよみたり、カメてふ詞は卽神とおなじ、天武紀に赤龜あり、万葉卷十六に、龜毛莫燒會とよめり、新六帖に「河こしのおちの田中の夕やみに何ぞと聞ば龜の鳴なる」また「氷とけ春はのごけき池水に汀のかめも日影まちける」さて龜卜の事は今津島に傳はりたり、按に、津島人岡田某氏龜卜傳云、龜卜之書、江次第、延喜神祇式、齋宮式等雖有之、中古傳絕矣。我五鰭翁歎之、尋索諸方受ニ卜部兼魚傳於松本正的ヿ、受ニ萩原侍從兼于傳於小原新助受ニ伊勢祭主傳於大伴宿禰重堅ヿ、又受ニ對馬醫牟田榮菴ヿ、各有傳書　諸說互考而新立龜卜之法、さて其用うる所の龜甲は皆海龜なりといへ

り。槃當てその敗龜甲を見るに、卽本草に載たる蟕龜なり。薪はハヽカを用うといふ。津島にてハヽカと云は、樺木なりといへり。我國そのかみは鹿卜なり。記云、天照太神閉二天石屋戸一而、刺許母理坐、召二天兒屋命布刀玉命一而、內二拔天香山之眞男鹿之肩一拔而、取二天香山之婆々迦一而、令二占合麻迦那波一。順抄に、櫻桃、一名朱櫻、和名波々加、一云邇波佐久良と註したり。また書紀通證にも詳にしるしたり　〔○以下三行白行〕

かり　記に雁をよみたり。万葉卷二に、鳥埀立飼し雁の兒、神代紀に以川雁爲持傾頭者云云北際の國ニツヽク　〔○一行白丁ニテ次頁ニウツル〕

かり　北際の國に潜まることは諸書に見えたり。高士奇が詩に、塞鴻六月護毛衣自注云、往年屆二從日北一見鴻雁六月換毛皆潛二藪澤中一養レ翮梳レ翎計不レ非聘取碧天秋信早雲羅万里高飛、また同人の淸冷堂集云、鴈於五月間生雛塞上諸澤中、また聞下野國日光山中湖水の北陰には夏月雁の栖て卵すること物にもしるしたれど、われは親しく其山人にきゝたり、蝦狄らは夏月つねに雁の卵を食料となせしとぞ松前の人言　〔○以下二行幷次頁白丁〕

かみら　記に蒜をよみたり、神代紀の哥に阿波赴珥破介瀰羅毗苫茂苫とよみたり

記補講　夫にかしをでとはじた訓ばの食れをこ物をとにいふとてかしははけしき葉なるべし

かしは　記紀ともに柏をよみたればカシハは柏の和訓成ことまさしけれ。ヒノキの本名なるべし、されご古語に凡葉皆カシハといふに似たり、仁德紀に御綱葉(ミツナカシハ)、注に葉此云箇始婆、類聚國史に三角柏に作、式に御綱柏と書たるも同じ　空穗物語に、松葉をカシハとよみたり、式に槲をよみたり、貞觀儀式に、長女(ヲトメ)柏、弓弦葉(ユルカシハ)あり、拾玉集に、長柏(ヲトメ)あり、後拾遺集に、猶葉柏あり、順抄に、保々加志波あり、江次第に、本柏あり、万葉に、安可良我之波あり、俗に楸を柔盛カシハといひ、大葉櫟を葉廣カシハといひ、江戸カシハといふ、江戸の俗にこれをたゞカシハといふゝ。尙詳に士淸が垂仁紀の通證にもいへり、士淸はカシハを堅葉(カタハ)の義也といひ、契沖が弟子の忠肅が柏の考には賢葉(カシコハ)の義なりといへれご穩ならず。いにしへは大葉に食物を盛たるなれば、式に葉椀などいふ字もありてクボテとよみたり、すでに万葉卷二に、家有者笥尓盛飯乎草枕旅尓之有者椎之葉尓盛ともよみたれば、食(ケ)敷葉(シドハ)といふ義なるべし 食をケと訓は古言なり　そのケシキハの約(ツヅメ)しにてケシハなるをケとカと通じてカシハといふなるにや、北史異國傳云、俗無盤俎、藉以槲葉、といふも、わがいにしへをしるしたるゝ。さて又後にはカシハといへる詞をかにもかくにも用ひたるゝ。こゝに用なけれど事の序にいふべし。眞字伊勢物語に、石をよみたり、万葉卷七に石迹柏とよみ

補　伊勢物語に、女かたよりそのみるをたかつきにもりてかしはをおほひていだしたるかしはにかけり云々

たるも、石門堅磐也。古今集に浪華江の藻に埋れる玉堅磐もおなじ、公賢家集に光柏といへるは燈盞之。後嵯峨院年中行事に烏柏と云は硯之。貞觀儀式に、假柏といふは傍膳なり。女官式に、御粧柏と云は梳笥之。延喜儀式に、調子柏と云は樂器也。逍遙院記に、霞柏といふは香盆之。西宮抄略註に、服部柏と云は褥之。山槐記に、紅葉柏と云は紅葉膳也。また櫻柏と云は、櫻膳之。今の俗に、波間柏と云梅花蠣なり

かには　順抄に樺を註したり。万葉卷六に、櫻皮纒と書てカニハマキとよみたり。また式にも、抄にもカニハを中略してカハとも〔○以下木本ニヨリテ補フ〕よみたり。樺は專らに皮を用とせるものなればカニハもカハも皆皮といふ儀なるべし。あるひは香庭といふ義也といへり。徹書記は一重の櫻也といへり。またあるひは薄紅の櫻也とも、黄櫻なりともいへれど、この樺はおのづから〔○一脱カ〕種にして信濃下野わたりにてカハ　カンハなどゝいひて、その皮をあかしに用ふるものなり。その皮に赤きと白きあり、花もさくらに似て香艶うすきものなれば國によりて櫻をカハといへるもあり、いにしへも樺に櫻の字をもちひたる例も万葉などにみえたり。さるを謬てさくら也といひしは僻事也、俗にも犬櫻といへり。またカハサクラともいへり。新六帖に「から竹の笛にまくてふかはさくら春おもしろく風そ吹なる」とよみたり

かはづ　万葉卷八に河津鳴甘南河、卷九に河蝦鳴六田河、卷十に河津鳴熊野河上瀨に河津妻喚、卷六に下瀨尓河津妻喚、卷十に河津鳴ナル有三輪ノ河、とよみたり。伊勢物語に「水口にわれや見ゆらんかはつさへ水の下にてもろ聲になく」久老云、河蝦は河にのみ讀合せて、古くは田にも沼にも池にも蝦をよめる例なければ、今の田面になく蛙にはあらじとおもへるとて、河鹿カシカといふ魚也といへり。游清云、河鹿は河蝦の俗稱にて俳偕者流のい〔○以上脫文〕ひそめしことしらる。さるはいにしへに其稱なし、また魚の化するとあるは、其魚もとより河蝦のうめる子にて、盛立すれば親のかたちとなるゝ。また山川なると、田沼なると異類にはあらず、山川なるはするどき水にそだてば、かたちやせ、その聲も淸らも。田沼なるは、ぬる水に育てば、かたちもふとり聲もたみたり云云これに似たる說、山海名產圖會にも見えたりむかし伊勢國にて井出の河蝦なりとて養たるに、みるに吹沙魚俗にハゼの小なるに似て兩脚あり、蛙の如く四脚はなし、其鳴聲は井手の蛙に似たれど、これは河鹿にして蛙にあらずといへり。猶尋ぬべし

かへる　後撰集に「あし引の山田のそぼつ打わびてひとりかへるの音をのみぞなく」淸輔朝臣集「ちかひしをおもへかへるの人しらず口から物をおもひける哉」順抄に蝦蟇を註し

て賀閉流とあれば、賀は濁音なりとおもへれと、紀には加部留、字鏡に、蛙を阿万加戸留、抄おなじ。また抄に、青蝦を阿乎加閉流と註し、また黒蝦を豆知加閉流と註し、字鏡に蟒を加比留と註したるは、蛙なるにやこそ、とまれかくまれカヘルのカは清音なるべし。さて小なるを蛙といひ、蛤といふ、即山蛤を赤カヘル也。大なるを蝦蟇といふ、こは紀に加播といひ、毛瀰といひ、万葉に谷蟆、また谷潜とも書たり。丹方に仇道といへる之。薩摩國人のワクドウといふは即仇道のうつりなるべし。豐後國人はウバクヅといふといへり。そのいと大にして蛇をくらふを田父と云、俗にはヘビクヒカヘルといふ之（かへるの子をどぢぐぢといふ、後のどぢぐぢの條にみえたり）

○世にかへるの合戰といひし事ありて、まゝ親見せし人もありとぞ、按に前漢武帝紀に、元鼎五年四月丁丑晦日有蝕之秋鼃蝦蟇鬪云云

○孵をよめるは順抄に切韻を引て云、卵、鳥胎也、孵化也、俗云加倍流

かひこ　紀に蠶をよみたり、順抄おなじ。うつゆふの條などむかへみつべし

○卵をよみたるは万葉にも、順抄にもみえたり

鷄頭樹は順抄

かへで　字鏡、順抄幷に鷄頭樹をよみたり。万葉卷七に、若楓、また卷八に、黄變蝦手（モミヅルカヘデ）とよみ

雞冠木の下にみえたり

記に翠鳥(カラス)二御食人一とあり

記の上神代巻に湯津香木、註に云香木、訓香木云加都良木、

たり、またカヘルデともよめり。今は秋山の黄葉を紅葉(モミヂ)ともいひ、また葉の野鷄楓をもモミヂといふ也。清記にかへでの木、さゝやかなるにも、もへいでたるこずゑのあかみて、といへるは卽鷄楓の紅葉也。野鷄楓は、今の漢商人のこゝの鷄頭樹をみて稱せる也。野鷄は雉也。きゞしの容(カホ)よき羽にたぐへていへるなり。こゝに鷄頭樹、鷄冠木などいへるは、馬醉木、女郎花の如く、わが國の雅名也。かへるでの條をむかへ見つべし

からす　記に八咫烏(ヤタガラス)とよみたり。或は云、詩の邶風に莫黒匪烏、これによりてカラスは黒しといへる詞のうつりたるなりといへどひがごと也。万葉巻(〇七)に「あかつきとよがらす鳴どこの岡の木末のうへはいまだしづけし」とよみたり。またおほをすどりとよみたるも烏をいへり

かつら　神代紀に、杜木、此云可豆邏、古事記に楓とも香木とも書たり。順抄に、楓を乎加豆良、桂を女加豆良と註したり。古事記によりておもふに、月桂、山桂、巖桂の屬なるか、順抄蓋しこれによるなるべし。杜は桂の誤といへり。いにしへこゝに云楓は、今何物たることをしらず、今專にかつらと云良材あり、或は卽是なるにや。享保年の比、唐山より貢し楓は、

○又到居天若日子之門湯津楓上云云

今も官園に榮たり。其葉は三尖にして其子栗毬の如く、大さ楊梅にひとし、此樹は斯方にあることをしらず

○かづら 附 かつみ

蔓草をかづらとよむは鬘の義にして濁てよむべし。某々のかづら皆しかるべし。或は葛をカヅラとよみたるも、卽蔓草をいへり

万葉四・四十三丁、をみなべし咲澤に生る花かつみかつてもしらぬ戀もするかも〔○本文ノ代リニ左ノ附箋アリ〕

【附箋】かつみ、寄居歌談、甲辰巻云、田安殿人井上文雄云、一ト年上野の草津の湯あみにものして、かしこにありける比、里人のかちもといふものもて來たるを見れば、菰(コモ)の實にてぞありける。是に寄て思ふに、かちもはかつみの轉音にて、ふるき說に、かつみは菰之といへるぞよろしかりける。散木集雜下に中納言國信の坊城の堂にてよめる長歌に、はゞからぬまの花かつみかつみるさまはまこもにて名をかへけるもうらやまし云云、著聞集に、五月雨のころ圓位上人熊野へまうでける道のやどりに、あやめをばふかで、かつみをふきたりけるをみてよみ侍りける「かつみふく熊野まうでのやどりをばこもくろめとぞいふべかりける」などあるをおもふべし。さてはなは花にはあらで、はた薄をばはなすゝきといへる類なるべし。はたすゝきは薄のほの皮(ハタ)にこもれるを言之といへば、菰の實の皮(ハタ)にこもれるさまも同じければ、しかいふなるべし。こもといふ名も實の皮にこもれるよりつけるな

らん歟、こはさだめてはいひがたけれど、いにしへより孤はくひものにもしたれば、花の意にはきはめてあらじかし。田字草または芡實などいふ說はさらにあたらぬひがごとゝ、といへり。文雄はおのれまだあひし事もなき人なれど、村田春野がもとより消息のたよりにこの說をいひおこせたるまゝにかいしるしつ

【頭註】玉かつま三の卷云

宗久法師が都のつとゝいふ物にいはく、みちの國淺香の沼をすぐ云云、此國にもあやめのあるにやと、年月ふしんにおぼえしかば、この度人にたづねしに、當國にあやめのなきにはあらず、されども實方中將の君くだり給ひし時、なにのあやめもしらぬしづが軒ばには、いかで都の同じあやめをふくべきとて、かつみをふかせられけるより、これをふきつたへたるなりと、かたり侍りし云々、といへり。國人の語りし說、うけられず

かゞみ　記に故大國主神、坐二出雲之御大之御前一時、自二波穗一乘二天之蘿摩船一、とみえたり。紀には一箇小男以二白蘞皮一爲レ舟、しるしたり。蘿摩は元來おのづからわが國にありし草なり、その莢のよく舴艋の類に似たれば舟にたぐへていへるなるべし。今の俗に誤りてカヾイモといへり、葉に光ありて根に魁有ものなればカヾミイモとはいふべし。さて白蘞は享保年のはじめ始てあだし國より種をつたへたるものなれば、いにしへ我國に白蘞といひしは何

草なるか詳ならず。式に白蘞をヤマカヾミといふも、記の訓によりたるなるべし。後にノカヾミ、ヤマカヾミ、カヾミグサなどといへるは、皆蘿摩を本としていひたるなり。芄蘭を蘿摩の一名となせるは違へり。詩衞風に、芄蘭之支童子佩觽何楷、世本古義に、芄蘭草名、說文云、莞也、一名葱蒲、可爲席、周禮有莞筵蒲筵莞蒲總一艸、而莞則蒲之小者、以之爲席、則莞精而蒲粗、舊說讀尒雅有藋芄蘭之句以爲此卽藋非也。按郭璞註云、藋芄蔓生斷之有白汁可啖孔疏云如此註則以藋芄一名蘭可知其非此詩之芄蘭明矣莞所以名芄蘭者似莞叢生水中似蘭而莖圓故字从丸而又呼之以蘭也其質輕揚善泛故取以爲幼弱不能自立者之比」支徐鍇云竹葉下垂也芄蘭之葉亦下垂如竹故其莖以支名」觽者成人之佩非童子之飾云々貌如錐以象骨爲之其銳端可以解結也（以上莠部百二丁）しかるを蘇敬以下李時珍に至るまで陸璣の誤を受て、詩の芄蘭を蘿摩となして本草を註し、再びこれを改むるものなし、順抄にも本草を引て蘿摩、一名芄蘭、和名加々美と註したり

かはな　祝詞式、順抄、古今物名など并に水苔をよみたり。祝詞式にいふ、加波奈は芹也、といへり。撮壤集に河苔をよみたり、かはなくさの條をみつべし

かはも　万葉卷二、人丸の哥に、玉藻をむかへて、川藻とよみたり、もの條にしるす

かゞち　記に赤酸醬を赤加賀知とよみたり、卽順抄に注したる保々豆木なり

かいな　順抄に黃草を註したり、今の俗に誤りてゴウナクサといへり

からし　順抄に辛菜を註したり、白カラシは白芥之

かむし　順抄に馬琬食經を引て、柑子、和名加無之。丹方には七卷食經を引。按に續紀元正の段に、播磨直弟兄初齎二柑子一從二唐國一來。佐味朝臣蟲麻呂先殖二其種一結レ子。また抄に、本草を引て、橘皮、一名甘皮、和名木加波、其色黃之義也。順抄、菓蓏部に、馬琬食經を引て、李衡註に、和名加無之乃佐禰、さて柑はそのはじめ上林賦に黃甘と見えたり、吳の李衡に至て種柑橘千樹云、柑字はじめてこゝに見えたり、甘皮は卽柑皮なり、本草に橘皮、一名紅皮、一名陳皮、これ橘に甘皮の稱なし、甘子また加宇之ともよみたり、さて柑の橘より味うして別物なることすでに詳に劉基が郁離子にみえたり

かうぢ　卽甘子、既に前條にしるしつ。抄に、枸櫞を加布智と註せしはたがへり。枳椇の下に載たり

かしひ　字鏡に椽を註したり

かふか　合歡をよみたり。新六帖「山ふかみいつよりねぶと名をかへてかうかの木には人まどふらん」また「おく山のかうかの花も哀なりまたもむすばぬ身のためしとて」ねぶりのきの條をむかへ見るべし

かにひ　丹方に芫花を註したり、かにひのはなの條むかへみつべし

かふち　麴をよみたり、かむたちの條をみつべし

かつを　字鏡、順抄に堅魚をよみたり、即堅魚の字訓なるべし。式に堅魚腊有、今の鰹節なるべし。また堅魚煎汁あり、今の煎取なるべし。漢人は烟魚また馬交魚といへり、松魚といへるはたがへり、乾脯となせるを蕘魚といへり。中山傳信錄に、佳蘇と書たるは即鰹節の塡字也。年中行事秘抄云、景行天皇五十三年八月、幸二伊勢一轉入二東國一冬十月、到二上總安房浮島宮一、尓レ時磐鹿六雁命、從レ駕仕奉、六雁命以二角弭弓一釣二游魚一忽獲二數隻一、仍號二頑魚一、今諺曰二堅魚一。しかれば鰹其始は頑魚といひし、頑のタク反ツなればナを略ツヲといひしにや、今も猶餌を用ひずして牛角或は鯨の牙を以一瞬の間に數百を釣るといふ、是浪華入江昌喜が

校云王餘魚、和名抄加良衣比俗云加禮比トアレバ此所ハからえひトアルベキカ

説なり、此説信(ウケ)がたし

かもめ　順抄に鷗を註したり、また万葉巻一に加萬目ことよみたり、また三に奥邊波鴨妻(カモメ)喚ことよみたり

からえ　順抄に王餘魚を註したり、韓鱏の義にや、鱏和名衣比、これにむかへたるか、今俗にカレヒといへり

かすげ　順抄に油馬、和名糟毛馬と註したり、是詩の小雅に云騆なり

かむひ　式に獨犴皮あり、かむの條にしるしたり

かみな　順抄に本草を引て、寄居子、註に、和名加美奈、俗用蟹蜷二字、是カミナは蟨なき事明かゝ、河貝子美奈とよみたるは是蝸螺也

かしか　後撰か拾遺に哥あり、下の句は、かじか鳴ゝ河の落合可考　〔〇三行餘白〕

かゝみば　紀の竟宴の哥に「玉がしはをかだまのきのかゞみばに神のひもろぎそなへつるかな」とは神代卷の岩窟の故事によりてよめるなれば、鏡葉の義なるべし。また台記に、柏葉の事を鏡葉と書といへり。眞淵の哥に「夏の來てむかしにかへる玉がしはとるともつき

標云かぬれどもハかれぬともノ誤カ万葉ハ雑干ト書ケリ

じにひかゞみはは」とよみたれば樹櫟〔〇を木傍ニアリ〕さしてよみたるなるべし

からある　輔仁和名に、鷄冠草、和名加良阿爲。万葉巻三、山部赤人「わがやどに韓藍種生之かぬれともこりずてまたも蒔んとぞ思ふ」また巻十一に「隠(シノビ)には戀て死ともみそのふの鷄冠草花の色に出めやも」また巻七「秋さらば影にもせんと吾蒔し韓藍之花乎誰かつみけん」さてカラアヰとクレナヰとは一物にあらず、カラアヰは秋花さきて今云ケイトウ之、クレナヰは夏花咲て今云ベニバナなり。万葉集中カラアヰにて物を染る事なし、クレナヰは専らに染物の具にのみしたり。游清嘗て万葉集中の哥を引て證となしたり

かりごも　万葉巻一に、刈薦の思乱とよみたり。薦は眞薦之。尓雅に、菰は蔣草といへるこれなり

【頭注】万葉集人丸、けひの海のにはよくあらしかりごものみだれづるみゆ海人の釣舟、かりたるこものまだ編ぬは、みだれやすければ、かくつゞけたるなるべし

かるかや　万葉巻二に、刈草の束間(ツカノマ)、また苅草の思乱ともよみたり。いにしへにいへる屋舎(イヘ)を覆葺萱(フクカヤ)茅をいふ之。今はスヾメムギといふ草をいふ之。六帖に「よしとてもよき名もたゝ

ずかるかやのいざみだれなんしどろもどろに」この哥などは萱茅をよみたり、雀麥とはおもはれず

からはき　古今物名に、うつ蟬のからはきごとに、とよみたり。うはきなどにや。按に枯荻ならんか、枯荻をカラヲギともいへれば

からほひ　韓葵（カラアフヒ）の義なるべし、からあふひの條をみつべし

かはほね　順抄に骨蓬を註したり、卽萍蓬草之。今醫家川骨二字を用うるも、卽加波保爾の塡字なるを、漢名とおぼへたるもあり、たがへりけん

かもうり　また冬瓜を注したり、この瓜には璸の如き毛あればいへり、かもの條むかへみるべし

からくさ　順抄に蒭を註したり、乾草をいへり、今いふ馬草之。また今の俗に牛邊蓮をもいへり

かしよね　順抄に粿米を註したり、祭祀具にみえたり。また淅をもよみたり、炊米の義なり

からをぎ　神樂哥にみえたり、體源抄に枯荻と書たり、應神紀の哥に、枯野をカラヌとよみた

れば、枯るゝをカラともいへり

からはな　大諸禮に造花をよみたり、造花は勝花とも粧花ともいふ之

かほばな　万葉巻八に、高圓之野邊容花、また巻十に、石走間々生有貌花、また巻十四に、美夜能瀬河泊能可保波奈、又同巻に、美夜自呂の緒可敝に多氏流可保我波奈。さて記にも顏面貌色を皆カホとよみたれば、形秀の義にして、こゝにいふ容花(カホバナ)は其花の艶愛をいふならん。杲鳥をカホドリ、桔梗、蕣花を幷にアサガホといふも、うるはしきをいふ之。俊頼家集に「道すがらかれのにたてるかほが花ふり分がみに霜置てけり」この哥は万葉にすがりてよみたれど、おのづからふり分がみのうるはしきに寄てよめるなり。莫傳抄に、かほよ花はかきつばたなりといへり、この抄の名義は惣ておしはかりの説にして證とはなしがたけれど、さもあらんか

からむし　紀に紵麻をよみたり、式に苧をよみたるも同じ。持統紀に、勸殖桑紵梨栗。下河邊長流が歌に「夏引の糸をばひるの長きにて賤がからむしよるぞほどなき」

かべくさ　万葉巻十、人丸の哥によみたり。こは新室を造れらば、先草をかりて壁を圍(カコ)ふこ

ゝろゝ。今も柑瞳(イナカ)にて新室をつくれば萱茅(カヤヽギ)などにてかこひ、壁のかはりにせるゆゑに、壁をカキともいふといへり

かんたち　順抄に麴を註したり、殕發(カヒ)の義ゝ。今カフヂと云も此詞の略ゝ、ヒメカフヂは女麴ハナカフヂは黃蒸ゝ。糀は俗の製字なり

からたち　万葉卷十六に枳棘をよみたり、韓橘(カラタチバナ)の義ゝといへれど、枳棘は臭橘なればいかゞ。順抄に枳椇を註せしは枳とまがへたるなり

かづのき　万葉卷十四に、和乎可鷄夜麻能可頭乃木とよみたり、いまだ考へず、今は鹽麩樹をいへり

かへるで　前にいふカヘデゝ、順抄に楊氏漢語抄を引て、鷄冠木を賀倍天乃木と註したり。また辨色立成を引て、雞頭樹、加比留提乃木、今案是一木名也と見えたり。かへでの條をむかへみつべし

からもゝ　順抄に杏を註したり。古今物名にもみえたり。新六帖に「いかにしてにほひ初けん日本の我國ならぬからもゝの花」

校云万十八は登吉時支トアリ

からなし　式の左兵衞府に榠樝をよみたり

かくのみ　垂仁紀九十年春二月庚子朔、天皇命ニ田道間守ー遣ニ常世國ー、令レ求ニ非時香菓ー此云ニ箇俱能末ー今謂レ橘是之。記の垂仁天皇の段の事は、たちばなの條にしるす、むかへてみつべし。万葉巻十八に、時支（トキシク）能香久の菓子とよみたり

かたがし　万葉巻十九、攀折堅香子、家持「もの丶ふのやそをとめらがふみとよむ寺井の上野堅香子の花」傍訓にカタカゴの花とあり。六帖にこの歌を木部に入て、かたがしの花とあり、八雲御抄木部に、橿をシラガシ又カタゴと註したり。こゝにカタコといふは堅香子をカタカコとよみたるをつゞめたるにやいかに、さて万葉の歌の題に攀折と云たるによれば、樹なること明か也。六帖の題にも歌にもカタカシとあれば、カタカコを誤たるにはあらず、必よしある名なるべし。おもふに橿（クシ）は諸木にすぐれて堅強なるものなれば堅橿ともいふべし。記に甜檮 白檮クマカシ ハヒロクマカシあり、式に甘橿社あり、其花は凡て栗の花に似てみるにたらず。寺井の上におひかぶしたる花を、小女らがよぢをるとてふみとよむを興じうたへるは、げにもいにしへぶりなり、世にこれを草にいふカタクリなりとおしあてしは、われとお

徒然草に吳たけは葉ほそく河竹は葉ひろし、とあり、又夫木集隆信の歌た「久しかれ君千代ませ河竹に色はへまさるとこ夏の花又堀太國信の歌に、木がらしにそゝにかのゝか

もひたがへり

かはたけ　古今物名によみたり、歌の心によれば河竹なるべし

かちかた　順抄に大麥を註したり、おほむぎの條にしるす

かぎろひ　記に加藝漏肥のもゆるいへむらとありて、陽餤なるを、万葉に蜻蜓玉蜻蜻蛉蜻火などの字を假りてカギロヒとよみたるを、いつしかに赤卒といへる蟲の名とはなりぬ。赤卒は順抄に阿加惠無波と注したり、崔豹古今注を引て、蜻蛉之小而赤也。蜻蛉は今いふトンホウ之、赤卒は今いふアカトンボウ之、また万葉に蜻蛉宮をアキツミヤとよみたれば、今蜻蛉をアキツムシともいへり

かはむし　順抄に鳥毛蟲を注したり、兼名苑を引て蛓虫、一名鳥毛蟲

かまつか　順抄に魼を註したり、玉篇を引て小魚名之

かひたこ　敏達紀に菟道貝蛸といふ人あり、順抄には私紀を引て、貝蛸を註したり。これ章魚の貝あるものにして、貝に乘て海上をうかみ流るゝといへり、此殼をタコブネといへり。按に坤輿外紀に載たる舡魚なるべし、詳に予が魚品にしるしたり

は竹かたよりになびけど色はかはらざりけり

圍万葉集抄巻五廿九丁云、容鳥とはゐなか人はかほとりといふ是なりかほ〱となけば鳴聲を名とせるなり

かほどり　眞淵はかつほ鳥といふものにて、喚子鳥といふもこれなるよしいへれど、たがへりけん。おもふにこは雉子なるべし、そのしるし万葉巻五に、可保鳥能布多利那良毗爲、巻六に櫻花木晩窂(ガクリ)貌鳥者間無數鳴、巻十に、朝井代尓來鳴杲鳥、また同巻に、容鳥之間無數鳴春野之草根繁戀毛爲鴨、また六帖に、人麿「夕されば野べになくてふかほどりのかほにみえつゝわすられなくに」これらの歌のこゝろにて雉なるヿ明か也、またこのカホはカホバナのカホおなじ詞なれば、うるはしきヿをしるべし。また源氏宿木の巻に「かほどりの聲もきゝしにかよふやとしげみを分てけふぞたづぬる」これ薫大將の手習のあね君を、うるはしきかほ鳥にたとへて、したひ給るこゝろなり、ヿにかほ鳥の聲もきゝしとつゞけたるにてもしるべし。これ花山帝の御時まではかくつばらなるをいかで眞淵の考もらしつらん、藏玉集の如きかりそめの書にも、かほ鳥は雉の男鳥之と云り

かさゝぎ　推古六年の紀に、難波吉士磐金至㆑自㆓新羅㆒而獻㆓鵲二隻㆒、乃俾㆑養㆓難波杜㆒。鵲こゝにカサヽギとよみたり。おもふに是鵲はもと新羅の種之、因て按に、宋の孫穆が雞林類事云、鵲曰㆓渴則寄(カツソキ)㆒是則韓語なれば、カサヽギは卽カツハギの轉なるべし。此鳥今筑後國におほ

補　正治百首、經家「おく霜にかれもはてなでかやくきのいかで尾花の末に鳴らん」紀に川鳫と見えたり

し、故に筑後鴉といへり。源氏浮舟卷に、さむきすざきにたてるかさゝぎのすがた、といへる詞あり、これなん鵲とはおもはれず。或說に河鷺（カハサギ）なるにやといへり、されば鷺の類は洲前などに立るくせあれば、かくはいひしにや、漢土の詩にも、河鷺立鷺と賦したるもあり、浮舟にいへるカサヽギは卽鷺をいひしにや、いかゞ

かやくき　順抄に鶂を註したり、信濃國人いはく、松本の方言にカヤクキまたカヤクヾリといへる鳥あり、秧鷄（クヒナ）に似て小なり、色はくろく茅原（カヤ）また稻田の畦にありといふ。さてカヤクキは茅潜（カヤクヾリ）の義にして、その詞の約りにや、またあるひはオホサヽエともいふといへり。伊豫國に畦鳥と云鳥あり、これ時しありて稻田の畦に群集してその形はこゝに云カヤクヾリの如きなりといへり、またその一種なるにやいかゞ

かはかり　神代紀に河鳫とみえたり、疏に鳧雁のたぐひなりといへり

かりのこ　鴨子なりといへり。源氏槙木柱の卷に「すがくれにかずにもあらぬかりのこをいづかたにかはこりかへすべき」つばめの條をむかへ見るべし

かしとり　堀川後百首、俊頼「夏そ引うながみ山の椎柴にかし鳥鳴つ夕あさりして」とよみ

校云活版本群書類從ニハかうとりトアリ

校云醫心方、加末之々トアリ

たり。是本草綱目鶻嘲の條に載たる䳜鷜鳥鳥なるべし

からとり　藏玉集に、かうなひしとりなりといへり

かはほり　字鏡に蝙蝠を加波保利と注したり、伊勢家集に、かうもりが道たづねわびてこよみたり、源氏みをつくしの巻にも、空穂物語にもみえたり、兩說ともに名義詳ならず

かはらげ　順抄に騂を註したり、川上(カハラ)の白沙の色にとるゝ、今は瓦毛とも書たり

かみしろ　髪白なり、黑月毛をいへり、百馬圖にみえたり、詩の魯頌の註にいふ雒なり、乃云黑身白鬣

かましか　皇極紀に山羊をよみたり、また天武紀にも山羊カマシカともみえたり、式に羚羊をカモシカとよみたり、又零羊とも書たり、輔仁和名の零羊を加末之と註したり、順抄に麢羊を加萬之々とあり

かきかひ　記に加岐賀比とよみたるは卽牡蠣殼の義なり

かしはき　輔仁和名に槲若葉を註したり、一名久奴岐

かたばみ　六帖に、あふとのかたばみぐさもつまなくにと有、清記に、かたばみあやのもん

補　補

にて、ともものよりおかし。順抄に酢漿を註したり

かさくさ　輔仁和名、王不留行、和名須々久佐、一名加左久佐と註したり

からたけ　六帖、から竹のこちくの聲もきかせなんあなうれしともおもひしるべく、又夫木集知家が歌に、から竹のふえにまくてふかはさくら春おもしろく風ぞふきける。或云、からたけは笛につくる竹之　〔○本册右マデ本年也以下字違フ。八行半頁白丁〕

かきつばた　万葉卷十七に、家持、加吉都播多衣爾須里都氣麻須良雄乃服曾比獵須流月者伎尓家里（きそひがりは藥獵なり、藥獵は推古十九年の紀にはじめてみえたり。天智七年まで四度ありしなり、その後は見るとなし、されど續紀及類聚國史などは未詳にせず）カキツハタは燕子花也、燕子の形ちに似たればあだし國にても稱せし之。眞淵云、東麿が說に翔燕の花てふこゝろなりといへり、また久老は万葉卷七に住の江の淺澤小野の垣津旗衣に須里都とよみたれば、かきつけ花といふこゝろなるべし、ハタとハナと通へり、ハタス、キまたハナス、キなどいへりと釋(トキ)たり。二說ともに信がたし。さて燕子花の名之、溪蠻叢笑に紫花全類燕子生於藤としるしたり、さるを漳州府志にこれを辨じて主ニ於水中一云レ生ニ於藤一誤也とみえたり、夏且菊圃同春云煙蘭卽紫燕微香、これも燕子花也。順抄に、劇草を加木豆波太と註したれど、

花の略似たればそれとなしていへるにや、劇草は今の俗に朝鮮アヤメといへる草花也、本草經に載たる蠡實なり。さて我國にて後世杜若をカキツバタとよみしはよる所なし、沈活が補筆談に、杜若卽今之高良薑後人不識又別出高良薑條、此說盡し然り、今姑くこれによる、槃おもふに、楚辭に搴汀州兮杜若、また華采衣兮若英、王逸註に若杜若え、こゝに言は華草の色を衣となして飾となせしえ、されば其花葉を杜若といひしえ、良薑は其根なること明え、猶杜蘅は香草の名にして、細辛は其根の名、萎蕤は花にして黃精は卽其根の名なるがごとし（二說別に考有）かゝるを後人竟に別て四條となす、抄に註せし劇草は卽いにしへのカキツバタにして、今の燕子花は後にいでゝ其花葉の劇草に似ていともかほよき花なれば、いつはあれ劇草の和名のこれにうつりしもしるべからず、さることはエビカヅラは紫葛の和名なれど、後には葡萄の名となり、クワヰは烏芋の和名なれど、これも後には慈姑の名となりぬるは其よろしきかたに名のうつりたるえ。カキツバタもさにはあらじや、いかゞ、今我よりいにしへを決めがたし

かきつはな　順抄に由跋を註したり

からあふひ　清記に、からあふひは、とりわきてみえねど日のかげにしたひかたぶくらん、

記に已に蒲黄の字を訓じて、かまのはなとあり

注に催馬樂淺綠の詠物に、からほひとあるもこれ之、といへり。按に、範兼卿の童蒙抄に、向日葵とて、日の影にかたむくなりといへり。源氏ふぢばかまの卷に「こゝろもて日影にむかふあふひだに朝おく霜をおのれやはけつ」按にこれ陳扶搖が花鏡に載たる迎陽花、馮紹京が新城縣志に、向日葵俗名望日蓮といへるも卽是之。今の俗にはヒウガ葵、また日週(ヒマハリ)、日車(ヒグルマ)などゝいへり。御蔭山のあふひとはことなり

からうはぎ　字鏡に茵を註したり、茵は茵蔯なり、順抄にカハラヨモギと註したり、又順抄に、薺をウハギと注したり、おもふにウハギは蒿類の名之、ハギの條見つべし

からよもぎ　字鏡に冬菊を註したり、もと漢土より來ものなれば、からよもぎといふは誤なり

かほよばな　前にしるしたるかほばななるべし

かまのはな　記によみたるは蒲黄なるべし

かはなぐさ　古今物名によみたり、順抄に、水苔を加波奈と注したり、月菜の義なるべし、視詞式にもカハナの名有、芹の名こす、殿に藻を畫(エガキ)あるひは彫したるもあり、皆火を防(フセク)也、これ

困藏玉 さきぐさの中にもはやきかゞみぐさやがて御調

も河菜なるべきよし、士清が栞にみえたり。 京極黄門光國卿の御說にはカハナグサは河花草の省たるにて川骨の事なりとの給へり、またある說に樺菜草ならんといへり、こは顯昭が說とおもほゆるゝ、さて樺菜といへるは何てふ草にや、これいまだしらず

かはらまつ　清記に云、西の京といふ所のあれたりつる事もろともにみる人あらましかばとなんおぼえつゝ、垣などみなやぶれて、苔おひてなどかたりつれば、宰相の君かはら松はありやと云々、玉葉和歌集、後京極攝政前太政大臣「山かげや軒端の苔の下朽ば瓦の上に松風ぞふく」按これ唐の蘇敬が本草に載たる瓦松なるべし、同時崔融が賦あり、卽苔類屋上におふる無根草なり、形は蓬の如く細葉松の葉に似たり、俗に童戯柴といへり、また狐ノヲなどともいへり、山中ふるやのやなどにおひしげるものなり

かゞみぐさ　莫傳抄に水上萍也といへり、また正月一日大内餅の上におく大根也ともいへり、また槿也ともいへり、藏玉集には山吹なりともいへり

かはやなぎ　万葉卷七に川楊をよみたり、字鏡、順抄おなじ、これ唐本草に載る水楊なり

かへでのき　順抄に雞冠木を注したり、かへるでの條にしるしつ

にそなへつるかな・

【頭註】側

困藏玉　山里の軒ばにさけるかざみ草色をも香をも誰みはやさん

困　梓弓春の梢に風見草のどけき色の打なびくらん

かはざくら　かにはの條にしるしたり

かはらぐさ　式に皀莢をよみたり、順抄に加波良布知と注したり

かさなぐさ　莫傳抄に柳ゝといへり　【脚注】困藏玉　松にのみ音は軒はの風な草いとには露もみだれつるかも

かきみぐさ　莫傳抄に卯の花ゝといへり

かさみぐさ　莫傳抄に梅の花のちるをいふといへり、藏玉集に香散見草は梅也、風見草は柳なりといへり

困香散見草　梅
風見草　柳

かたみくさ　莫傳抄になでしこゝといへり、またあふひなりともいへり、また菊也ともいへり、藏玉集おなじ

かざしくさ　藏玉集にさくらなりといへり

かうかのき　合歡木をいへり、ねむりのきの條にしるす。万葉卷〔〇八〕家持の歌に、わぎもこの形見の合歡とよみたり、壒嚢鈔カヲカノ木はエンズの木なりといへり

かくもぐさ　六帖雜草「うかりけるみぎはがくれのかくも草葉ずゑも見えず行隱なん」

但馬國出石郡出石注に以都之

補

校云庭におふるノ歌ハ催

かくまぐさ　輔仁和名に黃蓮を注したり

かしきがて　順抄に餌飯を註したり

かげのうま　稱德紀に奉鹿毛馬於若狹彥神、これ駵なり、騮駠駵おなじ

かみのこま　神の駒なり、新拾遺集源重之の歌に、千早振出石(イツシ)の言の神の駒とよみたり

かたつがひ　海道記、鴨長明「たのみつる人は渚のかたつかひあはぬにつけて身をぞうらむる」今はかたしがひともいへり、もろもろの片方(カタヘ)の貝をいへり

かたつぶり　字鏡に蝸牛を註したり、俗に眉螺(ツブ)と云、爾雅に蚹蠃といへり、寂蓮の歌に「うしの子にふまるな庭のかたつぶり角あるとても身をやたのまじ」

かはひらご　字鏡に蛺を注したり

かつらあゆ　夫木集、信實「あさなあさな日次そなふる桂鮎あゆみをはこぶ道もかしこし」

式云、桂のさとより日次に鮎を內裏へ奉りしと

からなづな　万葉卷に、「庭におふるからなづなはよき菜なり、はれ、みや人の、さぐるふくろを、おのれかけたり」或云、つねのなづななり　〔〇以下三行餘白〕

馬樂ノ歌ナリ

校云、和名抄、齸、迩介加無トス、木本迩介

諸縣郡、

かのにけぐさ　字鏡に人參を註したり、埃嚢抄に、鹿齸草なりといへり。順抄に爾雅の註を引て、獸呑ㇾ蒭噍反出而嚼、鹿ニ曰齸、和名迩双と註したり、或は鹿迯草などいへるは梁書の阮孝緒が故事のよるなるべし。大同類聚方に久多迩と注したるは疑ふべし、さて我國に中古ははじめて人參のいてしは元和年の始廣東潮州澄海縣の人何欽吉といふもの日向國都城ミヤコとい へる所へ歸化して醫を業とし世を營みたり、土人稱して杏林翁といふ、時に寛永年の比、同郡山中にいたりて自分藥を採、此時はじめて竹節參をとりてこれを製造し用ひたり、これより人これあることをしりたり、直振などいへるは、はじめて正德年の比よりいでたるよし物に見えたり。我かつて譜をつくり既にえりて成形圖說中に收めたり

からくれなゐ　式に韓紅花綾カラクレナヰノハナアヤと見えたり、歌によみたるは業平朝臣をはじめといへり、くれなゐの條をむかへみつべし

かにひのはな　淸記に、かにひの花の色は、こからねど藤の花にいとよく似て、春と秋とさへをかしげなり。拾遺集物名にもあり、雁緋なりといへり。按に輔仁和名に、芫花を注したり、さて今芫花にあてし薩摩藤といへるは秋には咲ねど、春夏の交アヒダに咲て、花の色いとよく

【園】藏玉 浪に吹かせはよしのゝ河高草あらしの瀧

藤の花の色に似たり、こはげにそれとしおもはれねど、名のおなじければ併てしるしつ、今の俗言(ヒナコト)にいへる草にて、花の樣いと〳〵たえ

からすあふぎ　順抄に射干を注したり、ぬばたまの條をむかへみつべし

かはらよもぎ　順抄に菊と白蒿を註したり、もと漢土より來るものなれば、からよもぎなりこといへるは誤なり

かみおこしな　順抄に苦芺を注したり

かれふのくさ　莫傳抄に春草のおひいづるをいふ、また春ぐさの惣名なりともいへり

かはぢさのき　順抄に賣子木を注したり

かはゝしかみ　順抄に呉茱萸を注したり

かにはざくら　かにはの條にしるしたり

かはたかぐさ　莫傳抄に柳なりといへり

かつをいろり　式に堅魚煎汁をいへり

かくがのとり　景行紀に五十三年冬十月至二上總國一、從二海路一渡二淡水門一、是時聞二覺賀鳥(カクカトリ)之

のうへにみるらん

【補】玉だすき巻五に云、和名抄に雎鳩（ミサゴ）としれど然には非ず。こは鳴聲のカクガクと聞えし故にかく名づけしにて、寶は海に住る、いみじき悪鳥なるかし

聲一欲レ見二其鳥形一〔〇尋而出海中いか本アリ〕なる鳥にや、いまだ考へず

かやくことり　秘藏抄に豆鵤（マメマハシ）なりといへり

かゝなく鳥　万葉巻〔〇十四〕「つくばねにかゝなくわしのねをのみか啼渡なんあふとはなしに」或云、鳥の餌など食とき異鳥にうばはれじとて鳴やうの聲をかゞなくといふと。順抄に鵄の字をかゝなくと註したり

かまのほなわ　或云、蒲にてしたる縄なり、穂にてないたるにはあらず、俊頼の歌に「むやひさすかまのほなはのたえばこそ蜑の友舟ひきも分らめ」

かまつかのはな　清記に、かまつかの花らうたげなり、名ぞうたてげなる。抄に、雁のくるはななどもじにはかきたると書たれば、雁來紅といふ物也とあり、されば今の俗に云葉鷄頭にして、卽五色莧の屬なり、さて雁來紅ともいへばカマツカは雁待の義なるにやといへり。槃おもふに、順抄に鯅をカマツカと註したり、この草の花のかたち、この魚の形などによしあるかも、後にたづねむ、東涯が輶軒小錄に、播磨にて月草をカマツカといふとあり、游清また云、伊豫吉田領にてもかくいふといへり、區々の名義いづれか是ならん

ばしさる狀を示(ミ)せて誑(タブラカ)せしなり後に八尺の白蛤と化りて在けるを六雁命膾に作て奉りし之

かはぞひやなぎ　源氏椎が本の巻にみえたり、六帖に貫之として「いなむしろ川ぞひ柳水ゆけばおきふしすれどそのねたへせず」この歌は顯宗天皇の御歌を載たり

かけふちのこま　堀太仲實の歌に「逢坂の關の木の間を引なるはこや望月のかけふちの駒」或云、かけふちは鹿毛斑なるべし　〔○一行餘白〕

かたかしぎのいひ　順抄に、饔饋を註したり、これは半熟飯な。　〔○以八行及次頁白丁〕

幾行

き　順抄に、葱を紀と註したり、葱は臭(キ)のいとしもつよきものなればいへるなるべし。仁賢紀に、秋葱(キ)之轉雙納とよみたり、海人藻芥に、禁中にて葱を空穂草と言といへり、職人盡哥合にも見えたり、婦人の(ヒトモジ)といへるも紀(キ)の一字名なれば也

○酒をいふは氣のつよきものなれば也、氣臭も同訓なり、キはクシの反也、久老が區志考に詳也、くしの條に略載したり

○樹も木も同訓也、いにしへは草をもいへるゝ、そのしるしは芒(ススキ)蓬(ヨモギ)夏枯草(ウルキ)荻

校云、康熙字典ニ引ケルハ蘸トアリ

ヲギ芽子ハギ商陸イヲスキ蘭アラヽギ黄芩ヒラキ款冬ヤマフヽキ菊カハラヨモギ甘草アマキなどの等シナ也といへり。漢土のいにしへにも、草木互に通用せし事あり。荀子云、西方有木曰射干焉、楚辭云、游二蘭與蓮林一、陸士衡詩にまた云、結風仲二蘭林一、これ射干蓮蘭皆草なり、而之を木といひ林といふ、又五行に有木無草則草之を木といふとしるべし、升菴丹鉛に青史子を引て云、古禮男子生而射天地四方東方之弧以梧梧者東方之草春木也云々、洪範既言庶草蕃蕪而木に不レ及、則木亦之を草といふべし。論衡云、毒之渥者在草則巴豆冶葛、按にいにしへより巴豆に草本なし、皆木なり、是草木いにしへ互に通用す　○樹と木と和訓はおなじけれど說文に樹生植之總名とありて、枯槁のものを樹といふとなし、木は生枯の通名と

○順抄木具に、根株、訓上爾、下は久比世○蘖、和名比古波衣○枝條、衣太○莖、久木○葉、波、注に、萬葉集、黄葉、紅葉、讀皆毛美知波○樹梢、古須惠○樾、古無良○杈枒、末多布里○樸、古波太○樺、加仁波○榮而不實謂之英、阿太婆奈○葩、波奈比良○蕚、波奈布佐○蘂、之倍○茼、布之、從草者草木節見玉篇○心、奈賀古○

きみ　記に、阿波、岐美とあるはけだし黍稷の總名なり。キミは黄實の義也。順抄に、丹黍を

稜威道別五ノ十三、ウ、菊も古くにク、と云しにや、和名抄肥後菊地ク、チとあり、菊花の形の括りたるさまよりいふか

淡云、覺ハ寶ノ誤

阿賀木々美、秬黍を久呂木々美、秫を木美乃毛智と注したり

きく　往に或人問、貝原翁大和本草に、菊和名にカハラヨモギと訓ず、但それは野菊なるべし、上代にはいまだ中夏よりわたらず、故に万葉には既に詠せず、また或は藥に用ひしは白菊をよしといへり。此等の說いかゞ、予卽答て云、類聚國史巻三十一行幸下 大同二年平城 九月丁酉朔乙巳廿日、幸神泉園、琴歌間奏、四位已上、共挿菊花、于時皇太子弟嵯峨頌歌曰、美耶比度乃、曾能可邇米豆留、布智波賀麻、岐美乃於保母乃、多乎利太流祁布。上平城 和之曰、袁瑠比度能、己々呂乃麻眞丹、布智波賀麻、宇倍伊呂布賀久、尓保比多理介利。群臣倶稱万歲云云、是菊花宴のはじめなるべし。又類聚國史巻七十五 延曆十六年癸亥十一日 曲宴、酒醋 皇帝桓武天皇 歌曰、この比のしぐれの雨に菊の花ちりぞしぬべきあたらその香を、此御製は菊をよめるはじめならん或は續古今集に、聖武天皇の御歌とて載たるは疑べし、正史にみる所なし これより經國集に嵯峨天皇、重陽菊花の賦あり、古今集秋下 寛平御時きくの花をよませ給ふとあり、すがはらの朝臣「秋風の吹上にたてる白菊は花かあらぬか波のよするか」過し年亡友三島自覺許より、紀の吹上の濱の種なりとて、白菊のみふさ四房いさにほひやかに咲たるを一株贈たる事あり、これげにもいにしへの種のたえなくおの

づからおふるものにしあれば、今寛平を距ると既に一千年にちかく、更にめでたきたねなりけん、他の國より傳えしものともおもはれずなん（寛平は唐の昭宗の代にあたる） 按に宋の劉蒙が菊譜に、新羅、一名玉梅、一名倭菊、千葉純白、長短相次、とあり。異稱日本傳に、松下見林云、新羅は百濟新羅の新羅にあらずシラの音にて、白の字の國訓なり（此說源君美東雅菊の注にもみえたり） さればこの新羅菊はいにしへ我より彼に傳へしものなりけん、また夫木集（卷十四） 家集中宮御歌合、翫菊といふことを、權大納言長家卿「雲のうへに菊ほりうゑてかひの國つるの郡をうつしてぞみる」此の歌の注に云、風土記に甲斐國鶴郡有菊花、流水洗菊飲其水人壽如鶴云云（順抄卷六國郡部に甲斐國は管四、都留郡とあり） 丹波嗣長遐年要鈔に、我朝甲州鶴郡多菊云云是亦甲斐の山路にも元おのづからおひいでしなるべし。

順抄、四聲字苑を引て、菊、舉竹反、また本草の注を引て、菊有白菊紫菊黃菊、和名加波良與毛木、一云可波良於波岐、俗云、本音之重（舉竹反キユク、キユ反ク、キユクク、となれば本音の重とはこれをいふ）にや、猶考べし。書紀に菊理媛をク、リヒメ、順抄に菊地をククチと注したり、肥后郡名之。（また、拾芥抄に、菊地姓也ク、チとよみたり、また抄に上總國郡名菊麻ク、マとよみたり） これ菊本草の注文を受て和名カハラヨモギ、カハラオハギとも注したれば、絕て野菊ともおもはれず、篤信の說われは信じがたし（藏器拾遺に野菊名苦薏、時珍釋名に、蓮心を薏といふ、野菊また苦し、故に苦薏といふといへり。おもふに菊原音居六反喉頭キユク、吳音キヨク、苦薏字は是其原音ならん）

歟さて和名の例を考るに、其種おのづからわれにありて、其名もおのづからわれにあるは、卽其名を注す。他の國より來りて、我に其名のなきはおほく其氣味効用を訓、また或は其字の和音漢音或は梵語等を屈伸して注する也。この菊の原音キユクを、和の淸音キクと呼しも屈伸てし例也。さて又わが國にてはやく白菊を詠じけるが、漢土にては月令に九月鞠有黃花とあれば、はやく黃色をめでしなるべし、吾に醫にありても卽黃菊を用ひし也。其氣味は甘苦寒を要とす、其主治する所は制火除熱養目而去翳膜ものと、服食には多く白菊を用ひし事、宋の蘇頌圖經（證類本草に引）及同時吳仁傑離騷草木疏等の書にみえたり。また本草綱目の附方中にも載たり。我國の服食は卽黃色の甘菊なり、予のみる所は如斯、さて後には翁草ともいへり、夫木集に、枯野を顯昭「殘りゐて霜をいたゝく翁草冬の野守となりやしぬらん」また若菜を安嘉門院「春きてはみな若菜にぞなりにける雪いたゞきし翁草まで」是らみな菊をさせるにて、菊は他草におくれて、霜のいたくふりぬるにもをさ〱けおされず咲榮ゆるが、白き花のうへに、霜の置ぬるさまは白頭の翁に似たれば、うちみるまゝにやがてかくは名をおほせたるなるべし。藏玉集に、松の異名を翁草となして、其注に、すみよしの遠里に五位

キサは牙骨中の細文理をいふにや、船に象をのせて其重さを計るとて船に

の松といふ松あり、彼松としふりて翁と現じて住けり、常に心をすまして、琴をしらべけり、秋は菊を愛し、おほくうゑけり、彼翁の歌「吾庭は岸の松かげしかぞすむ翁が草の花もさかなん」こゝによりて菊をも翁草と申也、とかゝれしはいふかし、是よりして菊を翁草といふにはあらで、菊を翁草といふ故事の有に付て、此物語は設つくりしなるべし。かゝる事は此間のみならず、他し國にも多き事也

きさ　順抄に、樣を註したり。木の文理をいふ也。奏文を入る箱をこの木にて作るといへり

○蚶をよみたるは順抄に見えたり、其文あるをもていふといへり

○象をよみたるも順抄にみえたり、されば其文をいへり

○𧏛貝をよみたるは記に見えたり、𧏛、字書にみることなし。宣長云、𧏛は蚶を𧏛と書るを誤れる物也といへり

きじ　神代紀に無名雉女をナヽシキジメとよみたり、キジはキヾスの約也、キス反シなればなり

きはだ　字鏡に黄蘗を注したり、黄膚の義にや

尾段をきざみけるをいふは信じかたし

記に可遣雉名鳴女云々雉をきじと訓じたり

きわた　木綿をいへり、類聚國史延暦十八年の條に、天竺人のもたらしたる綿種を諸國へ植させ給ふよし、その綿花を世に傳ふるなるべし。新六帖に「しきしまのやまとにあらぬ韓人のうゑてしわたのたねはたえにき」とよみたれば、ひとたびはまた絶たるとしるへし、わたの條にくはしくしるす

きさゝ　順抄に蟣を注したり

きゞし　記に岐藝斯と書たり。万葉巻三に、淺野之雉(キヾシ)、巻十に、春雉(キヾシ)、また巻十九に、鴙鳴(キヾシハト)響(ヨム)、皆キヾシとよみたり、春日應驗記に、春の狩の圖を為がきて鷹の餌畚(エフ)にキヾシの尾羽をさしいれたり、按にこは仁德の御代の故事なるべし、ぐちの條にしるし、雉を改て野雉といへるは漢の呂后諱を避といへどさにはあらず、唐宋に盛なり、漢の時には斷てあるとなし

きつね　狐をいへり、万葉にも、伊勢物語にもきつとよみたり

きたひ　字鏡、順抄、式并に腊を注したり、乾肉(ホシシ)をいふ之

きうり　順抄に陸機瓜賦を引て云、黄瓤、注に和名木宇利、また陸詞切韻を引て云、瓤黄瓜也、キウリは臭瓜の義之とも、黄瓜の義之ともいへり、これ即嘉祐本草の胡瓜なり

圏百首異見五ノ三十二丁、說アリ合可考

きはちす　順抄に蕣を注したり、蕣は木槿也、その花蓮花に似たればいへり、後に木芙蓉をもキバチスといひければ、今はその字音を呼てフヨウといへり

きくらげ　木耳をいへり、木水母の義也、順抄に、萸を木乃美々と注したるは、卽木耳の訓なり

きゐんは　順抄に、胡黎を注したり、黃色のトンボウ也

きすかひ　疵貝なり、夫木集に「與謝の海のしほひのかたのまさごぢに行ばきすがひありといふなり」　〔○以下二行及次頁白丁〕

きり〴〵す　順抄に蟋蟀を註したり、淸記に、あるかなきかに聞つけたるきり〴〵すのこゑといへるは、九月晦日十月の詞なり。また新古今集後京極攝政、きり〴〵すなくや霜夜のとよみたるも、順抄によりて蟋蟀をいふなり。眞淵云、万葉によるに、蟋蟀はコホロギを訓ずべきなり、彼順ぬし万葉を訓し時、誤てキリ〴〵スと訓しにや云云今槃万葉によりて蟋蟀をコホロギとなす、さればキリ〴〵スは蜻蛚なるべし。さて蜻蛚は淸洌也、蟋蟀は窸窣にして其鳴聲の淸濁屈伸を云なるべし、促織といふも卽機織の意の急なるによせて名づくるなるべし。

こゝにキリ〴〵スといふは頻々の義にして、スはシとおなじく助詞なりといへり。ハタオリメといふも促織を機女によせていへり、コホロギは轟また響などの義なるべしといへり。順抄に、此三名は段をことにし同に三條に分つ、按に、易通卦驗云、立秋蜻蛚鳴白露下、蜻蛚上堂、豳風に十月蟋蟀入我牀下とあるは蜻蛚をいふに似たり、爾雅釋蟲、蟋蟀蛬、音推郭景純注云、今促織也、亦名青蛚、陸璣云、蟋蟀似蝗而小、正黑有光澤如漆、有角翅。これ蟋蟀促織青蛚は正一物なり。凡むかし(ママ)は露けき秋にこそさやかに鳴なれば此一種いと聲の清冽なれば蜻蛚と名づけたるなるべし。こゝにキリ〴〵スといふも、其聲のあやといろとによりたる詞之。促織は蓋し秋冬の交に鳴なれば、機織の音のせはしげによせて名づけ、こゝにハタオリメといふも、其義によりて之。六帖に「秋くればはたおるむしのあるなべにからにしきにもみゆるのべ哉」また「かりがねの羽風をさむみはたおりめくだまく聲のきり〳〵となく」これも秋の末のさまなりけり。蟋蟀は霜におころふる聲のそこはかなれば、窸窣の聲の義をとり、こゝにコホロギといふもかすかにトヾロキヒヾク義なるべし。この虫秋より冬にいたりても其形をおなじ、松虫鈴虫などに似て色は玄黑にして、三尾あるものは雌也、二尾のものは雄なり、そ

補

の鳴や雄は股間よりいだせり、明の林兆珂が詩經多識篇によくこれを辨じたり、今の俗にキリ〴〵スといふは螽則なり、ハタオリムシは螽蟖なり、コホロギは竈馬なり、これは卽三名三物なり、これ古今名物在にとなるとかくのごとし

木こりむし　新六帖、衣笠内大臣「いかなりし世々のむくひぞ木こりむしみにおふほどの宿のはかなさ」何虫にや

きちかうのはな　古今集物名に桔梗をよみたり、清記には草の花にきゝやうと書たり

久行

くさ　順抄に孫愐切韻を引て云、草百卉摠名也。注に和名久佐

○草木名稱、荄、和名禰○萠芽、毛延○甲拆、二葉(フタバ)○葉、波○托葉、俗名字計波（蔕より出て花房をうくる葉なり）○莖、久岐○線楞、俗云莖(クキ)乃須知○特生、太知於比○叢生、無良太知○搨生、波比於比○蔓生、都流於比○枝條、和名延陀（木の柯幹もおなじ、また延ともよみたり）○苆、布之（草には艸に從て莭に作るを正とす）○心穰、奈加古、俗云、加良○蓓蕾、都保美○花華、波奈○蕚、花房(ハナフサ)○葩、花辨、花枚(ハナヒラ)○蕊、之倍○單辨、花乃(ハナ)一重○重

辨、八重○筒辨、俗云筒佐紀○甍、保曾、俗云反曾○蔕、俗云反太○莢角莿、和名佐夜○子實、美○人仁腎、佐禰○犀瓜辨、瓜乃佐禰○芋魁、俗云芋乃加之良 小なるを芋卵といふ ○珠根、珠数根 草に珠数根の木あり

○和漢ともにいにしへ草木通用の事は既にきの條にしるしたり　〔○以下五行餘白〕

久行

くは　神代紀に桑をよみたり、万葉卷七に、其業桑ともよみたり、クハは喰葉の義なりといへり、蠶に喰しむるものなれば、蠶葉の義にやともおもひつ、紀に金をコガネともクガネともよみたればコとクはおなじ、さて桑は四木の一にして世に益あるもの 四木とは桑楮榛茶をいふ 故に持統の御宇に初めて桑紵をうゑさせ給ふとあり、國郡に桑原てふ名を置給へるは、おほく此御時なるべし。凡桑に二種あり、眞桑と云は葉まとかにして厚く液おほし、蠶婦これにて養り。山桑といふは、おのづから山野に生るものなり、葉薄く液少し、柘もまたヤマグハといへれど、こゝにいふ山桑とは別也。上野國にては四の品あり、つねに云桑は卽眞桑なり、タテクハといふは葉に花叉あり、シマクハといふは葉のかたち眞桑に似て厚く、花はあれど實なし、メクハ

大和國吉野郡國栖てふ所にてつくりいだせしにて國栖また國樔などにもつくれり

こいふは幹大にして葉は眞桑より稍長く又花ありてみなし、今は此種をおほく蠶の養料(カヒモノ)こすこいへり

くす　神代紀に櫲樟をよみたり、繼體紀に樟をよみたり、字鏡に樟枏楠皆久須乃木こ注したり、今は樟こ楠こはおのづから別え　本草の書にも兩條に分ちて、液ありて腦を凝(コウ)すを樟こいひ、液なくて材に當るを楠こいふなり。今我薩摩にては樟をクスこいひ、楠をクスノキこいふなり、これいにしへこおなじ

くず　順抄に葛を注したり、万葉おなじ、卷七に、眞葛延こもよみたり、さて葛粉をもクスこいへるは、其はじめ大和國吉野郡の國栖(クス)てふ所にてつくりいだせしにて、其地(トコロ)の名を呼こいふこいへり　よしの川のわたりにてクスといへる魚あり、香魚の小なるをいふといへり、謠曲の葛の曲中にもみえたり

くゝ　紀に菊理(クヽリ)媛(ヒメ)神、また菊地(クヽチ)郡、皆クヽこよみたり、きくてふ草のこゝになりいでしとはきくの條をみつべし

くゞ　順抄に莎草を注したり、いにしへいふクヽツはこの草の莖にて編こいへり、クヽは莖なり、莖の字クヽタチこもよめり、又藁をもいへり、万葉卷三に久具都持(クグツモチ)こよみたり、久老云、

袖中抄に、くゝつこは蕢にて袋のやうにあみたるものなりこいひ、藻塩草に、海人のもくずなどいるゝものなりこあり。万葉に角兄麻呂の歌に、みつの海女のくゝつもちたまもかるらんとよみたり 世にくゞつめこいふもあり、古本空穂物語國ゆづり條に、中納言は、きぬのあやを、糸のくゞつに入て、供養のやうにて、三所ばかり奉り給ふ、こみえたり。さればくゞつてふ物は、服器の名にして、莎てふ草のみにつくれるにもあらず、たゞおほへの草にてつくれゝばくさの名にしおひたらめ、今のク｜、｜繩なども、あるは藺(ヰ)草もてつくれるゝ、また按に、今のク｜、といへるものは藺より堅靭にして海の淺渚に作れるものゝ、莎草とはげに異なり

〔玉かつま六之巻云、豐后國人かたりけるは、ふぐしといふ物今我國にありて用るゝくゞつもあり、くゞといふ繩してくゝりて小道具など入るゝ物と語りき〕

ぐち　韓語抄に鷹をいへり、仁德四十三年紀に、百濟俗號二此鳥一曰二倶知一、是今時鷹也 又云、是秋九月庚子、幸二百舌(モツ)鳥野一而遊獵、時雌雉多起、乃放レ鷹令レ捕、忽獲二數十雉一、是月甫定二鷹甘部一、云云 春日應驗記の春の鷹獵の圖に、餌春の内に雉の尾羽を三翅捕入たり、是百舌鳥野の故事なるべし、堀河後百首、俊成「紫野みかりはゆゝしましろなるぐちのはがひに雪ちりぼひて」

くち　順抄に鮑を註したり、また仁倍とも註したり

くり　順抄に栗を註したり、稜角をいふとぞ、三稜草をミクリと訓するが如し、記に美都具理

とみえたり、式に搗栗子、扁栗子、煠栗子、削栗子等の目あり、類聚雜要に搔栗あり、新猿樂記に、阿波栗今倚出せり、庭訓往來に、宰府栗あり、常陸國下野國越後國に三度栗ありシハクリともいへり、栗莰はシブカハなり、栗刺はイガなり、球彙ともいへり、栗楔は杓子クリ也、式に皀綵を久里乃伊登とよみたり、俗にいふクリイロなり、持統紀に、皀衣をクリゾメとよみたり、神功紀に栗林をクルスとよみたり

くひ　順抄に蝓蠑を注したり、牛馬皮中の虫なりといへり

くま　紀に熊をよみたり、神代紀に天熊、万葉巻十一に、荒熊とよみたり。太古の俗に、神を畏みてカミと云、また轉じてクマといふは、熊の猛き奇きをいふといへり。また愛瀰詩らが神をカムヒといひ、獐に似たる猛獸をリケンカムヒといふも、古の詞の愛瀰詩に殘りたるなり。韓語にはコマといふよし、今は卽クマといふといへり。凡物名にクマといへるは强大恐懼の義ゝ、クマ蜂、クマ蟻、クマ蟬、クマ稲の類なりといへり

くも　順抄に蜘蛛を注したり、喜母の轉音ゝといへるは誤なり、さゝがにの條みつべし、また抄に、蠨蛸を阿之太加の久毛と注し、蠅虎を波倍度里と注したり。また俗に草蜘蛛をサ、ク

モといひ、絡新婦をハナクモといひ、螲蟷ツチクモといひ、壁錢をヒラクモといへり、記にいふ土蜘を王化に從ざる強賊の氏之

くき　式に豉をよみたり、莖をいふは、くゝみの義クミ反キなりといへり

くゐ　式に久恵鱅あり、この魚いまだ考えず

くみ　式に諸生又久美とあり、蓋し胡頽子なり

くし　久老が酒の古名區志考あり、其略に云、日本紀神功卷歌云、虚能彌企破和餓瀰企那羅儒區志能伽瀰等虚豫珥伊麻輸伊破多々須周玖那彌伽未能畧摩菟利虚辭彌企曾云々その意は日本紀の歌解槻の落葉にいふを見つべしそもく丶此歌の區志の神と申ける言は、藥の神をいふ意にやと思ひて、年月にかにかくに思ひめぐらすに、やうやく思ひ得る事のあれば、そのをちく丶を左に擧て試にいふにこそ」藥といふ稱はもと奇しき意をぞ體言にしてくすりとはいふなるべし。さて久須里は上古もはら酒をいひしならん、さるは古事記應神の大御歌に、須々許理賀加美斯美岐尓日本紀神代上、一書云、素戔嗚尊乃敎之曰、汝可以衆菓釀酒八甕和礼恵比邇祁俚、この許登那具志恵具志は言和藥咲藥といふ言にて、卽須々許理が釀し酒をいふ之久須利の須利を約めて、久斯といふ、またその久須を約めて紀といふさて大汝少彦名二柱神の氏

酒を造初め給ひてしより藥神と申奉り、藥の神と申奉るより療病方を定むとは（神代紀に見えたり）舊辭にかたり傳へしなるべし、漢土の言に酒は百藥の長といへる言のあるをも思ひ合してよ」

この下あまたの條々に攷證を擧たれどいと／＼しげゝればこゝに省きけるなり、卷尾に云、

區須利はもと酒の名、その區須利を約て、區志といひ、また區志を約めて紀といひ、その紀を轉じてはかとも神ともいへるを知りて、區志は酒の古名なるを明むべし

〔○以下四行余白〕

くわゐ　順抄に烏芋を註したり、この菜の葉は藺草に似て、その根は水慈菇のごとし、さて烏芋の根のいろ黑ければ、これにむかへて慈菇をシロクワヰといひつれど、後には慈菇の世におほくなりて、烏芋を用ふるの乏しければ、遂に慈菇を専らにクワヰといひて、烏芋をクロクワヰとはいへり。さて慈菇の葉の形の鏵形に似たれば鏵藺などゝ解たるは、昔をわすれたる臆說なり

くゞつ　すでにくゞの條にしるしたり、万葉卷三に、塩干乃三津之海女乃久具都持玉藻將苅率行見とよみたり

くすり　藥をいへり、くしの條をみつべし、字鏡には、藥を豆知波利と注したり、此義いまだしらず

くたに　藻塩草に苦膽をよみたり、龍膽草なりといへり、苦如レ膽、此說いかゞ、古今集打聞にクタニは木丹の略にて木丹は梔子花なりといへり、眞淵の歌に「くたに咲そのふの木々のわかみどり夏このましき宿にも有哉」又或は木蝋なりといへど非レ之

くぬぎ　記に歷木をよみたり、順抄に、釣樟を注したり、また擧樹をも注したり、景行紀に、天皇幸筑紫之肥後國有僵樹九百七十丈、皆人蹈其樹而行、天皇其樹名曰歷木也、因其地號御木國、故謂之國木云、あるひは國木を二合して櫪木に作れり、歷木は即櫪也、順抄に擧樹、私記云、歷木、注に和名久沼木

くるみ　胡桃をいへり、呉實（クレ）また黑實（クロ）の義なり。貫之家集に「うぐひすに花しられげはなけれども春くるみちのものにぞ有ける」新六帖に「夏山のすそ野に茂るくるみばらくるみいとふな行て逢らん」式に姫胡桃子あり、また多く呉桃子に作りたり

くれき　榑木也、ひくれの條をみつべし

（ヌケ）

栗ナヨシの條ムカヘミルベシ

くぼて　式に葉椀また窪杯をよみたり、空穗物語に「ねぎども聞ずなりにし笠間には神のおほかるくぼてとけとぞ」相模集に、神山のかしはのくぼてともよみたり。万葉に、旅尓之有者椎之葉に盛とよみたるも、卽葉椀なり。かしはの條むかへ見つべし

くちば　朽葉なり、寶物集に「くれなゐの戀のなみだのいかなればはてはくちばとなるぞかなしき」

くちき　記に梅をよみたり、呆を二字によみたるなるべし、梅古字楳に作れるを、略きて某と書たるを、誤て呆に作るにや、また朽木をいへり、今の俗にクツキともいへり

くらげ　記に久羅下那洲多陀用弊流（クラゲナスタヾヨヘル）と見えたり。我國開闢を水母の水上にたゞよへるにたとへて書たるゝ。物名を國史に出せるは是を專一とす、式に水母をよみたり。順抄に、崔氏引て、海月、一名水母、文選に水母目蝦とあれば水母に目なしこいへるは暗きの義なりといへり、本草拾遺に海蛇とみえたり、ミツクラゲ、ミノクラゲなどあり、この二種は食料となさず

くちめ　神代紀に口女卽鯔魚なるべし、今云スバシリなり

くぢら　記紀順抄に鯨をよみたり、いさなの條むかへ見るべし、神代紀の歌に、區陀羅佐夜（サヤ）

離ごよみたり

くはこ　万葉巻十三に、桑子尓毛成益物乎、蚕子をいふ之、かひこ、またうつゆふの條をむかへみつべし

くゞひ　催馬樂、字鏡、順抄幷に鵠をよみたり、垂仁紀に鳴鵠をクヾヒごよみたり、夫木集、資隆「くれかゝる沼のねぬなはふみしだき刈田のくゞゐ霜拂らし」また家隆家集に「ながき夜に沼のねぬなはふみしだきくゝひゐ(ママ)雁かね霜拂なり」二首ともにクヾヰと書たるはたがへり。さて鵠をクヾヒごよみたるは借字也、鵠は今いふ白鳥なり、クヾヒは式にオホトリ、順抄に古不、文德實録に古不天宇、字鏡に古比と注したるものにして鸛なり

くひな　鳥にも蟲にもいへり、順抄崔氏を引て云、蠹鳥、貌似水鷄能食蠹故以名之、注に和名久比奈、漢語抄に、水雞、さればクヒナは食蠹の義にや、また食魚の義にや、皇極紀にも水雉、此云倶比那ご注したり。韻府群玉曰、庸渠似鳧灰色、雞脚、一名草渠、卽今水雞、庸渠卽西山經所謂鵃渠也、杜少陵が詩に水鷄啣魚來去飛、この詩によりても全く食魚の義なり、是卽秧雞なり。水蛙をいへるは圖經に云、俗云、石鴨所謂蛤子（俗に蛙を蛤と云）卽水雞是也、蛤子水中にあり

てかしがましく鳴ものなれば、農人其聲の大小早晩を占て豐歉を卜といへり。唐の章孝標の詩に、田家無五行水旱卜蛙聲とあり、その聲羽族の水雞に似たれば同名を呼けり、故にいにしへより惑へる人おほし、我國にていふ水鷄は、まさに鼃鳥なるべし、源氏明石の巻に「まだよひに打きてたゝくくひなかな誰が門さしていれぬなるらん」また身をつくしの巻に「くひなだにおどろかさずばいかにしてあれたる宿に月をいれまし」また「おしなべてたゝくくひなにおどろかばうはの空なる月もこそ入れ」六帖に「くひなだにたゝけばあくる夏の夜をこゝろ短き人や歸りし」

くろき　万葉巻四に、黑木取とよみたり、また式に黑酒あり、万葉などにも黑酒白酒をよみたり、酒をキといふはクシの條見つべし

くしか　字鏡に麐を注したり、順抄おなじ。斯方に本おのづから産することをしらず、往に中山侯備前守予に仰せて云、むかし黄門光國公卿朝鮮より麐をえたり、鹿に似て小、雄に有牙無角、方言ノロ、之を常陸國山中に放たしむ、今現に漸蕃息し、獵人時に或は誤て射捕をみるに小單角二枚を生ず、或は一角のものあり、其腦骨に雙角を生るものを予に賜はる、おもふに

是蓋し鹿に交りて角を生るか、諸本草に角ある説なし、下野國方言ソロボメといふもの全くこれと相同じ、ソロは蓋ノロの轉なるべし、按に出羽國鳥山方言に、一角のものをヒトツボウ是一角坊の義なるべし、二角のもの秩父方言ショロ、是は麞の轉訛なるべし、また近時蝦夷地方にリコンカムイと呼ものあり、其狀鹿に似て小、雄に有牙無角、これ卽麞なり、天地の潤耳目の隘後世に至り名物漸顯、近時人あり、一角のものを麟となせり、是蕃夷の説か、又或は馬歡瀛海勝覽の説によりて云、吾豈何ぞこれを取む、韓昌黎云、麟之所以爲麟者以德不以形

〔○以下六行餘白〕

くましね　順抄に粡米を注したり

くさひら　順抄に菜蔬を註したり、今蕈をいふは誤なり

くゝたち　順抄に薹を註したり、菜の莖の立たるなり、万葉にも、かみつけのふるのくゝたちをりはやし、とよみたり

くれなゐ　紅藍花をよみたり、クレナヰとカラアヰを一物にあらぬ事、既にからあゐの條にしるしたり。万葉卷五、くれなゐのあかもすそひき、また卷九、紅の玉もすそひき、又卷七、紀

七、我衣服色染トアリ

のころも染まくとよみ、猶數首あり、さてまた式に韓紅花綾(カラクレナヰ)と書たり、また業平の歌にからくれなゐとよみたり、カラは韓なり、クレは呉なり、いにしへに韓呉とかさねたる詞なし、眞淵もはやく呉は韓てふことなるを、その上に更にからといふは僞語なりけりといへり

くまのゐ　常には熊の膽をいへり、字鏡、順抄并に人參を註したり、その効のしるしあること熊膽の如なればいふにや、また別義なるにや。さて味の苦きをいふといへるはいたく僻事ぞ、苦き人參は俗にいふ竹節人參にして、こは寛永のはじめ・廣東のうち湖州といふ所の人何欽吉といふもの、日向國に投化して、はじめてわが國の人參を見いだしたり、尙詳に予が人參譜にしるしたり、されば寛平延喜の比にありともおぼへず、かのにけぐさの條をむかへみるべし

くちなし　式に支子を注したり、字鏡おなじ、卽巵子、後に梔子に作れり。こへどこたへぬくちなしとよみたるも、この花なるべし、實に開裂なければ、口無の義にや。續古今集に「おもふともこふともいはじくちなしのいろに衣をそめてこそきめ」またこの比の人の歌に「こころしげきうき世の人にみよとかも咲いでぬらんくちなしの花」

くまがし　記の雄略の段の歌に、波毗呂久麻加斯とよみたり、かしの條むかへみつべし

くだもの　順抄に菓を注したり、木種物の義なりといへり。紀にも木種とよみたり、また抄に古乃美とも註したり。應劭云、木實曰レ果、草實曰レ蓏

くすのき　字鏡に樟枏楠皆同訓なり、くすの條をむかへみつべし

くれたけ　順抄に篁を注したり、歌に吳竹とよめるは、むかし吳國より來れりとて、今禁省にて葉細くつねの竹にかはれりと士清いへり

くちなは　順抄に蛇を注したり、記には蛇をヘミとよみたり、また抄に蚖蛇を加良須倍三、蚺蛇は仁之木倍美、式おなじ。また蟒蛇を夜萬加々智、記にいふ赤加賀智は酸醬にして、蛇の眼のそれに似たるといひしを、竟にこれをわすれて、蛇の稱カヾチといへり。また抄に、蝮を波美と注したり、即反鼻の字音之、今は眞蟲といへり。さて又俗にいふカラスヘビは風梢蛇也、日光山にいふノヅチは千歳蝮也、俗にいふヤクヾリは屋潜の義之、これは黃頷蛇也、又いふ、麥稈ヘビは金蛇也、又いふシロヘビは銀蛇なり、又いふミヅヘビは水蛇なり、琉球にいふハブは地扁蛇なり、抄に蛇蛻を倍美乃毛奴介と注したり。輟耕錄に載たる骨咄犀は蛇角也といへり、

伊豫國クロトリは蛙鳥にしてこの一行は刪べし

校云髟クタスとあり

嶺南雜記に載たる吸毒石は蛇頭中の石なりといへり。淸の陳鼎九が蛇譜に、六十餘種を載たり。我に於て詳ならざるもおほし

くろだひ　順抄に、食經を引て、杉魚を注したり、卽烏頰魚なり

くろとり　順抄に鴲を注したり、鴲、化后反又唐韻を引て云、黑色水鳥也、紀に黑鳥とみえたり、また万葉にもよみたり、東鑑に海の黑鳥といへるもこれなるべし「伊豫國にクロトリこいへるものあり、かやくきの條みるべし」土佐日記にいへるもこれなるにや

くたかけ　平春海ありし時に云、いせ物語にのみ、くたかけのまだきに鳴てこよみたるは、小夜中とおもへるに、鷄のにくゝもはやく啼たるをうれたくおもひて、彼を罵(ノル)こゝろにてやクタとはいへるかとおもへど、罵とをかくいへる例しなければ強てもいひがたしこ云々　槃今その詞を尋るに、新撰字鏡に髟、下退良賤良クタとよみたり、また或は腐をクタス、また瘵腐髮ヂクタレガミ、胡粉クタス、人をいひ下(クタ)す、摧伏(クタキフス)などいへるクタこおなじかるべし。また疲勞なども同意歟、紀には碎をクタ〱シこよみたり、いづれもあしざまにいやしむる詞ゝ、俗語にクタヲマクも碎の字の意にて、つまらぬ事をいく度も〱いひかへすゆゑにクタ〱シも同語

よのはた明なんとせし比にとりのいく聲も〱つゞけ鳴をみだれ鳴と云これらをもくた〱しと云べし

くれのおも順抄に懐香を注したり令の集

なるべし。またクドシこいふも同じ、これクタカケのクタも罵義にあらずこも、必ずあしざまにいやしむるの義なるべし。またおもふに、頑鷄の義にや、頑もクダクダシキの義ゝ。按にクタレはクナタブレの約にて、人を罵いやしむる言ならん、クタカケはクタレカケなるべし、是宣長が歴朝詔解の注にありこ覺えたり。又按に、續紀卷三十、悪逆在奴久奈多夫礼麻度比云云こゝに云クナタブレも頑の義なるべし

くろこま　驪をよみたり、雄略紀に甲斐の黒駒とよみたり、万葉卷七にも、黒駒をよみたり、聖武紀に黒毛馬ともよみ、後紀に黒馬とも書たり

くろかげ　順抄に漢語抄を引て、烏騮を黒鹿毛こ注したり

くろかひ　舊事紀に黒貝あり、いがひの條に詳にしるしたり　〔○以下七行幷ニ次頁餘白〕

くにつもの　紀に土毛をよみたり、注に方士所生之物、また國信物、方物もおなじ訓なり

くれのおも　順抄に輿渠を註したり、また蘹香をも註したり、令集解に、蘹母とみえたり、また古今物名にも貫之のくれのおもを詠たる歌あり、こは皆類をもて名づけたるにや、今詳ならず。輿渠は阿魏なり、蘹香は舶蘹香にして、いにしへよりわが國にあるとをしらず

解に呉毋とあるは、興渠之、輔仁和名に蕭薬一名阿魏〈出波〉〈釋門〉方一名興渠〈出拾遺〉和會良之、按に普潤大師飜譯名義集卷三什物篇云、興渠今阿魏是、なりきた蒼頡篇引云、此葷辛菜也、云古

くまつゞら　順抄に馬鞭草を注したり

くるへきな　輔仁和名に撲奈〈所出未詳〉和名久留倍岐奈。按に順抄〈本文十四蚕絲具部に〉反轉、註に久流閉枳、また〈本文巻八國郡部〉安藝國高宮郡、訓寛、註に久留倍木。清記にくるべき物、空穗物語に車の輪の如く見くるべかしてとあり。是ら皆反轉のことなり、反轉は摩翻と同義、摩翻は唐音蒙汗と羽音蒙汗は毒菜也。さて撲奈こゝにクルベキナと註せしは即可レ狂菜の義之。且撲はタヲス、タヲルなど、訓る之。奈は卽菜と同訓之。是まさに毒草なるべし。かゝる毒草は麻苗刺茄〈一名曼陀羅花也〉及釣吻射罔の屬なるべし、さて又撲奈は漢呼ともおもはれず、式に僕奈とあるは、撲奈の誤ならん

くさのかう　六帖に伊勢「くさのかういろかはりぬるしら露は心おきてもおもふべき哉」

くもみぐさ　莫傳抄にあふちなりといへり

くもりぐさ　藏玉集に松なりといへり

くそかづら　順抄に細子草を注したり、万葉巻十六に、皂莢〈この莢は莢の誤なるべし〉尓延於保登礼流屎葛こもよみたり、また今の俗に蔓草の女青をもいへり、草の臭氣あるものに間クソてふ名を負

今集名物に貫之の歟あり

校云、刊本芽ニ作ル、醫心方矛ニ作ル

今の俗はツク〱ホウシといへり

たるは、屎糞の義にはあらず、万葉に屎字を塡たるは、例の借字なり、まさにクサキの義之、今の俗には猶もあやまりてヘクソカヅラといへるはあらじかし

くそまゆみ　輔仁和名に衞芽(ママ)を注したり、この木はマユミに似て少し臭氣ありて、蚤を避るものなれば、またクサマユミなり、今の俗にニシキヾといふもの之

くさゐなき　輔仁和名に野猪黄を注したり、順抄には野猪を註したり　〔○以下六行余白〕

くろきしろき　和訓栞云、キは酒の本名にて、大嘗會にいふ辭なり、万葉に天平勝寶四年新嘗會の歌によめり、酒彌豆男神は黑御(ミヤ)酒を造神なり、酒弥豆女神は白神酒を造神なり、よて酒殿神とす

くゝきあかき　源氏の抄に黑は皮ある木といひ、赤は削りたるをいふといへり

くろかはらげ　順抄に黑川原毛とあり、按に沙駱なるべし　〔○以下三行幷ニ次頁餘白〕

くつ〱ぼうし　順抄に蛁蟟を注したり、この蟬秋にいたり森々然として鳴ければまたシン〱ともいへり

くれのはしかみ　字鏡、順抄幷に薑を注したり、昔は吳の國より來れるなるべし、されば野

にも山にもおのづからはなし、はしかみの條とむかへみるべし

くまのひもろき　人皇紀にみへたり、熊膽をいふといへり、いかゞ

〔○以下三行丼ニ次頁白丁〕

くろみとりのうま　順抄に青驪を註したり、驪をいへり　〔○以下九行丼ニ次頁白丁〕

計部

けつ　狐をよみたり、鎮坐傳に素盞烏尊の御子、宇賀御魂神、また三狐神と名づく、注に三狐は卽御饌津（ミケツ）也とみえたり　〔○以下七行丼ニ次頁白丁〕

けもゝ　万葉巻七、吾家の毛桃、また巻十にもみえたり

けこも　大嘗會に神ノ食薦（ケコモ）とみえたり

けみら　紀に韮をよみたり、食韮の義ゝ、また野韮、山韮あり

けむし　式に枲をよみたり、葈は葈麻なり、ケムシとはその實をさしていふゝ

○虫にいふは蛅蟖なり、卽蚝蟲、蚝は蛓の俗字、說文に蛓訓毛蟲蛓七四切音次或は省て蛓に作

校云、熊白、和名熊脂、註、熊背上膏也トアリ

校云、以下數條前ニ出デシト大略同ジ重複カ

る

けもの　順抄に獸を註したり、雄略紀おなじ、神代紀に毛麁毛柔をケノアラモノ、ケノニコモノとよみたり、順抄にまた牝を米計毛乃、牡を乎介毛乃と注したり

○けだもの　順抄に畜を注したり、毛田物の義なり、六畜は牛馬羊犬鷄豕なり

○順抄、毛群體に、角、和名豆乃○觡觓、沼太波太○䚡、古豆乃○奴角、屖乃波奈豆乃○鹿茸、鹿乃和加豆乃○熊白、熊羊也○猨嗛、佐留保々○豚卵、爲乃布久里。毴毛、上音如勇反、不由介○蹄、比豆米○甲、豆米○齝、䶬、齸、邇介加無○犬呰、七鴇反、以奴乃太末比○嘷、吼、吠、保由○舐、豆木之良比○䑛、五忽反、字世流、以鼻動物也

○とりの條に禽獸蟲いにしへ通用の事をしるしたり

けもゝ　毛桃をよみたり、万葉卷七に、吾家乃毛桃、また卷十にもみえたり

けもの　順抄に獸を註したり、雄略紀おなじ、神代紀に毛麁、毛柔(ケノアラモノケノニコモノ)をケノアラモノ、ケノニコモノとよみたり、順抄に牝を米計毛乃、牡を乎介毛乃と注したり

けこも　食薦なり、大嘗會に神(カミノ)食薦ともみえたり

けみら　紀に韭をよみたり、食韭の義なるべし、この外にも野韭、山韭の屬あり

けむし　式に蕘をよみたり、さて蕘は蕘麻なり、ケムシといへ（マヽ）はその實也

〇蛅蟖をいへるは即蛅虫なり　〔〇以下九行餘白〕

けにこし　古今物名にみえたり、牽牛子の字音、今の朝顏なり

けだもの　順抄に畜を注したり、毛田物の義なりといへり、家畜は牛馬羊犬鷄豕なり

〔〇以下六行并ニ次頁白丁〕

けむりぐさ　後水尾天皇御製に「もしほやくうらならねどもけむりぐさ人の立るのしほとこそなれ」天皇即位は慶長十七年なり、この御製は何の集に載たるにや、尋ぬべし 嘗聞この草は昔時蕃舶一種の小島をへて其種を得て之を歐羅巴洲へ植てより後また他洲へ傳ふといへり、桀按に、唐山に入しは明の万曆年なり、我に入しは慶長十年乙亥の歳なり、其禁煙の令は唐山に於ては明の崇禎癸未、我に於ては元和己卯なりといへり。會津年譜に、文祿四年己亥歳始て莨菪（タハコ）を用とあり、是は會津侯封内の事のみなるべし。また安齋隨筆小車錦の條に、大中菴立志が腐纜集を引て、慶長十七年八月六日執達ありて、之を禁る令を載たり、其令いづれの御時に弛（ユルマリ）たるにや、今海内所とし

校云食ノ上饗アリ士ヲ玉ニ作ル

艸ノ上、一アリ

て用ひざる所なく、遂に進退の禮節となり、其用は病を理るより大なり。唐山にても、日用の常となることを諸書に見えたり。さて薩摩國日置郡冠か岳てふ所に、本おのづから一種の煙草を生ず、秋花開て實を結、春復生す、前古より今にいたるまで生々やむ事なし、土人呼て佾我多波古といふ、抑この冠か岳の稽舍頂峯院は蘇我馬子の建る所なりといへること、其院の舊記にみえたり、故に其名を帶たりとぞ、故老いふ、慶長の種ありてよりはじめて其名を得たるなるべし、固より慶長來舶の種にはあらず、從來(モト)自生のもの之といへり。また安齋隨筆纜の條に、水戶の儒士鵜飼信典が和漢珍書考、或問を引て云、西陽雜纂本文卷十七云昔猫朝の使者揚州の驛館に在時、食後土盆に薺艸を採して添ㇾ之、小管を以て巧に煙を吹かしむ、また西域の玄律中華に入後漢の順帝に一束の香草を献じて曰、吾邦の艸口をして芬煙を含といへり、然る時は此等の故實に据て考るに、中華に於て昔より煙草といふものを翫ぶ事明か之、玄律のことをみる時は天竺にもあり、日本たはこの事を薺艸と書ても不苦乎以上赤烏〔〇ホ烏〕　此說甚、可也、記して以て後考を竢のみ。又內典四分律に、陀婆闍、此云煙茉、また內典□□に此物を竹管中に入て火を取て煙を吐、病を治するとありと或人いへり。されば玄律が順帝に獻ぜし香

草の事に因あり、考ふべし。さて西陽雜纂の全書、槩いまだ嘗てみず、これを遺憾とせしのみ。他は友人大槻玄澤が蔫志にみえたり　〔○以下四行餘白〕

けのあらもの　すでにけものの條にしるす　〔○以下九行幷ニ次頁白丁〕

己行

こ　海鼠をよみたるは記にみえたり、式にも熬海鼠をイリコとよみたり、今俗にその生なるをナマコといへり、雨航雜錄に載たる沙噀なり、その乾かして脯(キタ)へたるを藥性纂要に海蔘といへり、また琉球屬島八重山島にいづるを八重山イリコといふ、これは本草原始に肥皂蔘といへり、按に丹方に崔禹を引て云海鼠　〔○二行幷ニ次頁白丁〕

○蠶をも卵をもよみたり

こめ　米をよめり、小實の義なり、米粒を壓牙といふは東鑑に見えたり、八木といへるは八人の形よりいでにしにや、又菩薩といへるは元來朝鮮の詞ゝ、史外ぼさつの條見るべし

こも　記に菰をよみたり、爾雅に菰は蔣草とみえたり、履中紀に蔣津をコッとよみたり、順

抄には薦を古毛と注したり、菰も蔣も草の名〻。万葉巻十一、菱をよみたるもおなじ、薦は席となせし名なれど、草に用ひたり。万葉に、弱薦、苅薦、薦枕、疊薦などよみたり。式には長薦、葉薦、稗薦、折薦、茅薦、食薦、簀薦、裏葉薦など載たり

こふ　順抄に昆布を註したり、昆布二音の約也、詳にえびすめの條にしるしたり

こけ　蘿薛苔をよみたり、石に凝木に掛肉に凝つくものなればコケともカケともいへり、字をもていへば分ちあるに似たり。記に蘿をよみたり、神代紀に蘿、此云比舸礙と注したり。順抄に松蘿を万豆乃古介、一云佐留乎加世と注せしもの是なるべし、このコケは石にも地にも生ずして、深山なる繁木に、白髪のみだれかゝれるやうにおふるもの、之薛は薜荔なり、清記にいへるこけ、こたにの屬にして、石にも木にも纒て生へるものなり、苔は菭〻、順抄に垣衣を之乃布久佐、また古介と注したる屬なり。さてわが國にて水にあるをノリといひ、陸にあるをコケといふ。その字はおほく苔の字を用て、漢文と同義なり。そのはじめ水陸ともに天の和氣に感じ、木石及び地上に布て毛茸の如く蒸生るもの泛稱なり。樹上の白蘚に艾蒳といへるもまた菭〻。さるをひたすらに比加介とのみいへるはあらじ、古の歌こゝろ詞に

圏鱗ヲコケと云事、前ニ焦あり　圏散木集、かゞり火のほかげにみればますらをはたもゝいとなくこひこくむなり

ておのづから詳なり、また字のみにもあらじ、万葉卷二に、松之末尓蘿生(ムシ)、また卷三に、鉾橀之末尓薜生、また卷七に、眞木葉毛久不見者(ヒサシクミネバ)蘿生家里、などよみたるは、比加介ともいふべけれど、卷六に、奥山之磐(イハ)尓蘿生(ムス)、卷七に、青根峯之蘿席誰將織經緯無二(コケムシロアカラ・アノタテヌキナシニ)、卷十一に、其枕苔生負爲、同卷に、吾木枕蘿生、卷十三に、石枕蘿生左右二などよみたるは必比加介にはあらじかし

○鱗を俗にコケとよむは、元來舊事記に身生蘿といふ詞よりいでたるにや、虫魚のいろくずもまた尙木石の上の苔のごとし

こひ　鯉魚をよみたり、戀の義なりといへり。按に景行四年紀に、春二月甲寅朔甲子、天皇幸ニ美濃一、左右奏言之、玆國有ニ佳人一、曰ニ弟媛一、容姿端正、八坂入彥皇子之女也。天皇欲レ得レ爲レ妃、幸ニ弟媛之家一、弟媛聞ニ乘輿車駕一、則隱ニ竹林一、於レ是天皇權令ニ弟媛至一而居ニ于泳宮(クヽリノ)一、鯉魚浮レ池朝夕臨視而戲遊、時弟媛欲レ見ニ其鯉魚遊一、而密來臨レ池、天皇則留而通レ之、爰弟媛以爲、夫婦之道、古今達則(リヨヘルノリ)也。夫木集に「いとねたしくゝりの宮の波にすむこひゆゑ人にあさむかれつゝ」圖書集成魚典に直省志を引て云、越人謂鯉之小者爲鯉花、又山陰縣志に謂鰤之小者曰鰤核、これ詩料に入べし

古事記に逆剝天斑馬剝而所隨入時云々しかあれは馬を直にこまとよめるなり

こま　紀に駒をよみたり、小馬の義なるべし。うまの條むかへみつべし。万葉に黑馬をもよめり、また神代紀に秋則放二天班駒一ともみえたり。順抄に猫をも注したり、子コマの略なりといへり

こゐ　鷹をいへり、木居の義なり。藏玉集にこゐ鳥ともみえたり、後に按るに嵯峨天皇の鷹經に諸名みえたり

こは　〔○以下白行に細字もて註せり〕

赤染衛門集に、ときぐ〳〵わたる所によいこはのあまたあるをひとつこふに、をしみしかば出でたるまにとりて歸りたるを、いかでかせうそこなくてはといひたりしに「ぬすむともこはにくからぬとしれこふにはしらすいかにかはせん」貞丈云、此コハといふ物詳ならず、大和本草に蒲葵の事を對馬國にてゴハと云と見えたり、濁音に云は轉傳したる成べし、右の歌のコハは此事なるべきやといへり。貞丈又云、蒲葵はビリヤウの事之、古へ蒲葵をヒリヤウといふ事詳ならざりしにや、檳榔の字を借り用ひて檳榔毛車と書き來れり、蒲葵は椶櫚ノ葉に似て大なる物なりと、薩摩にも土佐にもあり、此葉にて車の屋根を葺たるを、檳榔毛車と云、車をふきかざる具なる故、都にても此葉をたくはへし人有しなるべし

こなぎ　旣にうえこなぎの條にしるしたり

こたに　淸記に、苔、こたに、雪まの草と書たり。源氏宿木の卷に、こたになど引とらせ、とみえたり。細流孟津抄幷に蔦の類なりといへり、河海に木蔣と注したり、哢花抄に木にとりつきたる虫のからの類なりといへり。槃按に、淸記によりて攷るに蘿の類に今の俗に豆苔といひて蔣の狀の如く、又豆辨に似て日陰の古木などにはひまつへる苔なり

○人參をもいへるは、大同類聚方卷九十六、用藥部に、古多邇、一名加乃尓介久差、又久万乃以としるしたるは卽人參なり。又おもふに、いにしへ人參に古多邇の名あるをしらず、今みる所の大同類聚方はいにしへの眞本か疑はし

こほね　順抄に溫菘を註したり、小大根の義なりといへり

こみづ　順抄に醴を註したり、令にもみへたり、醬をコムスといふが如し

こけら　順抄に柹を註したり、木の削屑をいふなり、苔をもいへり、和訓栞云、らは助語なり、蜻蛉日記にこけらついたる松の枝とみえたり

このみ　神代記に菓をよみたり、木の實の義ゝ。くだものの條を見るべし

こぶし　こぶしのはなの條にしるす

こなら　槲をよみたり、されど槲の小なるを爾雅に枹といへり、また鎭江府志に、勃落樹といへるも小槲なり。万葉に古奈良とよみたるは是なるべし

こがひ　神代記に養蠶をよみたり、万葉巻十一には加不古とよみたり。この條、うつゆふの條をみるべし

○貝にいへるは山家集に「なにはは潟塩干にむれていで立んしらすのさきにこがひひろはん」
また師光の歌に「いせの海きよき渚に駒とめて都のつとにこがひ拾はん」

こがら　鳥に山ガラあり、其小なるをいへり、文治三年百首の内に信實「冬野にはこがら山がら飛ちりてまたいろ〳〵のくさの原哉」

こつを　式に乞魚、また許都魚と書たり、順抄に、玉篇を引て、鮀魚、注に、漢語抄に古都乎。按に正字通、鮀、舊注音吉斷魚、一曰魚游、何喬遠閩書載鰷魚小者名鍚鰞以其好交群魚若娼然故曰鯧又曰魚游、舊說に鰷魚はこゝに云眞名鰹也、むかし朱子璵こゝの眞名鰹をして鯧なりといひしより確的となせし也、さて眞名とは其味の美きをいふなり、眞名鹿、眞名鶴、眞名杜

などの義におなじといへり、尙詳に東雅にみえたり

ことひ　順抄に特牛を注したり、万葉卷九に牡牛をよみたり

ごしむ　五辛なり、僧尼令の注に、五辛者、一曰大蒜、二曰慈葱、三曰角葱、四曰蘭葱、（楞嚴經に茖葱に作）五曰興蕖也（楞嚴經に渠を蕖に作、興蕖は阿魏也、こゝにクレノオモと訓ず）これ楞嚴經に載たる所と正に相同じ、蓋し此經に本づくなり。また經にいはく、五葷熟食發淫生啖增恚、是この故に僧尼にこれを禁ずるなるべし。漢土にては晉の宗懍が荊楚歲記の注に、周處が風土記を引て云、元日造五辛盤正月元旦五薰練形、又云葱蒜韮蓼蒿芥也（蓼蒿はもし蓼蕎にはあらずや、蓼蕎は本草綱目韮の附錄に見へたり）羅願爾雅翼に云、西方以二大蒜小蒜興渠慈葱茖葱一爲二五葷一、さて又道家以二韮蒜芸薹胡荽薤一爲二五辛一、宋以來諸書を尋討するに大氐大同小異なり、極て定準なし、或云、莊子云、春月飲レ酒茹葱以通五臟也（按に此文莊子にみえず）南史に周顒春初早韮を食ふ、晉の李鄂於二立春日一以二蘆菔芹菜芽一爲二菜盤一相饋齎人春日食二生菜一これ春盤は迎新の意をとるゝ、其意また僧尼とことゝ、されど五辛ははやく楞嚴經にみえたれば、佛家に治るこ明らかゝ

こみら　順抄に韮を註したり、また菜の總名ゝといへり、みらの條むかへみつべし

こふこ　万葉巻十一に養蠶をよみたり、順抄に加比古また古加比須と註したり

このみ　順抄に唐韻云、説文木上曰果、注に私記云、古乃美、俗云久太毛乃、地上曰蓏、註に和名久佐久太毛乃、漢書註、張晏曰、有核曰菓、無核曰蓏、應劭曰、木實曰菓、草實曰蓏○順抄菓其に、核、和名佐禰○李衡、加無之乃佐禰、柑子人名也○桃奴、毛々乃佐禰○廿皮　木加波、其色黄之義也○甍、葧、保倶○櫟梂、以知比乃加佐○栗扶、久利乃之不○栗刺、久利乃以加○桃脂、毛々乃夜邇　〔○以下九行余白〕

こひくさ　万葉巻四に、戀草呼力車箭七車とよみたるは、但戀する人の事のしげきをいふなり。忘草、目覺草また今俗に笑草といへる類なり

ころくさ　莫傳抄に八月中の草の惣名なりといへり

このはな　木花開耶姫を齋て稚櫻の宮と稱したれば、さくらなるべし、また万葉巻八に藤原廣嗣梅花贈娘子歌に此花乃一與能內とよみたり、さくらの條をむかへみるべし

こにずい　字鏡に吳茱萸を古尓須伊とあり、コニスイは吳茱萸の音轉にて、それをやがて和訓とせしを今の俗には再び汎にてコンズイといへり、且其名を訛れるのみならず、其木をさ

へ誤り、栲をもてコンズイと呼なすはいみじきひが事ならずや、是游清が説之。槃按るに、爾雅に栲は山樗とあり、今の俗に云烏山椒なり、其葉茱萸の葉に似たればいにしへ是を呉茱萸と覺えたるもしるべからず

このきみ　晉の王子猷が竹の詩に、何可一日無此君耶といへるによりて竹の名となりぬ、新千載集に「万代にいろはかはらじ此君とあふけば高し國のくれ竹」

こをばい　紅梅也、拾遺集物名によめる歌に、紅梅を隱して、子をばいかでかうまむとすらん、とよみて紅の字音を凡てこをと呼しか、是をこうの韻にしては讀がたき故にてもあるべしと宣長が三音攷にいへり

こゐとり　藏玉集に鷹之といへり、木居鳥之　〔〇以下二行幷ニ次頁白丁〕

こゝろふと　式に凝海菜をよみたり、こるも、またこるもはともよめり、職人歌合には、心太と書てコヽロフトと呼てうしといへり、心貞（コヽロテイ）と云義なりといへり、俗説なるべし、今トコロテンと云しはコヽロテイの轉たるならん、是石花菜なり、廣東新語に白者曰瓊枝紅有曰草珊瑚

こそめぐさ　莫傳抄に萩なりといへり、藏玉集おなじ

こつゆぐさ　藏玉集に千種なりといへり

こしあぶら　式に金漆をよみたり

こまにしき　万葉巻十に、狛錦紐解とよみたり、丹敷(ニシキ)を織は狛人(コマ)より傳へたれば、にしきの冠字とせるなるべし、やまとにしきの條に詳にしるしつ

ことひうし　万葉巻十六に、事負之牛(コトヒノウシ)とよみたり、ことひの條むかへみるべし

このしろ　順抄に鰶を注したり、孝徳紀に塩屋鰶魚といふ人あり、鰶魚、此云二擧能之盧一と注したり

こほろぎ　順抄に青蛩を註したれば蟋蟀こそコホロギなれ、詳にきりぐ〳〵すの條にしるしたり

こぶしのはな　續詞花集に、こぶしの花を人におくるとて「時しあればこぶしの花もひらけたり君がにぎれる手にかくれかし」今の俗に辛夷をシテコブシまたムラサキコブシといへるは、この哥などにや本づくなるべし。本草和名に、辛夷をヤマアラヽギ、字鏡にヒキサクラと注したり

補　置之が賀に、カざす井立と立にし我乎にゞ事なし草のか心やなからん

後、院云コ今世柏ノテハト云木檜ノテニ似カ表裏マヘサヲナル、云云或ノ檞、機ノノ葉葉如クノノ

ことなしぐさ　清記に、事なし草は思ふヿなきにやあらんと思ふもをかし。六帖に「こりずまの松にはいとど年ふれど事なし草ぞおひうつりける」また「人にのみいはれの池のあやなくにヿなしぐさのやどにさそはん」また「君みてしほどのふるやのひさしにはあふヿなしの草ぞ生ける」源氏の抄に、しのぶぐさの名のよしいへればさるべし、されども清記には子にしのふをいだしたれば記にいへるは別物なるべし、戀草わすれぐさのたぐひならんか

このてがしは　万葉巻八に、兒手(テ)柏をよみたる歌あり、また巻十六に、謗佞人歌に、奈良山の兒手柏之兩面尓とよみたるは、今もいふコノテガシハの葉の表裏(ウヘウラ)のわかちなればこそ兩面とよみたれ、卽本草彙言に載たる叢柏なり、まきさくひとよみたるヒとは異之。その他(ホカ)の柏類は凡(スベ)て表(ウヘ)と裏明かに分れるもの之

こやすがひ　竹取物語に、つばくらめのもたると書たるは今いふコヤスガヒにはあらじ、今いふものは貝子紫貝の屬なり

ことひのうし　万葉巻〔〇十六〕に「わぎも子がひたひにおふる双六のことひのうしのくら

端五ッ出テ、手ノ五

〔補〕指アルガ如クゝ、サレバ見手柏ト云

困秀枝云今伊勢あたりにて獲物は色白にして圓ニ一寸ニ不過、余がもたりし黑紫の三寸斗なる物は八丈島の產なるよしなり

のうへのかさ」或云、おほきなるうしをいふ　〔○五行アケテ次頁〕

こゝのふしのあやめ　夫木集後德大寺左大臣「あやめ草こゝのふしをやとゝのへて玉のよどのにけふはふくらん」あやめ草の條をむかへ見つべし　〔○第三册終〕

國史草木昆蟲攷卷三

左行

さゝ　記に手草結天香山乃小竹葉、注に訓二小竹一云二佐々一とあり、天照大御神の磐戸に隱らせ給し御時、天宇受賣命の御手に小竹葉を持給ひてサ丨、サ丨、とうちふりて舞給ひし故事によりて、後代の神樂にも必小竹葉をとり用ひて、それをうちふる音のサ丨、サ丨、となるにつきて、諸人も聲を和せてサ丨、サ丨、とはやし謠ひしなり、竹葉をサ丨、といふもサ丨、ザヾとなる音によりていへるならんと本居宣長いへり。猶この事は古事記傳第八にくはしくいへり。眞淵は筱なみを神樂聲と書しは、いにしへ神樂にさるうたひ物の有しなるべしといへるはたがへり。又神樂歌に筱波や志賀の辛崎や云云てふうたひ物有れど、こは後の事なり。樂の字はサヾと下のサ丨濁はたがへり、もと神聲と書たるがいたく文字のはぶかりたるなり、さて又万葉卷十に湯小竹(ユザヽ)とよみたるもおなじ

㊀古事記に山

さゐ　記にみえたり、後のさゆりの條に詳にしるす

由理草の本名云ニ佐葦ニ

鮐音台又音怡

さや　莢をよめり、狹屋の義なりといへれどおぼつかなし。廣雅に豆角謂二之莢一

さけ　記に酒をよみたり、くしの條にしるしたり

○鮏をよみたるは輔仁和名に見えたり、俗に鮭に作るは非なり。式に鮏ノ背腹(セハタ)鮏楚割(ソハリ)あり

○梟をよみたるは俗語にして、さけぶの義ゝといへり

さば　順抄に鯖を注したり、式に鯖醬(ヒシホ)あり。按に今云サバは青花魚なり、朝鮮にて青魚といふはニシンなり

さめ　式に鮐をよみたり、字鏡にも鮐また鰹を注したり、方葉卷十六に、鮫龍をよみたり、式に鮫楚割あり

ざこ　式に雜魚をよみたり、今は雜口、雜喉等の字を書り

さぎ　記にも順抄にも鷺をいへり、卽白鷺也。此鳥の鳴聲いとさやぎてきこゆればサギといふといへり。紀の桃花鳥(ツキ)は朱鷺なり、抄の水門(ミト)サギは蒼鷺也、今云青サギは旋目なりといへどいぶかし、ダヒサギは白鶴子也、鶂鳽也と云はたがへり、ヘラサギは漫盡也、アマサギは小鷺也、またクロサギ、ホウシサギ、島廻(シマメグリ)などあり、源氏浮舟の卷のカサ、ギも鷺なるべし、かさゝぎの條

補記に猨田吡古神をさるたひことよみたり

文按義楚六帖云、僧祇律云、佛告諸比丘過去世時有城名波羅國名迦戸於窣閉處有五百獼猴遊行見樹下有井々中見月共執

にしるしたり

さる　猨をいへり、卽獼猴なり、神代紀に猿女君をサルメノキミとよみたり。新六帖「手にとらぬ水の月影それかとてさるはおろかに身をやかふべき」尾張國人天野信景が塩尻に、今画家の爲がく猿猴の月影を取らんとする圖は、謝靈運云遊名山觀ニ掛レ猿下ヒ飲爲ニ避レ臂相連」また經律異相に猿の月影をとらんとする事ありと云云、陸祚蕃粤西偶記云、平樂等府深山中猿猴極多善採（百木）異花釀酒樵子入山得其巢穴者其酒多至數石飲之香美異常名曰猿酒

さい　十題百首、寂蓮が歌に、うき身にはさいの生角えてしがな袖のなみだも遠ざかるやと

〔○次三行幷ニ次頁白丁〕

さゆり　万葉卷〔○十八〕「ともし火のひかりに見ゆるさゆり花ゆりもあはんとおもひそめてき」紀の神武の條、狹井河の注に、その河を佐韋といふよしは、其河のへに山由理草さはにあり、故に其山由理草の名にとりて佐韋河となづくるゝ、山由理草の本名佐韋と云之

さゝぎ　紀に豈角、此云娑佐礙と注したり、順抄同じ、卽豇豆なり。狹サ々グ芒の義なるべし、式には大角豆をよみたり

樹枝手尾相接入井取月恐批黒暗枝折一齊死

補（さゆり）或人云注の説いぶかし

さゝめ　茅をいふといへり。新六帖「ますらをのみのにさゝむと澤に生るさゝめのほにも袖はぬれけり」澤といへる題によみ入たり　三才圖會に、香茅は葉菅茅に似て三稜微柔軟、農家これをもて雨衣につくる、播州に多くあり、俗にタマボまたミノクサといふといへり、これこのサヽメなるにや、後に尋ねん

さうび　古今物名に貫之の歌にみえたり、薔薇の字音なりといへり、ばらの條に其類を詳にしるす

ざこく　六帖によみたり、いまだ考えず

さねき　万葉巻十に、阿保山之佐宿木花（サネキガ）とよみたり、また巻十二に、眞枝（サネキ）とも書たり、順抄にはサ子リノキと註したり、ねむのきの條をむかへみるべし

ざくろ　順抄に石榴を註したり、ザクロとは若榴の字音にや、万葉の山海石榴をもいふといへるはたがへり、こはヤマツバキとよみたり

さくら　順抄に文字集略を引て、櫻を註したり。我國に此花を貴（メデ）そめしは履中紀に、三年冬十一月、櫻花落二于御盞一、卽爲二宮名一、故謂二磐余稚櫻宮一。允恭紀に、天皇見二井傍櫻華一而歌之

曰、波那具波辭佐區羅。是藤原の宮より賞たりけん、弘安三年二月神泉苑に行幸ありて、櫻を御覧じ詩をつくらしめし事、類聚國史にみえたり。天喜四年あらたに櫻花宴殿をなし給ふ事、淸輔袋草紙にみへたり。拾遺集に「日の本にさける櫻の花みれば他の國にはあらじとぞおもふ」按に貝原篤信云、昔朝鮮より漂來りし篷桁にしたるをみるに、疑なき櫻之。其國人也是を奈木と云といへり、其花を問しに、二三月淡紅の白花を開といふ、されば朝鮮にあるらめ、源君美東雅の註に云、朝鮮にこのもの有や無やを、對州の人に問しに、かしこにある舘中に、こゝの楊貴妃と云櫻を移し植たり、其花開きし時は、王城の人來りみしに、問たりけるに、かしこにもあるゝ、其樹名を標といふと答たり。正德聘使の時に、稻若水に答へしを見れば、彼國にも此ものはなきゝ、棟の字をもて對へしと云、又或は宜春花と云といへり、これその名の正なきを見れば、朝鮮にありしと云はいぶかし。また享保中舶佑周未章周朱等云、我無此花、また安永中陸奥南部舟子風に漂て廣東潮州に到り、春の比より諸府縣を歷て福州にいたりしに、種々の山花はあれど櫻花をみるとなしといへり。また東雅云、むかし朱舜水にこの櫻花を問しに、櫻桃はあれどこゝの櫻はなし、もしこの花あらんには、梨花、海棠の如

校云なくれノゐの、歌、詞花集、高陽院七番歌合ニ見ユ

記に、爲レ鬘ニ天之眞(マ)拆(サケ)ニ云々或人いふ木名なり

櫁と樒同音蜜

きはかぞふるに足らず、と答られしと我師なりし人語りきとあり。 されば日本の櫻は唐山無事明かゝ、さるを櫻桃垂絲海棠などをこゝの櫻におしあてしは僻事之〔○原文欠〕に、くれなゐのうす花櫻にほはずば皆しら雲とみてややまゝし(すきまし(詞))。 歌合の評に、紅の薄花櫻は詩には作りたれどうたに詠ぜざるよし難ぜり、匡房卿、白雲は交へだつれど紅のうす花櫻心にぞそむ。 或人いふ、この薄花ざくらは海棠にはあらずや、猶尋ぬべし

さかき　記に眞(マ)賢木(サカキ)、神代紀に伊弭佐介箋(イチサカキ)、また五百箇眞坂樹(イツマサカキ)、景行紀に、磯津(ノ)山賢木(ヤマサカキ)、神功紀に、撞賢木(ツキサカキ)、字鏡、順抄并に龍眼木を注したり。 神樂歌にニ榊葉の香をかぐはしみ覓(ト)め來ればば八十氏人ぞまとひせりける」 新古今集、貫之「おく霜に色もかはらぬ榊葉の香をやは人のとめて來つらん」 源氏榊の巻に「おとめ子があたりおもへば榊葉の香をなつかしみとめてこそ來れ」 久老はこれらの歌、且サカキの葉ににほひある諸説をつどひて、槻の落葉に擧つらひ、万葉集の歌に奥山の志伎美が花のごよみたるシキミと決めたり。 順抄に櫁を之伎美と注したるも同じものにて、今もいふシキミなり、今姑くこゝによる」 本朝無題詩巻五、雅宗孝言(タカノリ)の詩に、鎖レ門賢木換ニ貞松一、自注に、近來世俗皆以レ松揷ニ門戸一、而余以ニ賢木一換レ之。 さ

古事記云惡神之音如狹蠅云々狹は發語にや又万神之聲者狹蠅那須ともあり

記ニ内剥鵝皮爲衣服

て又順抄に、柃を比佐加木と注したるは、眞賢木にむかへて非賢木の義なるかとおもふに、是眞賢木に似て香のなきものをいへるにや、今俗にムロノキにむかへてヒムロあり、此等は万たゝ似て傍なるをいひし也

さえだ　小枝なり、藻塩草には竹といふといへり

さゞゐ　順抄に、崔氏食經を引て、榮螺子、和名佐左江と注したり。催馬樂にもみえたり。夫木集にはサダエとよみたり、今の漢商は草螺といへり

さばへ　神代紀に蠅をよみたり、また五月蠅此云左魔陪と註したり

さゝき　記に鷦鷯を佐邪岐とよみたり、神代紀には鷦鷯此を云娑々岐と註したり。記の邪は濁音と、順抄に小鳥なりと記したり。古語に細小なるを狹々といひ、また古語に鳥を岐といふにや、その義は鷺をサギ、朱鷺をツキ、鷸をシギといふ、ミソサヽヒといへるはミソは密なりサヽヒはサヽギの轉れると、皆こまかなる事をいへり、此説ははやく東雅にみえたり。今の俗にはサヽエとのみいへり

さをり　万葉卷十一に、狹織の帶とよみたり、卽倭文の狹く織たるにて、今もサナダとて細き

とありて鵝をさゝきと訓ぜり

紐あるも狹織のこゝろなりといへり　〔○以下四行幷次頁白丁〕

さきくさ　万葉巻五憶良の歌に、三枝之中に乎爾牟登よみたり、眞淵が冠辭考に詳に諸書を引て解分（トキワケ）サユリ花なりとあてたれば、それに打まかせつ。さて信濃國徵山人三枝鼎輔といへるもの、詩つくることを好み江戸に出游せしごとに訪來りて、われに詩書の名物を質しける時しあれ予某が姓の三枝の事を問しに、某頓に云、吾鄕にてサイクサといひしものは灌木類にして、草に近く枝ごとに三枝を分ち、夏月三枝の末に房の如き花をひらくと。江戸にてはミツマタといへるものゝ、といひき。即しる是王蓋臣が芳譜に載たる結香にて、蜜蒙花の屬なり、枝ごとにひとしく三枝を抽、夏の始に三枝の末に叉整しく牙黄筒弁の小花數房攢り開く、げにも酒罇に飾るべく、殊に四月三枝祭の比にあたりて花咲ものなれば、いにしへにいふ三枝は正しく此ものならんと、ひとり喜びおしきはめつるに、ふと豊前小倉侯の藩臣秋山光彪が歌集をみるに、その巻末に、佐記久佐の條あり、流覽一過するに乃云、一年上野國より絹ひさぐ人の來て、和栲（ニヒタヘ）、あらたへ、何くれと取ならべてあきしこるついでに、今雁皮紙といふ紙に似て、いさゝかとなる紙を取出たるを見しに、豊後國筑城郡（ツイキ）窪手（クボ）といへる山にて、三股といふ

ものもてすきたる紙と、またく同じければ、あやしと問こゝろみるに、こはサイクサもてすきたるなりと云、さるはかの三股こそサイクサなりと云云、是鼎輔が言と同日の談なれば、げにもいにしへの三枝は今のミツマタなるべしとおもへるぞ。光彪も既に詳に解て、予が意とおなじけれ、さて又今駿河國伊豆などにて此ものゝ皮をもて專ら紙を抄て書せるぞ。是亦人智の會する所四方皆おなじかりける

さくらを　眞淵いはく、万葉櫻麻はさくらてふ所より出る麻なればしかいふか、今東のをかぢあさはかぬまをなどいふが如し。麻ならでも安藝の木綿(ユフ)、みしますげ、布に信濃望陁などの名も有、且さくらてふ鄕は、尾張遠江下總などに、昔も今もあり、他の國にも有ならん、また橘枝直、こをかにはをと訓んか、卷六、赤人櫻皮(カニハ)纒(マキ)作流(ツクレル)舟とよみ、和名樺〔カハまたカニ　ハ今櫻皮有之〕今うつは物作るに用る櫻皮を、今もかばといふといへり。今思ふに、これも據ありて、おかしき說なり。さくら麻は靑き白きあかきあり、その朱(アカキ)をかにはといふべきにや、源氏物語などにめでたしとするかばざくらも、その木の皮によれるのみにはあらで、薄あけなる花のいろによりていふとおぼしきぞ

七夕ノ歌ニサヽガニノ糸ヲヨメルヿ玉勝間十巻十三丁ニアリ

さのかた　万葉巻十に、「狹野方は實尓雖不成花耳開而所見社戀之名草に」また同巻「狹野方は實に成西乎今更春雨零而花將咲八方」類聚に合歡木、狹野方、佐宿木などを書ならべたり、管見抄には藤の異名こ、花はおほく咲て、實はす　しなる物なればこいへり

さきたけ　万葉巻七に、辟竹之背向に宿しくこあり、割たる竹なりこいへり

さすたけ　万葉巻六に、刺竹之大宮人こあり、眞淵云、古事記に夜久もた都伊豆もこ有を、万葉に人万呂、八雲刺出雲こかき、且古事記に景行條、意富迦波良能宇惠具佐、万葉巻十宇惠多氣能毛登左倍登與美、神代紀に注本所植此云多底なご有を交へみれば刺も立も宇惠も古へ同じごにて、生立てあるを謂こけり

さゝかね　允恭紀に、衣通郎姫の歌に、佐瑳餓泥こよみたり。私記に、蜘蛛の別名こ、今はサヽカニこ云こいへり。古今集に、さゝかにの衣にかゝりこよみたり、また私記に、其體蟹のごく佐々原に住したりこいへり。按に蠨蛸こいへるは蜘蛛也

さをしか　紀に牡鹿をよみたり、万葉巻四に、小牡鹿こ書、また巻十に、男鹿鹿こも書たり。また巻八に棹鹿こも書たり

さゝくり　順抄に、崔氏を引て、杬子を注したり。こは後世にいふ茅栗なるべし。西行の歌に「いせ人はひが事しけりさゝぐりのさゝにはならで柴にこそなれ」これ俗にもいへるシバグリにして、また三度栗(サンドグリ)ともいへり。一年に三度實成ものとぞ。上總國にて或は宰府栗といふといへり、三度よりうつりたらなん

さばやけ　わうさいの條にしるしたり

さゝなき　夫木集に堀河右大臣の歌に、あやしくも風になるてふさゝなきのはしはみよりも長くみゆらん。何物にや、考ふべし　〔○以下二行幷ニ次頁白丁〕

さしもぐさ　灼艾をよみたり、サシは艾灼の膚を傷ること、棘鍼の刺また毒虫の螫が如くに疼痛なればいふとぞ。後拾遺集、戀一、實方朝臣「かくとだにえやはゆふきのさしもぐささしもしらじなもゆるおもひを」此歌のサシは刺てふ義によみかけたるなるべし。醫書に、灸幾壯とあり、揚雄方言に凡草木刺レ人謂二之壯一、郭璞註に壯傷之と見えたり、是灼艾の膚にありて火氣の肉に透ること、物に刺傷られてひゞらぐが如くなれば壯といふとぞ。和漢おのづから會意せり此說ははやく齋藤彥丸に解示したり、既に木にもえりたりといへり　古版節用集に艾は扦(サン)て根を生るものなればサシといふとい

へり、此說うけがたし、モクサは燃草の義なるべし。さて艾はいにしへ下野國よりいでしなり、六帖雜の草「しもつけやしめじが原のさしもぐさをのが思ひに身をややくらん」淸記卷十二うちとくまじき段まとや下野にくだるこいひける人に「おもひだにかからぬ山のさせも草たれかいぶきのさゝはつげしぞ」この三首の歌をしるしこす。今近江國伊吹山の產を顯名こせしは蓋し永祿年より後の事なるべし。天教雜話を見るに、永祿の比南蠻國より宇留看普羅天の兩伴天連解理故利夜里異子の兩伊留滿渡來して信長公に謁し貧病の徒を救はん爲に藥園の地を請ふ、信長公其請に應じ近江國伊吹山五十町四方の地を給ふ、切支丹の徒其地を平げ藥木草三十餘種を植たりこいふ、今世に用ひし艾は是支切丹のうゑし種なりこいへり、さもあらんか。陳艾を貴みけるは孟子離婁に三年之艾を用ひしによるなるべし

【頭註】［栗］景樹が異見に云、岩橋秀榮が著せし名蹟考に、さしもぐさとは艾草をもくさに製する故艾の一名とせり、もくさとは此草よくもゆる性あるゆゑもえ草と名つけしを、もくさとよぶは語の急なるゑ。さすとはもくさに製して治病に火をもて灸所をやくをさすといへり、針もてさすといふに同し、火にて皮肉をやぶるをさすとは云り、よりてさしもくさと稱すといへり。此說よし。只さすの心たがふべし、こは紅藍(ヘニ)をさす眼藥(メグスリ)をさすなどの類にて

其もくさをよしつくるをいふべし、火もて皮肉をやぶるを打まかせてさすともいひ難きか云云

さなかづら　五味藤をいへり、記に佐那葛とあり、式に狹根蔓とあり。さてこの草の根を舂て、その滑汁を簀椅にぬりて大山守の命の蹈ばたふれ給ふべく設られし事あり、今はその莖の滑けを梳けづりに用ふるよ。また後の物にさぬかづらとも書たる有といへり

さがりごけ　古今物名によみたり、松蘿樹衣の屬なり、樹衣は樹にかゝれるこけの總名よ、謝在抗が文海披沙にみえたり

さるをかせ　順抄に松蘿を注したり、猴機の義よといへり

さゐたつま　和訓栞に虎杖、また草の異名なりといへり、延喜撰式にさいたつまがふ草葉におごろへてと有、ゐいい孰かよからん

さゆりはな　万葉卷八に、垣内の佐由理花とよみたり、さゆりの條にしるしたり

さくなむき　順抄に、石楠草を註したり、字音の訛れるなるべし。とひらのきの條をみるべし

さゝりぐさ　藏玉集に、「秋ならぬ風にやちらんさゝりぐさ花の下枝になびく五月雨」莫

傳抄に、小角豆也といへり。順抄に、[illegible]豆、和名ソヒマメとよみたるもこれなりといへり

さすやなき　万葉巻十四に、左須楊奈疑、また巻十三に、刺楊とも書たり、この刺も、刺竹(サス)のサスとおなじこゝろなるべし

さくらがひ　みなとがひに似て、こまかなり。またいろ貝にも似て、長からず、その色はあしたの虹の日にかゞやく如くめでたき貝之。夫木集に西行「春たてば霞の浦の海人はまづひろふらんさくらかひをや」定家卿建保百首に「いせの海浪の玉よるさくらがひかひある浦の春のいろかな」この貝にいろ／＼のうつりあるを絞纈(シボリ)ざくら、紫ざくらなどいへり

さめつきけ　式に白眼鴾毛をよみたり〔○次頁白丁〕

さはあらゝぎ　順抄に澤蘭を註したり、万葉巻十九に、黄葉澤蘭(モミヂセル)とよみたり、あらゝぎの條むかへみるべし

さよみのぬの　順抄に貲布を注したり、狹讀の義なり、ヨミは八十綫なるべしといへり、緣の杭に今もいくよみといへり、類聚雜要に細美と書たり、今サイミといふはこれよりいでたる名なるべし。夫木集、源仲正の歌に「いかなれば戀にむさるゝたへぬのゝなほさゆみなる

人のこゝろは」さゆみは、さよみの誤なるべし、あつしの條にしるしたり

さやつきどり　順抄に鶍鵅を註したり

さゝえこどり　藏玉集に、鶯の小鳥也、といへり。秘藏抄には親鳥ゝといへり。サヽといひコといへば鶵鳥なるべし　〔○以下九行余白〕

さいさかもはな　秘藏抄に万黨花なりといへり　〔○一行ノミニテ此枚白丁〕

志行

し　順抄に羊蹄を註したり、万葉にもシの助詞に羊蹄と書たり。今この草の葉をシノハといひ、根をシノネといへり　〔○以下七行並次頁白丁〕

しひ　神武紀に椎此云辭毗と註したり、記にも志毘とよみたり。さてシヒは音の轉じたるこおもへるに、別木にすぐれて葉のかさなり生たるゆゑにシヒとはいひしならん。いにしへ繁をシヒといひ、隔をヒといへり、葉のしげく重りへだてたるをいふなるべし。この說よくあたれり、万葉卷二に有馬皇子「家有者笥に盛飯を草枕旅にしあれば椎之葉に盛」今隼人國の俗

頼政の歌に「のほるべきたよりなければ木の本にし

ゐをひろひて世を渡る哉「とよめるは四位を椎によせていへるゝ然れば此頃假字はまきれたるをしるべし其外後世歌にまゝあり

校云
万葉歌

には、つねに木葉に食物を盛也、これいにしへの遺風也。式に葉椀をクボテとよみたるも、即これなり。通小町の謡に、いちひ かしひ、またはしひとならべていへるも、皆椎の種類なるべし

しぬ　稲をよみたり、神代紀に垂頴八握莫々といへれば、しなふよりの詞なるべし

しへ　順抄に蘂を註したり、心瓣の音にやといへり、いかゞ。蘂心をわらしべ、花瓣を花しべといへり

しぬ　記に恚怒といふ、篠また小竹をよみたり。神功紀に、小竹宮、此云之努と註したり、万葉巻六に、小篠、巻八に細竹、巻七に小竹、皆シヌとよみたり

しの　紀に篠また小竹をよみたり、字鏡に篻を注したり。順抄に長間笋を之乃女と注したり、しなふの義なるべし、また小篠の義なりともいへり

しば　万葉巻十に柴草をよみたるは、順抄に、莱草を註したるとおなじ、今いふ道柴なるべし。また万葉巻四に、小歴木をよみたり、契沖云、ちひさきくぬぎは、柴にこるゆゑに、こゝろを得てシバとよめる歟、管見抄にわかくぬぎと書たり 按に万葉にはやく「わたらひの大川のべのわかくぬぎわかくしあればいもこふるか

ノ下句誤アリト見ユ吾久在者妹戀鴨トアルナリ

補 鶺、音蘗、記に志藝和那波留云云ある人いふ志

も」とよみたり景行紀に、歴木とかきてクヌギと訓り、今の俗にシバといへる雜草は、尓雅に傳横目、注に一名結縷、俗謂之鼓箏草、といへるものなるべし

しみ　順抄に衣魚を注したり、爾雅に、蟫は白魚、蟫音淫、注に此衣書中蟲也。字鏡に蟫を注したれば、其音の訛（ヨコナマ）れるにや。按に是字音にあらず、古語に多く集るをミヽといふ、ノミ、シラミ、シ、ミ、ミ、ズなど是也。此虫書中に繁くむれたる故にシミといふ也。定家卿の歌に「いたづらに打置くふみを月日へてあくればしみのすみかとぞなる」

しび　記に志毘といへるは、万葉巻六に、藤江の浦に鮪鈎等、また巻十九に、鮪衝（ツク）とよみたるシビなるべし、順抄にも鮪を之比と注したり。これ黒鰻魚（マクロ）の一種にして、今漢音のいへる金鎗魚也

しき　鷸をいふなり、紀に鶺山祇神（ヤマスミノカミ）、鶺、此云之伎、烏含反と注したり。記に志藝山津見神とみえたり、万葉巻十九九丁に、羽振鳴志藝とよみたり、順抄に、鷸を注したり。蘗（シキ）山後にシゲ山といへればシキは蘗きところなり。　[案]今いふ鴫なり、万葉一二十七丁旅にして物戀之伎の鳴くとも云云

しめ　万葉巻十三に、伊蘇婆比座与（マセヨ）伊加流我等此米登、とよみたり、ひめの條むかへみるべ

鸚は鵂、之鸗、音籠

校云、白鹿、寛永版本シロキシシと訓ず

し。また順抄に、鴲を注したるもおなじ、これ蠟嘴鳥の類なり

し丶　神代紀に獸をよみたり、崇神紀に猪をよみたり、仁德紀に鹿をよみたり、記に白鹿をシロシとよみたり。膂肉をよみたるは式に見えたり。肉をよむはしまりかたきところ也、猪鹿をシ丶とよむは、鷄をもはらトリと讀が如し

しか　万葉卷四に、鹿乃濱、また卷八に鳴鹿とよみたり、また牡鹿をよみたり、順抄には、鹿をカとよみたり　〔〇次一行幷ニ次頁白丁〕

しなび　紀に稻の穗立をいへり、卽頴也、シナ　カヒは靡の義之、菅家の訓に、垂をいふなり、催馬樂に青柳のしなび、伊勢物語に藤のしなび、などおなじ

しとき　順抄に粢餅を注したり、字鏡に糈を注したり、これも白磨なるべし

しのめ　順抄に長間笋を注したり

しきみ　順抄に唐韻を引て、樒、香木也。漢語抄云、之岐美。万葉卷二十に、奥山の志伎美が花のとよみたり、是本草經に載たる莽草也といへり。圖書集成に、明の靳學顏が莽草賦序を引て云、橘葉桂莖丹蕚素蕾意若自負不儔凡卉者厥形麗矣。此說こゝのシキミとむかへみつ

べし。抄に樒、音蜜、按に櫁与梭字書に同、香木名、さかきの條むかへ見つべし。梭は沈水香なり

しゆろ　順抄に、棕櫚を注したり、夫木集には、すろのきと讀たり、しろの條みつべし

しゝみ　万葉卷六に、住吉の粉濱の四時美とよみたり。順抄に、蜆貝を之々美加比と注したり、堅田貝ともいへるは、夫木集に、しゞみとるかたゞの浦のとよみたり。また膳所貝ともいへり、せた貝ともいへり、あふみの膳所なる瀨田にあるをよしといへばかく名ぜる之。隼人國に縞しゞみあり、表に白き緯理（マキスヂ）あり、河間府志に載たる白蜆なるべし

しもと　順抄に葼を注したり、唐韻を引て、木の細枝之、茂本の義之といへり。字鏡に、楲を注したり、また楉をも注したり、式にも、靈異記にもおなじ訓あり。和訓栞云、此は若木二合の意、字書の本義にあらず、若弱におなじ、古今集にしもとゆふ葛城山とよめるは、卯杖を葛城にてゆへばかくつゞくるなりと顯昭の説之。順抄に、笞を註したり、拾遺集に「老はて、雪の山をばいたゞけどしもとみるにぞ身はひえにける」

しをり　栞をよめり、和訓栞に云、山に入に木の枝を折かけて、道のしるしとするをいふ、標（シメ）

折の義之。又柴折の義なるべし。紀に折₂取枝葉₁とみゆ、刊も栞も同じ、字書に栞槎識也、周伯温が六書精蘊に云、禹貢隨ㇾ山栞ㇾ木謂下隨ㇾ所ㇾ行林木斫₂其枝₁爲中道識上之、とみえたり、新古今集西行「よしの山こぞのしをりの道かへてまだ見ぬかたの花を尋ねん」近世文房の具にしをりと名づけし物あり、綾綺をもて小幅を造り、右の歌をかけり、讀書いまだ卷を終ざる時に、葉子間に挾み後日の標識とす、古今其止所に乙するに勝れり、また慈圓の歌もかけり「かへりては重なる山のみねごとにとまる心をしをりにやせむ」槃また聞、相模國三浦山中の人薯蕷の蔓の枯たる比、根の肥たるを掘に、先蔓ある時にそのもとへ麥粒を一摘つゝうめ置て、冬より春かけて薯蕷を掘に、その麥の生たるを標識とさせることゝ、此もまたシヲリのこゝろ也

○牛魚をもいへり、常陸水戸の海におほし、方言にマンボウといふ也、こは腸の名とせり、魚の名をばウキといへり、福州府志に載たる斑車魚なり

しろを　順抄に鮊を注したり、即銀魚也、今いふシラウヲなり。この魚の小なるを銀毛といふ、朱竹垞日下舊聞にみえたり、尙詳なるとゝ、金友理太湖備攷にみえたり、その他の數說は

補　夫木集　仲正
雨ふればかきねのしとゞそぼぬれてさへづりぐらす春の山さと

予が魚品に載たり

しこゝ　順抄に鵐を注したり、紀には巫鳥と書たり、古語拾遺に片巫をシトヽノリとよみたり、この鳥巫にゆゑあるべし、淸記にいへるミコトリもこれにや

しくま　齊明紀に、肅愼献生羆二、羆皮七十枚、とみえたり、羆こゝにシクマとよみたり、愛瀰詩にあるものはおほくは羆といへり、松前方言にキンクマといふ、是詩の韓奕の章にいふ黄羆なるべし

しろき　式に白酒をよみたり。酒をキといふはクシの反キなり、久老區志考に詳也、くしの條をみつべし

しほて　輔仁和名、崔禹を引て、楊蕨菜を注したり、下野國日光山にて四五月の比菜羹となせしシホテといひし野草あり、是蒸し救荒本草に載たる粘魚鬚且牛尾菜の屬なり

しまも　丹抄に海藻を註したり、なのりその條を見つべし

【附箋】栗　虱シラミ　後院云、或人曰、虱ハ北方ヲ知ル物也ト、予此說ヲ聞テ大ナル虱ヲ机上ニ放テ試ルニ、虱首ヲ北方ニ向テ行ク、彼說ニ違ハズ、此ヿヲ或學者ニ談タレバ、其ヿハ五雜俎ニ見ヘタリト云、予イマダ五雜俎ヲサグリ求ルニ遑

アラズ、軍中山路ニ迷ヒ方角ヲ知ラザル時、老馬ヲ放テバ道ヲ知テ行ト云傳ヘタリ、若老馬ナキ時ハ蟻ヲ以テ北方ヲ知テ道ヲ尋ヌベシ云々

しやこ　順抄に、珠玉類に廣雅を引て、車渠、俗音謝古。史外おほみかひの條にしるしたり

○蝦類にいふは閩書南産志に載たる蝦姑なり、これ亦其字音を轉訛せしなるべし、或はシヤクエビともいへり

しりくさ　万葉巻十一に、塩蘆に交れる草乃尻草のとよみたり、順抄に玉篇を引て、繭似レ莞而細ク堅シ宜レ爲レ席ト、注に和名爲、また辨色立成を引て鷺尻刺とみえたり。今の俗或は黒三稜を呼べり、ヰは龍鬚なれば略となり

校云塩ハ潮トアリ

しばくさ　万葉巻六に、志婆草長生にけり、これ爾雅に載たる傳結縷なり

しひなせ　順抄に粃を注したり

しらぎく　白菊なり、新羅菊の義なりといへり、詳にきくの條にしるす

しらかし　景行紀に、平郡乃山の志羅伽之、万葉巻十に、白杜材と書てシラカシとよみたり、記には白檮とも書て有、尙かしの條をむかへみるべし

〔図〕大嘗祭式に細螺二十坩とあり、万葉十六二十九丁小螺見ゆ又拾遺集物名にも見えたり

〔頭注〕〔図〕

したゞみ　　記に志多陀美、神武紀に、いせの海の大石にやはひもこほろふ之多儾瀰こよみたれば、下のタは濁音なり。順抄に食經を引て、小蠃子ハ貌似二甲蠃一而細小、口有二白玉蓋一者也。注に漢語抄を引て、細螺、之太々美こあり。按にこの貝は榮螺に似て、いこ細小にして扁く、扁螺よりや、大也、紀伊にて鳳皇貝こいへり、食經に白玉の蓋こいへるは即この靨なり、今の俗に䗩貝こいふもの也。讃岐國にてツブこいへる小螺あり、蓋なく礁石のうへにはひあつまるこぞ、是同類なるべし。蓋なきを異なりこすこいへり。伊豆國屬島八丈にてシダ、ミこいふものは、即礒貝にて、國書に載たる石磷なり、其形は稍ことなれど古名のこの島に傳はりたるはめでたし。但上のタを濁り下のタをすみたるのみ、顧峠が海槎錄に載たる相思螺、都元敬が鐵綱珊瑚に載たる長生螺、即是なり。又郎君子こもいへり

谷川氏云、細螺は吐哯をつだみと云に依れば舌吐の意なるべし、今きしやご、又ちしやごと云物なり、玉蓋は本艸に甋思子と云る物にて、今俗䗩貝と云是之といへり。又或人云、したゞみは榮螺の如くにて角無物なり。ちしやごとは異之と云り。又或人云、如斯なる形にて物につきてある貝之といへり。又荒木田久老云、志摩國にて今もシタゞミといふ、又尻高ともいへり、さてフクダミと云物あり、此名と合せて思ふに、したゞみは尻高だ

古今集貫之が長歌にもよめり

みの意にて、ふくだみ、低たみの意、ダミは此類の物名かといへり

しらたま　允恭紀に赤石海底有眞珠、こゝにシラタマとよみたり、万葉卷七にも眞珠をよみたり、卷六には白珠と書たり、式の交易雑物の條に、志摩國白玉千顆とあり、今は伊勢國、尾張國、肥前國より眞珠をいだせり

しらがひ　類聚雑要にしらがひを大饗に用ひし事みえたり、今白貝といへるは忘貝に似て白く、横に眞木綿の糸を延たるやうなる章あり、佐渡國人は餅貝といへり、丹後國宮津に文珠の白貝といへるは溝貝に似て理あり、これらは皆福州府志に載たる白蛤なるべし、また俗に忘貝の白きをもいへり。歌によめるはなべて貝つもの丶浪にさらせる白きをいふなるべし、名寄歌合に「月かげのしらゝの濱のしらがひは波とひとつにみへわたるなり」また夫木集に「はる〴〵としらゝの濱のしらがひは夏さへふれる雪かとぞみる」

しほがひ　師兼の歌に「いせの海の浦の汐がひ拾ふとのあまりに袖のぬれてかはかぬ」今は文蛤に似てみつの角そろひたる貝をいへり、あるはこれをやちよがひともいへり

しらさぎ　徹書記の歌に「しらさぎの雲ゐはるかに飛消ておのが羽こぼす雪の明ぼの」尚

さぎの條にしるしたり

しきかは　敷皮なり、たゝみの條をもむかへ見るべし

しゝむし　拾芥抄卷一諸頌部に志々虫あり、考ふべし

圂しこくさ

しのぶぐさ　輔仁和名に、垣衣、一名烏韮、和名之乃布久佐、一名古介と註し、また別に烏韮を知比佐岐古介と注したり、順抄にも苔部にいだしたり、苔は水衣ともいへれば、水陸ともにおふるをもて、さる文字を設るなるべし。白氏文集に麗山高吟あり、墻有衣兮、この衣といへるも苔なり、清記に、くちたる軒端のはしなどに生るがをかしと書たるなり、新古今集に「つく〴〵と春のながめのさびしきはしのぶにつたふ軒のたま水」また六帖に「ひとりのみながめふるやのつまなれば人をしのぶのくさぞおひける」槃おもふに、むかしはさたかにこれとも充て釋ねど屋遊てふ苔の類なるべし。屋遊は屋瓦上青苔也、とみえたり、されば屋のへの端に生れば、つねに人のめにふれずして、しのび〳〵に生ひしげるなれば、人をしのぶといへるこゝろにて、忍の字をあてたらんか。万葉卷六に之努布草解除而益乎、とよ

補　續古今　忘るゝも忍ぶも同じふるさとの軒端に生る草の名ぞうき

みたるも、しのぶ草を慕ニ云（シヌフテフ）云云にかけていふならん。さて今の都にも俗にもいへる眞木の葉ひとひらみたるやうなるくさは、つねにつひぢなどには見ることなければ、それともおもはれず、扨また金星草などをいへるも如何、また萱草とおなじ物なりと大和物語にみゆれど、すでに万葉巻三に、家持の萱草吾紐ニ付とよみたるをこれにあてたり、また伊勢物語に、わすれ草をしのぶ草とやいふとていだせしは別なる物を、わざとそれにかまへていへるをや、それを同物のしるしとしたるは非之。詩の伯兮の章に詠じたるを後には竟に諼と萱とを傳會して、順抄にも草部に入て、後の歌には花咲とをもよみたれど、しのぶぐさには花ある歌なし、わすれぐさの條を見るべし

しらげよね　字鏡に粳を注したり、順抄に粺を注し、糳を萬之良介（マシラケ）乃與禰、糲を比良之良介の與禰と注したり。字鏡にまた粺を與禰之良久と注したり

しもみくさ　莫傳抄に菊なりといへり

しのすゝき　すゝきの條にしるす

しほきくさ　尾張風土記に、海部郡長師山に藥草あり、シホキクサといふ、四時花實を結び、

万葉巻三、あめのはらふりさけみればしらまゆみはりてかけたる夜みちはよけん

玉だすき三巻云、息（イキ）を古言にシとも云へり、其は息（イキ）長（ナカ）鳥（トリ）を志

潮の進退に依て花實互に譲、潮の進る時に花開、退時に實をむすぶ、其花菊のごとく、實は棗の如く、醫家こりて胸裏の疾を治するに神功ありといへり。これかの國の朱草の屬なるべし

しらまゆみ　万葉巻九に、白檀弓今春山に、とよみたり、まゆみの條をみつべし

しろつゝし　万葉巻三に、美保の浦廻（ラ）之白管仕（シロツヽシ）とよみたり、卽白躑躅なり

しほのまつ　體源抄に灰の名にや應仁の比より出たり、土をよく炒たる也、杉の灰木綿の灰などもよろしといへり

しながとり　眞淵云、万葉巻七に、志長鳥、是息長鳥とおなじ物にして、卽鸊鷉の事之ニホドリまたミホドリともいふ　また巻廿に、にほどりのおきなが河はたえぬとも、また古事記に、みほどりの潜息（カヅキイキ）づきと云々、順抄に鸊鷉、和名尓保、鳬小而好沒二水中一也。或はいふ、志長は嘴長の略歟といへるはあらじ、今の俗にカヒツムリといへり、蝸牛をカタツムリといふツムリと同義なるべし。また按に、万葉巻九に、水長鳥安房ともよみたり、よてカクガノトリなりともいへり、いかゞ、信がたし

しまつとり　記に志麻都登理鵜養とよみたり、神武紀にも、万葉にもこの詞をよみたり、是

長鳥とも云ふにてしるべし、志長鳥は鷁鵬の事にて俗にムグリ鳥カイツブリなどゝもいふ鳥なり○水鳥なるが其

補　息い長く水中に潜りゐて鳴もするものなり云ゝ

野つ鳥きゞし、家つ鳥かけの例にて鸊鷉をいふといへり

しづくたま　万葉巻七に、石著玉とよみたり、こは即白玉にて鰒玉にや、また石に胎る玉にや

しろつきげ　白月毛也、眠窻集に駩をよみたり

しろあかげ　白赤毛也、黄をいへり、詩魯頌の註に黄騂を黄といふ、凡馬の黄色なることはおほく白しといへり、ある歌に、馬の玄きが黄になるといふとを、いはがねのこゞしき山をこえくればわがくろこまも雪になりけり

しろよもぎ　輔仁和名に白蒿を注したり

四十がら　十題百　寂蓮、朝まだき四十がらめぞたゝくなる冬こをかせるむらのすみかを。

今云四十唐なるべし

しきなみぐさ　莫傳抄に廡花也といへり

しのゝめぐさ　藏玉集に槿也といへり

しらゆふばな　ゆふ又うつゆふの條にしるしたり

しだるはしたゝるの約めなり

補

朱槿

しだりやなぎ　順抄に柳を註したり、万葉卷十にもよみたり、紀に、しだるといふ人の名に垂の字を書たり、漢土の書に垂柳と書たるもあり、本草の注に揚起するを楊といひ、下垂するを柳といへり、この説連文釋義にも載たり、やなぎの條を併せ見るべし

しでのたをさ　袖中抄に、賤の田長也、郭公は勸農の鳥にて、過時不熟と鳴なりといへり、タヲサは田事(タワサ)なるべし、ワとヲと通ふ例なり、古今集に「いくばくの田をつくればかほとゝぎすしでのたをさを朝な〳〵よぶ」

しだり櫻　夫木集、俊頼「あすもこんしだり櫻の枝ほそみ柳の糸にむすぼれにけり」或云、いま云糸櫻なり　〔〇以下六行余白〕

しもつけのはな　拾遺集物名に「植てみる君だにしらぬ花なれば家しもつげん事のあやしき」夫木集にもこの花をよみたる歌有とおぼえつ、李荷花品に載たる綉麻なるべし

しのゝをすゝき　すゝきの條にしるしつ

須行

頭萬葉集抄卷五十五云、郭知玄釋菅をしていはく、白花似茅無毛といへり

校云、邢昺云、爾

すげ　菅をよみたり、記に須宜ともよみ、万葉卷十四に、麻萬能古須氣、また須我ともよみたり。按に此草凡て三種あり、そのふたつは眞菅にて、これを漚ばいと清らなればスゲてふ名を負たり、紀に清の字をスゲとよみ、また清々をスガ〱シなどよめるもあり、また素鵞をスカとよむもこの義也、万葉卷七に、白菅乃眞野とよみたるも、清きをこめたる詞なるべし

○眞菅　万葉卷十二に、眞菅吉宗我乃河原、卷十一に王之御笠爾縫有在間菅、同卷に、眞野浦之小菅乃笠、また眞野池之小菅乎笠爾、また垣津旗開沼之菅乎笠爾縫、また難波菅笠、また三吉野水具麻我菅（水具麻は水隈なり）これ笠に縫てふ菅は皆水にかけてよみて、山にも野にもよみたる例なければ濱菅なると明か也。これを臺草に充たれどあしゝ。按に、詩の小雅に、臺笠また南山有臺、これ臺は山生、故一名山莎、爾雅に臺ハ夫須、また薃侯莎、これ夫須と莎とおのづから二物なり、さるを本草綱目に莎草、一名夫須といふは誤なり、臺の濱菅にあらざるとまた明か也。臺は卽山菅也。但その臺笠とあるをもて、大方の人笠に縫ける濱菅と覺へたる之○詩の陳風に、白華菅兮、爾雅に、白華ハ野菅、陸璣云、菅似茅而滑澤無毛、邢昺云白華亦茅類也、漚之柔韌異其名謂之爲菅、因在野未漚者爲野菅耳。濮一之云、左傳雖有絲

雅郭云トシテ署同ジ文ナリ

麻無棄菅蒯白華俗名白芒即菅也、こゝにいふ菅はまさに茅なるべし、猶何楷古義昂部白華の注を參省すべし

○やますげ　順抄に、麥門冬を註したり、式おなじ。万葉卷三に、おく山のすげの葉しのぎふる雪、卷七に、卯名ての神社の菅の實を衣に書付、同卷に妹がため菅の實つみに、卷十二に、山菅のおもひみだれて、同卷に山草と書てヤマスゲとよみたり、卷四に山菅の實ならぬことを

附て言、山菅の實不成とよみたる歌の心を甞て聞また甞ておもふに、これ序哥の體にかゝる例あり。万葉卷九に、いそのかみわさ田のほにはいでず、卷十に、あきはぎの花野のすゝきほには出ず、とよみたり。さて秋はぎの花野のすゝきといへば、早くほにあらはれいでしすゝきなり、わさ田といへば早くほのいづる田なり、さるをかくいへるは、上の詞に用なく、下にほといふことをいはん料の序なり。惣ていにしへの序歌は、上の詞にかゝはらぬこと。卷四に、おみなべしさく澤に生る花勝見、卷十一に、かきつばたさく沼の菅を、とよみたるが如く、おみなべしも、かきつばたも用なし、いにしへぶりの歌は、かく詞のうちに、虚詞あるも

校云金葉集ノ歌ハ水鳥の

のおほし。近體の如く、序歌にも冠辭も、皆緣語をとりて、三十一もじながらはしなくこゝろをこめたるのみにはあらずなん、さてまた、或は山菅のみなるが如くに實のならず、わさ田のはやくほのいづるやうに、穗にいでずと見るべき例もありければ、彼はあれと我はなきにとよみなしたる反轉の意之けん

○いはすげ　万葉卷三に、おく山の磐本菅を、同卷に、あしひきの石根(イハ)こゞしみ菅の根を、卷四に、磐影に生する菅の根、これら今いふイハスゲならんか。今山中のいはねにおふるものは、其葉靭剛にして折やすし、笠にぬひ、蓑衣にさす用にあたらず、眞菅と更にとなる事しるべし。されば眞菅、山菅、石菅すべて三種なり、薦にをりなすものは正に眞菅なるべし

なゝふのすけ　万葉卷三に、丹生王長歌に、左佐羅能小野之七相菅、按に、紀に八相柴垣の相にて節の約なりといへり。長明が海道記に、七(ナヽ)編の薦席(コモムシロ)と書たるもまた節あるを詳也。また按に、神代紀の下に造八重蒼柴籬、注に柴此云府璽(フシ)とみえたり、これも七編の義なるべし

とふのすがごも　金葉集に「水鳥のくひなのつらゝとけぬべしうへさむからてとふのすかごも」また仲實朝臣の綺語抄、範兼卿の童蒙抄などにも載たる歌に「みちのくの十府菅薦

つらゝの枕ひまもなしむべさえけらしとふのすがごもトアルヲ誤レルカ

な〻ふには君をねさせてわれみふにねん」（説苑に三經之席とあり經はへの假字なり）十府はみちのく南部にある地(トコロ)の名ゝ、かしこにつくれる菅薦(スガゴモ)なり、今も尚つくれるよし聞たれば、その國人に請うるにまさしく石小菅にて十編にをりたる薦(コモ)也。いにしへの手ぶり今に遺(ノコ)りたるこそげにくめでたけれ。さるを近き比みちのくにてつくれる大藺席を、いつはりてすが薦といへり。八雲御抄に、但馬なるこふのすがごもよみたれば、むかしはその國にもつくりたらんか、さればこれも山菅か、濱菅もておりたるべし

すし　順抄に爾雅の注を引て、蓤蕪、似羊蹄葉細味酢者也。註に、和名須之。これ羊蹄草なり。羊蹄和名シとあり、此草に似て味ひ酢ければいひしなり。按に是酸模なるべし

すゝ　神代紀に野篶(ヌスヾ)八十玉籤(ヤソクシ)、万葉巻二に、水篶(ミスヾ)苅信濃、あるは眞弓にむかへ眞篶(マスヾ)なりともいへり。また吉野の嶽にすゝ分て、大竹のすゝ吹風、すゞの下道、また榮雅集に、たかむなのほそきを奉られて、是はすゝか、竹かいづれと見わきてと有、また安宅(アタカ)の謠に、旅の衣はすゞかけとも見えたり。さて今信濃にていへるすゞは小竹(シヌ)の黑きを云なり、今こゝにいふスヾはクマザ、にして、卽箬なり。和訓栞にスヾは涼しき義なりといへり、いぶかし

記には椙と書たり

すろ　順抄に、椶櫚を注したり。又云、俗云種呂（シュロ）、これスロは字音の轉なり、夫木集に「朝まだき梢ばかりに音たてゝすろの木過るむら時雨哉」

すぎ　記に椙をよみたり、スギは進木（スヽキ）の義なり。顯宗紀に神椙、注に此云、須擬。按に集韻に椙、烏昆切、音溫、杉也。三代實錄に誤て椙に作る、今俗或はこれによる。万葉巻十九にも椙野と書たり

すみ　式に炭をアラズミ、和炭をニギズミ、また熬炭あり、紀に焃炭をオコシズミとよみたり、墨に似たればいふといへり

○灰墨は獸皮薰（クス）ぶる灶（カマド）の突（ソコ）に付たる煙なり、これを煙膠といへり、墨をいへるは染ものなれば染の義之分注劉照釋名云、墨晦也、言似物晦黑也其はじめは松煙油煙また漆などをまじへていとそのむかしは墨なし竹梃へ漆を點して書けりといふ、魏晉の時にはじめて墨丸有、わが國に墨の製をはじめしは推古の御宇に高麗の僧傳へたりとぞ、尙詳に予が暇積抄巻十二にしるしたり。和訓栞に、すみ、墨をよむは、そみの轉、江州丹波の制尤ふるし、其色淡黑にて麁薄なり、新續古今集に、熊野より歸まうでくと聞て、よき墨や侍ると尋ける、古今著聞集に、後白河院熊野詣に、

藤代の宿にて國司松烟を積て御前に置たりと見えたり、爲重の歌「あふ事を松にかけたる藤代の墨の名しるきかぢの玉づさ」朝野群載に、伊豫國墨、讃岐國墨、新猿樂記には淡路墨と見えたり　〔○以下二行余白〕

すゝき　をぎ、をばな三名一物、卽芒なり、是其活本の名也、カヤは其刈りて輿葺料とせし時の名之、チとツハは卽茅之。チとカヤはおのづから二物之、チガヤを一物とせしは違へり。また別に三脊茅あり、これはいにしへ包藉縮酒の用となせしもの之、かやの條をむかへみつべし。游清嘗て須々岐考を作りておくりたり、卽こゝに登載す、其名義に云、すゝむといひ、すさむといひ、すそりといひ、すゞしといひ、すぐ〳〵、すら〳〵といふ、すの字はみな物のとくとゞこほらず、やすらかにおひたつをいふ詞之。此草は、他の草にすぐれて、すぐ〳〵と高く生のぼれば進草（スヽキ）意之。杉（スギ）といふも他木にすぐれて早くおひ立とて進木（スヽキ）意に名付たると同例之、木といひ草といふは、常の詞にて木を草、草を木とたがひにいふ事も古今その例すくなからず、また案るに古言に芒草をのぎと訓たり、此草の葉に稜角ある事劍芒鋒芒の如くなれば、進芒の意にや、劍をつるきといふきの字も同じ意之。漢土にても茅葉如矛とみえて、名

付る心はかはる事なし、このふたつの内いづれよけん、己が心にはえ思ひ定ねばみなあげたり。ある人すゝきは進毛の義くこいへり、こは神代巻一書に、素盞嗚尊の毛をぬきあかち給ひしが、さま〴〵の木になれるよしみえたるによりて、毛を木にし草木を末になしていへるなれ共、そはひたぶる書にまごへるなり、すべて神代の事は有が如く、無が如く、おほかたに閣捨おくべし、いかに神のみしわざなればとて、いかでか毛をもて草木とはなしたまはん、さは人の身に生る毛髪も、山野におひたつ草木も同じさまなるものぞこいふとわりをしらせんとて、かくは書しにて、毛義を移して木こいふにはあらず、もしいひていはゞ、木を移して毛こいふこもいひてまし、漢土にても人を小天地こいひ、身上の毛髪を山野の草木に譬へたり、扨いひなるゝまゝに、うつしては草をも毛こいへり。野菜を渓毛こいひ、荒たる地を不毛の地こいふ是之。此間にても苔(コケ)を疑毛こいひ、蘿を小掛毛(コカケ)こいふかごし

ひこもこすゝき　古事記上巻八千矛神の御歌に、夜麻登能比登母登須々岐宇那加夫斯(ウナカフシ)、こあるは、すゝきこいふ名の書にみえたる始之。こは後世いふ花すゝきこ同物なるべし。花こはのたまはねごも、宇那加夫斯(ウナカフシ)と有によりて、穗の出たるがなびきたれたるさまは、おしはか

らるゝ也。按書紀神功卷に幡荻穗出吾也、また仁德卷に敦數茅荻取氷以置其上、また孝德卷に、三河直蘆人名なりとあるをみれば、古すゝきといひし物一種にあらぬに似たれども、よく思へばすゝきをもとにて、其形の似たるをば荻をも蘆をもかよはしてすゝきといひしなるべし。物は異なれども似たる所あれば同名もて呼ぬるは、古も今も其例いと多し。一二其證をいはゞ本草和名、新撰字鏡、和名抄をまじへ引　桔更アサガホ、牽牛子同上、蕣同上、黄芩ヒヽラギ、杜谷樹同上、巴戟天同上、木天蓼ワタヽビ、蒟醬同上、釣樟クヌキ、欅樹同上、款冬ヤマブキ、山吹同上、女蔵アマナ、黄精同上、蛤ハマグリ、貝母同上、薇蔞ムクラ、葎草同上、石長生ホト、百部根同上、樒シキミ、莽草同上、此外數しらず多けれども、くだ〳〵しければさのみはひかず。さて又漢土の字を求るに、上古の書にては書經詩經にみえたる茅字なるべく、いたく後世の書にては、李瀕湖が本草綱目に載たる芒字にいとよくかなへり。芒字ははやく本草拾遺にみえたれども、今いふすゝきの形狀をつばらにとけるは綱目なれば、かくは擧たり爾雅には莣と書たり、同物なり

はたすゝき　すゝきの穗に出たるをいへり、此名いつばかりよりいひ出たるにや、定かならねども、神功紀の天疎向津媛命の御詞に、幡荻と有、是始なるべし、荻字を用ひしは此比は荻

をもすゝきといへば、たゞ荻てふ詞に借たるにて、はたすゝきとつらねいひては、今いふすゝきなる事疑なし、さてはたとは咲出したる穂のさまをいふ、はたはすべて高くひろごりたるをいふ言にて、旗といひ、鬐といひ、はたがるといふ、みな同意之、旗すゝきと出したるに付て、旗のごとき義と思ふはたがへる說也。又魚ノ鬐に似たれば鬐すゝき也といふもあしゝ、是らの詞には本末なし、よし又本末有とても、いづれとも定がたし、たゞ高くひろごりたる物をさして、はたといふと心得べし。萬葉集によめる歌、旗須爲寸、卷八に、波太須珠寸、卷十四に、波太湏酒伎、同卷、波太須酒伎、卷十六、者田爲々寸、卷十七、波太須酒吉とみえたり

をばな

古言に招引ををといふ、書紀に招禱といひ、風招といひ、誘といひ、和名抄に、攣媒鳥、招餌、蚇蠖といひ蚇蠖は首尾を一所に引よせつゝゆくゆゑに招虫の意之、今俗は尺取むしといへり万葉に鷹を呼を呼久といひ、又愛をも惜をもをしとよめる、皆此方に招引意之。さてすゝきの穂の風に靡くが、物を招に似たれば、招花とはいふ之。荻をいふも招草也、草をキといふよしは前にいへり、もしくはたゞ招の意に名付たる歟、さりながら體語の時はヲクといはねばかなはねば猶招草の意なるべし是も穂に出たるが靡くさまは、いとよく似たる物之、後世人招花の名義をばとき得ねども、其靡くさまにつきて、歌にはみな招とよめり、こはゆくりなく、此草の名にかなひし

え、古今集秋上、有原棟梁「秋の野の草の袂歟花ずゝき穂にでゝまねく袖とみゆらん」拾遺集巻三、秋、讀人しらず「をみなべしおほかる野べに花すゝきいづれをさしてまねくなるらん」後撰集六巻、秋、いせ「宿もせにうゑなめつゝぞ我は見るまねく尾花に人やとまると」万葉集には招(マネク)とよめる歌一首もなし、古今集よりはじめて見えたり、万葉集に、をばなを乎(ヲ)花(バナ)、乎婆奈(ヲバナ)、尾花(ヲバナ)、麻花(ヲバナ)、草花(ヲバナ)などと書たり、みな字をかりたるにて本訓にはあらず、此内草花とかけるはいかなる意にか、案に衆草の内にて殊に高く穂に出て人にもみゆれば、草花といへばやがてをばなの事と誰(タレ)もしりぬるからに、かく戯れ書(カキ)しなるべし

薄

和名抄に、薄字を擧て、新撰万葉集の花薄、弁色立成の芓字を引てはなすゝきとよみ、且爾雅を引て、草聚生日ㇾ薄と注せられしはいかゞ、古すゝきといひしは前に擧るが如く茅(スゝキ)をもこにて、夫に似たる荻蘆をも通はしよべるなれば、たゞおしなべての野草をさせるにあらぬを、此薄字をすゝきの訓に用ひしは古意にそむけるに似たり、故つらつら新撰万葉に花薄二字を用ひられし意を考るに、すゝきはもとしげりたる物なれば、はやく此書かゝせ給ふころにはすゝきといひて、やがて物のしげりたるをいふ詞とさだまりたるなるべし。扨から國に

て薄字はすべて物のしげくせまりたるをいふ字にて、草聚生曰レ薄とも、木曰林草曰薄ともあれば、彼是を思ひよせて、薄字はたゞしげくせまりたる義をのみとりて、かりにすゝきの訓をあてられたるなるべし。順朝臣も、名物にはつはらながら、猶思ひたらはぬふしもあれば、新万にすがりて此字を用ひ、爾雅を引て新万の說を助られたるなるべし。さりながら新万には、花薄二字にかゝれたれば難なし、薄一字をはなずゝきとよまれしは、此朝臣のひがことなるべし、再案るに木曰林草曰薄、また草聚生曰薄と有によれば、此字をすゝきと訓て、一種の草とするはあたらねども、字書に又簾也、曲禮、帷薄之外不レ趨、また蚕薄などみえたるによりて考るに、簾に作るにたゞおしなべたる野草は用べからず、必すゝき、をぎ、あしの類なるべし、吾國にても、をぎ、あし、すゝきにて簾を作るつねの事え、しからば此薄字もをぎ、すゝき、あしをさしていへると無にあらねば、此字を訓てすゝきといはんもひたぶるにたがへりとは定めがたし。たゞ順朝臣の注せられしおもむきにてすゝきと訓て、一種の草とせんはかなへりともいひがたし。又新万に、花薄とよまれしも、此字義をよくわいだめて用ひたまひし歟、猶前にいひしごとくたゞしげき義をかりて用ひ給ひし歟、今よりしてはいづれとも定めが

たし

はなすゝき　此草の穂に出しをばはなごもはたすゝきともいひたれごも、花すゝきこいへる事古書に見えず、然るに万葉集巻八「めづらしき君が家なる波奈須為寸穂に出る秋の過らくをしも」この波奈須為寸こ書たる歌、集中にたゞ此一首なれば、こは波太須為寸こ有し波太を波奈に誤寫せしなるべし、扨かく誤て後は、波太こいふよりは波奈といへるかた詞もうるはしう聞え、且花橘・花蓮、花勝見などよめる例もあれば、遂に夫にのみよみならはして、はたすゝきの名はかくれしなるべし。後世は花すゝきこのみよみて、旗すゝきこいはねば、今よりみては別物にやこ思へごも、よく其本を考へぬれば、唯同物なりけり。新撰万葉には、花薄こ書る所ふたつ有、扨是より後古今集をはじめ、世々の集みな花すゝきこのみ詠て、旗すゝきの名は絶たり　をりをりひとつふたつはみえたれども、よくその意をとき得てよみたるにやおぼつかなし　又後には尾花の花すゝきとさへ詠る歌あり、元眞集に「さだめなくまねく尾花の花すゝき穂に出る秋はからるゝ哉」

しのすゝき　後世の歌にしのすゝきこいふ一種有、いこゝ詠なしたるはみな古今集の誤を受たるにて、古はふつになきとこ。円珠庵も縣居も皮すゝきの皮義をば弁へられたれごも、後

世しのすゝきとよめる哥多きにまどひて、別にしのすゝきの說を擧られたるは誤え。故つばらに其よしを弁ふべし。まづ萬葉集中の皮爲酢寸を波太の脫字としぬれば、其外にしのすゝきをよめる歌なし。たゞ卷七に、妹所等我通路細竹爲酢寸我通靡細竹原とある一首のみえ。されども此細竹爲酢寸はすゝきの事にあらず、細竹の生茂たるを、すゝきといへるえ。其證は結句に、細竹原と有にて知べし。もしすゝきの事ならんには、結句にすゝき原といふべき理なるに、さもあらぬをみれば、細竹は體にて、すゝきは用語なる事いちじるし。若又是を細竹薄原を略きて細竹原といふにやとも思ふべけれど、さる例はたえてなし。古事記中卷に、阿佐志怒波良許斯那豆牟とみえ、万葉卷十、淺小竹原乃と有、此外細竹原とつゞけいへるは多く例あり。されば此歌の意は妹がりと吾通ひぢの細竹原われしかよはばなびけ細竹原、と重ねいふべきを、原といひては詞のたらはぬから、すゝきといひたるにて、やがて原といふと同意なり（詞を重る例は、卷八に「眞玉つくこしの菅原われからで人のからまくをしき菅原」この外猶多し）集中に細竹をたゞ假字となして、人をしぬぶを細竹櫃などと書る類いと多きに就て、此細竹をもしなぶ義の假字と思ひまがふるはいたくひがごとえ。又題に寄草と有によりて、竹類にはあらじと思ふべけれども、すべて竹

類は木こも草ともわかぬ内に、此細竹は丈も低く、專に似たる物なれば、みな草部に入たり。卷八寄草といふ題にて「あふみのや八橋(ヤバセ)の小竹(シヌ)乎(ヲ)矢にはかでまこ有こや戀しき物を」と有は、正しく小竹こ有て題に草こいへり。　かく本を正しぬれば集中に一首もしのすゝきてふすゝきはなく、古今集よりこのかた、其物なくして其名出來はじまり、果にはあらぬ物をさして夫ゝこ作り出しを、世々の人〳〵一人も知者なく、中々にあこなき說をさへいひそへ、虛をもて實となし、今世に傳へ來ぬ、近來古學さかんにおこなはれて、古の名物もつぎ〳〵明らかになりぬれごも、此誤をばいまだ一人も正せし人なし、故くだ〴〵しけれごもつばらに是を弁へおくなり

いこすゝき　いこすゝきといふは、常のすゝきの穗の、風にみだるゝさまを、糸にみたて、作者の心しらびしてよめるなり。　花を雲に見なし、紅葉を錦に見なしてよめると同例にて、一種のすゝきにあらず。　建長八年百首歌合、衣笠內大臣「花すゝきすそごの糸をよりかけて玉をしげぬく秋のしら露」俊賴集に「花すゝきまそほの糸をくりかけてたえずも人をまねきつる哉」是にて知べし。　扨是をも數こいひなれてば、うちまかせて糸すゝきこもよめり。　權

中納言長方卿家集「すかるふすくるすのをのゝ糸すゝきまそほの色に露や染らん」是也。扨かく糸すゝきといひなるゝに、是もはてには糸すゝきといふ一種有と思ひ誤り、然思ふ心よりすゝきの内にて、別て糸によく似たるを、是ぞ糸すゝきなるといひ定めたる物ゝ。されども古へにいひしは皆穂のさまもて名付しを、今世は葉のいと細きを糸すゝきといふは、いよ〳〵たがへり。殊に小野蘭山などは、李瀕湖が說の石芒をもて糸すゝきにあてゝ、夏穂をなすといへり。古の糸すゝきに夏穂をよめるともなく。又一種の物とかぎれる事いかなる書にかみえたる。是らみな近俗の謬說になづめるよりの誤ゝ。すべて吾國の古書をよく讀とかぬは名物の學問もつばらにはなし得がたし

○しげき事をすゝきといふ、すゝきといふは古より今に至るまで一種の草の名なれども、多くいひなれてはたゞしげき事にも轉じて、後世の詞にては幾むら幾もとゝいへる義に用ひしも見えたり。攝津國風土記、雄伴郡夢野條に、又曰都須々岐草生多利見支、此夢何祥、とあるは、ひとむらの草といふがとし、下句に背上生レ草者、矢射背上之祥也、と有にてすゝきならぬはいちじるし、是を下河邊長流が書に、假字にてすゝきと書いだして、すゝき草の事とせしは誤

之。又万葉集卷七、妹所等吾通路細竹爲酢寸吾通靡細竹原と有も、細竹のしげりたるを、すゝきといへる也（此すゝきくさならぬよしは既に前に委いへり）又四季物語に、放免の下人の袖袂に、付たるもゝなりへうのすゝきになりたるなど、けしからぬ見ものゝ、といひ、西行集に「よしの山風にすゝきに咲花は人のをるさへをしまれぬ哉」など有も、瓢のしげく、花の多きをすゝきといふ也。又信濃國人の物語に、松本邊にてはをぎ、あしなどのおひしげりたるをすゝきといへり

○まそほのすゝき　後世十寸穗（マスホ）、眞蘇か（マスウ）、眞麻（マソヲ）と三種に說分たるものあれどひがとなり。

友人清水濱臣よくときさとしたればこゝにしるす。濱臣云、堀川院百首薄、俊頼「花すゝきまそほの糸をくりかけてたえずも人をまねきつる哉」權中納言長方卿家集、薄「すがるふすくるすの小野の草薄まそほの色に露やそむらん」山家集、月前薄「花すゝき月の光にまがはましふかきまそほの色にそめずは」夫木集十一、薄、鴨長明（左註に三種の薄といへれば、無名抄にいへるマスホ、マソヲ、マソウの三種をよみ分しなるべし）「日を經つゝいとゞますほの花すゝき袂ゆたかに人まねくらし」に「しろたへのますほの糸をくりさらしまがきにさほす花のを薄」に「秋ふかき霜よりのちの菊の色をかねてますほのをばなにぞ見る」此三首歌伊勢記云、ゆきつきて見れば、かしこを二見の浦云云

校云そか原本アリ
校云うか

うか原本アリ

圏荻 契沖云、詩ニ芦花荻花通ジテイヘル様ニ聞ユ、難波ノ芦ハ伊勢ノ濱荻ト古ヘヨリ定ル名目ミ万葉四、

さるほどなる板屋のをかしげに住なせるに、いろ〳〵のぜんさいども盛過たれど、よしある人のあたりと見えたり。時雨などいふばかりにはあらで、はれまなかりければ、いたづらにこもり居たる、なぐさめがてら、ぜんざいなる花のいろ〳〵一ふさづゝとりならべて見るついでに、三種のすゝきといふ事人のかたりしを思ひ出て、こゝろみによめる云云 以上夫木左注 長明無名抄に、あめのふりてふるき事などかたり出たりけるついでに、ますほの薄といふはいかなるすゝきぞなどいひしらふほどに、ある老人のいはく、和多のへといふ所にぞ此事しりたるひじりはある、と聞侍しか、とほの〴〵いひ出たりけり。登蓮法師そのなかに有て、此言を聞て、詞すくなになりて又とふ事もなく、あるじに蓑かさしばしかし給へといひければ、あやしと思ひながらとりいでたりけり。物語をも聞さして、みのうち着、わらぐつさしはきて、いそぎ出けるを、人々あやしがりて、其故をとふ。和たのへにまかるなり、年頃いぶかしく思ひ給へしことをしれる人ありと聞て、いかでたづねにまからざらむといふ。おどろきながら、さるにても雨やめていでたまへといさめければ、いではかなき事をものたまふかな、いのちは我も人も雨のはれまなどまつ物かは、何事もしづかに、とばかりいひすてゝいにけ

神風ノイセノ濱荻折フセテ旅子ヤスラン荒キハマベニ　此歌ナドニテイヘルカ、又或人荻ハウミカヤト云物之トイヘリ、神功紀幡荻ヲハタスヽキと訓、孝德紀ニ人ノ名ニ蘆ノ字ヲ書

り。いみじかりけるすきもの也かし。さてほいのごとくたづねあひて、とひきゝて、いみじく秘藏しけり。此事第三代の弟子までつたへならひて侍なり。此すゝきおなじさまにてあまた侍る也、ますほのすゝき、まそほのすゝき、まそうのすゝきとて三種はべるなり。ますほの薄といふは、穗ながくて、一尺ばかりあるといふ、かのますかゞみをば万葉集には十寸のかゞみとかけるにて心得べし、まそをのすゝきといふは、眞麻緒(マソヲ)の心也。これを俊頼朝臣の歌には、まそをの糸をくりかけてと侍るとよ、糸などのみだれたるやうなる也。まそうの薄とは、まことにすはうなりといふ心也。ますはうのすゝきといふべきを、ことばを略したるなり。色ふかきすゝきのながくしだれたるなり。古今集などにたしかにみえたることはなければ、和歌のならひかやうなることを用ふるも又世のつねの事也。人あまねくしらず、みだりにとくべからず（つれ〴〵草百八十八段にマスホの薄マソヲの薄の事をいへるは全無名抄にもとづきしたる也）按るに、此三種の說いみじきひがこと也、いかになればまそほは眞赭(マソホ)にて、万葉集卷十四、麻可禰布久 爾布能麻曾保乃伊呂尓低氐 伊波奈久能未曾 安我古布良久波とみえたる 麻曾保にて、たゞ赤色をいへるのみ（そほは赤色の古言にてそほぶね、そほにのたぐひ例おほし、但ほほをの如く唱るなり）麻は上にそへたる語也。さ

テス・キト注ス、然ハアシトス、キトヲキトハヒトツニテ有リ云云

ればまそほのすゝきは、たゞ尾花の穗に出しはじめ、いとあかきがあるものにて、それをいへる之。すとそと同韻相通にて、ますほともいふべし（ますをとかくはあやまりなり）まそうといふことはなし、たゞ一種なるを三種にいひつたへしはひがことなり。中古以來古言にうとき人々、ひたすら師傳の説をのみまもりて、古書に證し見ることをしらず、つひに無名抄の如く雨をおかして遠く尋ね行て、かゝる迂遠の僻説を聞來り、あやまりを後世につたふる登蓮法師がたぐひもいでくるぞかし。今彼三種の説のあやまりをくはしくあげつらはんに、まづますほは一尺の穗之とて、万葉にますかゞみを十寸鏡とかけるを證に引れたれど、集中まそかゞみといふに、眞鏡、眞十鏡、眞祖鏡、銅鏡、白銅鏡、清鏡、麻蘇鏡、喚犬追鏡などあれど、十寸鏡とかける所はなし、おもふに万葉に眞十鏡とかけること、神代紀の八咫鏡とをおもひよせて、まそかゞみとは一尺の鏡之などゝひが心得したるものなるべし。まそかゞみは集中に眞十見鏡、また眞墨乃鏡ともありて、眞清の意之。いかでまそほのすゝきのまそと一つことならん。次にまそをとかきて、眞麻緒と心得しもいみじきひが事之（印本無明抄に眞广とのみあれども、古寫本に緒の字有て、俊頼朝臣の歌にも眞麻緒の糸といふ心にてよまれたるとみゆれば昔しか心得し成べし）次にまそうとかきて眞には蘇芳のごとく之といふ説も又あやまり

之。蘇芳は字音にてこそあれ、いかでその字音の上に眞といふ語をくはへて歌によむとのあらん、されば三種ありと心得るはいみじきあやまりなるべし(ママ)をわきまへしるべき之。山家集「しほそむるますほの小貝ひろふとて色の濱とはいふにやあるらん」これもたゞ色の赤き小貝にて、眞赭(マソホ)の小貝之。しかるを後世にこれは蘇芳貝ともいふは、まそうのすゝきと同じく傳へあやまれるもの之

ほやのすゝき　續古今集、文永二年九月十三夜野鹿といふ題に關白左大臣の歌に「夜寒なるほやのすゝきの秋風にそよぎて鹿も妻をこふらん」袖中抄に「しなのなるほやのすゝきも風吹ばそよ〳〵さこそいはまほしけれ」按に信濃國小縣郡塩田に保屋のといふ地名あり、順抄にはみえず

すみれ　順抄に菫を注したり、万葉卷八、春の野に須美禮採爾等よみたり、或は之この花の形墨斗(スミイレ)に似たれば墨入草(スミレ)の義なり、また酸榆(スニレ)の義なりともいへれど、皆俗説也。いにしへ必ず別義あるべし。また万葉卷八、山振の咲有野邊の都保須美禮、宣長云、菫のまとかなるをいふといへり。ツボは圓なり、圓(ツブラ)の大臣、またつぶら江などのツブと同じく圓の字をよめり、

久老は採スミレ(ツム)といへり、つぼすみれとよみし歌に、採(ツム)といへる詞をそへたるはなしといへり。二説孰か是なるべし。さて又景樹とやらん人はあまたの證歌を擧て、今の俗にいふレンゲサウを、いにしへのスミレなりといへり。いにしへにいへるスミレは今の俗にいふスミレにはあらぬよしを說(トキ)たり。さて宣長つぼすみれは葉のまろきより名づけしといへり。按にスミレに似て葉の圓なるものあれど、これはスミレにあらず、花もとに碎細にして白く、少し淡紫のうつりあれどみるにたらず、また採べきものにもあらず、スミレの花は藤の花によせてよみたれば、紫色なることしるべし。レンゲサウの花の色はむらさきといひがたし

【頭注】栗

藤原芳樹が寄居歌談癸卯の卷卅四丁ニ云

ある人のかけるものに、今すみれと云ふ花は、古へのすまひぐさにて、をさなきものども、すまひとらすとてもてあそぶなる相撲取草(スマウトリクサ)といふくさ是之、といへるは、ひがごとにはあらじか。すまひぐさは、字鏡に旋覆花須万比久佐と見えて、世にをぐるまといへる秋の花のことなり、いかなる故にて此花をすまひ草とはいふにか、そはしらねど、幼なき者どものするわざよりつきたるにはあらで、外に故よしのあることなるべし、源順集に「ことのははこはく見ゆれどすまひ草露にはうつるものにざりける」とよめるも、秋の歌合の判の歌なれば、春の相撲取草を殊

更に引出べくもおほえず、但判の詞に三千世といふ詞をろうじて、春の野に咲らん桃もおもひ出られけるといふことかみにあれば、すべて春の花をもて判じたるらんとおもふ人もあめれどしからず、夫木集に「すまひ草妹のはつきのをりをしりてうつる色にはたちなまじりそ」とある、まさしく妹の歌ならずや、かゝれば今の相撲取草すなはち古へのすみれにて、古へのすまひ草は、今のをぐるまなる事さらにうたがひなし。すみれはれんげ花なりといふは、藤袴は菊なりといふ類ひにて、おのが說をまたでも誰もうけひくまじければとわらず、たゞかのすまひ草は猶すみれの又の名にやとおもはん人もなきにあらざめれば、くはしうあげつらふになんと備中の長尾の里人小野務が隨筆に見えたり。この務といふ人、おのれ未だ逢ひし事はなけれど、とのたよりに其の人となりを聞くに、物よくいひとほれるすき人なりとぞ、詠史の哥などあまたよめる、鰒玉集に見ゆ、其中にをかしと思ゆるを一首上件にのせたり、まとやかの旋覆花、古名は加万都保といふ、伊せ集物名に、わかまつほくさとよめるも是ならん、されば字鏡にすまひ草とあるは一名なるべし、わか山あたりにてすみれより外に相撲取草といふ物あれど、花さかぬ草にて、金葉集の連歌に、はかなくうつる花なれどといへるにかなはねば、とにもかくにもすまひ草は旋覆花の一名なりといはんかた穩なるべしと諸平はいへり

〇按に

すがも　万葉卷〔〇七〕に、氏河におふる菅藻とよみたり、今いふ柳藻なるにや

校云、按以下木本ナシ、前ノすみれノ説ノ按ノ終ニツゞクナラン

補

すゞな　拾芥抄に、菁をよみたり、菘菜をいふなるべし、スヾは小をいふなれば今のアヲナ也

すはう　式に蘇芳をよみたり、即蘇方木也

すもゝ　李をよめり、万葉巻十九に、吾園之李花とよみたり、新六帖に「山がつのそのふのすもゝ咲にけり風もいとはぬ花やみるらん」

○按に彼邦のいにしへに菫と稱するもの四種あり、詳に予が橘黄閑記巻十八にしるしたり、今こゝに其略を引○詩の大雅云、周原膴々、菫荼如飴、また禮の内則云、菫荁枌楡以滑之、これこゝにいふは呂覧に言、菜之美雲夢之芹、周禮、醓人に言、芹菹、また尓雅に言、芹楚葵なり、和名世里○晉語云、驪姫將譖申生寘鴆於酒寘菫於肉、また唐武后寘諸食中以毒賀蘭氏、こゝにいふは蓋し黄菫を指之、黄菫は即鈎吻之、今俗云毒芹(セリ)○呂氏勸學云、是救病而飲之以菫、また淮南主術云、天下之物莫凶於鷄毒然而良醫橐而藏之有所用也、これ尓雅に言、菫芨草、即烏頭なり、和名於宇○尓雅云、齧苦菫、即須美禮なり○菫芹通用、邢昺尓雅疏云、菫音靳、陶弘景云、斳俗作芹、槃按に菫はじめ艸に從て堇につくる、正字通にみえたり

すゞき　記に須受岐と書たれば受は濁音也。万葉巻三に、藤江之浦に鈴寸釣とよみたれば

記に、鱸、註に訓云須受岐云々

雀字、大雀尊と古事記に書れしごとくさゝは古訓なるべし。さゝと

鱸をいへり、順抄に鱸を須々木と注したり、このうをの響快和なれば前のス、キの義と同じ

すとり　万葉巻十四に、圓方之湊渚鳥浪立巴、巻十一に、大海之荒礒之渚鳥とよみたり。記の八千矛の條に、宇良須登理ともよみたり。年山記聞に、八雲御抄に、何れの鳥にまれ、河洲に居る意にや、今按に万葉に荒礒の渚鳥、またみさごゐる洲にゐる舟とも、みさごなる荒礒ともよみたれば、渚鳥とはみさごをいふよと聞ゆ。詩に關々雎鳩在河洲、此歌につまよぶなどいふも此詩にかなへりと釋給へり。槃おもふに、八雲御抄の説のごとく、何にもあれ洲にゐる鳥をひろくさしたるなるべし、ミサゴと決めしはいかゞ

○巣鳥をいふは栖鳥の義なりといへり

すゞめ　順抄に雀を注したり。スゞは狹みにして小なる之、メは集の義也、鳥に尙シメ、ツバメなどいへるもおなじ、人の名に集連あり、メムラジとよみたり。神代紀に以雀爲春女、雄略紀に庭雀ともよみたり、また記に須受米と書たれば下のスは濁音なり

すがる　雄略紀に叉命蜾蠃、注に此云須我屢、万葉巻九に、腰細乃須輕娘。このむしは色黒く雌なし、子なし、土中にありて巣をつくり、桑虫を負來りて房に置てやしなひ、七日ふればお

は少き、專之、本草綱目時珍說、上少は其容につき佳は短尾の鳥を稱する字なれば合せて雀字を作るといへり、後とさゝ世稱へず、すゞめと訓ても少き事に用ゆ、すゞめうりはひめうり

のが子となるといひ傳へし如く、かく他の巢にて生つく、故に巢借虫とはいふといへり。常には似我蜂（シカバチ）といへり、腰のいと細ければ、他し國にても細腰蜂といへり、よて腰細のすがるとはよみたり。万葉卷十に、春されば須我流なく野の子規とよめるは、秘藏抄に雌鹿なりと云はいとゝひがとなり

すゝき 前の條に補入すべし　　夫木集、俊頼「秋風にすゝきの鱠おもひいでゝゆきけんひとの心地こそすれ」晉書張翰字季鷹呉人有淸才善屬文而縱任不拘時人號爲江東步兵旣入洛齊王冏辟爲大司馬東曹掾翰因秋風起乃思呉中菰菜蓴羹鱸魚鱠曰人生貴得適志何能羇宦數千里以要名爵乎遂命駕而歸云云此歌この意て讀なるべし　　（〇以下四行余白）

すゞしろ　　書紀通證に、荒井氏の說なりとて、すゞしろは大根にはあらず薊なり、和名抄に、鬌小兒剪髮所餘也、と有て、須々之呂と有、また時珍の薊其花如髻也とあるをむかへていへり。彥麻呂云、和名園菜部に薊あり、野菜部に大薊ありて、草類に載たれば、食用なる事うつなし、されど共に須々志呂といふ名目なし、そのうへに鬌に似たる花の形狀也、春の若菜の形にて名づくべきを、食ふ事はとまれかくまれ、刺ありて手だにふれがたき花の比は狀もて

ともいひて王瓜の類之、すゞめの鉄炮といふは雀麥娘といふ草にて皆少きもの之と一友人談ぜりき蒿溪閑田耕草に戢す

名附むといかゞ。槃おもふに、仁徳紀の歌に、やましろの小𨫼(クハ)もちうちし於朋泥々しろのしろ多那武枳、またうちし於朋泥佐和佐和にとよみたり。腕の白きにたとへ、またサワ〳〵にと、よてさゝやかなるをいへれば、涼しきこゝろにもわたりたれば、すゞしろはまさしく蘿蔔なるべし、薊なりといへる説は遠山乃石狹間(イハムラサマ)をさくりたるなるべし

すろのき　清記に椶櫚をいふ之、すろの條むかへみるべし

すゞむし　まつむしの條に併てしるしつ

すゞかも　小鳧をいふなるべし。源仲正家集に「よもすがら沖(オキ)のすゞかも羽ぶりして渚の宮にきぬつゞみうつ」

すがとり　夫木集、祐盛法師「いづかたもおなじうきねを何とかも浦わたりするさよのすがとり」藏玉集には男鹿也といへり。按に万葉卷十二に、妻太細江菅鳥乃とよみたり、スガといへる詞はスガ〳〵などいひて清きこゝろなれば、うつくしき鳥をいふなるべし

すゝくさ　輔仁和名に王不留行を注したり　〔○以下四行丼ニ次頁白丁〕

すまひぐさ　今の京(ミヤコ)にてスモトリグサといひ、筑紫にて駒引草といひ、關東にてはふるきによ

りてスミレといへり。源順集に「との葉はこはくみゆれどすまひぐさ露にはうつる物にざりける」金葉集の連歌に「とる手にははかなくうつる花なれどひくにはよわきすまひ草哉」夫木集に「けふにあふ雲ゐの庭のすまひ草とる手もあだにうつる物かは」すみれの條むかへ見るべし

○旋覆花を注したるは字鏡にみえたり

○白蘞草を註したるは順抄に見へたり

すひかづら　字鏡、順抄并に忍冬を注したり、童のたはれに花瓣を吸故にいふといへり

すきがへし　和訓栞に、清和帝崩じ給ひし時、女御ふぢ原の多美子生前に賜ふ所の御筆の手書を漉改めさせて、經典を書て奉られし事史にみえたり、これをはじめとす。十訓抄には反古色紙といひ、東鑑には薄雲色紙とみえたり。或は宿紙といふも是なりといへり。宿を經て成名とすとぞ

すくもむし　順抄に蠐螬を注したり。この虫スクモのうちより化し出ればかく云なり。成長して草木の根をくらふものなれば、俗にキリウジ、ネキリムシなどもいふ。（スクモとは糞土をいふなり）

すゝめうを　齊明紀に、出雲國言、於二北海濱一魚死而積、厚三尺許、其大如レ鮐、雀喙針鱗、々長數寸云云名曰二雀魚一。按にこれ俗に云ハリセンボンなるべし。張世南倦游雜錄に載たる泡魚即魚虎、また王贄が瓊山縣志に載たる虎魚これなり。詳に魚品にしるしたり

すまろぐさ　順抄に天門冬を注したり、今の俗に云スキカヅラとぞ。按にスマロはスバルとおなじ、凡物の聚り統るをいふ。この草蔓延して聚生するものなれば名こせしなり。神代紀に五百箇御統の玉をスバルの玉といへるも、五百の多なるを緒にぬきあつめて、領にかくるものなればまたいへり。又抄に昴星をスバルと註せしは九曜のあつまるをいふとぞ。天須婆留女命を昴星の緣によるならん

すかねとり　秘藏抄に雉也といへり

すだれがひ　薩摩赤貝に似て緯すぢのそろひたるもの也。山家集に「波かゝるふきあげの濱のすだれがひ風もぞおろすいそぎひろはん」また覺性法親王「百數の玉のうてなのすだれがひあしやの浦に波やかけけん」

するつむはな　紅藍花をいへり、万葉卷十に、外耳見筒戀牟紅の末採花乃色不出友。此歌の

詞よりして韓藍花（カラアヰハナ）の名となせしかと、カラアヰ花は今のケイトウなり、からあゐはなの條に、そのしるしをあげたり。源氏末摘花の卷には、またあか花とも書たり

すゝくれくさ　莫傳抄に松ゝといへり　〔○以下四行丼ニ次頁白丁〕

すぐれたるうま　紀に駿をよみたり。穆王の八駿は絕北、翻羽、奔霄、超影、踰輝、超光、騰霧、挾翼なり、拾遺記にみえたり。また赤驥、飛黃、白蟻、華騮、騄耳、騧騟、渠黃、盜驪なりともいへり、博物志卷四にみえたり　〔○以下六行丼ニ次頁白丁〕

すくなひこのくすね　輔仁和名に石斛を注したり　〔○以下半丁空白〕

世行

せ　順抄に崔禹錫を引て云、尨蹄子、貌似ニ犬蹄一而附レ石生者也。和名勢。また衆名苑を引て云、石花、二三月皆紫舒花、附石而生、故以名之。丹方にまた崔禹を引て云、貌似犬蹄而附石生、肉頭生黑髮白卷曲者是也注に和名世　按順云、和名勢、仁云和名世衣、或云これ石蜐なり、紀伊國方言ヱボシガヒ、猶諸名あり。綱目に時珍卽江淹石蜐賦を引、また郭璞が賦を引、石蜐應節

而揚葩、且いふ、生海中石上、形如龜脚、亦有爪狀、殼如蟹螯、其色紫、この說似犬蹄といひ、また紫舒花附石而生といふにかなへり〇或は鹽シリ貝なりこもいへり、これは閩書に載たる蛾且石磷のたぐひなり、これもまた一說にしるすのみ〇按に兼名苑に石花、註に花或華、万葉巻三に、石花をセとよみたるもおなじ〇福州府志に石花附石生殼如牡蠣而大、可飾窻牖といふもの、兼名苑の石花ともおもはれず、是けだし紀伊國方言の牡丹介ならん、牡丹介を琉球にてイハヒラといへり、石板の義ゝ、中山傳信錄これを石花といへり、これ生類にあらず、石梅の屬ゝ　〔〇以下三行余白〕

せり　順抄に芹を注したり、万葉巻二十に副芹子褒歌に、欲流のいさまに都賣流芹子こ詠たり。セリは纏集てマトヒツトヒおふるをもて名づくるゝ、今の詞にもセリアフなどゝいへり。柴胡ノゼリ、當歸ウマゼリ、オホゼリ、ヤマゼリ、前胡ノゼリ、早芹ヲカゼリ、鉤吻ドクゼリこいへるも皆この芹葉に似たれば、芹を本としていへるゝ〇紀に命の御名に芹をノリこよみたり

〔〇以下三行幷ニ次頁白丁〕

せうび　埃嚢抄に少微と書たり。翡翠をいへり、ひすいの條みるべし

〔○以下八行并ニ次頁白丁〕

せみのは　順抄に蟬翼を註したり

せみかひ　玉珧(タマフキ)のいと小なるものゝ。夫木集に「せみかひの聲かときけば村松の岸うつ浪のひびきなりけり」また舟貝ともいへり。同集に「こぐ人も渚によする舟がひは吹くる風やつなぐなるらん」是老學筆記載したる沙瑤なり、俗にはウスギヌ夕顔などといへり

せうかうじ　伊勢物語に、いしのうへにはしりかゝる水は、せうかうじ、くりのおほきさにて、こぼれおつ云云。實證註云、大柑子といふ物あれば、ちいさきを小柑子といふにや。招月の歌に「瀧津浪木のもとならばせう柑子栗やひろはん水の白玉」蓋しこの物語をとりてよめるにや。柑子の事はかむじの條につまびらかゝ　〔○此頁三行余白〕

曾行

そ　木綿また麻など割て用ふるものをソといふゝ。それが中に木綿をはめてマソといふといへり。式にも、木綿を貴(ホメ)て、麻をいやしめり。大祓詞に菅ソといふも菅を八針(ヤハリ)に割などゝ

校云刊本蕎積

鴗、音立

補

いへり　〔○此頁五行幷ニ次頁白丁〕

そば　記に曾婆、順抄に蕎麥を、曾ば牟岐、一云くろむぎと注したり。稜麥の義なり。卽蕎麥の三稜(ミカド)あるをいふなり。隼人國にてソマといへるも同義也。元正紀に養老六年七月宣丙令下天下國司、勸ニ課百姓一、種ニ樹晩禾蕎麥及大小麥上、藏ニ置儲蓄一以備乙年荒甲。信濃の國に蕎麥生(ソハフ)といへる地名(トコロノ)有、けだし元正天皇の御宇に置けるにや、今は蕎麥草と書てソバムギノフ呼といへり

そひ　順抄に、鴗を注したり、卽魚狗之。古事記、日本紀にも翠鳥とあり、舊事記等には翡翠をよみたり、文德實錄には魚虎鳥の字をよみたり。ひすいの條みつべし

そに　記に蘇邇杼理といへるは翡翠なるべし、前のソヒとおなじなるべし

そま　記に鶩爲(ソマ)ニ掃持一とあり鶩をそまと訓じたり。猶さぎの條むかへ見るべし

〔○以下六行余白〕

そはき　順抄に歴草を注したり、式の大舍人寮にもこの名みえたり、淸記にそばの木はしたなきと書たるは別物之。後のそはのきの條みつべし　〔○以下七行幷ニ次頁白丁〕

圏記傳云字書を考るに柧稜は木の名に非ず、木の楞(カド)なり、然るを此字ソバの木に當たるは物の稜角(カド)をソバといふから思ひ

そかきく　袖中抄に承和菊なりといへり、承和帝の黄菊を好み給ふによりていふこいへり。神樂歌のせがゐを清和井と書けば、承和もソカといふべけれこいへり。貞德が說に、十日義ゝこいへり。鄭谷が十日菊の詩あり、卽九日にむかへていふゝ。また一說に背向(ソカ)菊ゝこもいへり。いづれかよからん

そばのき　式の大舍人寮にみえたり。順抄に、柧稜木、和名そばの木、また四方木也と有。說文に柧は稜也、徐鍇字解云、字書三稜爲柧、音姑。廣韻に稜、四方木也、と注したり。さてソバこいへる詞は、凡(スベ)て物の稜角有をいふゝ。抄に蕎麥をソバムギと注したるも、その殼に稜あるをいへるなり。木類に稜角を生ずるものは衞矛杜仲の屬は枝莖に翦羽の如きものあるゝ、もしこの類にや。清記に、そばの木、はしたなきこゝちすれども、花の木ごもちりはてゝ、おしなべたるみぎりになりたる中に、時もわかず、こきもみぢのつやめきておもひかけぬあを葉の中よりさしいでたるめづらし、とも書たれば、前にいふふたきともおもはれず。游清は清記のソハノキを今の俗に云ヤシホノモミヂなりと決めたり。また或人は、夏山に立てとみたる赤色の廣葉カヘデなりといへり。二說ともにわれはそれこもおもはれず、當否はとまれ

混へたる誤なり

圏ヤソバノキ　谷川氏云、是は箭柧棱(ヤソバ)にて今矢箸(ハシ)と云、漢名鬼箭といふ木なりといへり。又八柧棱(ヤソバ)か、又八ト(ツ)葉(ノ)木か、何れならんと宣長いへり

かくまれ、順抄にいふものと、記にいふものとは物ことなるに似たり。また仁徳紀に椰素磨能(ヤソバノ)記(キ)あり。是も何物にや。また記の神武の段に、多知曾麼能みのなけく(中略)伊智佐加幾みのおほけくをと謠ひ給へるは、其實の無きと多きとをむかへたるゝ。されば記のタチソバは實なきものなればまたことなり

そまむぎ　游清云、古今著聞集飲食部に、道命阿闍梨修行しありきけるに、やまびとの物をくはせけるを、是は何といふ物ぞと問ければ、かしこにひたはえて侍るそま麥なん是なる、といふを聞てよみ侍りける「ひたはえてとりだにすへぬそまむぎにしゝつきぬべきこゝちこそすれ」高田与清云、杣麥はしげりあひたるさまのことにて、もとしげり葉の約語しばといふを通はしていひけるにや、しば山とも、そま山ともいへるなど思ひあはすべし云云游清案るに、杣麥の説おぼつかなし、こは和名抄に、蕎麥を曾波牟岐とある物にて、今の俗にそばといふ物なるべし。波の濁音と麻の清音と通ふは常の事にて、國によりてはそまむぎともいふなるべし。さりながら、そばは常に人のくひなれたる物なれば、かくいぶかり問べきにあらずと難ずべけれども、そは都の内にて物せしそばこそさもあらめ、山がたづけるゐなかに

て、あやしきしづの男などのてうじてくはんは、必色もくろばみ、粉もあら〳〵しう常の物とはいたくかはりて、都人などのふとみては、え見わかで、こは何てふ物ぞとうたがひあやしむともなどかなからん、はた詞書にかしこにひたはえたると有は、即しげきをいふ詞なるに（是を引板なりといへども、詞書のさまにてはさはきこえず）かさねて、しばむぎといふべきよしもなく、又是より外に麥のしげきを柚麥といへる例なければ、いよ〳〵此説はしたがひがたし

そで　ひ　夫木集に「波あらふ衣の浦の袖がひをしほひに風のたゝみおくかな」今の俗に胡蝶介、鶯介など云ものこれなり。袖介眞珠といふも、この介の腸のうちよりいづる珠なり、劉珣が嶺表録異に載たる珠牡なるべし

（卷三第四冊　終）

國史草木昆蟲攷卷四

多行

たね　種をいへり、田袂の義ゝこいへり

たで　蓼をいへり、万葉卷十一に、穗蓼古幹、式に干蓼あり。またこの物に五色ありて、五つの名あり、丹抄に蘿菌を太天とよみしはいぶかし

たな　順抄に蒲公英を注したり、田菜の義ゝこいへり

たけ　記に竹をよみたり、一旬にして長高（タケタカ）きの意ゝといへり。紀に竹林をタカハラともよみ、篁聚をタカムラ（篁は卽竹田之笛に作る竹をいふは後の名之、順抄に四聲字苑を引て云、竹草之、一云非草非木）万葉に竹葉をタカバとよむも皆長高の義なるべし。竹の屬ひ漢土にありては戴凱之釋贊寧李息齋が譜旣にあまたしるしたれご、我國には其種いこ少し、世つねに見る所のみをこゝにしるしつ

○破竹、戴凱之竹譜云、甘竹似篁而茂淡竹之。順抄に、唐韻を引て、篓竹、注に漢語抄云、淡竹、於保多介。丹抄に竹葉を加良太計と註て云、隨病用之、これ亦淡竹ゝ、弓材に用ひしも卽淡

竹にて、播磨國龍野に產するをよしとす、方言龍野竹、攝津國八幡に產せるも亦良、山城志云、葛城郡太秦嵯峨二村產者勁堅○矢竹、また竹譜云、箭竹高者不過一丈、節間二尺群芳譜に疏節竹あり、一尺一節堅勁中レ矢、大和國芳野山中に生るもの良之、歲どに箭竹二千二百竿を大坂御城へ貢くよし植村氏の採藥紀行にみえたり○紫竹は元益部方物記にみえたり、周文華が致富奇書之を觀音竹といふ、一種黑色なるものあり、此花鏡にいへる黑竹の類なるべし○業平竹、竹譜云、篁竹曰篁竹節体圓而質堅皮白如霜爲笛といふも蓋し是なり○弱竹、一名篠竹、俗に苗竹とも、女竹とも、苦竹とも云、紹興府志云、若竹筍味苦不堪食有黃苦青苦白苦紫苦幹細而直可以爲筆管○眞竹、本草圖經云、苦竹亦有二種一出江西閩中本極粗大筍味殊苦不可噉、これ眞竹之○布袋竹、薩摩方言、古散竹按に古散竹は福州府志に見えたれと異なり贊寧筍譜云、鶴膝竹狀節下大小似苦竹而閩中土呼爲槌竹亦堪作楸杖、嶺南雜記に名雞腿竹○寒竹、薩摩方言、小孟宗竹、花鏡云、孝順竹幹細而長、作大叢、夏則筍從中發、涼讓ニ母竹、冬則筍從外發護母竹○孟宗竹、莽州葉苑云、貓竹、大者經七八寸、高而堅實、筍生於冬日、冬筍不出土而味佳云云群芳譜に、茅竹また毛竹に作る、皆一聲の轉之、此種正德中に、中山人これを薩摩に致したり、今は則四方に盛茂す○

朝鮮竹、本草綱目、竹の條に載たる百葉竹なるべし○班竹、今好事のもの筆管となせしものにして、諸山中或はこれあり、いにしへは我にあることをしらず、陶隱居諸詰云、竹有黑點、謂之班竹非也、湘中班竹方生時每點上苔錢封之甚固土人斫レ竹浸レ水用ニ草穰ー洗出苔錢則紫暈爛班可レ愛、此眞班竹之、槃むかし日向國に往し時、端山麓の內に班竹をえたりしにげにも陶說と同じ、また相摸國箱根山中のものも亦しかり○金竹、また黃竹、八閩通志云、黃竹小而黃色、これ卽紹興にいふ黃苦なるべし○金明竹、花鏡に載たる金鑲碧嵌竹之○綫竹、典籍便覽云、對青竹、ー邊青半邊紫二色相映といふもの是なるべし○豐後竹、また雌籠竹、袁牧新齋諧云、羅浮山有快子竹々形小而質勁截可以爲箸とは蓋し此類之○唐蘆、海澄縣志云、盧竹、竹譜云、有竹象レ蘆、卽これなり○鳳皇竹、花鏡に載たる鳳尾竹之○綫小竹、遵生八牋云、水竹高五六寸許、極則盈尺細葉老幹、瀟欹可レ人、按に花鏡に載たる龍鬚竹また此類之○根小竹、南方草木狀云、越王竹根生不レ上若ニ細荻一高尺餘、南海有レ之、南人愛ニ其青色一用爲酒籌、一云越王棄ニ餘算ニ而竹生、これ文士詩人の筆端游戲之○小竹魚、飛騨國方言之、今は諸所にあり、陶穀清異錄云、江湖有一種、其葉糾結如蟲狀、山民日此蚱蜢竹○青葉の笛竹、薩摩の方言臺明竹、

大隅國噌唹郡清水鄕臺明寺山中に產す、此境內に天延年に鑄たる古鐘あり、其銘に云、此山中竹從天智天皇御宇剪爲笛竹給、其音淸妙、名謂靑葉笛竹、以來爲笛竹貢御所云云、また其寺の什物に、二條天皇御宇平治年及後深草天皇御宇建久年に給りたる解狀文狀數通あり、其文意皆鐘の銘とおなじ、狀中に二葉の笛竹と書たるもあり、また建長年の後に貢せし事おほくありて、府學の年錄にみえたり、今も猶貢せし事あり、國史を稽に此事なし、蓋しいにしへの流例なるべし。さて其竹は弱竹の如く其大なるは圍五六寸、節間二尺にみちたり、管籥に作れば其音さやかゝ、其笋は四節を期しておひてけり、國人なべてこれを貴て珍饌に備へける、是王藎臣が群芳譜に載たる四季竹ゝ。世にいふ須磨寺の什物靑葉笛竹は、むかし樺纒の下のせみより靑葉をおひいでたるよしにて、かくはいふといへり。長門本の平家物語には、靑葉の篳篥とあり、されば今ある所の什物とはたがへりけん、もとより臺明竹にはあらじとぞおもひける○今まれに舶來の暴節竹をみるに正に竹譜に載たる筇竹なり、これ竹の奇なるものゝ。また寶干魯墨譜及息齋竹譜に圖載せし佛面竹また奇の奇なるもの、これ蓋し竹譜の人面竹の屬ゝ。伊豫國吉田領大乘寺境內に生じたるとて、其國人其圖をもたらして予

に質すに即佛面竹之。また尤奇なるは、香祖筆記に載たる⿱𥫗谿竹（⿱𥫗谿音谿、空大之）、許續曾須行紀程に載綿竹、群芳譜に載たる藤竹、一名蔓竹、王阮亭居易錄に載たる閩中の朱竹之。
〇菌をよみたるは順抄、野菜部にみえたり。また菜羹部に菌茸をも註したり。また野菜部、菌の條に蕈を木乃美々と注したり、即木耳の訓之。タケは其氣味の猛をいふこいへり、今は木蕈、地蕈通じてキノコといふ。西國にてはナバといふ、その小なるをイグチといふ（順抄に缺唇をイクチと注したり）陸奥にてモクシといふ、或はフサともいひ、またスヽキともいへり、越前にてはコケといふ、佐渡にてはミヽといふは木耳之、今いふ木水母（キクラゲ）の類をいふなるべし、今の俗にクサビラといふは誤之。抄の蕈茱の條に茱蔬を久佐非良と注したり。さてまた菌の類にヨシタケあり、火斿急就篇、顏師古注に、藿菌、一名藿蘆、生東海池澤及渤海章武此藿蘆之地所生菌也。これヨシタケ、一名は菰耳といへり、丹抄に菌を太天と注したるはいと〳〵いぶかし

たづ

記に鶴をいへり、万葉卷六に蘆多頭とかきたり。卷六に、白鶴シラタヅ、また卷三に八十之湊尓鵠（タヅ）佐波二鳴、鵠をタヅとよみたり。他し國にてもいにしへは鵠鶴通用の說あり、五雜俎、通雅等の書にみえたり。また万葉に、田鶴と書たる歌あり、田の字にこゝろなし。謝

玄詩に、田鶴遠相喚と詠じたるは、我國の歌によめるは田鶴とはミえ、游清云、鶴をタヅとい
ふ名は古へより有てツルといふ名後世に出來しなり、名義を考るに、古へタヅといひ、後世タヅ
ドといふはすべて物のたしかならず、おぼつかなきをいふ詞にて、萬葉集四卷に「くさかえ
の入江にあさる芦鶴乃痛多豆多豆思（アナタツタツシ）友なしにして」また卷十八に「夏の夜は美知多都々
之船にのり川の瀬ごに棹さしのぼれ」是友なしに獨りをれば心のおぼつかなくたしかなら
ぬをいひ、夏の闇夜は路のおぼつかなきをいへり。また後世の文に郭公なごの聲のさだかな
らぬを、耳たど〳〵しといひ、しらぬ道をまどひ行てはかどらぬをたごる〳〵行とも、道た
ど〳〵しともいへり。また尋（タヅヌル）といふ詞も、たしかならねばもとむる意なり。扨共鳥のあゆ
むさまは、物を疑ひあやぶむやうに、足おもくはかどらねば、たづ〳〵しき心にて名付しな
るべし。いひなれ行まゝには、やがて是が名にかけて、あしたづのたづ〳〵しなどもいへる
なり。扨また萬葉集中、鶴の字を助語に用ひしは、盡くツルとよめれども（是は傍訓のみにて假字は一所もなし）生
類の時にツルと訓る事なし、皆タヅとよみ、假字には多頭、多津、多豆とかきたり。然るに九
卷に、天乃鶴群（ツルムラ）とあるは生類なれば、タヅと訓べきを傍訓のツルをふとおもひまがへて、かく

攷云楊氏抄云一云トアル一云刊本和名ニナシ

しるせるなり。此外にツルとよめるは一首もなし。古事記にも多豆と書るはなし。扨生類にてツルといひそめしはいつの比よりにか、和名抄云、四聲字苑云、鶴和多豆流似鵠長喙高脚者也。唐韻云、鸖楊氏抄云、一云多豆、按倭俗謂鶴爲葦鶴是也今鶴別名也、とあり。是にてみれば、此ころは既にツルといへるかたをもはら此鳥の名とせしとみゆれば、此頃より前つかたにいひ出しとみゆ、又是より後はツルの名のみもはらになりて、今の世の俗はタヅの名さへしらぬほどになりたり〇扨またツルといふ名義はいかなるにか未詳、もし是も後世にタドルといふが如く、古へもタツルなどいふ詞の有て、上の例を略きてツルとはいふ歟、されどタツルといふ詞もみえねばこはおしあてゝ。又考るに、蔓(ツル)、絃(ツル)の類みな長き物をいへば、此鳥の首をのべたるさまの蔓などに同じければかく名付る歟。また考るに、啼聲のツゥツゥと聞ゆれば名付る歟、カンカンと鳴ゆゑに雁(カリ)といひ、カアカアと鳴故に鴉(カラス)といひ、カケロと鳴故に雞(カケ)といふ類ゝ。是らの下のヲリロは詞の助に添へたるにて、本義はみな上の一字に有歟、ツルも亦此類なるべし〇あしたづといへるは、たゞあし邊にむれたる物なれば、何の心もなくいひ出でしなるべし。芦鴨(アシカモ)といひ、芦蟹といふたぐひなり。行さまのたづたづしければ、足タヅの義

圏万葉十六巻十八丁オ、ひしほ酢にひる

かとおもへど、そは餘りに考へ過したるゑ。猶芦鶴にてあるべし。谷川氏の説に、たづは田鶴の義といはれしかども、いたくひが言ゑ、こは萬葉集に、田鶴とも書る所有よりの説なるべけれども、うめを烏梅、やなぎを楊奈木、かけを可雞とかける例にて、たゞ似つきたる假字をかりたるのみゑ。字につきて義を求るはたがへり。且田にのみおりゐる鳥ならば、さもいふべけれども、古くはみな海河にのみよみたり

たか　鷹をよみたり、万葉巻十九、矢形尾の眞白の鷹乎屋戸尓須惠、巻十七に、矢形尾乃安我大黒尓、注に大黒者蒼鷹之名也。さて嵯峨院御撰鷹經三巻ありて、詳にしるし給へり。鷹の事は世に撰集の書あり、よてこゝにつくさず

たう　字鏡に鴟を注したるは、其音なるべし。臺をよめるも音のうつれるゑ。鴟またツキともいへり

たひ　記に赤海鯽魚をよみたり、仲哀紀に海鯽魚と書たり、式には平魚また鯛をよみたり。万葉巻十六に、鯛ねがふとよみたり。いにしへも今の如くにこの魚を貴たるとしるべし。さて丹方に崔禹を引て、鯛味甘冷無毒貌似鯽而紅鰭堅鱗和名多比と注したり。また鄭望が

つきかてゝ鯛もかもわれになみせ

【附箋】そ水葱のあつもの、鯛ねがふ云云は此歌を誤れる歟

困筆のすさひに云、安藝國佐伯郡水内（ミチ）和田村の邊に三四月の頃鰊鰠（タイ）魚潮上に身を

膳夫錄に、鱠莫レ先二於鯽魚一鯿魴鯛鱸次レ之といへる鯛もこゝにいふタヒメ〔〇メ本なし〕なるべし

年々隨筆云

神代紀に、赤女比有二口疾一云云、注に、赤女鯛魚名也。一書云、赤女有二口疾一不レ來、亦曰口女有二口疾一、卽急召至探二其口一者、所レ失之針鉤立得、於是海神制曰、儞（ナレ）自今以後不レ得レ預二天孫之饌一、卽以二口女魚一、所三以不二進御一者、此其縁也、とあり。此一書の文は、口女か赤女かたゞよはしきやうなれど、又の一書どもには、赤女とも赤鯛とも鯛女ともあり、又古事記に、海赤鯽魚とありて、本居先生の說は、仲哀紀に、海鯽魚をたひとよめるを據として、鯛の事なりとあり。日本紀のおもてはまづはたひの事とみえたれば、御饌にたてまつらぬにやあらん。かうたぐひなくうまきものゝ、くちをしき契なりけり。しかれども御元服の理髮の大臣、干鯛を奉ろ事あり。今も常に奉るときく、かたぐいぶかしき事也。こゝに正明おもふ事あり、尾張國知多郡の浦々、篠嶋ひまり島などにてとる魚に、ヂンメ、ヂンナメ、アイナメ、アカメ、クヂメなどめといふ魚なほ多かり。これらみな藻魚の種類にて、たひよりは味淡く毒なき小魚ども也。およそは、あいなめを除てその餘はおしこめて藻魚といひ、又嶋物といひて、こまかなる名は漁人魚市の口にのみ傳はれり。そのアカメは、赤もどこともいふ。紅色にて三四五寸ばかりあり、江戸にても常みる物也。クヂメは淡黑色なり、くろもどこともいふ。赤女と口女（クヂ）とは鯛と黑だひとのごとし。

扁して浮く漁者是を捕るに勞なく纏などにてすくひとる、これを浮鯛と名付て名產とせり

さて又一種、今やがて赤鯛ともいひ、又めだひともいふ物あり。形鯛に似て、腹のあたりほそく、肉あつく、まなこ殊の外にふくれ出て、鱗の色もゆるばかり赤し。これすなはち赤女の大品にて、味淡く、藻魚の屬なり。鯛の種類にはあらず、その口の大きにひろごれるは、かい探られし故にもやあらん。はかなき方言を據にすなれど、やがてあかだひといふ事もあると、めだひと鯛女とかよひてきこゆると、赤女がその小品なると、口女がその種類なると、かたぐ〳〵よしありげなり。さて又書にみえたる名字どもをとかば、赤女とあるは、女は藻魚島物といへる數品を攝ねたる種類の名、その中に一種ことに色あかき故の名にて、すなはちめだひをさしていへるゑ。口女は、同種類ゆゑまぎれたるつたへ、鯛女は、鯛に似たる女といふ事とみて、すべてよくかなひたり。赤鯛、海赤鯽魚は、形たひに似て、その色ことに赤きゆゑの名也かし。今もしかいふ海鯽魚がたひならば、海赤鯽魚が赤だひなるに論なし。赤女鯛魚名也とあるぞ、すこしいかゞながら、是も打まかせて鯛の事とおもはれたらば、鯛魚也とこそあるべきに、名の字をしもくはへたるは、鯛の一種と心得られたるにや。赤女は藻魚の屬にて、鯛とはもてはなれたる物ながら、形の似たればまぎれもすべし。日本紀つくれる博士たち、郭璞孫敬が流にもあらず、蜑人魚捕にもあらざれば、さばかりの誤りはありもすべし、からまでわりなう論ずるも、世にたぐひあるまじきものを、御饌に奉らぬといふが、くちをしさのあまりぞかし云云

たち　蝮をよみたり、式に蝮部を丹比部（タチヒ）と注したり。記に蝮（タヂ）之齒別と申奉るは、反正天皇を

稱し奉るゝ。紀に、多遲比瑞齒別天皇としるしたれば、蝮をタヂとよみけるといとふるし

たま　紀に、海神の持たる白玉と云は、鰒玉なるべし。允恭紀に、幸二於淡路一獲二大鰒於明石一、赤人の淡路島にて鰒玉を潜哥あれば、鰒の眞珠なるべし

たに　順抄に、螭を注したり。按に、蟣蠓蚊蚋いへれば螭は蚋の誤にや、蚋蚋おなじ、即牛蝨也。このむしの脊くぼく、谷に似たればいふとぞ。此説砂石集に見えたりとぞ、尤否

たつ　順抄に、龍を注したり。時ありて起り立の義ゝといへり。清の王丹麓が龍經に、眞龍あることをしるしたり。この書は張潮の昭代叢書中に收たり

たく　記に栲繩之千尋繩打延爲釣海八云云

菌字考　說文に、菌は地蕈なり唐韻に蕈音尋、菌生木上といふ　玉篇に蕈は地菌なり通雅に、郭璞云、江東土菌を名づけて馗厨といふ、孫炎云、地蕈を亦地雞といふ　菌疏云、大なる者を中馗と名づけ、小なるものを菌と名づく、本草に或は云、地生を爲菌、木生を爲レ蛾、蛾は則木耳なり　また或は云、北人蛾といひ南人蕈といふ、陸容菽園雜記云、蕈字原甚に作る、土音の僞張華云、江南諸山郡大樹斷倒し春夏を經て菌を生す之を椹といふ　嘗て本心齋蔬食譜をみるに蕈に作る、知

是蕈甚一聲、蓋し菌音より轉じて假借する耳。廣東新語に、厚者を蕈といひ、薄者を耳といふ 菌の莖なく欄なく木に傍て固着する者は卽耳之、可レ食。その不レ可レ食ものは酉陽雜俎にいふ胡孫眼なり 菌又之を雞といふ 或は其味雞に似たり、故云 或は㙡といふ 㙡或は㙛宗に作る、時珍云、南楚人雞を謂て㙡となす之 或は菰といふ 尓雅邇、疏の注に云、土菌に似て菰草中に生ず、故に南方人至今て菌を謂て爲蔬、馮時可、蓬窗錄に雕胡卽茭草中に菌を生ず瓜形のごし可レ食、故に之を菰といふ 近世或は菇に作る、是音に依て俗之を轉ずる耳、內則云、芝栭、孔穎達云、栭は芝の屬、芝栭一物、亦檽に作る 鄭樵云、五木耳を檽といふ 尓雅郭璞注に、亦云、栭は芝の屬、又云、茵は芝一歲三華、芝栭檽茵是蓋一物之 時珍、栭を以て㮕耳となし、芝を以て硬菌となす 源登州和名抄に四聲字苑を引て云、葰音軟、菌の名、齊民要術云、木耳なり、竹簟之を蕈といふ、蕈は陳草復生なり、王符潛夫論云、中堂生負苞、負苞は朽木菌なり　〔○以六行余白〕

たのみ　田乃實之、古今集に、秋風にあふたのみこそ悲しけれとよみたり、また源氏あかしの巻にも、秋のたのみをかりをさめと書たり

たちひ　反正紀に多遲比花者、今虎杖也。虎杖はイタドリ之

たまも　玉藻也、玉は例の賛辭之、禮記の玉藻などに依ていへるにや、萬葉におほくよみたり

たむき　順抄に、蘇敬を引て云、秦皮、一名石檀、和名止禰利古の木、一云太無乃木、輔仁云、

多牟岐。これダム|は卽檀音也、今タモキ|といへるはまたひとうつりしたるなり

たきゞ　薪之、つまぎの條みるべし

たゝみ　薦をよみたり、記の龍の宮の條に、美知皮之疊敷八重、神代紀に鋪設海驢皮八重といへる是なり。嘗て田安故中納言某公の製ツクらせ給へる菅相公の像に、虎の皮薦を設たり、按にいにしへの博士講席に皮を鋪設るとあり、左傳に公子偃蒙皐比、皐比は虎皮之。宋の張橫渠座虎皮設レ易　尙詳にとらの條にいふべし。萬葉に、薦疊菅疊絹疊皮疊々薦木綿疊あり、大嘗會式に薄疊あり、また式に—帖をタヽミ|とよみたり、短帖幾枚など見えたり

たつび　順抄に田中螺を注したり、東雅にタツボ|ともみえたり、畿内にタノシ|、タンシ|、關東にてタニシ|といへり、いと〳〵小なるをモノアラガヒ|といへれど違へり

たごり　按に尓雅に鵽鳩は寇雉とあればアタトリ|の略なると明之。鷃を田鳥といへど、同名異物にして、其義は卽別之。鵽、丁刮切、鷃音龔

たかべ　順抄に、鸍を注したり、爾雅の注を引て、鸍一名沈鳧、貌似鴨而小、背上有文。万葉卷三に、鴦ヲノト與高部タカベ共船上住とよみたり

たぬき　順抄に貍を註したり、こゝのタヌキと漢土の貍とたがひあるに似たり。またムジナと貉ともたがへるに云、またタヌキとムジナは國所により互にたがひ唱へるもあり、われ嘗て試に書付たるタヌキ、ムジナ、マミダヌキの說を併て出す。　貍音釐、陶弘景云、虎貍、貓貍いにしへ蓋し二種有、蘇頌之を疏して云、虎班之者堪レ用、貓班者不佳、寇宗奭また之を釋て云、其文有二、一如連錢、一如虎文、李時珍また云、大小如狐、毛雜黄黑、有斑如貓、而頭円大尾者爲貓貍、其肉臭不可食、有班如貙虎、而尖頭方口者爲虎貍、善食虫鼠果實、其肉不臭云云。　按に西土の俗貍を馴て鼠をとらしむる事あり、莊子既に言、貍善捕鼠、斯方のタヌキをして鼠をとらしむる事をきかず、蓋し斯方のタヌキと彼方の貍と其性異なるかもしるべからず、されど順抄に、貍、和名太奴木、舊事紀にもタヌキと訓たり、其皮深厚溫滑なれば射臂鞲等に用ひ（射臂鞲を手貫といへり）また此方にて槖治に用ひし吹火韋囊は皆タヌキの皮也、ムジナの皮を用ひし事はいまだ聞ず

○貉 附　音鶴、字說に、貉與貛同穴、許愼說文に、作貈、宗奭云、狀如小狐、毛黄褐色、時珍云、生山野間、狀如貍、頭銳鼻尖斑色其毛深厚溫滑可爲裘服、順抄に說文を引て、貉似狐而善睡者也、注に、漢語抄に云、無之奈。　推古天皇紀にはウシナと訓たり（ウムの假字古今通用）　是貉皮毛深厚、　斯方

校云、訓尒雅ハ鈕ニ作ル

のタヌキに似たり。彼邦の貍に其皮毛深厚柔煥の說なし、時珍云、人好睡者、謂之貉睡。斯方にて伴睡するものをタヌキ眠といへどムジナの睡る說なし。また彼邦にて燻狐貉といふ事あり、斯方にてタヌキをふすぶるといふとあれどムシナを燻といふ事を聞ず、是彼邦の貉は斯方のタヌキと異なるとなし、拾玉集に「人すまでかねも音せぬふる寺にたぬきのみこそつゞみうちけれ」夫木集にこのうたを載て其題に、狢の字を擧たり。其書を撰する人必ず見る所あるべし

○貒附　音湍 順抄に音端又音且につくる 尒雅に、貒、一名貛、蘇頌、似犬而矮、尖喙黑足褐色與貛貉三種大抵相類、而頭足小別。按に尒雅、尒貒乎、其足蹯、其跡丸、蹯は足掌をいふなり、丸は指頭のあとをいふ之。丸音訓、内字の譌也。順抄に貒、和名美、今の俗にミダヌキともマミダヌキともいへり。さていにしへより貍をタヌキ貒をマミダヌキと訓ぜしのみにて、敢て之を弁ずるものなし、近時或人常に好てタヌキを養ふと既に年ありて、能其性情を詳にしりたり。某云、タヌキとムジナとは蓋一物之、田舍の人よく是をしりえず、或は云タヌキありてムジナなし。また或はムジナありてタヌキなし、是其方士によりてタヌキをムジナとおぼえ、またムジナをタヌキと

衞門府風俗歌云、多々良女乃、花乃如、加以祢利好牟夜、滅紫色好牟夜

覺たるやうにも似たり、又云、世におほくはマミダヌキをムジナと覺たるもあり、タヌキをマミダヌキに比すればマミは少しかしこし、窠(ス)褥を運に前足を用ゆ、タヌキは口にてせり、またマミは其項首を抓に前足を使、タヌキは後足なり、且マミとタヌキは足も少し異なり

〔○次二行余白〕

たまつし　字鏡に蕢苡を注したり、輔仁和名、順抄幷に豆之太萬と注したり。古語拾遺にツシタマは馬の旋毛にたとえたりといへり、旋毛は順抄にツムシと注したり

たゝらめ　内膳式春菜料に、多々良比賣の花搗あり、衞門府風俗哥に、多々良女の花のとかいねりこのむやけ紫の色このむや、と見えたり。字鏡には莘を注したり。按に式のタヽラヒメはタヽラメなるべし、さてタヽラメてふとは爛目(タヽラメ)の事にて、順抄に瞜をタヽラメと注したり。瞜は眼瞼(マブタ)の腫て眼涙の凝るなればかくいふゑ。今の俗にタヾレメといへるゑ。おもふにこの草瞜(タヾレメ)を治する故に、かく名付つるならん、其治驗によりて名とせる例もあり、龍膽草、溫病を治するによりてエヤミクサといひ、敗醬、赤眼を治するによりてチメクサといへる類是なり、今の俗にタヽラビといへる草あり、目疾を治するに風府の穴へその葉を傅(ツク)ればいゆるなり。こ

右以政事要略補之

圏件信友ガ比古婆衣卷三ノ四十八丁ヨリ五十四丁マデ、タ、ラメノ事論ヘリ

圏本草綱目啓蒙濕草中ニ鱧腸タ、ラビとよめり`こは小紫斷アルト云ルカ故

れタヽラヒはタヾラメの訛(ヨコナマ)れるをしりたり、これ本草經に載たる石龍芮也。救荒本草に此草を菜となしくらへるとみえたり。今にしても田穀不登時は田人(タミ)これをくらへり。わがいにしへは儉素をもとゝし給へば、春菜の料に入られしこと義理ぞ。内膳式にもまたすでに龍葵なごをも擧載たりければ、タヽラメのタヽラヒなることいよ〳〵疑なし。さて莘は艸の聚生の貞にして、一草の名に非ず、おもふに、これ椿鞨の如き二合のこゝろにや、石龍芮、味莘と有は、其辛きに艸を貧て艸莘の義にて、それをタヽラメと注せるもしるべからず、ある人タヽラヒはタヾ梅の花といへるを書あやまれりといへれどおく說に近し

たなしね　天智紀に稻種をよみたり、いなたねの條をみつべし

たけのこ　竹筍をよみたり。古今集みつね「今さらに何おひいづらむ竹のこのうきふししげき世とはしらずや」また源氏胡蝶の巻に「ませのうちにねぶかくうゑしたけのこのをのが世々にやおひわかるべき」また横笛のまきにも、くれ竹のこはすてがたき、ともよみたり

たかむな　紀に竹筍をよみたり、神代紀上に投湯津爪櫛此卽化成筍、こゝにタカンナとよみたり。字鏡に笋を註したり。筍笋おなじ、竹芽(タカメ)菜(ナ)の義なりといへり。新六帖に「吳竹のお

に風俗歟の滅紫色にかなへり。石龍芮は同書に毒草部にいれり、又無言抄にも今のウマ

ミツバ之といへり、然ハ内膳式の春菜料に用る物はいづれにかあらんうたがはし

くれてさせるねたかんなうもれなからに身は老にけり」また、たけのこともよみたり、古今集みつね云云

○順抄に竹具に、笋、和名太加無奈○長間笋、之乃女○籜、笋乃宇波加波○篾、竹乃加波○節草にいふは草に從て莭に作る布之○兩節間俗云與、槃按に竹膜を竹絲草といふ、竹譜にみえたり誰が竹譜といふことをわすれたり

俗にタケノヨノカミ○竹實、即竹米之、一種有如鷄卵者、一名練實、廣東新語にみえたり○兎齒、俗云、笋乃石着(イシツキ)○竹黄、即天竹黄なり、日向國方言、竹樟腦(シャウノウ)○仙人杖、俗云サヒタケ、またタチカレ○僞筍、俗名ハイモ○竹蓐、俗名雀乃イヒ

たちはな　續紀天平八年、從三位葛城王、從四位佐爲王等上表曰、和銅元年十一月廿一日、供二奉擧レ國大嘗會一、廿五日御宴、天皇譽二忠誠之至一、賜二浮杯之橘一、勅曰、橘者果子之長上、人所レ好、柯ハ凌二霜雪一而繁茂、葉經二暑寒一而不レ凋、與二珠玉一共競レ光、交二金銀一以逾レ美、汝姓者賜二橘宿禰一也。　萬葉に冬十一月左大弁葛城王等賜姓橘氏之時御製、聖武天皇「橘は實さへ花さへその葉さへ枝に霜おけどまして常木(トコヨギ)」　眞淵云、万葉本文十水田「橘を守部のいへの門田早稻苅こきすぎぬ不來とすらしも」　こは守部氏なるもの丶家の門田といふに、橘守(タチマモリ)てふ氏も

圉玉かつま七ノ巻に云、ひごの國人のいへる、かの國にてひきがへるとい

有をもて、語をのべて、かくは冠らせつらん、守部は河内の神別にて、姓氏錄守部王といふも有、橘守は左京の諸蕃にて、かの但馬日楢杵（ヒナラギ）が孫多遲麻毛理が、常世の非時の香菓（カクノコノミ）を持來しよりぞ、その裔子は橘守を氏とせしなり古事記に垂仁天皇の御世の末に、三宅連等の祖名は多遲麻毛理を常世につかはして、迦久の木實を求らるとみえたり、こを引たり垂仁紀に此木のみを釋て今謂橘是也と有に依、そのもと來し人の名をもて多治婆名とは後に呼し也けり。然ればたちばなはたぢま名なれば、橘守と書て、氏もたぢまもりと訓べきぞ。橘を今も上總人南部人はちを濁りていへり。古人はた唱へけんかし。婆と麻の淸濁の通ふは常いふが如しといへり。後には花たちばな、あへたちばな、からたちばななどあり。皆それ〴〵の條にしるしたり

たにぐゝ　記に多尓具久と書たり。上のクは濁音ぞ。萬葉巻六にも多尓具久と書たり。祝詞式に谷蟆（タニグヽ）乃狹度（サワタル）極とあり、谷蟆をタニグ、とよみたり、また谷潜とも書たり、これ蝦蟆をいふなり

たかとり　予が同僚長谷川某云、吾むかし公の仰により、うるまの島に屬したる海見島（アマミ）にわたりしに、彼島にてツグミをタカトリと呼けるぞ。島嶼の言葉なれば、鳥獸の名も往々に差て

ふ物をたんがくといふなるは、古のたにぐゝの詠りなるべくおほゆとかたりしは誠に然るなるべし

補

深山カハセミをコハルこ呼、魚虎をカントリと呼、雀をヨモントリと呼、此類枚擧すべからずこ云々 アマミ島は今大島といへり 大和物語の賦の巻喜種の歌に「たかごりがよゝになきつゝこゞめけんきみはきみにここよひしもゆく」按にツクミこふ鳥は秋の比渡りくる鳥にて、ひるは竹林中などの深き處にすくみかくれて、よるになりて鳴わたるものなれば、このうたの心にかなひたり。さて海見島の傳記をけみするに、むかし平氏檀の浦の役に敗北の公卿幷に士卒ら百餘人この島ににげ渡しこゝあり、されば其比までツグミをタカトリこ呼しなるを、彼島に其名の遺りたるは、卽平族の傳へしならんか、またおもふにツグミもスクミの轉じたるにや、武藏國秩父郡の人いふ、ツクミは地上をあゆみつゝ立こまりてすくむものなれば、スクミの義にやこいへり。さこ人はスクメともいへり、メは集なればさもあらん

玉むし　新六帖、知家、はかなさは露よりけなる玉むしのからをこゞめてかたみこやみん、今の俗に弄ぶ金龜虫なるべし　〔〇以下五行幷ニ次頁白丁〕

たはみづら　萬葉巻十四に、乎呂田尓於波流多波美豆良、これをミクリなりこいへり。ミクリは三稜なり。さて乎呂田は疎田なるべし、タハミは撓の義にやこいへり、されど撓はタワミな

ればいかゞ、いまだえ考へず

たまかづら　萬葉卷二に、玉葛實不成樹とよみたるは、玉藻玉かしはなどのたまにして、例の賛辭なれば、一種(クサ)には非ず、玉蘰影尓見乍などよみたるは、玉蘰今とはとなるべし（玉葛實不成樹とは、山菅實不成と同例なり、すげの條、やますげのくだりにしるしたり）

○貝にいへるは丹敷(ニシキ)貝の小なるに似て、牒樞(ツカヒ)短かく内ふかし、翁貝、畚(フゴ)貝ともいへり

たまばゝき　万葉卷廿、天平寶字二年春正月三日、召二侍従豎子王臣等一令レ侍二於内裏之東屋垣下一、即賜二玉帚一肆宴、仍應二詔旨一各陳二心緒一作レ歌賦レ詩、家持「はつ春のはつねのけふの玉ばゝき手にとるからにゆらぐ玉のを」俊頼云、玉帚は蓍といふ草をといへり。今の俗に地膚また漏盧の類にいへり

たむけぐさ　眞淵云、萬葉卷十三長歌、未通女等尓あふ坂山に手向草麻(ヌサ)とりおきて我妹子に相海の海乃云云、こは手(タ)祭(ムケ)種(グサ)の麻(ヌサ)とつゞけたるなり、今本に絲取置と有れど、いにしへより手(タ)祭(ムケ)に絲を用る事なく、理もなし、麻の字を絲と誤りし事明らかなれば改めつ。卷三に「佐保過て寧樂の手祭におく幣は妹を目かれずあひみしめとぞ」てふ歌の意も詞も相似たるもて

校云、之ノ下、冠辭考ニヨルニ「本乃手酬草云云と有、此濱松之本を今本に濱松之」ヲ說セルガ如シ 園藏玉雲は猶

おもへ。且この草は借字にて、種の意ぞ、その色品をいふのみ。卷六に、其さほ川に石(イソ)に生(オフル)菅根取て之努布草解除(ハラヘ)てましを、てふも慕(シヌ)ばる、おもひ種を、解除失ひてまし物をと云也。その秡の具の草といふべき物は菅のみこそあれば、この草も借字にて垣衣の事ならぬもて今をもしれ、手向草てふ事に俗說多かれば猶いふべし。卷一に「白浪の濱松が枝の手向草幾世左右(マテ)にか年の經ぬらん」また卷九に、再載たるには、白浪の濱松之木とかけるは誤ぞ。さて舊本に、本の字なるに依に、右の枝と有も沵の字を誤れりと見ゆ、然ればそも濱松がねと訓べし。前のみかどの幸まして、をり〳〵この濱の松陰に、み旅の手祭せさせ給ひけんを、其松の今も在たてるを見て、むかしの手祭種は幾世までにか年經ぬらんと云なりけり。されば是も草は色品の意なると、右の二首の例にてしるべきなり。

或人は、手向草は松を云て、結ひ松の類ぞといへれど、松をむすぶは誓にこそせれ、手向などに松をせし例なきをや、又手向草は松蘿にて、日蔭の事ぞといへど、日かげは神わざに蘰などにはすれど、たむけにせし事なし。又松を手向草といふと意得てより、すべての木をも何草といひ、獸をも何鳥などいふごとき事は、後世の好事のわざぞ。按に齋禮祈共に、たむけと訓ぜり、貫之は手向をいのりとよみたり、國のさかひのみねのあるはあら山のいたゞきなど通る人そこにかならず手向する事なれば、そこをやがてたむけといふを、通辭にて、たうげといふとといふなるべしといへり、以上冠辭考

立田の山の手向草夢の昔のあとの夕暮、櫻之といへり「山里のふるき軒ばの手向草花はよそなる名殘とぞ見る松」といへり

校云按ニ以下ハ冠辭考ノ

補　コノ處ノ文ニハアラズ

たまがしは　紀の竟宴のうたに「玉がしはをかだまのきのかゞみ葉に神のひもろぎそなへつるかな」これも玉かづらのたまとおなじ、かゞみばの條をみるべし

たなつもの　田穀をいふ之、式に穀の一字をよみたり、神代紀にも五穀をいつくさのたなつものとよみたり

たまみぐさ　藏玉集に萩之といへり

たまえぐさ　藏玉集にあしのつのぐむをいふといへり

たけのかは　順抄に篾を註したり

たつたぐさ　藏玉集に紅葉之といへり

たくみどり　清記に巧婦鳥をいへり、順抄にも註したり

たつのこま　龍の駒之。竟宴哥集に、龍をよみたり。周禮に凡馬八尺爲龍、公羊傳にも七尺以上爲龍とみえたり。萬葉集卷五に多都能馬(タツノマ)ともよみたり

たつのひげ　輔仁和名に石龍蒭、和名宇之乃比太比、一名大都乃比介と注したり

玉こすげ　夫木集、元眞「あしがらの山にしげれる玉こすげゆきかふ駒もすさめざりけり」

或云、小すげの實をほめて玉こすげこいへるなり

たぢひのはな　虎杖をいへり、反正天皇淡路宮に生れ給ひし御時、瑞井を汲て洗まゐらせしに多遲比花落て井中にありしによりて、御名多遲比瑞歯別尊こ申奉るなり。三代實錄に、たちの花こしるしたり。日本紀、姓氏錄等によるに、たぢの花は即虎杖之。さてたちの花は、本名にして、いたどりこいふは俗名なるべし

たまのやくさ　莫傳抄にはぎゝこいへり。救荒本草に載たるは千屈菜也、世に鼠尾草こいふはたがへり

たそがれぐさ　藏玉集に夕顏之こいへり

たちばなどり　藏玉集にほこゝぎすなりといへり

たむほゝのはな　夫木集に「なにしおふつゞみが瀧へ來て見れば澤べにさけるたんほゝのはな」輔仁和名に、蒲公草、和名布知奈、一名多奈こ注せしは即このタンポヽにして、今通名蒲公英なり　〔○以下四行余白〕

知行

ち　順抄に、茅を註したり。神代紀に、茅纒(チマキ)、仁徳紀に茅荻(チスヽキ)、崇神紀に、淺茅原。ちは千の義、おほくあつまりておふるなればいふこといへり　また秋に色の染るものなれば、血の義ともいへど皆信がたし

ちさ　順抄に、苣を注したり。萬葉卷十八に、知左能花こよみたるはこれにや、また山知左にや

ちや　茶の字音をよみたり、類聚國史卷三十三、嵯峨天皇弘仁六年六月壬寅、令ニ畿内並丹波播磨等國殖ㇾ茶、毎年獻ㇾ之、これ我國に茶を用ひしはじめなり。其後に後鳥羽院建久二年に、栂尾の明惠其種を吾山にうゑしより廣く世につたへたり、こ栂尾寺の記にみえたり。東鑑卷二十に、順德天皇建保二年に將軍家御惱ありける御時に、茶を奉りしとあり。後の歌に目覺草(メサマシグサ)、また樵(本マヽ)の春草などよみたり。其出る所をしらず○康熙字典引魏了翁集云、茶之始其字爲ㇾ荼、如ニ春秋齋荼、漢志荼陵類、陸羽盧同、以后則遂易ㇾ荼爲ㇾ茶。槃按に、漢志年表に茶

陵、師古注に荼音塗、地理志荼從〻人从〻木、師古注に戈奢反、又丈加反、これ則漢の時既に茶字あり、また尒雅釋木に檟苦荼、則しる是陸羽にいたりて荼を易て茶となすにやあらん

〔魚〕ちぬ　古事記傳卷三十九丁に云、黑鯛の屬にチヌと云魚あり、和名抄に海鯽魚と當たり。此魚和泉ノ和泉郡血沼ノ海の名產なりし故に地名を卽其物の名に負るなるべし。さる例こゝにも隣國にも甚多し、さるに此魚の多くあるより地名ともなれりといふ說は本末たがへり

〔〇一行餘白〕

ちがや　萬葉卷十六に、神樂良能小野尒茅草苅とよみたり。いにしへはチとカヤはおのづから二物なり、今はチカヤ混じて一物となしたり、つばらにかやの條にしるしたり。いにしへ神祠廟堂を茅もて葺たればチカヤといふなるべし、チは卽茅ゝ、カヤのカは古言に上よりおほふをいひ、ヤは屋舍をすべていふなれば、茅もて作る覆屋の義にいへるなるべし。左氏傳に清廟茅屋昭其儉也とみえたり。我國の故實にも淳素儉約を貴とびて華靡壯麗を用ひざれば、すでに伊勢宮殿の如き、今にしも猶茅をもて神祠を葺たり、中元神籍端午饗もまたこの茅を用ふ、これその祭祀苞苴の用に供するを古今和漢みなおなじ

ちよき　秘藏抄に松をいへり

ちどり　記に知登理、萬葉卷三に夕浪千鳥、同卷に乳鳥とも書たり。あだし國人の書たる款

に冬燕とみえたり、われいまだ名物の書に冬燕といふ名をみるとなし、今の唐山の俗名なるにや、いまだ考へず、古歌に

「とほくなりちかくなるみの濱千鳥こゑにはしほのみちひをそしる」

ちめくさ　順抄に敗醬を注したり、この草血眼(チメ)を治すると有ゆゑにいふなり。　順抄別に女郎花を出す、おみなべしの條むかへみるべし

ちゝのみ　萬葉卷十、卷十九、卷二十に知智乃實乃父とよみたれば、父に因あるものならん。さるを眞淵冠辭考に、銀杏なりと釋したれど、これは眞淵一家の說之、われは信がたし、乳字の和訓を考ふに、神代紀上卷脚摩乳(アシナヅチ)、手摩乳(テナヅチ)、また下卷乳母(チオモ)、記上卷胷乳(ムナチ)、萬葉卷三、帶乳根(タラチネ)、順抄に乳和名(チ)、また乳癰、和名(チフ)、是いにしへに乳をチヽと訓たる例なし　〔○以下九行余白〕

ちさのはな　萬葉卷十八に、世人能多都流許等大豆知左能花とよみたり、やまちさの條むかへ見るべし

ちよみぐさ　莫傳抄に松をいへり

ちぎりぐさ　藏玉集に菊ゝこいへり

ちどりがひ　夫木集に「はまちごりふみおくあこのつもりなばかひある浦にあはざらめやは」このうたは千鳥貝の歌ならんか。さてこの貝はみつかひのされたるをいふなり

ちくさがひ　裏雲珠こいふ貝に似て小なり、また扁螺にも似たり、表に久理なく紅白紫のまだらありて華布のかたのごし。夫木集に「君が代のためしとみゆる長濱にちくさの貝の數もつきせじ」この歌は種々の貝をよみたるなれど、ちぐさ貝の名はこれらの歌詞よりいでたらめ

困ちよ若草　藏玉若菜「いづくにもけふや摘らん千代若草御調の種の數をそなへて」

〔○五行余白〕

都行

つる　蔓延の泛稱なり、ツゝはツ、こいふ詞ゝ、ツヽクもツラもツラ、も皆おなじ詞ゝこいへり

○鶴をいへるは、たづの條を見つべし

囲万葉集抄卷五卅二丁云、

つぬ　蕀をよみたり、仁徳紀に、菟怒さはふいはの姫、繼體紀に、つぬさはふ磐余(イハレ)の池、萬葉卷十一に角障經石村、蕀は常にいふツタなり、ふるくはツヌ、ツナこもいへり

つた　順抄に絡石を註したり、萬葉卷九に、蔓都多(ハフツタ)こもよみたり。或は蔦をもよめり。集韻に樢同蔦、また地錦をもいへり、これは今云丹敷蘿(ニシキツタ)なり。山家集に「おもはずもよしある賤が住家かなつたのもみぢを軒にはゝせて」このうたも地錦を讀たり

つげ　順抄に黄楊を註したり、万葉卷九に黄楊(ツゲ)之小梳、卷十一に黄楊枕、卷十三に日本の黄楊の小櫛こよみたり

つき　記に都紀、万葉に齋槻(イハヒ)、小槻(ヲ)、うゑ槻なごよみたり、詳につきのきの條にしるしたり

○鴇を註したるは順抄にみえたり、また漢語抄を引云、紅鶴、また紀私記を引云、桃花鳥。安寧紀に倭(ヤマト)桃花田、垂仁紀に狹(サ)桃花(ツキ)鳥坂、宣化紀に桃花鳥、今はトキまたトキサなごゝいへり。淡紅毛の鷺也。師曠禽經に載たる朱鷺是なり

つみ　順抄に毛傳の註を引て桑柘、蠶所食也。漢語抄に云、豆美。されば喙の義ゝ。今の俗には山クハ、狗クハ、野クハなごこいへり。葉は構(カヂ)の葉に似たり、萬葉卷三に柘(ツミ)之左枝こよみた

柘者似桑有刺木也といへり

補 新六帖に、光俊、山風にならの葉がしは音高し住みみづくもきゝやおどろく

食ハ茅ツ花ニ万

り

つは　出雲風土記に石蕗をよみたり、今はツハブキといへり、蕗(フヽキ)に似て滑(ツヤ)あるものなり、ツは滑の義なり。史游が急就篇に載たる槖吾なるべし

つぶ　粒をよみたり、靈異記にツビとよみたり

○木欒子をいふは俗名之

○螺をいふも俗名之、皆圓の字義之。つぼすみれの條見るべし

づく　順抄に、木兎と註したり。尓雅の註を引て、木兎似鴟而小、兎頭毛角者也、和名都久、或云、美々都久。日本紀私記に、筑紫州地形如木兎、故名之。この鳥仁德紀にもみえたり

つす　古語拾遺に、薏、古語都須と見えたり。順抄に兼名苑を引て、薏苡、一名芋珠、和名豆之太万

つばな　茅針をよみたり。万葉巻八に、春野に抜流茅花、同巻に、茅花抜浅茅之原、また浅茅之花ともよみたり。游清云、凡つの字は突の意にて、この花の針のやうになんあれば、かくいへり。つばな、つばら〳〵になどいへるも、つの字よりつばら〳〵と受てこそいふといへ

八サノ「わけがため我手もすまに春の野にぬけるつばなぞめしてこえませ」八廿ヲ「我君にわけはこふらし給ひたるつばなをくへどいやゝせにやす」

り。つ|よりうつりて、ちばなとはいへるなり、ち|よりつばなに轉(ウツ)るにはあらじ

つゝじ　字鏡、順抄并に躑躅を注したり。万葉三に、茵花香(ツヽジバナニホヘル)君、卷六に、丹(ニ)管(ツ)士(ツシ)の将薫(ニホハン)時、卷七に石管自、卷三、卷九に、白管自とよみたり。茵は例の借字也。茵芋は今云ミヤマシキミ也。今ツヽジ数種あり、春花さくを春鵑といひ、夏咲を杜鵑といひ、またキリシマあり、元來日向國霧嶋岳よりいでたりとて名づけたり〔霧島岳は高千穗の嶺也〕これを日顏といふ、皆躑躅之、詳に釋了心皷山志及び周文華開史等に見えたり、いにしへにも其種類あり

つまゝ　万葉卷十九に、過澁谿埼見巖上樹々名都萬麻、家持、礒上之都萬麻乎見ば根乎延而年深有之神佐備にけり。新六帖「いそのうへは心して行け眞砂ぢやねはふつまゝに駒ぞつまづく」この樹いまだ考えず、強(シ)いはゞツマ、夫妻互に稱る詞なれば、雌雄にもわたるべし。マ|はマツの約りにて松ならんか、さればメマツ、ヲマツの巖の上に生(ヒ)て年ふりたるを、その俗(サト)の方言にもし夫妻(ツマ)松といへるを、そのまゝによみたるにや、いかゞ。さて記の歌に、ひとつ松あはれ、とよみたり。今の俗にも、相生松、夫婦松などいへるともあれば、いにしへの俚言にも夫妻(ツマ)松といへるともなきにしもあらんか

古今集
あづさ弓ひきのゝつづら末つひにわが思ふ人にとのしげゝん

つぼみ　莟をいへり、蓓蕾もおなじ、つぼむ義之

つゞら　式に黒葛をよみたり、崇神紀に、葛頭邏(ツヽラ)さはまき、とよみたるもこれにや、今は防己をいへり

つばめ　万葉巻十九に「燕來時に成ぬとかりがねは故郷おもひ雲隱鳴」とツバメは光澤羽集の義之、順抄にツバクラメと註したり。燕は春來て秋去もの之。徐葆光中山傳信錄七月令に、玄鳥來と記(シルシ)たるをみれば、この鳥こゝを秋さりて秋より冬かけては彼のうるまの島に栖けるとなり。雁は春より夏過るまで蝦夷の千島にひそみ卵せしとはいへり。猶かりの條をむかへみつべし

つぶり　順抄に鷸を注したり、鷸は今云シギ之。しぎの條見つべし。今云カヒツブリは万葉によみたる二保、また息長(シナガ)鳥にて、即鸊鷉なり。ツムリとシギは自ら別之

つきげ　順抄に載たる桃花鳥なり、つきの條をみるべし

つぐみ　順抄に鶫を注したり、ツグミはスクミの轉れるにや、たかとりの條むかへみつべし

つなし　順抄に、鰶を注したり、孝德紀の塩屋鰶といふ人あり、此云、舉能之盧と注したり、

されば閫書に載たる洲鯯はこゝに云コノシロにして、抄のツナシなるべし。萬葉卷十七、家持、都奈自こるひみの入江、こよみたるツナシも、おなじうをなるべし

つかひ　こは片つ貝をはぶきていへるならん。長明が海道記に「たのみつる人は渚のかたつかひあはぬにつけて身をぞ恨むる」この歌などにてしるべし

つばき　順抄に、漢語抄を引て、海石榴を注したり。万葉卷一、河の上のつら〳〵椿つら〳〵にみれどもあかぬ巨勢のはるのは。また卷四「あしひきの山椿さくやつ(岨)をこし(越)しかまつ君がいはひつまかも」こゝに椿の字をよみしは、後世山吹花に欵冬の字を用ひ、鹿鳴草に萩の字を用ひしが如きゝ。其事ははじめの例言中にしるしたり。記に婆毘呂都婆岐ことあり。ツバキは光澤木の義なるべし

○清記に、市はつばいち、やまこ(大和)にあまたあるなり。抄に椿市(ツバキ)、長谷にちかきは今たばいちこいふ所こぞ

○ツバキの生(ナマ)木を燒て灰こなせしを山灰(ヤマアク)こて染用に入るなり、はひの條をみつべし

○あやつばき　此即海石榴にして、柏葉をさしまじへおふるものなり。花は紅白兩種あり。

寛保中に、伊勢國鈴鹿郡高宮村より奉りしよし、植村某氏の紀行に見えたり。今三縁山増上寺台廟御園中に榮ばえけるとぞ。式に、鈴鹿郡椿太神社あり、今は椿の明神と申ける伊勢國にあり其境内にも此樹あり、こゝにアヤツバキといふよし、亡友平春海が記に云、御社の前にいたれば、かなたこなたにいと陰ふりたる椿の花、白きとあかきがあまたたてり、立よりてみるに、檜の木のさましたる葉のえだどに生いでたり、こはいかなる種ぞと問へば、此御社の前なるは皆かゝる葉の生いづめり、此をむかしよりあやつばきとぞいふなる。またこのうしろなる高嶺をつばきがたけともいひ、なべてこのほとりに椿いとおほしとなんいふ。またこの御社はなにの神のいはゝれ給ふにかといへば、猿田彦の大神なりとぞ、やがていがきのもとにぬかづきて「はふりこがいはふみむろのあや椿遠つかみ代にうゑし種かも」

○なつつばき　此は海石榴の種にはあらず、其花のよく似たれば名とせり。其葉はやゝ櫻のはに似て清碧之。中夏の比、五(イツ)ひらの白花を開く、げにツバキの花とおなじ、俗にサラッツジュといへり、蓋し伶利の花姑くこの名を襲ひて、花辧の心を惑はすのみ、豈それ抜汗郁國の娑羅樹乎　抜汗郁國娑羅樹の事容齋四筆に出たり○郁の字不審未考

○海石榴は明人のいふ山茶なり、一名石榴茶、一名海榴茶ともいへり、この樹の花葉は苦茶の花葉にやゝ相似たれば、茶名をおひたりけん。さて海石榴の名は式にもみえたれば、蓋し漢土にては唐末の名なるべきに、槩いまだ嘗て宋元の書に見る所なきは撿及の足ざるゆゑ之（正字通、榴字の注に、海石榴、高二尺卽結實不可淩暾）山茶の名は明世より唱るならんか。時珍綱目に、宋の范成大がいへる南山茶花を引たり、おもふにこれは尓雅にいふ檟苦荼の荼花なるべし。さてまた朝鮮にてツバキを冬柏といふよし、按に淸の善景愚か養花小錄に云、世人不習衆花名品有以山茶爲冬柏、これ冬柏は俚言之、後世此花紅白緋纈雜色單瓣重瓣等の種いでたれば、王路が花史、陳扶搖が花鏡に其名色を釋して一譜を錄したり、就てみつべし

○本草綱目灌木部に、｜茶を載たり。我國のものもおほかたは灌木なれど、日向國諸縣野尻郷に生るものは皆喬木にして、其幹抱を合するものおほし、是其地勢によりて卽然り、槩むかし其地に到り親しく見る所なり

○椿　順抄に、和名豆波木と注したり。ツハキ卽光澤木の義之。此樹長じ易く且壽考おほき木なれば、莊子に大椿といひ、蘇軾靈椿（淵鑑類函に引）といへり。されば此樹の多壽を美稱し、光澤の

囲玉かつま四の巻に云、月草は今世に露草といふ物え國によりボウ

義を借てツバキといふにや。今の俗にキヤンチユンといふは卽香樹(ヒヤンチユン)の唐音を轉訛したる也。唐本草に、香者名レ椿(嘉祐本草に莢名ニ鳳眼草一)臭者名レ樗、新城縣志にこれを臭椿と云、武藏國山中のもの多くは皆臭椿也、さるを人或は是をキヤンチユンといふは違へり、椿樗栲は一木にして三種也

○詩唐風に山有レ栲、尓雅に栲山樗、注に栲似レ樗色小白、生ニ山中一因名云、亦類ニ漆樹一。今俗これをゴンズヒ一名カラスサンシヨウといふ、ゴンズヒは卽吳茱萸也。こにすひの條をみつべし。こゝに云烏山椒を、いにしへ盡し吳茱萸となせし也。さてまたいにしへは栲をハシとよみし也。今もハジウルシといふ、筑紫及四國わたりにて其實を搾(シボリ)て蠟をつくり、燭用の料となし、廣く四方にいだす　(以下四行幷に次頁白了)

つきぐさ　萬葉卷七に、月草に衣は染、また月草に衣は將摺とよみたり。また卷四に、月草之徙安くこもよみて、この花のうつろひやすく、また物にも移りやすければ、傳草の義也。江次第に、鴨頭草移(ウツシ)とみえたり。されば音便にて泉式部家集には、ついぐさとよみたり。式には都由久左とよみたり。遂に顯昭が哥に露草と書たり、古今集にもみえたり、これもよしなきにもあらず。萬葉卷七に「月草に衣は將摺朝露にぬれての後にうつろひなんか」とよ

シ草べドし草ともいふ、世にボウシといひて物を染る紙あるは此草にて染たる故の名之又古き歌に花色衣とよめるも此月染之°今の世に青色を花色と云是之°又それをちくさともいふは月

みたれば、朝露に從(ウツ)れらばさもいふべし、さて此花を紙にうつせしとは寧樂の朝などより有て、これをまた衣にすりけるなりと物にしるしたり。此草は、陳藏器拾遺に載たる鴨跖草、一名碧竹子、また後世に碧蟬花などもいへり。うつしの條と併て見るべし

つしたま　つすの條にしるしたり

つちはり　萬葉卷七に「吾屋戸(ヤド)に生土(オフル)針從心も不想人衣にすら由奈」此ツチハリを明し解(トク)ものなし、槃按に、輔仁和名に王孫、和名奴波利久佐、一名乃波利。順抄に、沼波利久佐、此間云三豆知波利、この草かの國の王孫にや、そはとまれかくまれ、けだし其葉の榛榛(カクチハリ)に似たればいふならん、されば野榛(ヌハリ)土榛の義也。其證は、獨活の葉の桵(タラ)の木の葉に似たれば輔仁和名、順抄幷に都知多良と注したり。ツチタラは即土桵(タラ)、字鏡に乃太良、また野桵(タラ)の義也。古の物に名を設る格にかゝる例おほし。おほよそその木に似たるものにその木の名を借て野といひ、土といふは和名の例に似たり。草にあれ、木にあれ、似てよからぬものには犬といふ詞をおふるも。漢土にて小なるに石の字をおひ、大なるに馬の字をおふるが如し。今ツチバリならんとおもふ草を尋るに、江戸の花師(ハナヤ)の呼名に立葵といふ、また大和國多武峯にてエレサ

草を訛れると或人いへり

ウといへるくさあり、伊勢方言に養老草といへり、上野國、下野國の深山にもありて、一枚三葉或は四葉を敷、その正中（マホツ）に白花をひらき、其葉は正しく榛（ハリ）の葉に似たり、さて榛に似たればこそ衣にも摺ならめ

○藥を注したるは字鏡にみえたり、これいまだいかなる義をしらず

つちたら　輔仁、順抄并に獨活を注したり。この葉の桜（タラ）の木の葉に似たればいふ之。郎土桜（ツチタラ）の義なり。この例つちはりの條にしるしたり

つがの木　眞淵は黄楊の事ならんといへり。槃強ていはんには、今ツガノキともトカノキともいひて、つねに深山に生て、葉は樅（モミ）の木の葉に似ていとこまかにしてしゞに生たり、その材も樅（モミ）に似て尚良材之、萬葉卷一に、樛木（ツガノキ）の彌繼嗣に、卷三に、繁生有都賀乃樹、卷十九に、安之比奇能八峯能宇倍能都我能木能伊也繼々、卷六に、四時に生たる刀我（トカ）の樹とよみたるにふさはし、さてツゲは集中に皆黄楊（ツゲ）と書たり、眞淵別にみる所ある歟

つまなし　萬葉卷十に「黄葉之丹穗日は繁然鞆妻梨木乎手折可佐寒」何てふ木にや、宿の端（ツマ）にたてる梨の木をよめるにや、いまだ考へず

つきのき　順抄に槻を注したり、唐韻を引て、槻、木名、堪作弓也。万葉卷二に、堤に立有槻木之己智碁智乃枝之春之葉、またうゑ槻などもよみたり。また神功紀、攝政元年の歌に、菟(ツ)區瀰(クミ)こよみたるは槻弓也。むかし陸奥國にて秀衡のつくれる十万弓をみるに、まさしく今もいへる槻の材なり。さて槻は其材其葉よく欅に似たり、之をつばらにせるに、その葉は欅葉に似て邊の岐歯に尖(トガ)りなく、其材は脉理(スヂメ)連絡(カラミ)戻(モトレ)りければいこ強勁え、よて今は多く槃(シメ)版(キ)槃(シメ)杭(クヒ)の料こせり、其勁きと衆木に勝れりこいへり。いにしへ弓材に用ひしもげに義理(コトワリ)なり。
按に江陰縣志云、槻質堅而勁多葉繁陰人家門巷多樹之、俗にケヤキに槻の字を用ひしはツキこいこよく似たればえ、されどキは木理交糾してケヤキの如く直聳ならず、其葉もケヤキに似たれどケヤキは葉邊の岐歯げに鋸歯の如く尖れり、ツキは尖歯なし、圖識に圖狀あり

つるばみ　橡實また櫟實、櫟毬こもいへり、伊勢貞丈の考に云、或人云、凶服に多く橡(ツルバミノイロ)染こ記せり、元來橡は凶服の色にや。答云、橡色元來吉凶の事なし、橡、和名抄に、橡實、和名都流波美、櫟は以知比こ有、其木の實外房を取燒て灰こなし染るに黑色え、諺に此みを鶴の好みてくらふゆゑに鶴食(ツルハミ)こいふよしえけれど榛子(ハシバミ)こいふもの有ど、その物なければ喰こいふさ

たあらざるにぞ、是非は予が知る所之。その焼たる灰にて染ては色薄き故に、五倍子鉄漿を入て黒くするもつ　ばみの名あり。諸書にくろつゝばみと書とはたゞ橡の一字を認てよろし、武家装束抄に、将軍御袍黒橡と有、これもたゞ橡と書てくろつるばみの事之。此説外に考あり、橡古代は元來賤者の服也、大寶の衣服令に家人奴婢橡黒衣と有、平城の御時に賤者の服したると萬葉に證歌あり「橡の解濯衣のあやしくも殊にきまほしき此夕かも」これ賤者の身の直しといふこゝろのうた之。式に橡染、赤白橡、青白橡等みえて、やゝ上下通じて用うる色となりたれども、貴重の人用ふべき綾にして、卑賤の民用ふるは似るべくもなき麻布の類なり。蓋し漸々服色亂れて、寛弘の比より橡は四位以上の服色となれり、橡袍四位以上云云、如此なればもと橡は凶服の色にあらざれども、黒色なれば、鈍色に混じて遂に凶服にも用ひたれば、凶服に限りたる物におもふは非之。唯心院關白の祕記に、凶服の條に橡と載て、仁明天皇素服を除て橡染を着御せり、猶一周の間凶服なりと家記に注せり。又臣下に橡宣下と云とあり、是も素服を除ても天皇亮陰の中は無紋の橡色を着てよとの宣下之、四位も五位も同色之、是また凶服之、慶長公家譜法度に、親王の袍橡、大臣袍橡とあり、是は今の吉

服綾地有紋のふしかね染の事之、かくの如く無紋の橡は凶服にて、有紋の橡は吉服なれば、橡に吉凶の謂なし、染地が有文無文にて、もはら差別こそあれ、其内茜を入るゝ橡斗にて染るにて、猶差別す、外に考あり錫紵、桓武延暦八年十二月皇太后崩、天皇服錫紵、令義解云、錫紵細布即用淺黑色也、また天智紀に云、素服し給ふを、麻物御衣と訓ぜり、是また紵布の御服にして臣庶の藤衣なるべし、紀の通證に見えたり　或云、橡は鈍色に混ずといひ說いかゞ。答云、鈍色は墨に縹を加へ染る也、重服は墨勝にする、輕服程次第に藍を勝樣にして色を分るゝ之。諸書に青鈍といふ是なり。鈍にするに必ず墨をまじへて染ることにて、常の花田は薄濃共に藍斗なり。打見にはおなじ色にみゆれど、全く染りの不同、吉凶混ぜざることそ　その墨の勝たる鈍色が橡に似たる故に、つひに混用ふることになりたるべし。故實は露草にて染る鈍色といふ、勿論墨を入る事輕重の服に隨ふ之、つゆくさは其跡なくはかなきにとる　或人云、諸裝束書中に、白橡に二樣あり、赤白の橡といふは赤色の事、青橡といふは青色の事を云、共に橡は入されども此名をうるは心得ずといへり。按るに、管見抄に、この橡衣を着しぬれば身にとなしといひ習はせりとあり。万葉卷七に「橡の衣きし人は事なしといひし時よりきまほしぞおもふ」かくいへるによりて祝せる心にて唱へ用ひたるにや、されども一點も橡を入ざるものを其名をかりていふもおぼつかなし、いかゞ。答云、汝が疑ひ至極せり、

予が一説あり、延喜縫殿寮式に、青白橡綾一匹、苅安草大九十六斤、紫草六斤、灰三石、薪八百四十斤、是即青色と（本ノマヽ）ひ麴塵と稱する品之。源氏みをつくしに、六位の中にも藏人は青色しるくみえて、注に、青色或號二麴塵一、或稱二青白橡一、園大暦裝束抄に（中園相國公賢公作自二花園一至二後光嚴一）青白稱青色、縫殿寮式に、赤白橡綾一匹、黄櫨大九十斤、灰三石、茜大七斤、薪七百廿斤、同式橡染、搗橡二斗五升、茜大七斤、薪二百廿斤と有、右の如く橡の入らざるも橡と稱して墨といはず、是古今集黒染といふ事をさけて、黒の字の代に橡の字を用ひたるべし。白の字は薄を心に用ひたる字にて、赤うす黒色（黄橡は服色部類に木蘭地といふ色をいふ、黄は黒色之、今のかちんといふ色の如し）青うす黒色は事之、さて又白橡とのみあり、彈正式、奴婢の服にみえたり、是薄黒色なるべし。かくの如くなれば、凡白橡といふには三等ありと心得て、其人體によりて分別すべし。源高明西宮記に、天皇白橡の御服云云とあるは、是奴婢の白橡にはあらず、赤青のふたつを通じて云たると或説にみゆ、さもあるべき事之。同記に、主上出御赤色御袍とあり。式部卿重明親王吏部王記に、内宴日主上着御赤白橡の闕腋袍及靴、王公侍臣着青白橡闕腋袍魚袋餝劍靴、北山抄に、仁壽殿出御赤白橡、源氏乙女の巻に、あか色のみそ奉れり（赤色或稱赤白橡）是皆橡の字、黒の字にみて仔細なし、事

など祝する名ならば橡その薄を白橡といひ、濃を橡とのみいふ（俗黑橡といふ宜からん、初にいふは前段にいふごとく、黑の代に用ひし故事也）後世五倍子、鉄漿を加へて眞黑になして、橡の名を用ひたる故に、遂に橡を入ざれども薄黑を白橡といひ、濃を橡と稱することになれり。されば後世諸抄、又は凶服抄などに出たる白橡は、淺鼠色にて、黑橡は黑色也。凶服は布、又は平絹、吉服は有文綾の違はあれども、皆ふしかね染のみ也。そのふしかねにては臭く、また朽ることはやきが故に、下地に蘇芳の木をよく煎じて染、其うへを五倍子ノ枝、もしくは葉をせんじて染ることになりたれば色もうつくしく臭もなしとぞ。是も橡の名を失はぬまゝに稱し來事は、是元來黑字をさけて、橡と稱する故實をもてなり。或云、空頂黑幘といふ事あれば、黑の字をさくるのみいふ事あるべからず、いかゞ。答云、黑染衣といふをのみさくるにて、あへて餘事にわたるべからず、黑戸の名もあり、なづみて論ずることなかれ。或云、日本紀持統天皇七年、詔令天下百姓服黃色衣、奴婢皂衣とあり、かくの如くなれば、凶服の橡も奴婢の橡とおなじく、橡をもて染る歟。夫を天皇の凶服に用うるも穩ならず、また村上天皇元暦八年正月廿二日、侍臣女房等出修明門外除素服着皂衣と、此皂衣といへるも橡の衣也。かくの如く上下ともに同色を用ひ、吉凶

混雑すこいふべし、いかゞ。答云、凡位袍の色、階序古今相改り似て非なるもの紛々たり、まづ天皇錫紵は（素服といふにおなじ、錫はすゞにて色淺黑に白みあり、紵はあさといふ字なれば、色地によりて名づく、素服あらあらとしてもろもろのかざりすべてなき故の名なり）喪葬令に、錫紵細布也、卽淺黑色こ注せり。是墨の色にして麻布の地之、續後紀、仁明天皇承和七年五月丙子朔、甲申、天皇於二清涼殿一着二素服一、戊戌、天皇除二素服一着二堅絹御冠橡染御衣一以臨レ朝也。御簾及屛風緣、並用二墨染細布一云云。こゝにいへる橡は平絹地の橡染之。さて別に綾を染たる事あり、是は茜を入て染るとゝ初にいへるごとく、式に見えたり。されば吉服の橡は茜を加へて染め、凶服の橡には橡斗之、是吉凶差別ありて、貴賤相混ずるとなし。奴婢の橡にも茜を入て染る故に、橡斗にて染たる御衣とは異之。殊に綾織物は奴婢の着ものに非ず、されば都て混合するとなきゝ。後世の錫紵は地布黑橡こみえ、亮闇にも黑橡は地絹之、錫紵は闕服の御袍、亮陰は御引直衣この替あり、またのためしには錫紵は布黑、涼闇は御引直衣鈍色の生平絹こもあり、これは皆古の黑染の製絶て、只鈍こ橡斗になり、其橡も五倍子、鐵漿染にてあれば、只布を用ひ、平絹を用ひ、臣下に綾を用ふれば、有文ならざるのみ凶服の古實を稱せり、後世の凶服抄に黑橡こいふはふしかね染の黑にて、白橡こいへるふしかね染

の淺きにて淺黑色之、常の吉服のふしかね染を橡と唱ふ等、凡て初にいふ如く、いにしへの唱をうしなはず、事實長く傳はりしも知べし

つのまた　式に、角俣と書たり。鹿角菜の類之

つぼくさ　深本に積雪草を訓たり

つゝ鳥　「これもまたさすがにものぞあはれなるかた山かげのつゝ鳥のこゑ」十題百、寂蓮がうたなり　〔〇以下一行幷次頁白丁〕

つぼすみれ　すみれの條にしるしたり

つゆたぐさ　莫傳抄に蓮葉也といへり

つゆやぐさ　莫傳抄に荻之といへり

つゆぞぐさ　莫傳抄にすゝき也といへり

つばくらめ　順抄に、燕を注したり。艷黑羽集の義之。つねにいふは越燕なり、ツチツバメといふは胡燕之、ウミツバメといふは海燕也、イハツバメといふは石燕之。つばめの條をむかへみるべし。天智紀に七年獻二白燕一こゝにツハヒラクとよみたり

つくゞし　貞應三年百首爲家「さほ姫の草かこぞ見るつくゞし雪かきわくる春のけしきに」秘藏抄、家持「片山のしづがこもりにおひにけりすぎなまじりのつくく〳〵しかな」家持とあるは疑ふべし

つなぎぐさ　輔仁和名に牛膝を註したり　〔○以下五行余白〕

つれなしくさ　六帖、雜、草「こしをへてなにたのみけんかつまたの池に生ふてふつれなしのくさ」

つまごひぐさ　藏玉集に、もみぢえといへり

つはひらくさ　輔仁和名に、薪蓂子を註したり　〔○以下五行幷次頁白丁〕

つくみのいひね　順抄に、白英を註したり

つはさかまとり　藏玉集に、隼也といへり　〔○以下八行幷次頁白丁〕

天行

てふ　蝶を字音に呼べり。六帖に「いへばえにいはねばさらにあやしくも陰なるいろのて

ふにもあるかな」

てむ　順抄に貂を註したり。字音の轉れる成べし、また或は猟に作れり、これ和俗の製字なりこいへり　〔〇以下三行并次頁白丁〕

てつくり　字鏡に紵を註したり、靈異記に䩆をよみたり、順抄に白絲布を註して俗用手作(テツクリ)布一萬葉卷十四、武藏國歌に「多麻河泊にさらす氐豆久利佐良々々に奈にぞこの兒のこ許だかなし伎」また卷十六に、「日暴之朝手作こもよゝたり。式に調布をよみたり。和訓栞云、久利反キ也、手の御調(ミツキ)の義、紀に女手末之調(ミツキ)こいへる意なるべし

てりうそ　西行家集に「桃園の花にまがへるてりうそのむれたつをりはちるこゝちする」何鳥にや

てなれくさ　藏玉集に扇ゝこいへり

てらつゝき　字鏡、順抄并に斲木を注したり、即啄木鳥なり。今はキツヽキ、ケラツヽキなど、いへり。木中の蟲を喰ふ鳥ゝ、ケラは虫なり

登行

こら　順抄に虎を註したり。万葉巻十六に、韓國乃虎云神こよみたり。紀に虎を友こして術を學びたるよし有、また万葉にも虎乗てふうたも有。虎は人を捕故にトラこいふこいへど、まゝ馴たらんにはかゝる事もありぬべし。往に琉球人の物がたりに、福州鼓山の道霈禪師は大徳の僧にて、つねに虎を養馴して、つねに其側におきたりこぞ、福州に虎ありてまゝ人を害すれど、禪師の服したる衣の裁端を佩たるものには、虎も害せずこいへり。さていにしへは其皮を敷ぞるあり、すでにたゝみの條にもしるしたり、むかへみるべし。菅相公の像に、虎皮鋪たる圖も、かのいにしへの博士の講席に傚たるなるべし。按に莊公十年の左傳に、公子偃自雩門蒙二皐比一而犯、注に皐比、虎皮也。また宋の名臣言行錄に、張渠先生左京座虎皮說易、蓋し虎皮をもて講席こなせり。また或は豹席、熊席など云ここ有、わが前古に海驢皮を鋪設ると神代紀にみえたり。後は鹿をも用ふると、小笠原家記にみえたり。敷皮二字は、江家次第にみえたり。此外に虎のとは和訓栞にしるしたり。かの國の事は、陳繼儒が

圏鶏は古くはトミといへるよし古事記傳十九卷三十丁表を見るべし

虎會に裒て錄たり。新六帖に「いけながらわかれし世こそかなしけれつたへてこらのかはをみるにも」

こり　鳥をよめり、飛集の義之こいへり。鷄をよむもおなじ　神代紀に、鷄子のトリコ、天智紀に、山鷄ヤマドリ、萬葉卷三に、雞之鳴東國、卷十九に、鳴雞者彌及鳴杼、同卷に、打羽振鷄者鳴等母、これ雞をトリこよむは猶猪鹿を專にシ、こよむが如し

こひ　神武紀に、靈鵄、天武紀に、貢白鵄、々皆トビこよみたり。輔仁和名に、鵄。頭註に、揚玄操作レ殞、按に證類本艸に元來鴟に作れり、殞はまさに鴉の誤之。鴉鴟同字、龍龕手鑑にみえたり。順抄には、即鴟を土比こ註したり

こりの下に入るべし

○禽獸蟲通用、順抄に云、一說飛曰鳥、走曰獸、惣謂之禽。註に、訓與獸同。槃按に、書の益稷に、百獸率舞、これ專走獸をのみいふに非ず。考工記に、下大獸五脂者膏者羸者羽者鱗者。易の屯象に即鹿無虞以從禽。禮記に、猩々能言不離禽獸。後漢書華陀傳に、吾有術曰五禽之戲、一曰虎二曰鹿三曰熊四曰猿五曰鳥。大戴禮に、羽毛鱗介皆是謂之蟲。また羽鱗毛介是謂

之渾蟲。淮南子に、馬聾蟲也。これ禽獸蟲いにしへ通用せし事しるべし

○順抄、羽族類體に、冠、佐加○嘴、和名久知波之○喙、久知佐木良○啄、都以波無○鳴、佐閉都流○毳、爾古計○刷く、所劣切、波都久呂比。また阿布良比岐○襍褷、布久介○淋滲、豆々介○羽、波○翥、波布流。俗云、波豆々○翼翅、都波佐○翮、八爾○翀、加佐木里○倍羅麼、鳥乃和岐乃之多乃介乎○翹、俗云、翡翠、鳥尾上長毛也○尾、乎○鍬、乎不佐○䐡、比太禮、俗所謂阿布良之利○吭、鳥乃布江○䏶脛、鳥乃和太○肫、無々木○膆、毛乃波美○媧、音委、曾々呂○蹼、美豆加木○距、缺○鴨通、加毛乃久曾○蜀水華、宇乃久曾

校云、距和名抄阿古江

ととき　輔仁和名に、千歲虆を註したり、後には沙參をいへり。トヽキの義詳ならず、朝鮮譯士朴方貫薩摩國人云、沙參朝鮮語にトヽクとよべり、さればトヽクのうつりてトヽキとなれるにや、尙尋ぬべし

とくさ　式に木賊をよみたり、砥草の義成べし

ところ　式に莣をよみたり、卽草薢なり

とひを　字鏡、順抄幷に緜を註したり、卽文緜なり　〔○以下七行幷次頁白丁〕

玉勝間十三巻十九丁ニ云、とねりこの木といふ木、木の色いと白く、葉は榎の葉ににて大木になる物之、實はかくの

とみくさ　梁塵抄に稻をいへり、集韻に、稛音困、禾華也とみえたり。詞花集に「うちむれて高くら山につむものはあらたなる世のとみくさの花」また相撲集に、み山なるとみくさの花、ともよみたるは、誠いねの花にや。さて稻花を採(ツム)べきやうなければいぶかし。藏玉集には檜之といへり

とねりこ　梣をいへり、按にこれ元來蕃名なり、梣は卽本草經に秦皮とみえたり、ハシバミの榛には非ず、今の俗タモキともいふ、たむきの條むかへみるべし

とがのき　萬葉卷六に、四時に生爲刀(オヒタルト)我乃樹とよみたり。卷三に、繁生爲都賀乃樹とよみたれば、トガ、ツガは同一ならん、つがのきの條むかへみるべし

とみのき　近江多賀のにてカツラをいふといへり

とこなつ　後のとこなつのはなの條にしるす

どちぐち　俗に科斗をいへり、ある卿のいへらく、古歌に「とちくちはきさらぎまで　はめもなきにさ月の比は河づとぞなる」と人にの給けると聞つれど、この歌何がしの集に藏たるにや、今いまだ詳にせず、順抄に、蝌蚪は蝦蟇子也。輔仁和

名に、蛤子、和名加倍留

ときうま　字鏡に、駿を註したり。八駿の名はすぐれたるうまの條にしるしたり

とつかむ　式に獨犴あり、かむの條にしるしたり　〔〇以下三行并次頁白丁〕

ところづら　記に登許呂豆良とよみたるは薢蔓之

とさかのり　式に鳥坂苔とあり。順抄に、漢語抄を引て、雞冠菜。注に、土里佐加乃里。閩書に海物異名記を引て云、赤菜海生而紫蔓其大者爲㢮菜。徐葆光中山傳信に、琉球土名のトサカノリを紅菜としるしたり

とびらのき　順抄に石楠草を注し、また俗云、左久奈無佐と注したり。トビラは十枚の義にやといへり。サクナンサは石楠草の約なるべし。さて今トヒラノキといへるは花鏡に載たる鐵樹をいへり、鐵樹また外に二種あり

ときみぐさ　藏玉集に松をといへり。たむけぐさの條を見るべし

とはれぐさ　藏玉集に松なりとも、萩なりともいへり

ときはぐさ　莫傳抄に松をといへり　〔〇五行余白〕

とこよのもの　万葉巻八に、等許余物とのたち花とよみたり。常世の國より來れゝばかくいへり。たちばなの條を見るへし　〔○以下七行幷次頁白丁〕

とみくさのはな　すでにとみぐさの條にしるしたり

とふのすがごも　すげの條にしるしたり

ときはいろもき　秘藏抄に萱苓といふ木ゝといへり、冬も枯ず常盤なるといへり

とこなつのはな　なでしこの花ゝ。染殿の大后を瞿麥（ナデシコ）の女御といへる故に、そをいみてなでしこをいふといへり。他はなでしこの條をむかへ見つべし

とりのあしくさ　順抄に升麻を註したり

〔第五冊　終〕

奈行

な　菜にあれ、魚にあれ、おほよそくらふべきものをナといふ、ナはナメ ナムの約りにして、嘗の義也。俗には但クサヒラの名とのみおぼえたり。ナといふ詞は、はやく記に阿袁那とつゞけたり、外にもナと呼びしものあれば、これにむかへて生菜をアヲナといふならん。さてクサビラは草杭にして菜蔬の名なるに、俗には菌耳の名とおぼえたり

○魚をいふは、魚屋をナヤといひ、鮒をフナといひ、鰤をフシナといひ、鯔をイナといひ、方頭魚をクスナといふ。また和訓栞に、魚をよむはまなの略也。記録に眞菜とも書り、漢にも魚菜などつゞけり。又住吉にては魚供をあまなと稱し、平安にて鮓にする小魚をすしなといひ、尾州の方言に川魚のちひさきを水なといひ、あめごの魚を日光にていはなといへりこそ

〔○以下本頁四行餘白〕

なき　丹方に蘚菜、一名薞菜（薞當に轂に作るべし）一名水蓉、和名奈岐。順抄に唐韻を引て、蘚、水菜可

食也。また漢語抄を引て、水葱〔奈木〕一名蘋菜。按に、蘋菜と水葱とは必一物にあらず、其しるしは蘇敬云、蘋菜葉似澤瀉而小、花青白色〔按るに花帶少く淡青色也〕是今こゝに云匙面高(サジヲモダカ)といへるもの也。漢語抄に、水葱とあるは我國の名にして、たまく漢呼とおなじければ、蘋菜に傳會せしなり。万葉卷十四に、なはしろの古奈伎が花をきぬにすり、とよみたれば、花に色あるも明かなり。白き花のいかでは衣にするべきや、これ其別物なることまた明かなり。さて水葱はいにしへ天皇の供御に奉りしものなれば、内膳式に曰、六段二百三十歩種芹水葱料、在乙訓(ヲトクニ)郡〔山城國にあり〕万葉卷十六に、水葱(キ)の煮物とよみたり。天智紀の童謠に、奈疑のもと制利のもとゝつゞけたり。これも食料をめでゝいふならめ。名義は既にうゑこなぎの條にしるしたり。万葉卷三に「はる霞春日のさとに殖子水葱なへありといひしえはさしにけむ」とよみたる、苗のおひいでしに從ひ枝をさすといへるゝ。且其花も色ありて衣にするものなれば、今の俗にいふミツアフヒの形狀なり。猶うゑこなぎの條をむかへ見つべし。今もくらふ事あり〇木にいへるは益部方物記に載たる竹柏なり、その葉の水葱の葉に似たればいふなるべし

なへ　万葉、字鏡など皆苗をいへり

なら　順抄に、唐韻を引て、楢を註したり。万葉巻四に、楢山、巻十二に、小野之櫟柴、巻十九に、楢櫟榛三字皆ナラとよみたり。また紀に、平の字をもナラとよみたり。仙覺が抄に、古語にしなやかなる皃をいひてナラナラなどいふや、柴のわか枝のしなやかなるをもてこのありしといへり。さて楢の字、字書に詳解なし。但許慎說文に、楢ハ柔木也。工官以爲𥳑輪。郭璞註、中山經、楢ハ剛木也、中レ車材。後世にいたりては羅山縣志に載たるのみ。されどまた未だその詳審を悉さず。按に周禮の周官に司爟氏四時變ニ國火一以救ニ時疾一ハ柞楢之木理白、故秋取之　これ柞と楢と幷稱、また柞櫟幷稱して一物之、延喜の式文にも柞櫟幷にナラとよみたり、されば柞櫟楢三名はまさに　類なるべし

なし　梨をよみたり、万葉巻六の歌詞に止時梨二とよみ、また順抄、甲斐國山梨を夜万奈之、また備前　磐梨を伊波奈須とよみたれば、十淸がいふ中酸の義にこそ。又或は奈子の音を謬用ふともいへり

ない　順抄に柰を註したり、これ字音を伸てよみたるなり　〔○以下次頁共白丁〕

なづな　順抄に薺を註したり、撫菜の義にして、愛することろなるべしといへり。六帖に「今

補
紀に赤鯽魚をなよしと訓ぜり

團伴信友ガ比古婆衣三ノ巻五丁ヨリ七丁マデ、赤女口

はとて人のかればや淺ちふにさればなづなの花ぞ咲ける」拾遺集に「雪うすみ垣根につめるからなづななづさはまくのほしき君哉」爲重集に「人もこぬ垣根に生るからなづなふりつむ物は雪にぞ有ける」

なまゐ　字鏡、順抄幷に澤瀉を注したり

なつめ　順抄に棗を註したり。夏月にいたるより新芽(ワカメ)を生いづるもの故にいふなり

なまづ　順抄に鯰を註したり

なよし　順抄に鯔を註したり、今の俗に一歳なるをオボコといひ、二歳をイナといひ、三歳をスバシリといひ、四歳よりしてボラといへるなり。ナヨシは凡(スベテ)いへる名なるべし。貫之の土佐日記正月元日の條に、けふはみやこのみぞおもひやらるゝ、こへのかどのしりくべなはのなよしのかしら、ひゝらぎら、いかにぞと書たり。これは名吉の義をとりたるか、今は即イワシのかしらをさせり。順抄に、鯔、和名以和之と註したり、齋祀の義なりといへり、されど齋祀は紀に、恰破毗とよみたり、シとヒとは通じがたし、また詩經古訓には魴をナヨシとよみたり

なゝくさ　いにしへは何くさと定りたる事なし、漢土にいふ五辛のごとし。淸記に、七日の日

玄名吉ノコヲ委ク論ヘリ

に菊をもてはれるを「つめどなほみゝなぐさこそつれなけれあまたの中にきくもありけり」そのくさぐ〱の定りたるは善成公の河海抄に薺(ナツナ)、蘩蔞(ハコベラ)、芹、菁、御形、酒々代、佛乃坐也。拾芥抄、公事根源、年中行事皆おなじ。このくさぐ〱は其條々を見るべし。增補題林集に載たる歌に「せり、なづな、御形、はこびら、佛の坐、すゞな、すゞしろこれぞ七くさ」とよみたり。別本公家年事、埃囊抄などもおなじ。さて佛の坐の一名、田平子なるを重ねてよみたるはたがへり。長明四季物語にも、七つ草を擧たれど、やゝくだれる世には猶くさぐ〱の說あり、槃むかし新菜攷を作りて、さくらぎにゑりたればこゝに悉さず。漢土にて正月七日以七種菜爲羹とは、晉の宗懍が荊楚歲時記にみえたり。後に祇園執行日記をみるに、南朝正平七年壬辰正月一日、三月十五日、鎌倉殿入洛以來入用、觀應三年九月廿六日改二觀應三年一爲二文和元年一依二代始一也。正月小六日、堀河神人役七種菜、沙汰人行心法師持參、ナヅナ、クヾダチ、牛房、ヒジキ、芹、大根、アラメ各方五寸、折敷、次ニ各入之、此外鹽味噌各一土器在之、是入一種の七種なり。また每年松尾村より折敷に松の枝を立て、若菜を奉るとみえたり、圖は別に圖叢に出す

【以下頭註】

壒囊鈔ニ云

正月七日ノ七草ノアツモノト云ハ、七種ハ何々、七種ト云ハ異說アル歟、不一准、或歌ニハ

セリ　ナヅナ　五　行　タビラコ　佛の坐　あしな　みゝなし　是や七種

芹　五　行　なづな　はこべら　佛の坐　すゞな　みゝなし　是や七種

又或日記ニハ薺、蘩蔞、五行、スヾシロ、佛坐、田ビラコ、是等之ト云云、但シ正月七日七草ヲ献ズト云ヿ更ニナシ。年中行事ニハ、七日白馬節會及敍位事。兵部省御弓奏事。ト計リ記メ、七草ト云ヿナシ。十五日ニコソ、献ニ七種御粥ニ事註シ侍レ。又資隆卿八條院書進、簾中抄ニモ、此定之。彼鈔名物之。豈浮ケルヿアランヤ。又禁中ノヿ、年中行事ニシカンヤ、既ニ癈務マデ注セリ、爭當時ノヿ漏哉、旁不審ノヿ之。乍レ去諸人皆七日ト思ヘリ、何ナルヿニ歟、人可レ尋之云云

園江戸人の作に春野七種考ト云一小册アリ、品々說もあつめたれど今抄出する程の事もなきみだりなるものなり

なのりそ　紀に濱藻をよみたり、万葉卷三に、石轉におふる名乘藻、また名告藻、名乘曾、卷七に、玉藻の名乘曾花、卷十に、莫名藻の花ともよみたり。允恭紀衣通姫の歌に、宇彌能波摩毛とよみ、その下に云、時人號濱藻謂奈能利曾毛、今云ホダハラをいふといへどいかゞ、すべて藻葉をいふにや

○まくり附　丹抄に、海藻を之末毛仁支女と註して、本朝神馬草也、神代時馬食之。下學集云、神功皇后攻異國時、船中無馬秣、取海中之藻。また正保年刻本和名集を見るに、海藻、一名藫、日本に神馬草、またマクリといふとあり。おもふにこゝにいふ藻は蓋し一種にはあらず、さて以上の説をおもひよするにマクリは馬喰(マクヒ)の義ならん。さて今マクリといふは大隅國に屬したる海見島(アマミ)よりいづる海人草をいへり。小兒初服の藥名にいへるも、海人草を主藥となせし故なるべし、これいにしへの遺方なるにや、しるべからず、凡海藻は腹中の蟲を征するの効あり、海人草を閩書に載たる鷓鴣菜に充しは形狀には因なし、但其効によるのみなり

なゆたけ　若竹なるべし、万葉卷三に、名湯竹の十縁(トヲヨル)皇子、また女竹、波竹などもいへり、皆弱竹のこゝろ也

なでしこ　万葉卷三に、石竹をよみたり、卷八には、瞿麥をよみたり、あだし國にては、やへに咲るを洛陽といひ、一重を石竹といひ、また園圃に培養せしは花の色も艶なれば、そのみやびをいひて、また洛陽花ともいへるを。おのづから野邊に生ふるを瞿麥といへれど、もと

は一物也。清記に、草の花はなでしこ、からのはさら也、やまとのもいとめでたしと書たり。とこなつの條むかへみるべし。なでしこのすゝきとなりたるといふことは左のごとし

○游清云、赤染衞門家集に、撫子のすゝきになりたるをみて「おひかはることや撫子の花すゝきまねかば人も行てみつべし」契沖阿闍梨云、是は撫子の變じてすゝきになれる歟、又撫子とすゝきと有けるが、撫子のおされてみなすゝきになれるをよめる歟、撫子の變じてすゝきになれるならばめづらしきこと也。眞淵翁云、大和なでしこは、秋ははやう枯失る物にて、同所にうゑし薄のみ專ら榮えたるを、かく書なしよみなしたるのみ。或人隨筆云、今案に、撫子の茂生したるをいふなるべし。長明四季物語に、放免の下人の袖袂につけたるもゝなり瓢のすゝきになりたるなどけしからぬ見ものといひ、西行集に「よしの山風にすゝきに咲花は人のをるさへをしまれぬかな」と讀めるも瓢や花の多きをすゝきといへる也。以上の諸說とりぐ〵にて、いづれとも定めがたけれども、近來の人々おほかた撫子のしげりたるを、すゝきといふよしにときなせり。さりながら撫子の多ければとて、すゝきになりなして、まねかばなどよむべきことわりかは。又眞淵翁の撫子の枯れ、すゝきのみしげりたるをいふとい

はれしもいかゞ有ん、まねかばと有にてまねかぬよしは明かなるを、實のすゝきならば招と
わりなれば、此詞かなはず。契沖師の撫子の變じて薄になれる歟といはれしは、さるともや
と思へども、さるめづらかなる事ならば、かくかりそめなる詞書ならで、其よしをくわしく
しるしぬべき事ゝ。かにかくに此一條はさとりがたし、たゞへ赤染衛門は撫子のすゝきに變
じたるをみてよめりとも、又撫子のしげきをすゝきといひたりとも、又撫子の枯てすゝきにの
みなりたるをよめりとも、今よりしてはいづれとも定めがたし。己が心のひくかたにしひ
てときまげたりとも、何でふかひかあらん

なはのり　万葉巻十一に、奥津繩苔とよみたり、今いふものは龍鬚菜なり、備前國人はシラモ
といへり

ならしは　万葉巻十二に、櫟柴をよみたり。巻四に小歴をシバとよみたり、今薪にせしもの
ゝ。是爾雅にいふ枹也。鎭江府志にいふ勃落樹也、ならの條をむかへ見るべし

なはせみ　順抄に蚱蟬を註したり、これ啞蟬ゝ。今俗にいふおほしせみゝ

なはさは　順抄に鯆魚を註したり

なめくぢ　順抄に衆名苑を引て、蚰蜒一名蚹蠃、また本草を引て、蛞蝓、和名奈女久知と註したり。爾雅及方言等によりて此を考るに、今云ナメクヂにあらず、蚰蜒の形は必蜈蚣に似たるものなり、詳に予が纂疏濕生虫山蛩虫の條にしるしつ

なのりそも　既になのりその條にしるしたり

ななふすげ　七相菅なり、すげの條にしるしたり

なごりぐさ　莫傳抄に牡丹なりといへり

なまえのき　順抄に荊を註したり

なかつかみ　天武紀に虎豹皮をよみたり、輔仁和名に虎を註したり

なかてのいね　歌嚢に、中てのいねとは中稉なり、八月刈をさむるをいふ。農書に八月收者爲二遲稻一、字類抄に、中毛とあり。藻塩草に、中田の稻をいふといへり、俗には二番早稻といへり。夫木集に「わが守る中ての稻ものきばうちてむらく／＼ほさきいでにけらしも」

ならしばとり　藏玉集に鷹ゝといへり

なでしこがひ　末摘花、紅介、海菊などいへり、紅藍の濃淡あり、また黄もしろきもあり、夫

木集、西行「ちしほしむなでしこがひにしく色はやまとからにもあらじとぞおもふ」

なみまがしは　波間柏なり、牡蠣のいと小にして殼のうすきをいへり。これに紅白の二種あれば月日介ともいへり、定家卿「浪花めがなみまかしはをとるかとに日もくれ袖に月ぞやどれる」肇慶府志に載たる珍珠蠔なるべし

ながなくのとり　記に集ツトヘテ常世長鳴鳥ヲ令レ鳴云云とあり、ある人は鷄を指していふといへり

〔〇以下四行余白〕

仁行

にら　韮をいへり、みらの轉ぜるなり。みらの條みるべし

にれ　楡をいへり、順抄には、夜仁禮と註したり。ヤニは黏滑の義なりといへり、禮の內則に、堇、荁、枌、楡、以滑レ之、洪舜兪が賦に烈有ニ椒桂一滑有ニ黃楡一といへり、我國にても食料とせしことすでに內膳式にも載たれば、いにしへは供御にも奉りしものゝ

にし　游清云、順抄に七卷食經を引云ふ、辛螺和名仁之　楊氏漢語抄云、蓼螺子、本草拾遺云、蓼蠃

和名抄 小辛螺

国万葉集抄巻五廿五丁 ニ| にとみと通ふ は蜷をみなと

生水嘉海中味辛辣如蓼、是今の世にもいふにしなるべし、名義は味のからきをもて付たるゝ、にの字に辛辣の意は無れども、みの字と義通へるなるべし、韮ミラニラ 鵪鶉ミホトリニホトリ 蜷ミナニナ の類にて、古へにとみを通じかけり。扨韮をミラといひ、細辛をみらのねぐさといふ、みの字はみな辛味をもて名を負し事、前に擧し事の如し、俗にみしく辛カラシなどもいへば、にしとみしと其詞通はずといふべけんや、古へは定めてみしともいひたるなるべけれども、其詞の絕たるなるべし。又散木集に、ある蜑の口あしくて物のくはれぬににしといふ物こそ思ひ出らるれといひけるを聞て、求めてくはせけるに、からみといへる所はからしとてくはざりければ「よしと思ふ心にねかふにしなればからみなりともまゐらざらめや」是らにて名義明かなり。漢土にて辛螺とも、蓼螺ともいふも、其義よくかなへり

にな　字鏡に蜷を註したり、蜷も製字なるべし、蝸蠃をいへるなるべし。ミナのうつれるなり。此もの河海の二品なり　〔〇以下七行幷次頁白丁〕

にぎめ　順抄に海藻を註したり。和布の義なり。荒布にむかへていへり。抄にも俗用和布とみえたり。今はワカメといへり。万葉巻六に、海藻をメとよみたり、李時珍食物本草に載

云かとし　　補　補　木本ナシ

たる裙帶菜なり

にはそ　順抄に甘遂を註し、また仁比曾ともみえたり

にかは　式に膠をよみたり、煮皮をいへり

にこた　輔仁和名に人參を註したり

にかな　輔仁和名に龍膽を註したり　〔○以下二行並次頁白丁〕

○景行紀の歷木を、伊豫國方言の扶桑木に附會せし說あり、所云扶桑木は陰沈木、沙板の類なり、さて扶桑木を扶桑樹と書したることあり、樹は生植の總名なれば枯木にいふは誤なり。按に扶桑は元是東極の名なり、山海經に東至扶桑、離騷に飲余馬於咸池兮（注日浴處）總余轡於扶桑（日出處）天問に日月安屬列星安陳（陳排列也）出自湯谷（即暘谷爲日出處）次于蒙汜（即濛谷爲日入處）淮南子に日出扶桑入于蒙汜、また延喜式に東西文部呪文に謹請皇天上帝云東至扶桑西至虞淵南至炎光北至弱木千域百國精治万歲、是皆其證なり、東方朔神異經に東方有樹高八千丈名曰扶桑。此說蓋し恠誕のはじめなり。許愼說文竟に神木となす、山海經に若木之國灰野之山有樹靑葉赤花名曰若木、徐鉉が說文字解、榑字の下に云、叒音若日初出東方湯谷所登榑桑也。後人蓋し此說に由て扶

桑佛桑に附會して樹名となす耳、佛桑は卽朱槿之、凡後世藥草木の名かゝるたぐひおほかるべし。また唐宋詩人扶桑を國名となして、我日本を指、また我國人もこれを受てみづから我國を大扶桑國としるせしも亦誤なり　〔〇一行餘白〕

にほどり　万葉卷二十に、尓保杼里能於吉奈我河泊とよみ、また卷四に、二寶鳥乃潜[カツキ]ともよみたり、紀には美本杼里のかつきいきづきとよみたり。万葉卷七の志長鳥にして、欽明紀の臘[アトリ]鳥なりといへり。卽鸊鷉之、今の俗にいふカヒツブリ之、しながとりの條をむかへみつべし

にこぐさ　万葉卷十一に、あし垣の中の似兒草、また卷十六に、いる鹿乎とむる河べの和草[ニコクサ]、また卷二十に、秋風になびくかはびの尓故具佐とよみたり。神代紀に、毛麁ケノアラモノ毛柔ケノニコモノとよみたり、順抄に、毳、細弱毛也。和名ニコケとみえたり。さればニコクサは柔弱なる草之。また弱草[ワカクサ]をもいふべし。新六帖に「おく霜にかれにけらしなあしがらの箱根のねろに茂るにこぐさ」

につゝじ　順抄に茵芋を注したり、茵芋は例の借字にて紅躑躅をいふ之。つゝじの條みるべし

にがたけ　古今物名によみたり、苦竹也

○蕈（キノコ）をいふは毒蕈なり

にはくさ　順抄に地膚を注したり、万葉卷十によみたるは、庭の面などにおひたるをいふなるべし

にがにし　前のにしの條見つべし

にひまぐさ　順抄に藺茹を注したり

にはみぐさ　莫傳抄にはぎゝといへり、藏玉集おなじ

にはきぐさ　莫傳抄に芭蕉なりといへり、藏玉集おなじ

にはざくら　順抄に朱櫻を注したり、またハヽカとも注したり。本草に載たる櫻桃ゝ、拾遺集に「朝どにわがはく宿の庭ざくら花ちるほどは手もふれでみん」おもふにこの哥は庭もせに立るさくらをよみたるならんか

にはこぐさ　莫傳抄に橘ゝともいへり

にほひぐさ　藏玉集に梅なりといへり

校云、名にしおふハ名に高きカ

補　木本ナシ

にしきぐさ　藏玉集に紅葉也といへり

にしきがひ　きのくに千尋濱にいへる介なればチヒロガヒともいへり、今チイロガヒといへるはたがへり。また撫子介ともいへり。その色の黃紅なるものにしていと餘光(ニホヒ)あるかひなり、三條院御製に「こきまぜにいろをつくしてよるかひはにしきの浦と見ゆるなりけり」に、神武紀伊國荒坂浦を丹敷浦といふとみえたり、後拾遺集に道命阿闍梨の歌にも「名にしおふにしきのうらを來てみればかづかぬ海人はすくなかりけり」阿闍梨は熊野へ參られける人なれば、きの國にて詠まれたる歌にやといへり

にはつとり　紀記ともに雞をよみたり、野つ鳥、雉子にむかへたるゝ。万葉卷七にも、庭津鳥可鷄(カケ)の垂尾の亂尾のとよみたり。かけの係むかへみるべし

にはすゞめ　記の雄略の段の歌に、尓波須受米(庭雀)とよみたり

にはやなぎ　夫木集慈圓の歌に「殿づくりせくやり水の岩かげに白き色こき庭柳哉」又和泉式部、庭柳松たかへるは有月の菊のなくとも見るなりけり。或云、こは俗にびやう柳といふ物ゝ、黃色の花さくといふ云云　〔○以下五行幷次頁餘白〕

にはくなぶり　神代紀に鶺鴒をよみたり、庭來押觸の義なりといへり、いかゞ。いなおほせど

り、とづきをしへ鳥の條を併せみつべし〔〇以下七行幷次頁餘白〕

にふなひすゞめ　實方中將のふる事にいへりと聞つれど、いまだ閱せざれば姑く史外にしるしおきつ

〔案〕玉かつま三之卷云、尾張國人のいはく、尾張美濃などに秋のころ田面へ廿三十ばかりづゝいくむれ〱むれ來つゝ稻をはむにふなひといふ小鳥あり、すゞめの一くさにて、よのつねの雀よりはすこしちひさくて、觜(ハシ)の下にいさゝか白き毛あり、百姓はこれをいたくにくみて、又にふなひめが來つるはとて見つくればおひやるゝ。此すゝめ春夏のほどはあし原に在てあしはらすゞめともいふといへり。宣長これを聞て思ふに、入內雀(ニフナイスヾメ)といふ名、實方の中將のふる事にいへる、中昔の書に見えたり、されどそれは附會說にて、にふなひは新嘗(ニヒナメ)といふ事なるべし、新稻(ニヒシネ)を人より先にまづはむをもて、然名づけたるなるべし。萬葉の東哥にも新嘗をにふなみといへり。又おもふに稻負鳥(イナオホセトリ)といふもし此にふなひの事にはあらざるにや、古き哥どもによめるいなおほせとりのやうよくこれにかなひて聞ゆること多し。雀はかしかましく鳴物ゝ、庭たゝきはかなへりとも聞えず

〔〇以下次頁共餘白〕

奴行

ぬか　繼體紀に糟屋をヌカヤとよみ、光仁紀に舐レ糖、万葉卷十に、荒糠とよみたり。廣韻に糠、穀皮也。字典に、稃卽米殼、草木之華房爲レ柎、麥之皮爲レ麩、今いふコヌカと別之

ぬの　布をいへり、縫幅の義なるべし、といへり。ぬの長幅の事、式にみえたり、予が暇積抄中に通釋の説を載たり

ぬて　順抄に樗を註したり、辨色立成に白膠木とも書たり、紀には白膠木をヌリデとよみたり。今はヌルデノキといへり。ぬりでの條みるべし

ぬえ　順抄に鵼を註したり、万葉卷五に、奴延鳥の能杼與ひ居、卷十に、奴延鳥裏嘆(ウラナク)ともよみたり、紀に、あを山に奴延は鳴ともよみたり。この鳥恠鳥にして、人の哭泣にたとへおきたり、今は虎ツグミといふ鳥なりといへり。また或說には鳩よりもいさゝか大きにて、鳶の羽のどし、梟の類にて夜鳴といへり。是も虎ツグミのかたちによく似たるゝ

ぬか　正治百首、慈鎭、ともにわが一こはなれてかふぬかのぬかづくとは君を祈りて。何鳥にや、考べし　〔○以下三行餘白〕

ぬびる　記に怒毘流とよみたるは小蒜か、けだし野蒜なるべし

俗に鵼字を用る事を考べし

校補
慈云ハ
慈鎭圓トべ
アルべ
ジ

補記に以㆓海蓴之柄㆒作㆓燧杵㆒云云

ぬなは　紀記万葉によみたるは卽蓴ゝ、また根沼縄、浮沼縄ともよみたり。趙璘が因話錄云、千里蓴羮未下鹽豉世多以爲淡煮蓴羮非也、蓋末字誤書爲未末下乃地名此二處產此物、この說甚だ新なり、また明の胡家之が珍珠船云、顏氏家訓云、蔡朗父諱純改蒓遂呼蓴菜爲露葵、王維詩云、松下淸齊折露葵意謂帶露之葵不指蓴菜蓋蓴菜非朝川所有、宋玉諷賦云、烹露葵之羮、曹植七啓云、霜蓄露葵語並在蔡朗前亦不指蓴菜

ぬりで　紀に白膠木をよみたり、順抄に楞を沼天と註したり。漆手の義なりといへり、其生膠の粘滑なればいふとぞ。安齋隨筆、赤烏の條に云、最勝王經取香白膠、楞嚴經諸香木中有白膠、釋私記云、白膠靈木故修法之壇取此木乳塗用、軍器考稱白膠木爲勝軍木。槃按に、楞と白膠木と異なり、本草綱目楓香脂の條をみつべし

ぬはり　輔仁和名に王孫を注したり、野榛の義なり、つちはりの條みるべし

ぬかご　順抄に拾遺本草を引て、零餘子、署預子ゝ、注に和名沼加古。信實朝臣今物語りに載たる連歌に「はふほごにいもがぬかごはなりにけり、今はもりもやとるべかるらん」後に按るに、ぬかごの名はやく三代實錄に見へたり　〔○以下八行幷次頁白丁〕

ぬえくさ　眞淵云、古事記上に奴延久佐のめにしあればとあれば、なえ草の女とつゞけて、弱々としたる草の如き手弱女(タワヤメ)なりといふこゝろにて、弱草とは書たりけん。また嫩草と釋したるもあり

ぬばたま　眞淵また云、ぬばたまてふ辭は、日本紀私記に、烏扇の實といへるをよしとす、何者順抄に、射干一名烏扇、和名からす安布木。又云、考聲切韻云、狐、射干也、關中呼爲ニ野干一語訛之と、然れ共万葉にぬば玉に射干玉と書は正字にて、夜干玉など書は音を借たるなり、且射干の實は黒き玉の如にして野に生る物故に、我國には野眞玉(ヌマ)といふなるべし（古へは野をぬといひ、眞の清音と婆の濁音と通ふ例故に、野眞玉をぬ婆玉といへり、これは眞玉ならねど、いひつきたる語なればしかいふのみ）久老云、東國の方言に寐をぬるといへるは、奴婆は奴麻之、多麻はその間をいふ言にて、寐(ヌ)る程の夜といふより、夜は暗きものなれば、黒ともつゞけ、目とも夢ともつゞけたりといへり、倚槻の落葉を見つべし

ぬかつき　丹抄に酸醤を注したり、額突の義なるべし、ほゝづきの條をむかへみるべし

ぬつとり　雉子をいふ之、記に見えたり、万葉巻十三に、野鳥(ヌツトリ)きゝしは動(トヨム)とよみたり、庭津鳥可雞、島津鳥鵜などいへる同例なり

禰行

ねひら　式に澤蒜をよみたり

ねむり　順抄に合歡木を注したり、ねむりのきの條にしるしつ

ねずみ　記に鼠をよみたり、順抄おなじ、催馬樂などにもかくよみたり、天智五年京都之鼠向近江移、かゝる事は和漢ともに古今にあるとまゝみえたり

ねこま　順抄に猫を注したり〔○以下二行幷次頁白丁〕

ねぬなは　根沼繩也、蓴をいへり、また浮沼繩ともいへり

ねむのき　後のねむりのきの條をみるべし〔○以下八行幷次頁白丁〕

ねむりの木　万葉巻八に、夜戀宿合歡木花晝者咲。輔仁和名に、禰布利乃木と注し、順抄にも立成引て、睡樹を注したり。六帖に、かうかといへる題に「晝はさき夜は戀ぬるねむりの木君のみみんやわけさへにみよ」この歌は万葉巻八に載たる紀の女郎の歌之。また六帖に、かたみのかうか花にのみ、ともよみたり。新六帖、光俊の歌に「山ふかみいつよりねぶと名

補 輔仁和名に菟絲を注したり

をかへてかうかの木には人まごふらん」按に万葉卷八に、吾妹子がかたみのねむ、こはやくよみたり

ねつこぐさ　万葉卷十四、芝つきのみうらさきなる根都古具佐、こよみたり。或云、根津小草は斜のやうなるくさゝこいへれご、何てふくさにや、六帖にも哥有れご證こする所なし

ねなしぐさ　六帖に「わが世しもちよにあらめやねなしぐさたはれやせまし身のわかきこき」菟絲の子ナシにや、今之佛甲草の子ナシにや、强て何れこも定がたし

ねざめぐさ　藏玉集に松ゝこも、また萩ゝこもいへり

ねしろぐさ　莫傳抄に芹ゝといへり

ねざめぐさ　藏玉集に雉ゝこいへり

ねつらくさ　六帖雑草のうちにあり上の五もじかけたり　見うらさきなるねつらぐさあひみざりせば我戀めやも

〔○次一行余白アリ〕

ねずもちのき　淸記に、葉のいみじうこまかにちいさきがをかしきなり、こ書たり。伊勢家集に、ねずもちの紅葉にさしてなんやりけるこて「涙さへ時雨にそひてふるさこは紅葉の

色も濃さまさりけり」今は女貞を鼠糯こいへれご、女貞にもみちするものなし、また順抄に、四聲字苑を引て梗、音臾鼠梓木也。漢語抄にねずみもちの木こいふとみえたり、さて前の鼠梓は今の俗にケラノキこいへるものにて、構の一種にして葉もひろく、これもまたもみぢせる木にはあらず、されば葉のいみじうこまかきにもかなはず、また紅葉せるにあらざれば、いにしへの名のみ有て、そのものをうしなへるこそ慨たけれ、尚後人の考あるべし

困ねしろ草　藏玉、芹こいへり　〔〇以下八行餘白〕

乃行

のり　苔をよみたり、万葉巻十三に、縄法こ書てノリこよみたり、式に紫菜をよみたり、輔仁和名に、渉藿、一名水落、和名阿乎乃利。順抄に、俗用青苔按に水落はまさに水菭の誤なるべし、字書菭晋臺、薢也、水土濕氣所生、説文に菭字ありて苔字なし、蓋し苔は菭の俗字なるべし、さて我にありては水にあるをノリといひ、陸に生るをコケといふ、共に苔字を用ひたり　また抄に神仙藥を阿末乃利こ注し、俗用布苔、また抄の水菜部に、水苔、一名河苔、和名かは奈こ註したり。さて紫菜青苔は鹹淡こもにありて、皆蘆荻柞櫟の柴を樹てこれよりむし生たるものゝ。また海中の暗礁池沼

の陰沈木石よりも生じ、多藝知瀨にもおふるものぞ。それが中今は武藏國荏原郡品川より先の八幡大森建石のわたりの淺瀉にて柞櫟の柴をたてわたして、柴菜をつくりて江戸の名品となれり、あしつきの條むかへみるべし、その稱は通じて海苔二字を用ふ

【頭注】滋野貞融つながぬ舟云

くし大森のさとをもとにて、品川のすくわたりの海にいつるを世に淺草海苔といふは、淺草のさとよりおほやけに奉り、よにもひろまれればしかいふなるべし。この海苔といふもの、その類ひをいはゞ國々の海にいつる數す(マヽ)くからねど、みなあら磯の岩石につきておふるものなれば、たま〳〵その味ひよしと思ふ品も、さゞれ石にいさごさへおほくまじりて、きよくもはらひつくされねばあかぬこゝちするを、淺草のりはさる石いさごなどもあらず、その味ひこの類ひにおきてはすぐれたる品なり。そも〳〵此のり大森より品川かけて、秋の彼岸といふころ、なら柴を磯わにたて、冬になりて寒中といふころまでとるものにて、磯わの浪にもよほされて、なら柴よりいでくるのりなれば、こゝをはなちては國々あらぬぞ。たとへば山ざと人のしひたけをつくるも同じことわりにして、おのづからおふるながら其はじめ人の力をそへつるものにぞありける。うべな〳〵かの國々にあらぬもさるべき事にて、こま、もろこしにもたぐひなかるべし

のき　順抄に稻の條に、芒和名乃木と注したり。また芒を稻毛(イナケ)ともいへり

のみ　順抄に蚤を注したり

のせ　順抄に鵚鶌を注したり。野兄鷹の略なりといへり　〔○次一行餘白〕

のらえ　順抄に蘇を注したり

のたら　字鏡に獨活を注したり、順抄には豆知太良と註したり、さて抄に桜をタラと注し、桜は木本之、獨活の桜に似て草本なれば、野といひ土といふ之。つちはりの條をむかへみるべし

のぜう　順抄に、陵苕、和名末加衣木、一云農世宇。今本草にも紫葳、一名凌霄、卽ノセウは陵苕の字音之、俗にはノフセンカヅラまたユウセンカヅラといふ、皆ノセウよりうつり來れるなり

のづち　字鏡に蝮を注したり、今も下野日光山中にて反鼻の尤毒あるものをかくいへり、この蛇は尾を木枝にまとひて首を擧て人を撃といへり、されば野槌の義にや

〔○以下七行餘白〕

のこりくさ　藏玉集に菊といへり

〔○第六冊終〕

國史草木昆蟲攷　上　　日本古典全集之內

編纂者　　正宗敦夫

東京市豐島區長崎東町三丁目一六一
發行者　合資會社日本古典全集刊行會
代表社員　長嶋東一

東京市豐島區長崎東町三丁目一五八
印刷者　不二製版印刷所　高瀨清吉

東京市豐島區長崎東町三丁目一六一
發行所　合資會社日本古典全集刊行會
振替東京七三〇三二

昭十二年二月十五日印刷
昭十二年二月二十日發行

【非賣品】